

# 奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

3月号



1963・3

奇譚クラブ



3月号



昭和三十三年二月十日印刷 昭和三十三年三月一日発行 三月号 第十七巻 第三号 毎月一回 二日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和十五年六月十七日国許大蔵省特許認可 第三号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価二冊五



日本版  
サド侯爵悦虐絵巻

画の大きさ **A5判**

21種×15種(本誌の大きさ)  
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9

風流豊かなアイディアと適確無比の画面制作を以て一世を風靡せしめた奔馬の創作意欲を燃え立たせしめて構想を練る約半世紀にわたる口絵に於ける種々なる制限と妥協を提呈し、強烈なまとまりを完成した。これにより分譲しました。これこそ通信販売の完成といえます。

ので一般書店にては一切販売いたしません。是非直接お申込み下さいませ。内容はサド侯爵と自称する或る億万長者の青年が、美貌の巨大なる女性を背景として訓練し、嗜虐する富を飼育して嬌烈なサド・ストリー华的完全絵画化であります。



一、女体食卓（大テールブルの中央に裸の美女が仰向けに寝かされてる。ボクは今夜の調理人だ）  
二、逆さ吊り女体（ベッドの傍では膝で吊られた真白く輝く女体が逆さになって目の前にブラさがつてい  
る。ボクはムチを持ったいたぶるのだ）  
三、針のトイユ（針の植った奇妙なトイユ、浣腸を施された美女が今や排泄を強要されている。ボクは覗き窓から眺めている出る亀）  
四、女体燭台（厳重なアグラ縛りで乳首に結んだ紐がピンと張つてい  
る。仰向いた額に立つ蠟燭に火をつけたボクは一服をつけた）  
五、拷問室のベツト（お前はボクの可愛い愛玩物、衣服をすつかり剥

せいでお前が、その真白い肌をくねら  
 六、浴室の女神（むづちりと肉のつ  
 いた女体にグルグルと巻いた太い縄  
 か水を吸って縮み、足を釣られた女  
 神のような清純な美女がムチうたれ  
 て後光を放って悶える）  
 七、蛙腹の実験（水道の蛇口からゴ  
 ボゴボと否応なしに口に注がれ、き  
 やしゃやとお腹が妊婦のように膨らむ  
 のをボクはじっと見つめる）  
 八、アクロの舞（アクロバットの前  
 歴をかってボクは君に、こんな奇妙  
 な恰好を強要している。闇に輝く女  
 体は素晴らしい舞踊だ）  
 九、排尿の図（さあ、鏡にうつった  
 お前の姿をよく見てごらん。赤ちゃ  
 んは、こうして抱っこされてオシツ  
 コするのだよ。さあ、オシメカパー  
 をはずしませうね）



連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り

略号(りつ1)

**A5判** (21×15㎝) **感光紙焼付**  
**八枚一組** **五〇〇円** (送共)

第二集

逆胴吊り

略号(りつ2)

**A5判** (21×15㎝) **感光紙焼付**  
**八枚一組** **五〇〇円** (送共)

吊責にあえぐ美人モデル 梨花悠紀子嬢の裸身があますところなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていただくために、A5判(21種×15種)の大きさに廓大いたしました。宙にういた梨花嬢の悶悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フオトの圧巻であります。この全写真集は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。

全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思ふままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がビシビシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたものですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出していることを信じます。

**第一集（逆エビ吊り）**  
両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいる。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げると、ううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上った美しい逆エビの裸身――

**第二集（逆胴吊り）**  
ヒエーツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによって、くぐもってしまふ。繩は徐々に滑車によって巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとなった裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。



凄絶！とおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待





# 画の大きさ A5判

(21 糎×15 糎) 感光紙焼付  
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

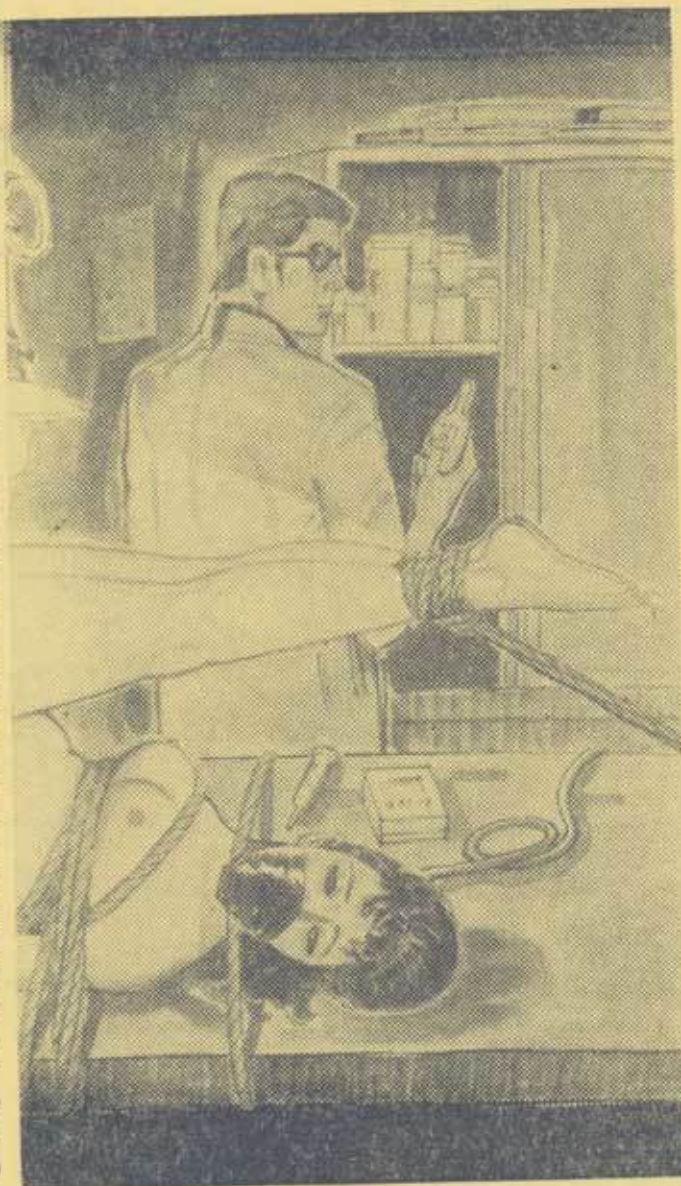
二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイルリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれるばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



## 四馬孝・案並に画

### 女体浣腸嗜虐場面図

(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイデアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っている要望も、まいるの制約のため、果し得ませんでしたが、浣腸ファンが見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、ここに四馬氏を煩して、女体浣腸の興味的な場面、小数字の変化ある姿態、背景、小

道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニヤの方は勿論のこと、Sマニヤの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニヤのため、特に作成したこの画集を、引続いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。





激しい被虐の表情	関谷富佐子
ムチの雨の下にて	関谷富佐子
擦りと抓り責め	関谷富佐子
胴縛りと首縄	絹川文代
黒髪の乱れと白蛇	大塚啓子
エビ縛りにあえぐ	大塚啓子
セーラー服は泣く	梨花悠紀子

巻頭口絵

白色奴隷の見本市

商品の陳列 商品の検査 商品の発送

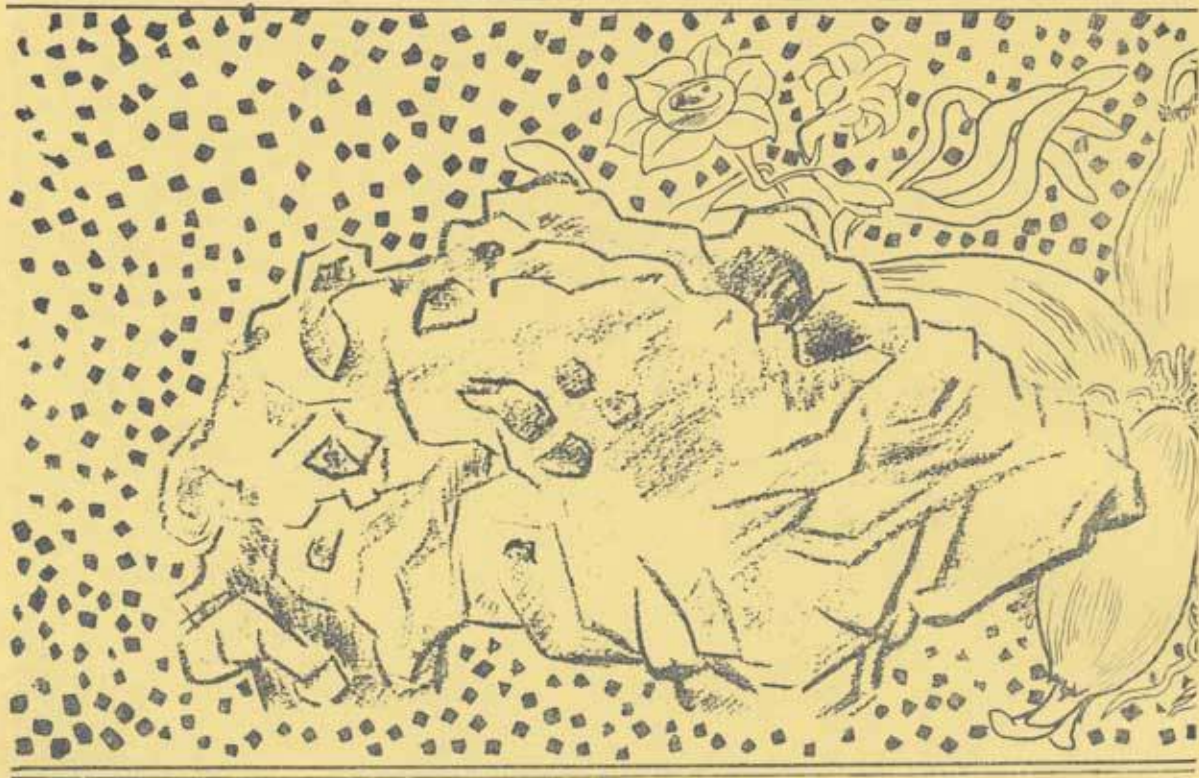
四馬孝	オムツカバー	四馬孝・画
シリーズ	革のさく衣	四馬孝・画
切腹	切腹すめ腹切	四馬孝・画
アイデア画	鼻なぶり	四馬孝・画

第ニヤ

抱えあげられた女体荷物	大塚啓子
ウエスト縛りの連続ポーズ	梨花悠紀子
もだえ転がる一瞬の表情	絹川文代
告白	関谷富佐子

告白

風	山辺まゆみ
白いソックス	万田 不仁
被虐愛さんげ	



お 腰 漫 談	牧 高志
トイレ覗き談義	森 栄三
長篇SM小説	宇宙のどこかで
最近のショッキング緊縛映画	東山 映史
アップチック	ピアノ責め
ストーリー	雪 俊 遙
続者短信	「坐 剤」
女体切腹秘話	遙かなる山河
「奴隷国探検」	サルジニア探訪記
オムツ奇談	奇妙な告白
「体験告白手記」	「K子のこと」
ガン作マニアのノート	私のバーでの会話
事実小説	悪 夢
「奇譚三十九夜」物語	（第二十二夜）
イエロー・セックス	切 腹 偶 感
異文雅渉お 臍と切腹	創作「焰と泥」
読者体験小説	女 工
マゾ芸術考	（女性男裝管見）
緊縛フォト撮影の実際	「芹屋マダムか白百合夫人か」
読者通信	



## 梨花悠紀子逆吊り写真特集

吊り責めが大好きだという梨花悠紀子嬢の強烈にしてトリックのない真正銘の吊り責め写真は誌上に分譲写真に大好評を博しております。殊に「りつ1」「りつ2」は注文殺到の大盛況のため、ここに新作の嗜虐味あふれた逆吊りのフォト三集を発表いたします。美貌の梨花嬢が苦痛と悦唐にあえぐ表情と全身、殊に吊られた足首の喰い込む縄目に御注目下さい。

### 第一集 両足首括り逆吊り

略号「さか」

大中判印画紙 (13×19 ㎝) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上にして逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子両手は背中後手に縛られ、胸に耐えうるのも梨花嬢なればこそ。

### 第二集 逆吊りの女体折檻

略号「させ」

大中判印画紙 (13×19 ㎝) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に對して、更にあぐなき暴虐の手は情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女。両足の間に竹にてこじられ、剥がれた衣服の上にて悶える凄絶にして、しかも美しい逆吊りフォト。

### 第三集 手足逆宙吊り

略号「さと」

大中判印画紙 (13×19 ㎝) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子、柔肌には恐ろしいほど縄がうずまって、吊り責めの真価が鮮明なる印画紙焼付によってマニヤの皆さまのコレクションの中に発揮されるでしょう。

## 東浦ひかる強烈縛写真特集

昨年春から病氣のために御無沙汰していた東浦ひかるが、秋に至って病氣全快と共に、数カ月のブランクが逆作用して、異常なまでに嗜虐感情を燃え上らせ、殆ど連日に亘って彼女の好みによる強烈な縛りを敢行。すでに分譲品として発表した、あの足を高々と顔の上より高く挙げた二つ折りのフォトなんかはマニヤの嵐のような賞讃を得ました。最近一入肉がついてポリウムを増した彼女ですが、それでいて、海老責なんかになると二つ折りになって、首が縄ですれて血がにじんできても尚辛抱するひかるなのです。

### 第一集 後手吊り足挙げ縛り

略号「うら」

大手札印画紙 (13×9 ㎝) 焼付 五枚一組 五〇〇円

肥り気味の割に柔軟な姿体のひかるの辛抱強さと柔軟さを試すため、後手縛りの縄で両足先がやっとな床につく位に吊り下げ、片方の足首にも縄をかけ、その縄をぐいぐい吊り縄にて引き上げ、恰も一本足の力カシのような哀れな姿で許しを乞うまで晒しておく。

### 第二集 二つ折りエビ責め

略号「うり」

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付 五枚一組 五〇〇円

これは、流石辛抱づよいひかるも、早く解いてくれといって悲鳴を上げた一コマ。丁度腰のところまで二つ折りになるように膝と後手とを連繋、両方の足が高々と挙り、丁度赤ちゃんがオシッコをさせて貰うときのような恰好で床に坐らせて許しを乞うひかる。

### 第三集 足挙げ椅子責め

略号「うる」

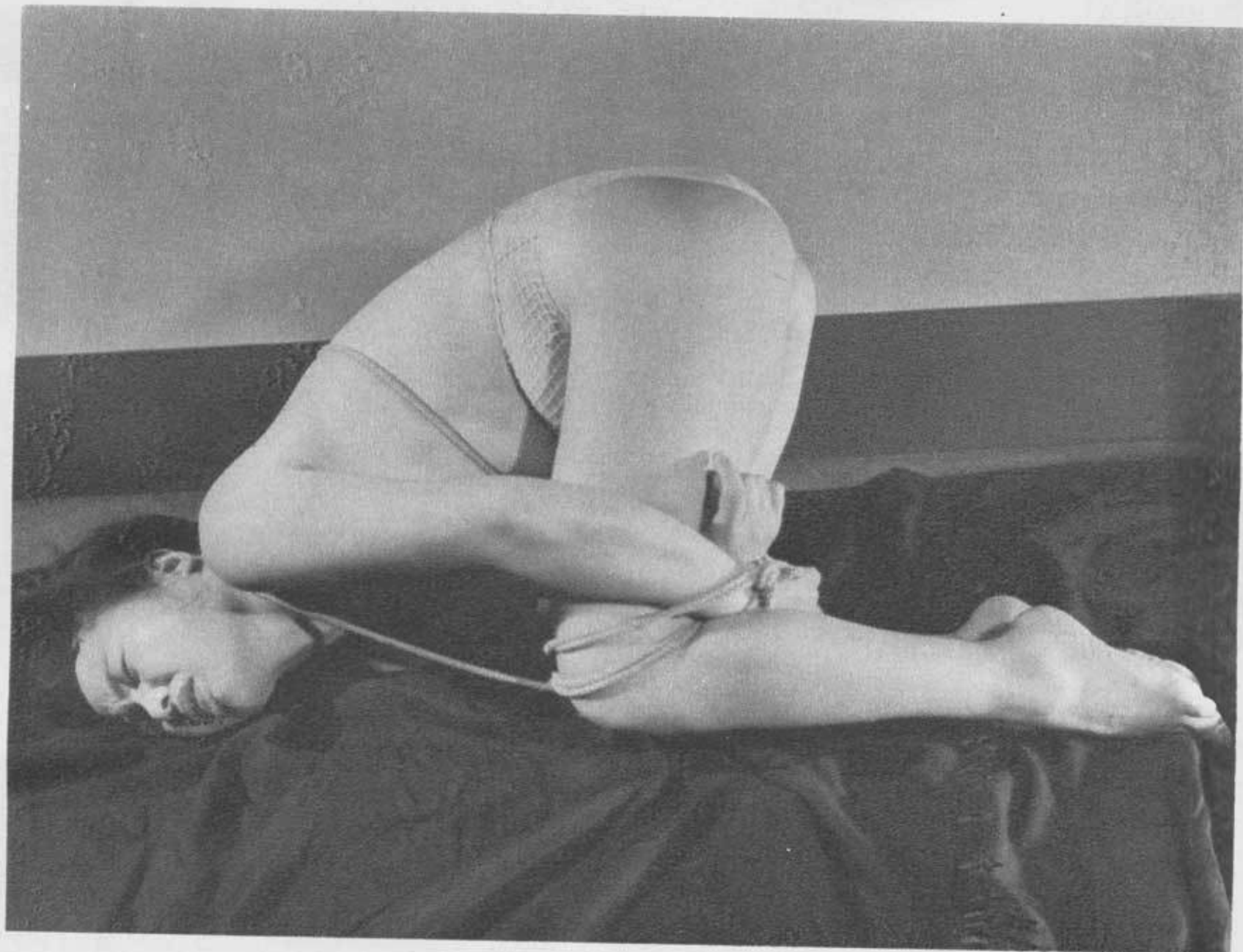
大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付 五枚一組 五〇〇円

責めが終ってからマゾ女性ひかるが最も素晴しかったと述懐した苦痛と羞恥に満ちた強烈な緊縛。両足が高々と頭の上まで挙って両足の間から顔がのぞくといった、ぎゅうぎゅう力一杯締めつけたひかるのようなマゾ女性だけにしか試みるこの出来ないポーズ。

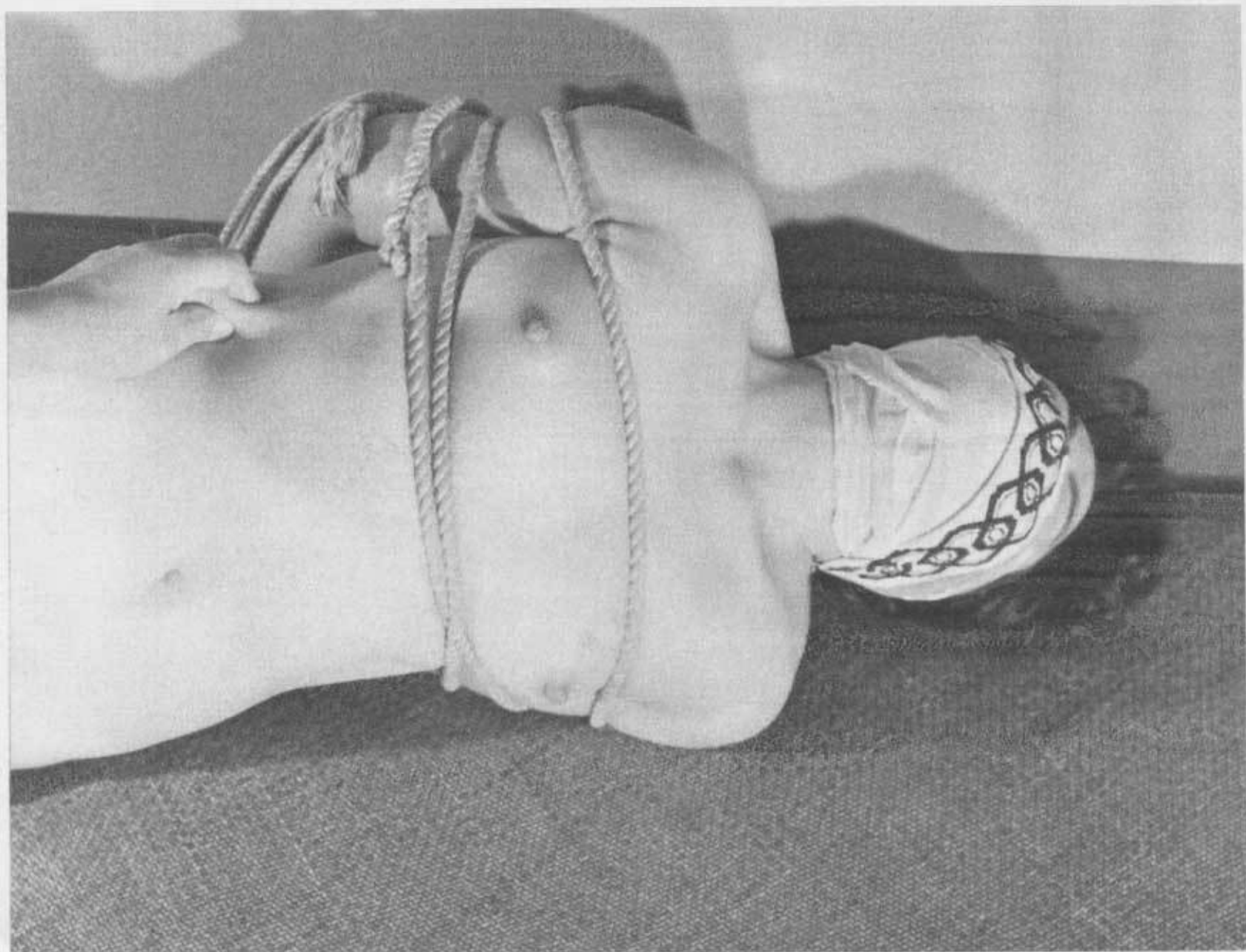








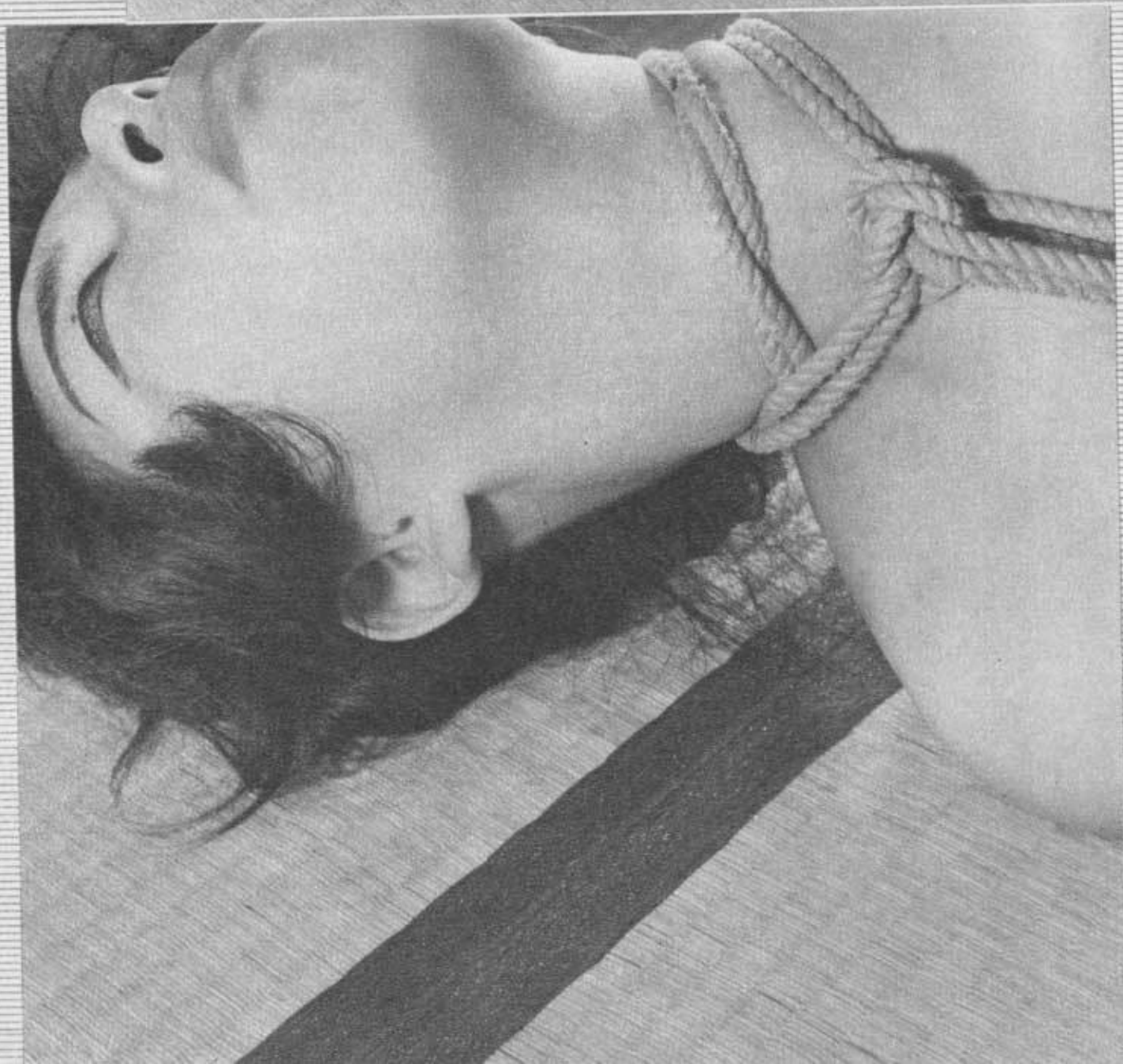




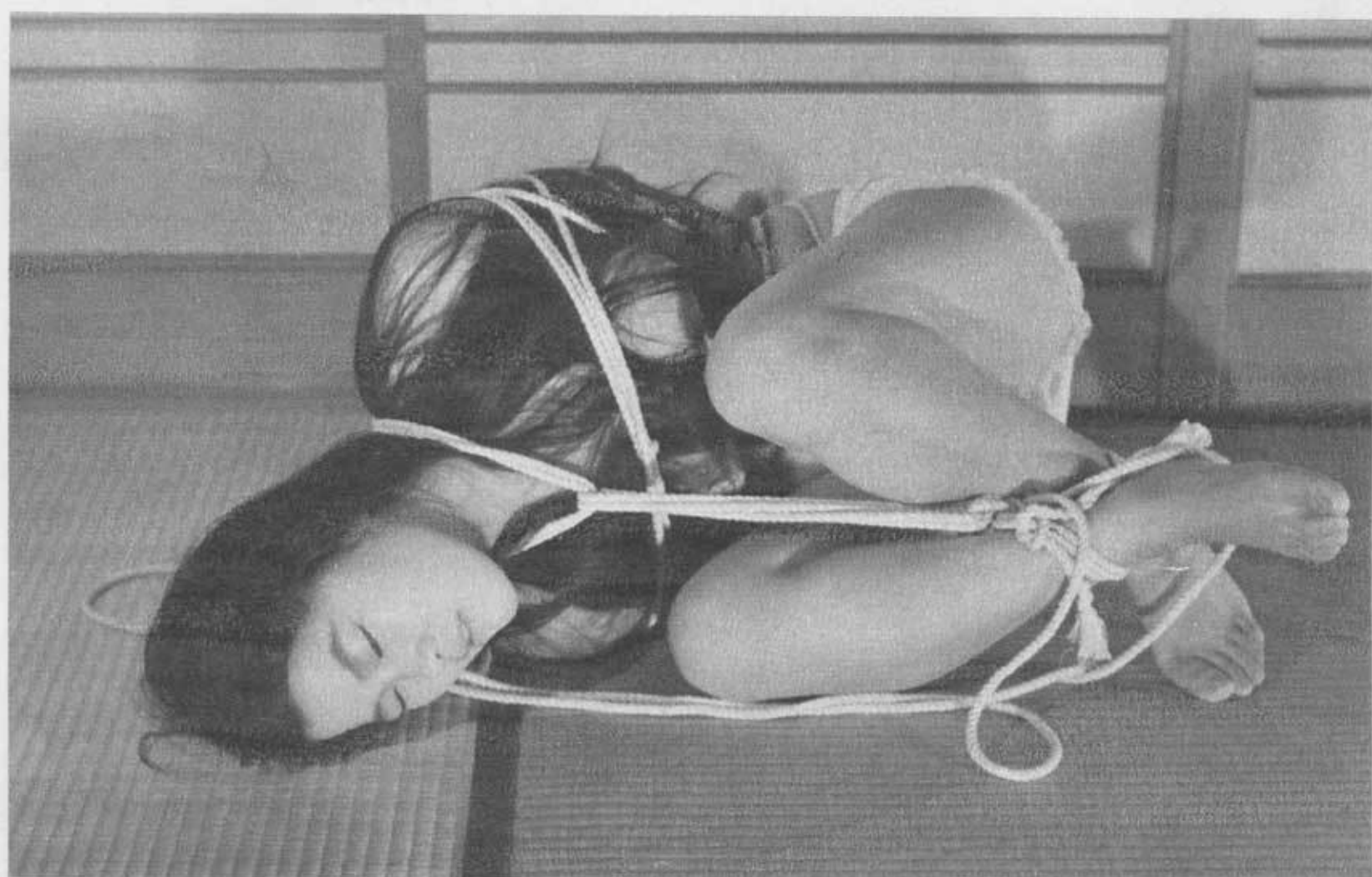
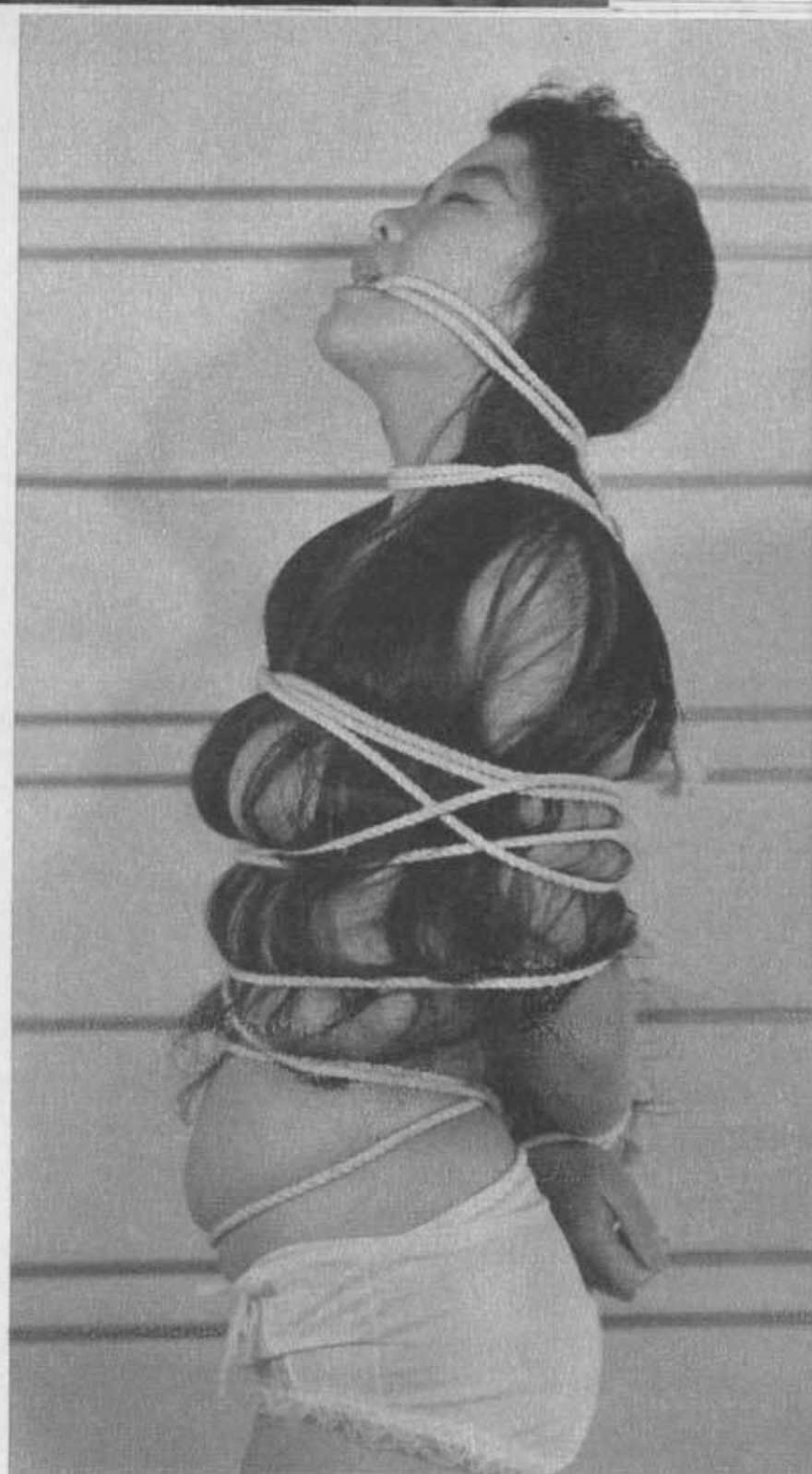
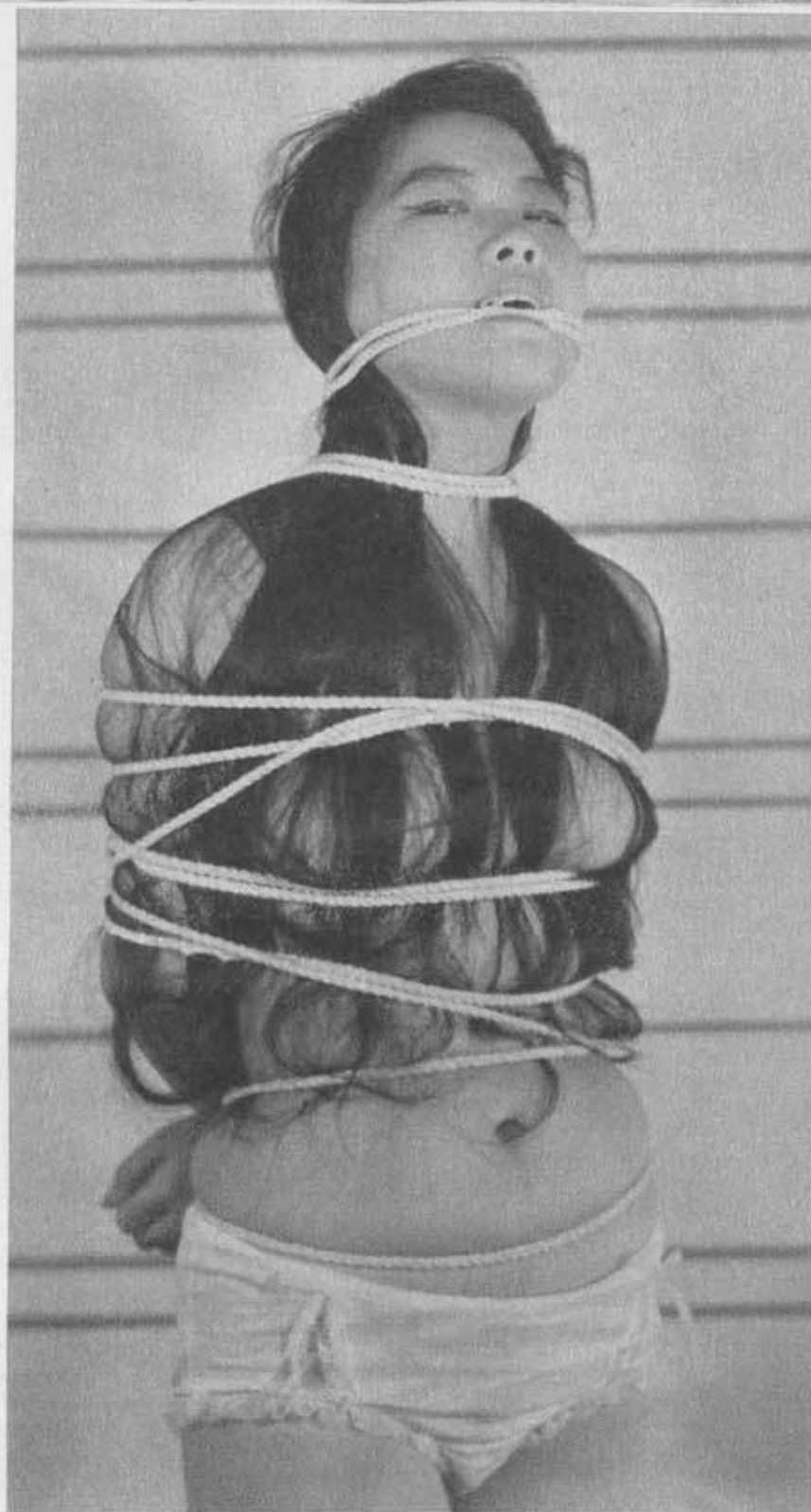




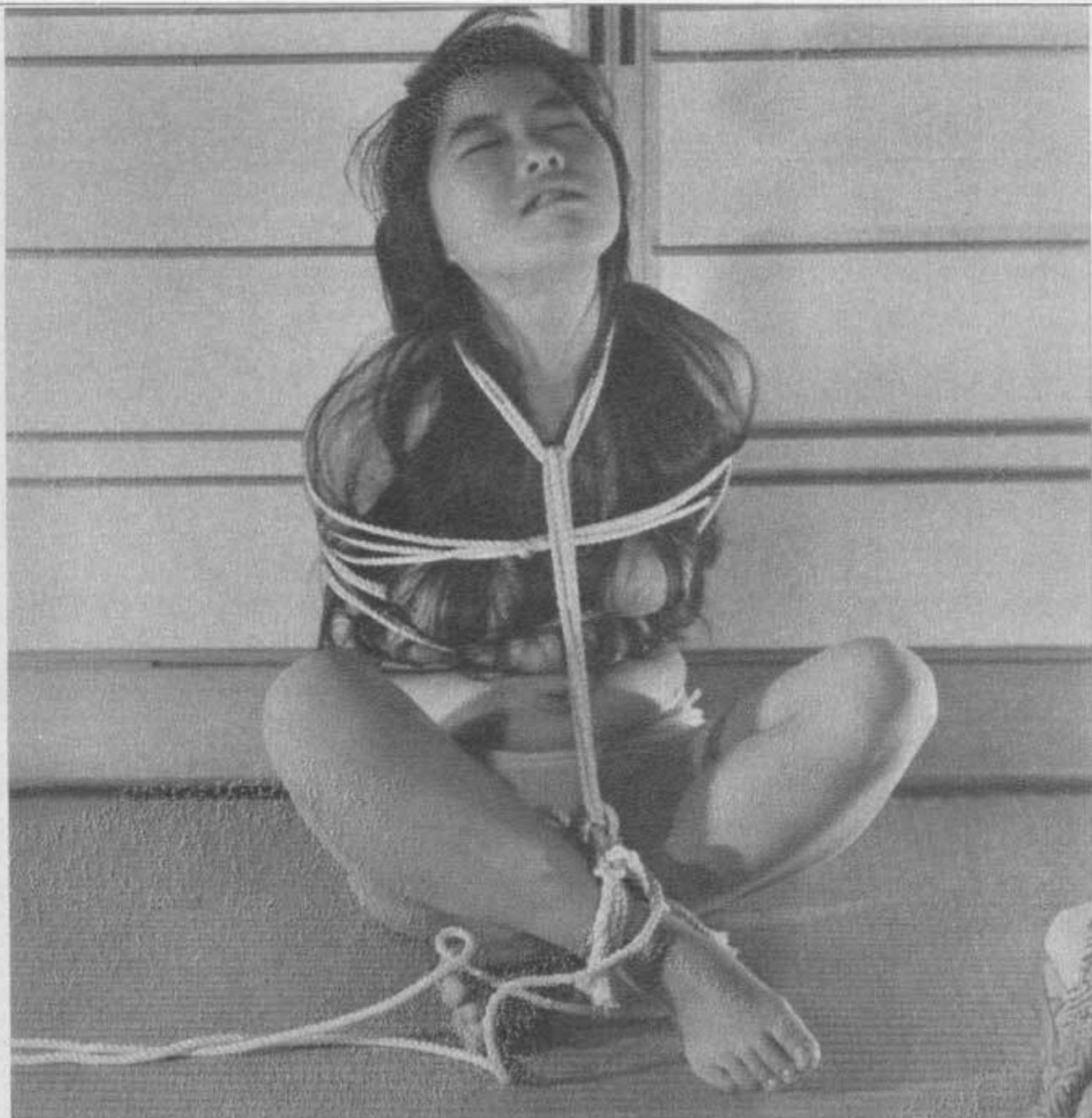








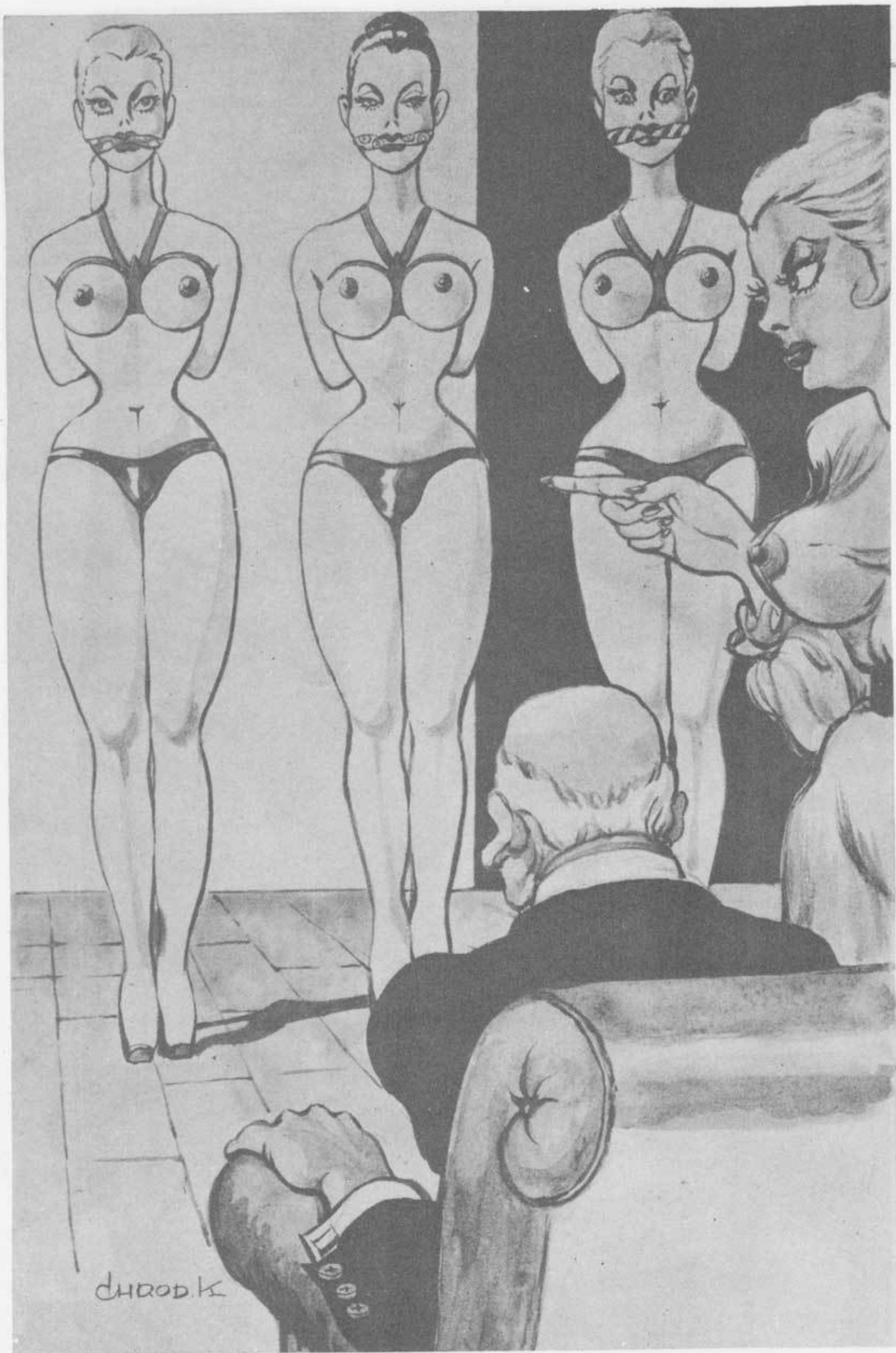








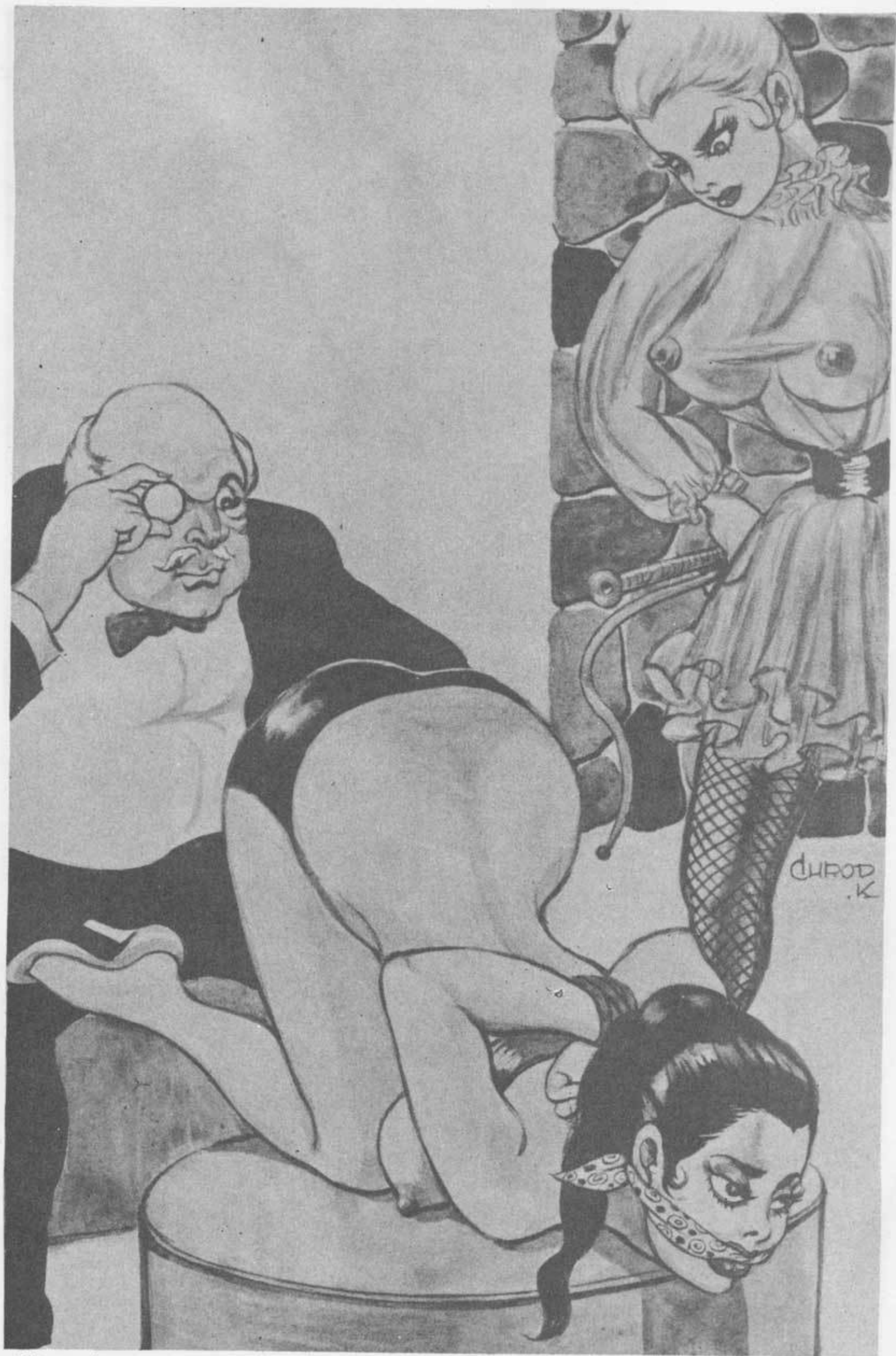




客の前にずらりと並べられた商品たち

クロード・コガ 画





客の気に入った商品は、更に入念に細かい部分まで鑑賞される。少しでもしぶると女主人の鋭い鞭が飛ぶ。





取引きされた商品は、嚴重に荷造りされたうえ、  
買い主のもとに發送される





オムツカバ— (浣腸を施された彼女は、たまらなく歩きまわる)





さく衣 (皮は水を吸って縮み身体にぴったりはりつく)

四馬孝・画



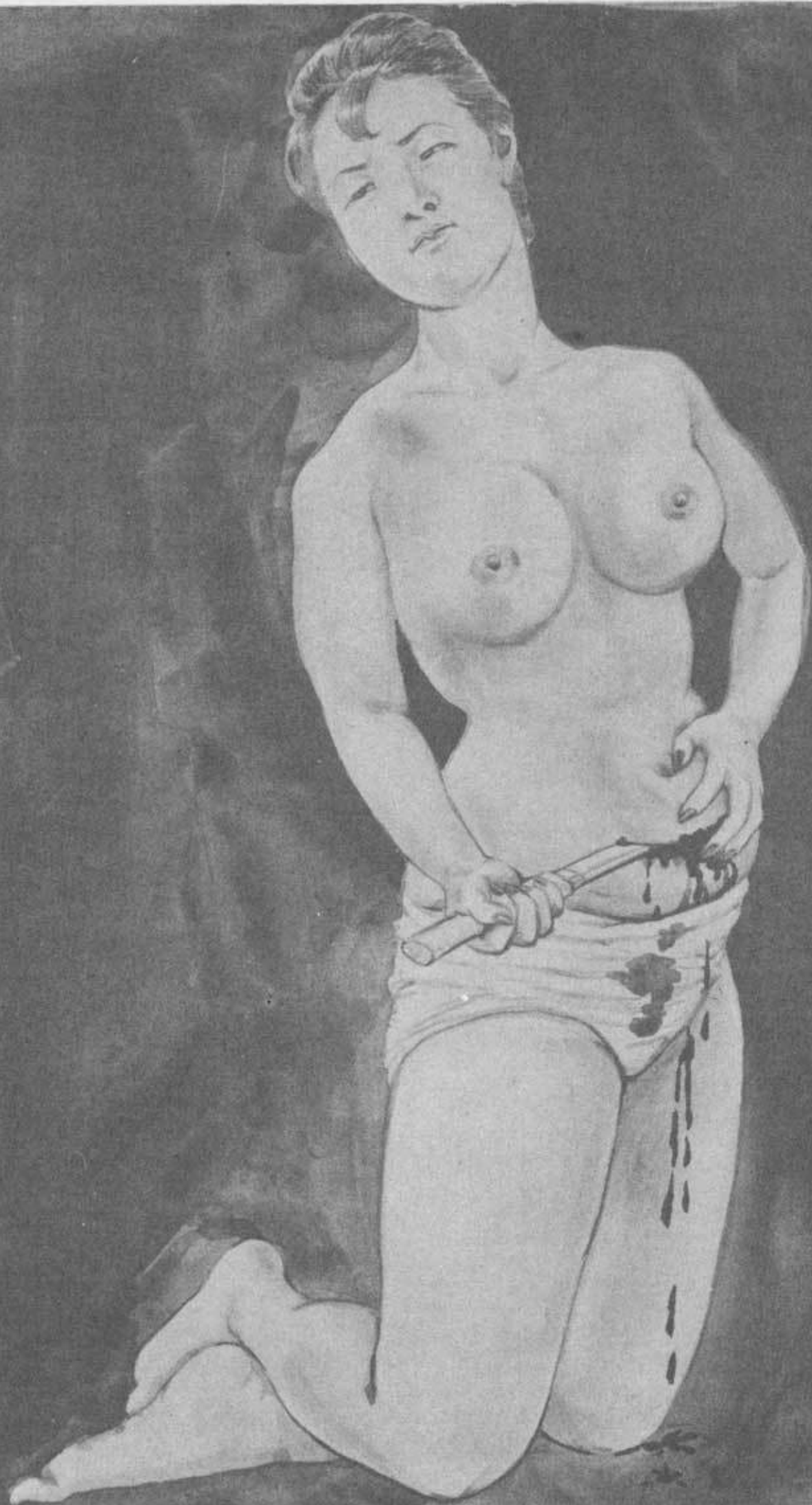


むすめ腹切

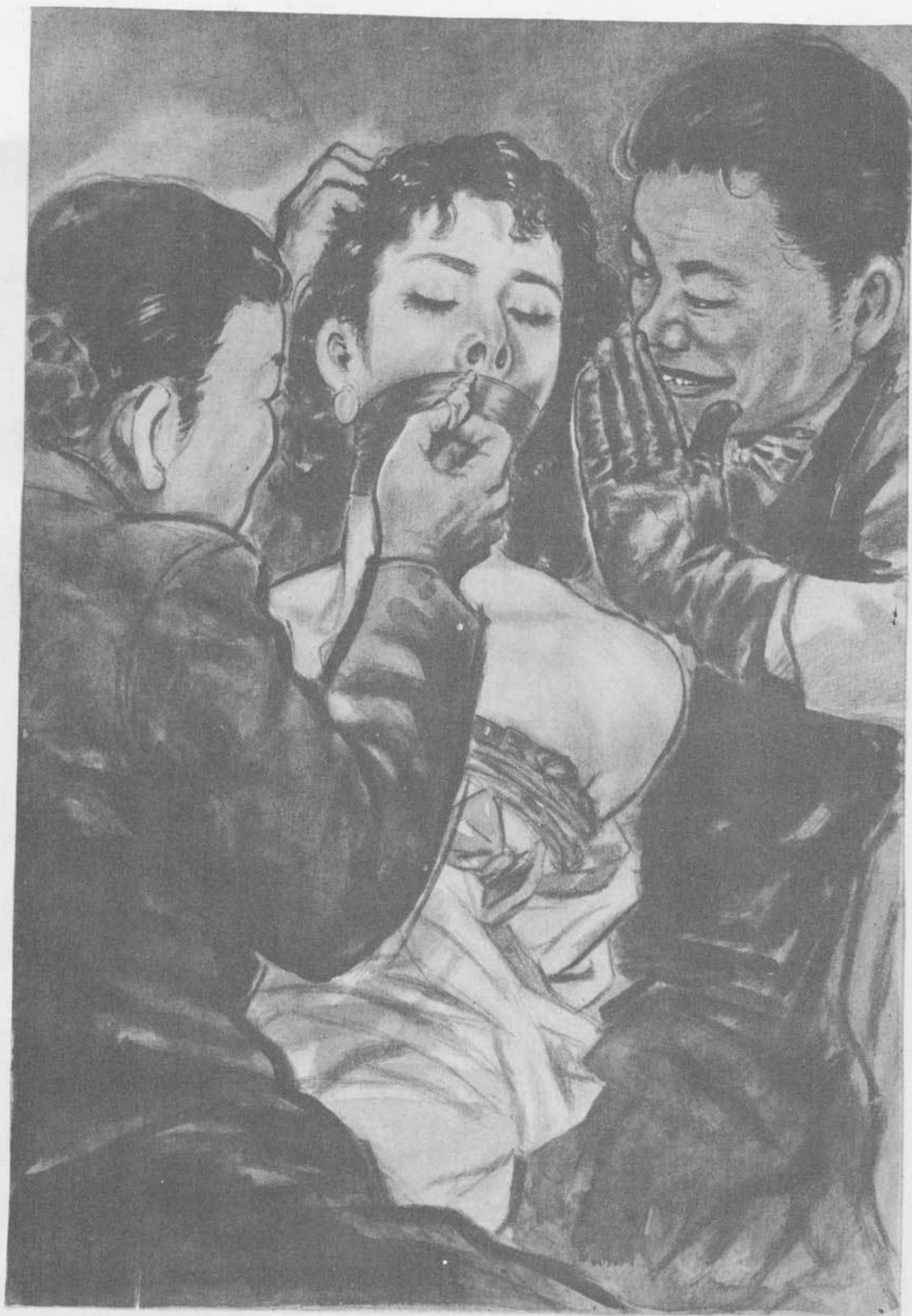


# 切腹プレイ幻想図

龍 れ い 子 ・ 画







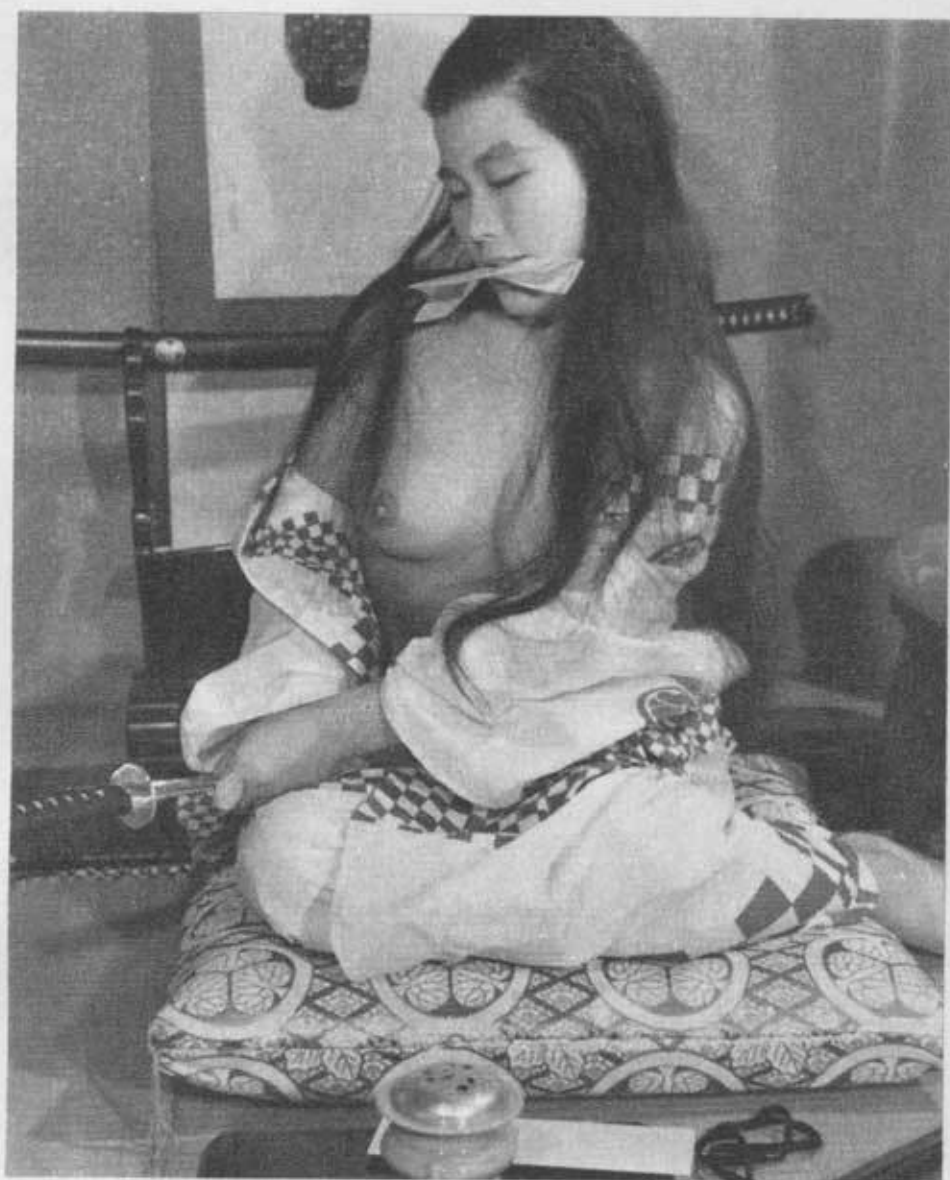
鼻 な ぶ り

四 馬 孝 ・ 画













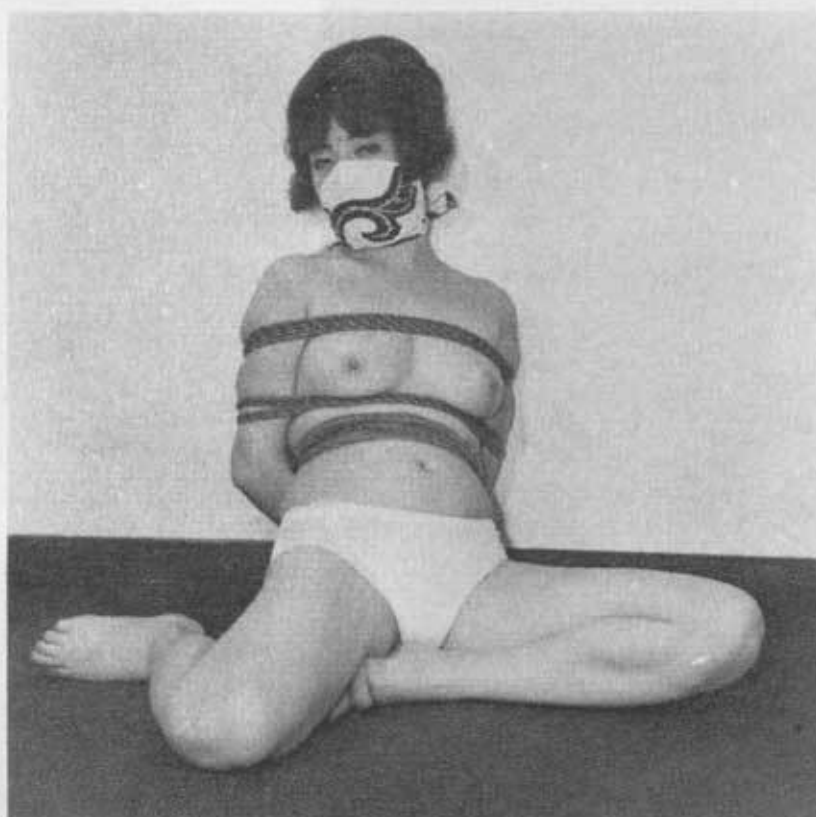
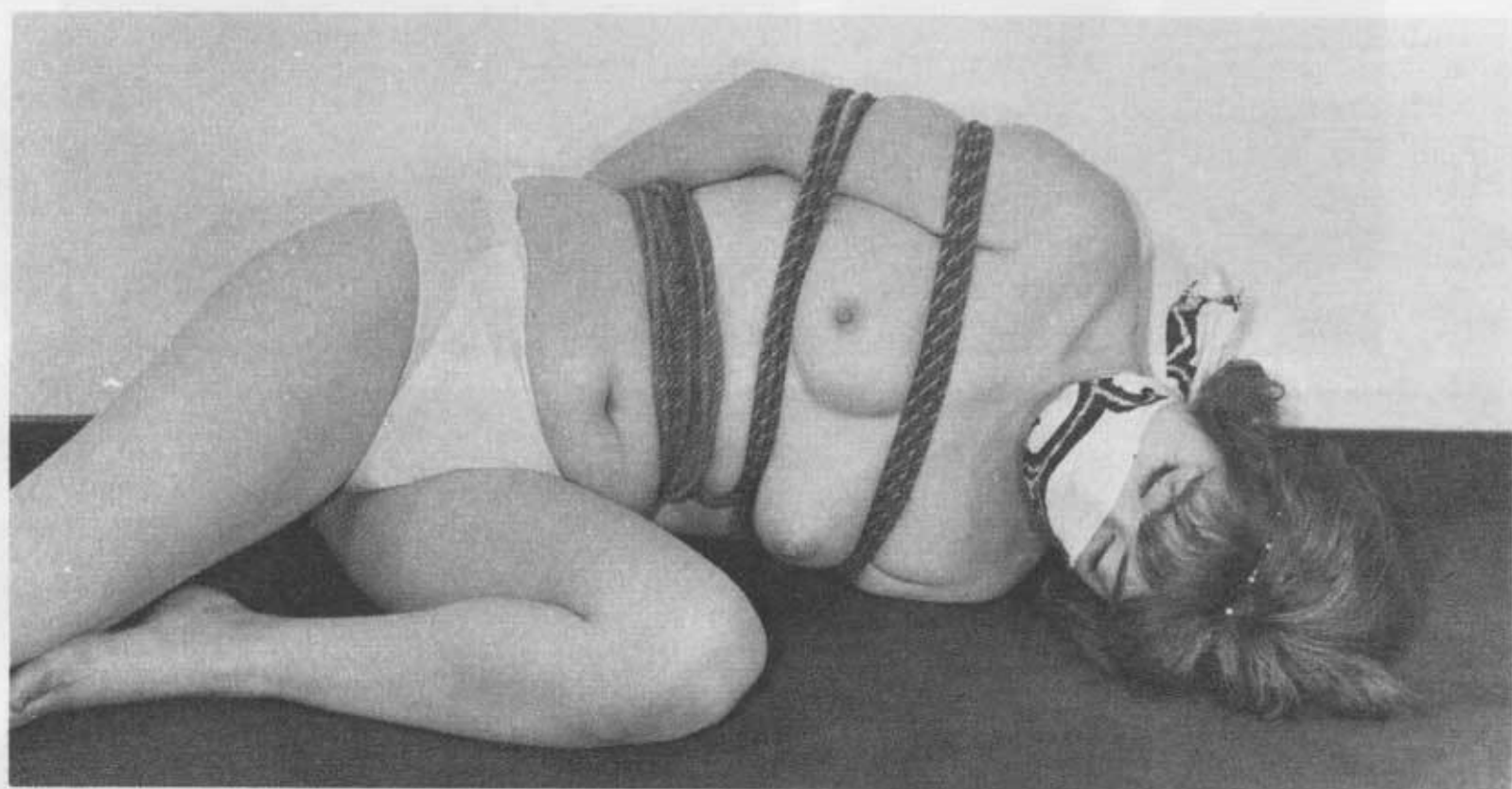




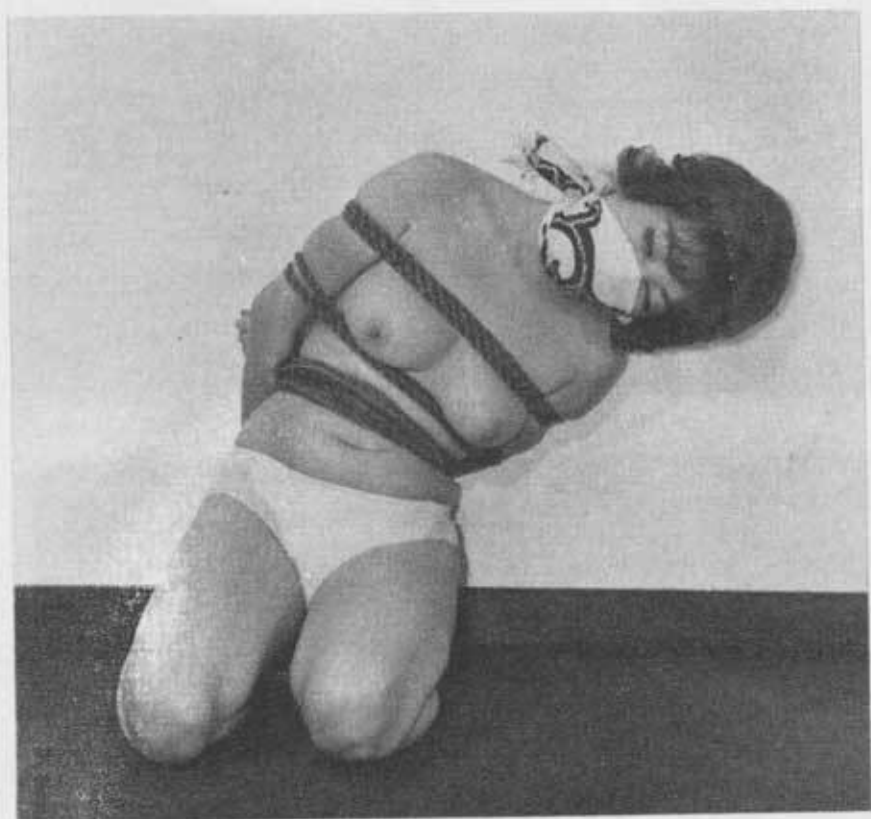
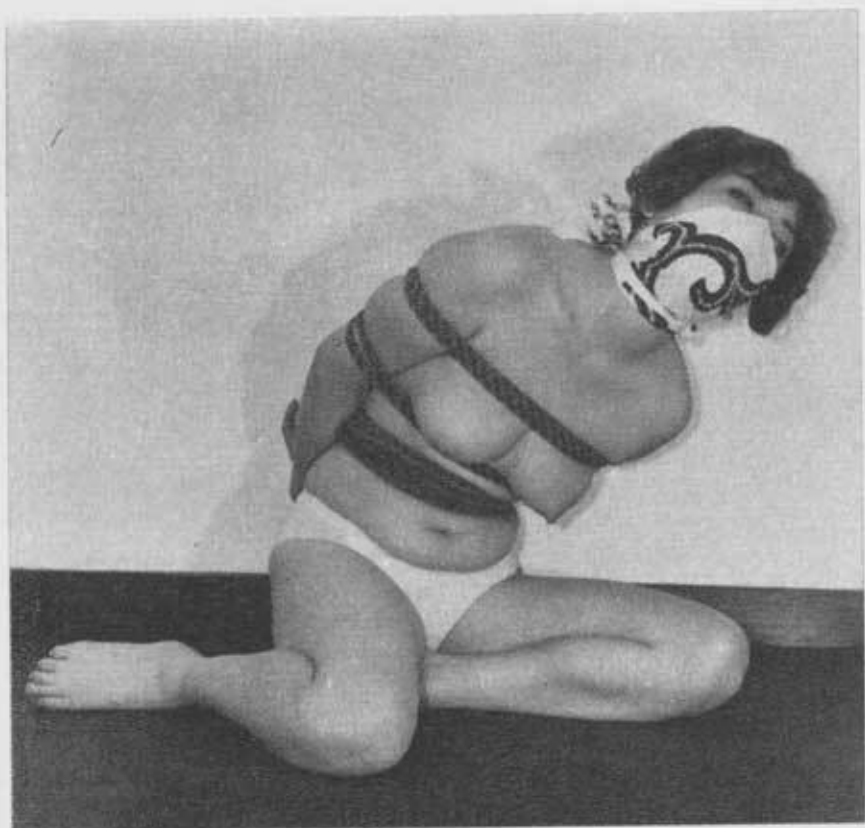




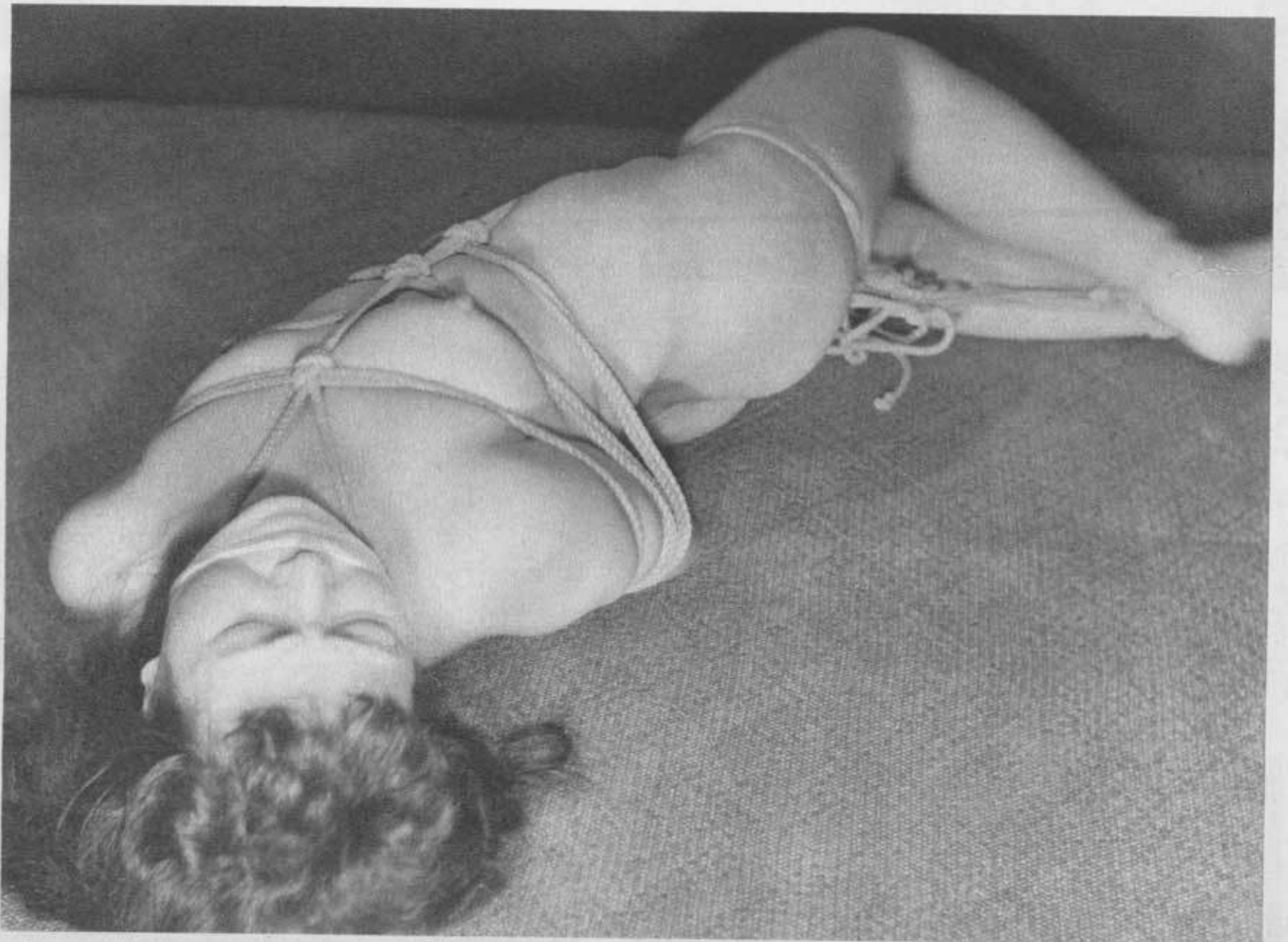
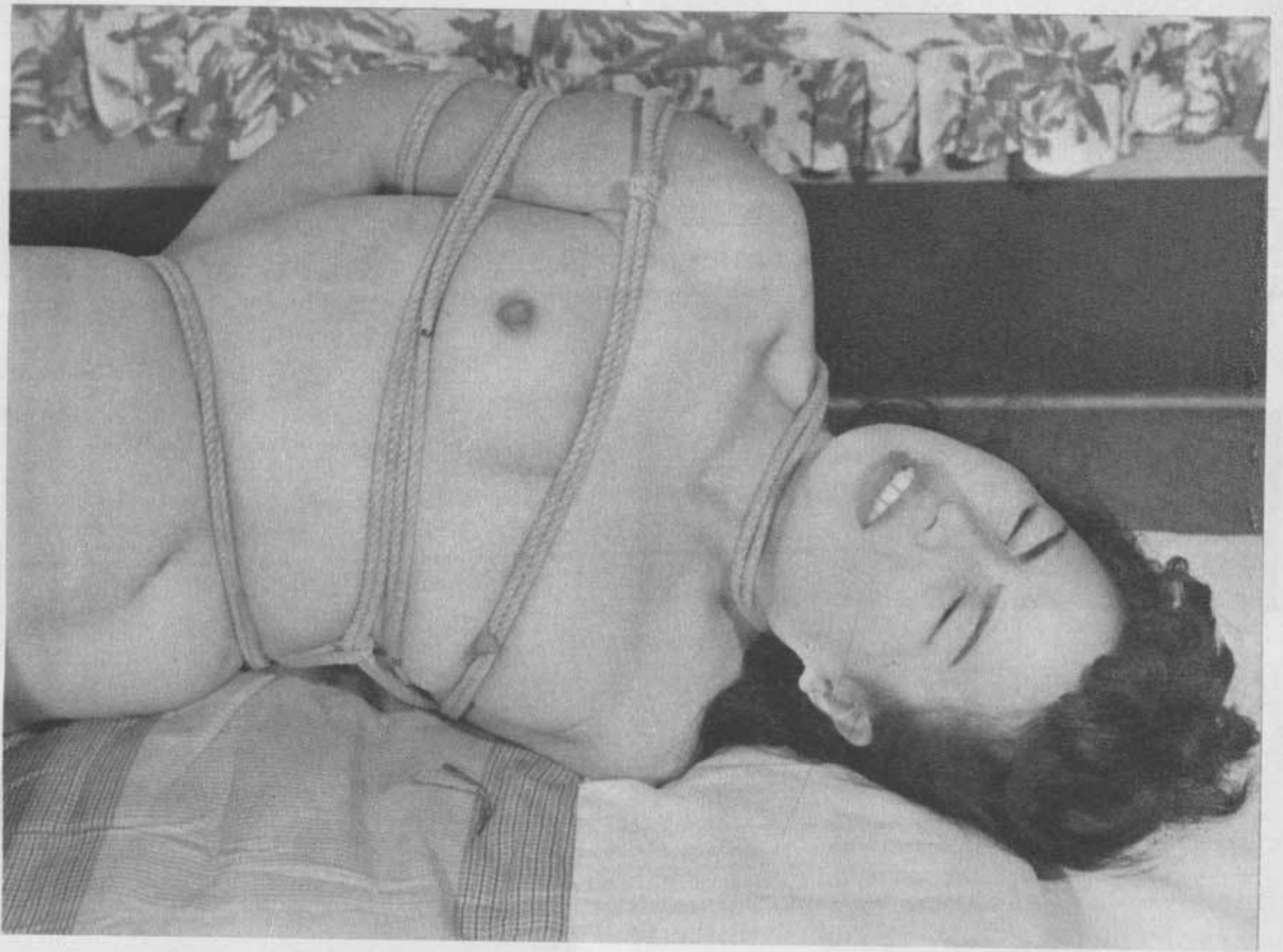
















新しい風俗文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1963年 3月号

(第17巻 第3号 通刊 第174号)



## △告白▽

## 風 の 町 か ら

山 辺 ま ゆ み

紅葉していた山々の肌が色あせ、きらめきながら流れていた川が冷たく澄んで来ると、いつの間にか冬がやって来る。町角に木枯しが吹き始めると、私はきまってあの頃の自分や、かげのように私の人生をねじ曲げて去った亡き夫の事を思い出す。それは、この季節を迎えたと私の胸をひたして来る秘かなよしみでもある。自分一人にいい聞かせていたひめごとが読者欄への投稿を機に、小さなしめりを突き破ってあふれる水のように、私にペンをとらせた。

この経験が、この苦い不思議な快楽が、私以外の人たちにどれ程の共感をもって迎えら

れるのか。半ば不安、半ば解放の心を噛みしめながら、私は私のあざやかな思い出をひろげてみよう。

## 1

七年前、私は全くのねんねえのままに結婚した。夫は昼間はある小さな商事会社の事務員、夜は取ったばかりの免許を利用して、生け花の出稽古をしていた。私はそれが約束の共稼ぎで相も変らぬB・G生活を続けた。もち論楽とはいえなかったが、結婚後の日々は来る日来る日が新鮮で些細な苦しみも、むしろ新らしい経験として私には意欲的に迎えら

れた。だから夫の帰宅の遅いのも、つい生け花の教授に身が入ってのことだろうと信じて疑わなかった。昼間の勤めでグッタリと疲れても、夫を迎えると女としての献身の本性が全身を支配していた。いわば、それが愛情だと思い込んで満足していた。私とは、そんな女だったのだ。

その私が、夫の悲しい性癖に気づき、私自身までも、その不思議な陶酔の世界に踏みこむようになったのは、一年程した木枯らしの鳴る乾いた冬の夜からだだった。

その夜、めずらしく、夫は酒気を帯びていた。めったに酒など飲んだことのない夫だっ



「だから、私は、はじめからある種の異常な予感を感じていた。」

「どうして飲んだの？」

「君に話したいことがあるからさ。」

ふだんは気弱な眼が坐っていた。寝間着に着がえると、夫は私の手を引っ張って、無理に寢床の上に坐らせた。

「頼みがあるんだ。」

「？」

「前から、頼みたいと思っていながら、君があまり素直なんで、逆にいい出せなかったのさ。」

私は答に迷った。どんな頼みにしろ、夫のいう事だったら妻として叶えるのが当然ではないか。しかしいい出せなかったとは、一体どんな重大な事なのだろう。私は夫の手をにぎって、彼の顔を下から見上げた。

「私にできることだったら、何でも……。」

「何でも？」

私はコックリとうなづきながら、酒まで飲まなければいけないこととは何かと推しはかりかねていた。不安の反面、妻の座からものをいう甘い愛情の快感もあった。

「黙って眼をつぶって、僕のいう通りにして欲しいんだ。」

「何だ、そんなこと。」

私はフツとおかしくなった。夫婦の間で、いい出しかねていた事とは、夜の愛情の交歓で思い切り自由な肢体をとりたいたいという、いわば固い人柄で通っている夫の抑圧からの解放なのかと解釈したからだ。

「いいわ、いう通りにするわ。」

夫は、ゴクリと生唾をのみこんだようだった。

「裸になって、ほしいんだ。」

私はちょっと頬を染めたが、すぐ黙ってうなづいた。室を暗くした寢床の中では経験したことだったが、明かるい電灯の下で、しかも対坐したままのたたずまいで裸身をさらすのは結婚して、はじめてであった。帯を解き着ているものを脱ぎすて、下着をとり去るとさすがに寒気が身に沁みた。はじめて気づいたのだが、その時の夫の眼は異様に輝やき、熱気さえ感じられた。私の背筋を、とり返しのつかぬものへ踏みこんだという思いが、一瞬、ゾクリと突っ走ったのを覚えている。以来、思いきって行動に踏み切るようになったのは、必らずこの時の感覚が反芻され、それが大きな決心を促がすからだ。

私の半生は、この時から大きく方向転換を

余儀なくされた。私はその夜、夫から全く知らなかった別の人生のあることを思い知らされたからだ。

胸をかかえ、膝小僧をそろえて正坐した私を、いきなり夫は突きとばすように押し倒すと、両足を握って大きく開いた。私は自分の不ざまな恰好に悲鳴をあげ、顔をおおった。

「僕は、君を責めたかったんだ。責めて、責めて、君が悲鳴をあげるまで、今までは、お花の生徒で我慢していたのさ。それが結婚で姿を消しちゃった。折角トレーニングしたお弟子だったのに……。でも、僕には君がいる。君は何でもいう事をきく筈の女房だ。僕が何をしても、君は我慢をしてくれる筈だ。いやその内、我慢どころか、きっと進んで僕に協力してくれる……。」

夫は、うわ言のようにそんな事をいいながら、私の巻きつけていた腰紐を使ってしまった。ねじり上げられた両腕を背後へ回されて縛られた。びっくりして声もたてられずショックが恐怖にかわって、私の顔は半分、泣きべそだったに違いない。夫は、まるで人が変わったように、無抵抗のままに私の裸を眺め、それから昂奮した顔つきで作業にとりかかった。



作業とは——裸の乳房を力いっぱい、しほり上げたり、手の平で激しくまさつしたり、いわゆる乳房責めをすることだった。私は、ようやく涙を流しながら、それでも夫のために必死に痛みを耐えた。

外に轟々と吹きまくる夜半の木枯らしが、耳に虚しくひびいて来ていた。

## 2

その夜を境に、夫の態度は急変した。昼間は優しく平凡な夫が、夜になると荒々しい一匹の獣となった。はじめは抵抗を感じていた私も、痛苦の中にうっとりするような秘薬を



味わってから、次第に夫の意志の中に傾斜するようになっていた。

二人の生活が急角度にノーマルの度を踏み外すにつれて、時間も夜だけとは限らなくな

った。朝、起き抜けの私をとらえて、いきなり上半身を裸にし縛り上げることもあった。日曜の昼、買物から帰った私を玄関先に仰向きに倒し、洋服の胸元をひろげて、乳首をひき出し、洗たくバサミをかまして、眺めていたこともあった。しかし二人だけの秘密の内はま

だよかった。加速度的に異常の度が加わり、少しの刺戟ではあきたりなくなった夫は、ある日彼の知人を仲間に引き入れたのだ。それが佐賀さんであり、後

年、私を更にこの道から外れなくさせた重要な人物となった。

翌年の早春——梅のつぼみが、ふくらむ頃の事である。その日、いつになく早く帰宅した夫の背後に、長身でやせ型の佐賀さんが立っていた。外面は柔和そうだが、ほりの深い表情の眼の色に、どこことなく射るような強い光りがあった。

「取引先の会社の方でね、話し合っている内にウマがあつて、すっかりお友だちになっちゃったってわけだ。君を紹介しようと思つてね。」

夫は佐賀さんをひき合わせてから、私に酒の仕度を命じた。佐賀さんは洋酒党だが、日本酒も決して嫌いな方ではないと説明した。

ふだん家に置いてない酒や、つまみものの調達に、いささか慌てながらも、大事な夫の知人ということで、私はいそいでどうにかテーブルの上の体裁を整えた。次の間にひかえて針仕事する私の耳に、ヒソヒソと話し合う二人のようすが何となく気にかかった。それは酒をはさんで談論風発という男の世界のそれではもち論なく、歓談という明かるいものでもない。アルコールが廻っているのに奇妙に陰湿な空気が感じられたからだ。

二時間たつても、三時間たつても帰らぬ客にそろそろ苛立ちを覚え始めた頃、境の襖をあけて、赤い顔の夫が入って来た。ようやくお帰りがかと腰を浮かしかけた。私の背中から夫はムズと手を伸ばして着物の襟をひき開いて来た。さすがの私もあわてて、振り切ろうともがいた。佐賀さんに気がねして声も立てられない。





「駄目……お客さんがいるのに！」  
「いいんだよ、あいつも承知なんだ。」  
瞬間、私は例の背筋を走るゾクリとしたものを感じた。それを感じることは、次の段階に倒れこんでしまう、悲しい無抵抗の前ぶれ

った。

「なる程。」

つぶやくように佐賀さんはうめくと、何と私の側に、露店の品物でも見る客のようにうずくまった。私は恥辱で、消え入りたい思い

でもある。私は、ねじふせられ、着物をはだけられ、夫のネクタイで両手を結ばれ、部屋の中央に転がされていた。夫の低い、さすような言葉を聞いてから、不思議な事に力が抜けてしまったのだ。なるように成れ！と、不貞くされた不安の中で、新しい好奇心が頭を持ち上げてもいた。

とくに聞えている筈の物音なのに、佐賀さんは、それまで、ひっそりと際の室に坐っていた。  
「すみましたよ。」

夫が声をかけると、相談でもしてあったのか、出を待っていた役者が、きっかけを得て揚幕からでも登場するように「やあ！」とかけ声をあげて、佐賀さんは入って来た。

私の全身が、恥づかしさで火照

だったし、夫への憎しみのような複雑な気持ち胸をよぎった。

「始めて見て下さい。」と佐賀さん。

「ええ、よく見て下さいよ。きょうは思いきって、やってみますから。」と夫。

私は思わず「止めて」と叫んでしまった。

「何をいうんだ。佐賀さんは、わざわざ吾々のために来てくれたんだよ。この道の先輩だし、いわば僕達のプロデューサーでもあり、演出家にもなってくれる人だ。」

「奥さん、突然で申し訳ありません。御主人が、どうしてもとおっしゃるんで。奥さんだって最後には同意してくれると説得されて、とうとう……。でも、誰にもいやしません。

この点だけはご安心下さい。」

交々いう二人の言葉も、激してきた感情のために私の耳には入らなかった。

「ともかく止めて！こんな事、私、嫌です。」

私は不自由な手のまま、思い切って体を、ボタンボタンと畳に打ちつけてもがいた。

「チェッ、仕方がねえな、よし！」

舌打ちすると夫は、いきなりお膳の上のふきんを私の口の中に押し込むとお膳かけをぱつとめくって、それでしっかりと口を噛ませってしまった。



世にも鮮烈な思い出が展開したのは、それからだ。もう近所は寝静まり、真夜中に近かったろうか。

上半身裸にされた私は、はじめて会った異性の前で、乳房を夫によってモミクチャにいいじめ抜かれた。それは全く、クチャクチャという単純な言葉が一番びったりするような責め方であった。私には何時間もの長い時間にも思われた。私はうめいて、失神しそうになった。その時、佐賀さんはニヤリと笑ったようだった。強い眼の光が、はじめて残忍に燃えたようだった。

「奥さん、今度は私の番です。」

佐賀さんは、それだけいうと、グツタリしている私の体に手をかけて、うつ伏せにさせた。

夫に責められた胸が、ヒンヤリと冷たいたたみに触れて、ツキツキとうずいた。

「貴女も、きつと好きになりますよ。」

佐賀さんは投げかけるようにいうと、私の足元に廻った。私はむき出しの足を意識してモウロウとしていた神経が俄に緊張するのを覚えた。佐賀さんの手に握られていたのは浣腸器だった。そして、夫はこの一瞬を待って片唾を飲んでいたのである。

## 3

さすがに、その日からしばらく私たちのプレイは中断された。夫の知人とはいえ、私にとっては初対面の異性である。その異性に肌身をさらしたのは何といっても、ショックだったし怒るに値する事だった。私は夫をなじり、夫はあやまった。しかし私は怒って、一旦実家へ帰ってしまった。そのくせ、冷たいガラス器の感触が妙に時々思い出されたのは、もはや私が完全に夫に飼育された証拠だったのかも知れない。

実家に帰っていた二週間ばかりに、ちょっとした異常な経験が一つあった。同性と責め合った経験だが、これはここでは語るまい。当時、夫からの責めになれ始めていた私にとっては、さして満たされたものではなかったから……。

そして、和解の話し合いがつき、再び夫の許へ帰って三月ばかりして、私は第二の転機を迎えた。それは夫の死だった。会社からの帰り、夫は不幸な事に制限時速以上のスピードで走って来た三輪車にはねられ、脳内出血であっけなくこの世を去った。全く手痛い打撃だった。生活はもち論、これからの半生は

灰色にぬりつぶされてしまったと信じた。果然とし、何も手につかない日々が続いた。異常な夜の記憶がよみがえり、一人身の辛さが身に沁みだ。

ようやく忌も明け、落着きを取り戻しはしたものの、一人身で明け暮れる毎日は味気なかった。しかし妻の座から解放されてみると再び私は若さの中に引き返す楽しさのあることに気づいた。聞きなれた「奥さん」という言葉も次第に私から遠去かった。私は転機を図るつもりで、それまでの家をたたみ、勤務先により近い現在地に引移った。いつまでもメソメソしてはいられないという決心からだった。Tという米軍基地のある町に近く、冬になると黄塵が中空を茶色に染める。木枯らしが夫のいた頃の事を思い出させる以外には、しばらく何事もない何年かが続いた。

B・G生活が板につき、私自身で眺めてもちょっとと婚期の遅れた娘という感じでしかなかった頃、再び例の佐賀さんにめぐり逢った。私には忘れ難い痛烈な思い出だったから彼の顔を見忘れる筈はなかった。一見生真面目そうにムツツリ黙った表情の中に、相変らず強い眼の光があった。数年前と変っていない



い彼に会った瞬間、チラッとガラスの感触がよみがえった。春先の、まだうそ寒い玄関先でモソモソと土産ものを取り出し

「突然お邪魔してすみません。でも、ずい分苦勞して探したんですよ。あれから、どうされたかと思って……。」

と挨拶する彼に、私は忘れてしまっていた背筋を走るせんりつを久し振りに感じた。追いつ返しても失礼になる相手ではないと思つた。しかし私は、つきものでもしたでくのぼうのように、彼を座敷へ招じ入れていた。

「うっ、うっ、うっ」

私がうめく度に、佐賀さんの顔が紅潮して行くようだった。着衣のままで縛られ、あの時のように私は乳房責めを受けていた。違ふのは夫に代つて、佐賀さんが私をしっかりおさえつけているという事だけだった。

そうなつてからの佐賀さんは、全く別人のようだった。座敷にあがった当座は、親切に紳士的に夫の思ひ出話や、生活のことを、細かい心づかいで話しかけて来た。たった一人の生活で、内心頼るものの欲しかった私は、追いつ返しても失礼ではない「などと思つていた心がいつの間にか解けて、次第に打ちつけた態度になつて行つた。たまたま話が、例の

夜のことによつた。あの晩は、ほんとうに失礼しましたといいながら、探るような眼がキラリと光つたのを感じた時、私はすぐ次に来るものを予感していた。むしろ私自身が、誘うようなこびを示したのかも知れない。何年かの間に、私には悲しい性癖が、夫になり代つて植えつけられていたのだ。長い年月が、そのことを、オアシスのように待ち望む私を作つていたのだ。

「あの時は、びっくりしたけど、今は平気ですよ。かえつて、なつかしいくらい。」

この一言が、彼を急激に変貌させた。

佐賀さんは立ち上がると用意していたゴム紐で私を後手縛りに動けなくしてしまつた。「奥さん、ごめんなさい。僕も実は内心、奥さんをこうしたくて……。お互い、心の底で期待していたのだから、今夜はこのつぼの中にとびこみましょう。」

俄に熱をおびて来た彼の膝に顔を伏せて

「いいわ、でも誰にもいわないで。」

と私はコックリをしていた。

まゆみは悪女

知らない男の胸の下で

苦い異常の美酒に酔おう

目くらむ時まで

夢幻の中を行こう

涙の流れるまで

さ迷つて行こう

さめた時

一人で空を歩けるように

詩とも何ともいいようのない、でたらめの言葉が胸をよぎつて、私の行動をおおつた。

私はむしろ、積極的に佐賀さんを乳房責めにさそつた。佐賀さんは室の隅にあつた物差しを拾つと、それを私の胸にこじ入れて、何度もしごいた。乳首を二本の指でつまんで、力いっぱいねじつたり、大きな掌で胸をわしづかみにして、ゆすつたりした。

そして、挙句の果て——私は鴨居に逆づりされ、ここには書けないような佐賀さんの洗礼を受けた。私は失神した。

4

調子に乗つて、私はついいいわなくてもいいような恥さらしを書いたようである。以来、私と佐賀さんの間には数々のプレイが実現した。その事についてはまたいつか書く機会があるだろう。最後に、K誌に投稿してから以後のことを告白して、この稿を終りたい。

私は佐賀さんによつて、この道から抜け



れなくなり、M的な素地にS的なものまで培われたが、更にK誌の紹介も受けた。はじめて見せられたのは、Nという同性の「恐怖の塩水」という一連のグラビアだった。

「このタイプ、君とおなじだよ。」

と、いきなり開いて見せつけられたページには、半裸のNさんが、机の脚にゴム紐で首をつながれて括られ、無理やり、男から塩水を飲ませられようとして、おそれおののく姿が迫力あるカメラでとらえられていた。

以来、巻を追って借り読みしている内、とうとう自分でも購入入したいと思うようになった。

しかし女の身で書店から購入するのは、実は容易ではない。もち論、この町の店はさけ、新宿へ遊びに出た折などに思い切って買って帰る。佐賀さんからモデルに志願しないかとからかわれたが、私にはそんな勇氣はとてもない。ふだんは内気で億病な平凡な女に過ぎないのだから……。



佐賀さんは、半ばマネージャー気取りで私につきまとうが、私は古い傷を背負ったつながらりからは早く脱出したいと時々思うのだ。  
(佐賀さん、これをお読みになっても、怒らないで下さい。私の気持はお分りでしょうか)

ら

実は投稿も、佐賀さんには内緒であった。どうせ知れてしまうだろうし、知れたら、こわかったら、僕にまかせなさい。交渉して、安全な人をつれて来てあげる”などといい出しかねないと思った。事実、後日佐賀さんは、私の思った通りの事をいった。

しかし私は一人でやりたかったし、新しい友だちを得て、ひそかに限界を試したいという無謀な策をにかけて直進した。

無論、乱暴な人はこわかったし、セックスの面が最も心配だった。見知らぬ人でも、佐賀さんの場合は夫という仲だちがあったが、今度は一対一なのだという思いが、私の胸をひそかにふるわせた。けれど私は勇氣を出して読者通信に呼びかけた。やや強がって、オーバーなプレイへの呼びかけになったのが、はしたなく、いささか面映ゆく活字になったのを見てから逃げ出したような後悔の念におそ



われた。

一カ月後——正直にいうと十二月も一週間ほど過ぎてから、おそろおそろ書店で私はその反響を読んだ。K誌を購入する機会がなかったし、仕事の都合で、都内へ行ける日もなかったから、私は返事を手に入れるのが遅れる結果になってしまったのだ。二、三の方の呼びかけに応ずるには遅過ぎてしまったし、結果からいうと、それでよかったのかも知れない。何故なら、私は新しい友だちとして登場した一人から、手痛い背信を受け、今はしみじみ自分の浅はかさを後悔しているからだ。それは千駄ヶ谷のHという旅館の一室で展開された最も新しい思い出である。

私は実をいうと、その人の住所も名前も知らない。素性の知らない未知の人は何となくおそろしくお断わりしようと思っていたのだがその人はズバリと私をたずねて来たのだ。「貴女が山辺まゆみさんでしょう。実は見当をつけて来たのです。たまたま武蔵野に住んでいますし、貴女のことを実はある人から聞いていたのです。それとK誌とが結びつきました。」

そういって、その人は山田と名乗った。仮名だという。貴女も仮名なのだから、それで

許してほしいという。私はむしろ、ある人というのが気になったし、勤め先を知っているらしい素振りに、正直のところ気持が動揺した。申し出の通りについて行かなければ、明日からの勤務が不安になった。何故分ったのだろうか？佐賀さんが話したのだろうか？まだ二十二、三の学生臭の抜き切らないような青年なのに、どうしようというのだろうか？（後で聞くと、郵便局でK誌への通信に切手を貼る時見られたらしい。その宛先をキャッチして調べたとの事だった）私はとも角さそわれるままに、ハイヤーに乗った。

着いた先は温泉マークのついた旅館で、数寄屋作りの離れになっている上品な部屋だった。女中がいなくなると、山田さんはいきなり私の体に手をかけて来た。縛られはしなかったが私は彼の用意していた手拭いで猿ぐつわをされてしまった。

「まゆみさんが、声をあげると困るからね。」彼は煙草をくゆらしながら、座敷の真ん中にビニールを敷いた。そして取り出したのはどこの薬局でも売っている、だ円形の大人用の浣腸数個だったのである。

私は道々、ポツポツと語っておいた私の条件を彼が守ってくれることを信じた。しかし

結果的には、その信頼は裏切られた。私は甘すぎたのかも知れない。見知らぬ異性に約束を期待したのは無知で馬鹿なことだったのかも知れない。上半身だけという約束は無視され、私の着衣はすべてはぎ取られた。バス・ルームに押し込まれるように追い立てられ私は立て続けの浣腸を受けた挙句、排泄の恥しさを監視されなければならなかった。

私はようやく、この告白的な手記を書き終えた。私のような女は、他にもいるのだろうか。私は一応、呼びかけに応ずることに、ためらいを感じはじめている。ショックが大きすぎたからだ。しかし、だからといって私の悲しい性（さが）は、いよいよこの道に灰色の情熱を燃やすだろう。

今後もし、私に共感の意を表わしてくれる人があるなら、私はその中から同性の人を探し出して、秘かなよろこびにひたろう。いや私はもう自らそれを求め始めている。無謀な直進をさせて、自分の眼で探そう。新宿の赤い空の下に歩み出そう。いつかはきっと、私の求めている友だちが得られるに違いないと信じながら……。



〔告白〕

白 い ソ ッ ク ス

万 田 不 仁

— 被 虐 愛 ざ ん げ —

私は、中学校に入ると直ぐ下宿させられました。小さな待合を経営していた母は、男の子として難かしい年頃になる私を花柳界の中で育てる自信がなかったようです。一体に待合の女将や芸者の子は早熟で、頭も良いのですが、年頃になると兎角脇道に逸れがちで、そんな例を幾つか見ている母は私の先々が不安でならなかったのでしょう。

「中学生になったら、しっかりした堅気さんの家へ下宿させる」

と、予々いつていました。尤もそうすれば完全に私の不良化を防げると考えるほど単純な頭でもなかったと思いますから、ひとつに

は跛で、うじうじした気性の私を幾らかうとんじて、いつそ他人の中へ出したら少しはしゃっきりした子になるかも知れないという楽天家らしい、虫のいい計らいもあったようです。ところで、その下宿先ですが、母は料理屋の女中だった二十代の頃から易学を生活の唯一の羅針盤としていたような女で、私の下宿先もある日、帳場の簿記台の上に算木を並べて方角を決定しました。地図に磁石を置いて、その方角を調べた母は早速出掛けていて恰好な家を決めて来たのです。こうして、私は停年近い子供のない官吏の家に、二年余り寄寓しましたが、二年の三学期になると、

母は

「今年は吉方が出たから南へ引越すんだよ」と、いいました。何事も母には絶体服従だった私は、青葉時に母が易断で決めた家に移りました。菱川という、その家は古い二階家で、四十近い母親と女学校へ通っている娘の二人暮らしでした。

「あなたよりひとつお姉さんよ、ね、背もあなたより高いし、目方もこの通り少しデブちゃんだけど、大変な我儘者ですから、どうぞよろしく」

初めて菱川家の食卓に着いた晩、母親は闊達な人らしい朗らかな態度で、一人娘の節子



を紹介しました。私は途端に赤くなって、書生ッぽい挨拶をしました。が、眼の大きい、バタ臭い顔立の白哲、大柄なこの女学生は面倒臭そうに軽く会釈したきりでした。見るからに勝気そうな、それに何処か驕った様子で、重苦しく庄倒されるような気がしました。子供の頃から家の女中にも親しまず、出入りする芸者や半玉に至っては、まるで別世界の人のような感じで、偶帳場にいる時に彼等女が入って来ると、直ぐに座を外すほど変屈な、女性に小心だった私には、同じ屋根の下に若い娘がいるということは非常な気詰まりでした。しかし、二階の部屋に戻ると、今初めて逢ったばかりの節子の、長々と背中へ滑らせ、重そうな髪の毛が黒い流れのように私の網膜にきらめくのです。確か鈴木三重吉の小説の中で、うら若い女が恋しい夜は、髪が重くてねむれぬと歎く件があったと思います。が、そのところを思い出して、何故か顔の火照るのを感じたものです。

節子は、最初取っつきが悪い質だったらしく、少し日が経つと、夕餉の時など頻りに話しかけて来るようになりました。どういふ訳か若い女の前で物を食べることに異常な羞恥を感じる私は何時も俯きがちにもそもそと飯を嚙んでいますと「あなたの足どうしたの、痛まない？」などと、男の子のように勢いよく食べながら私の一番聞いて貰いたくないことを不遠慮に尋ねたりしました。私は、うちで母と親しい芸者などが来て、坐りこんでしまうと、もう食べ物に喉に痞えそうな味気ない気持ちになるのです。この私の羞恥心は誠に自分ながら厄介なもので、それは尚ほかに、もっと始末におえぬことがありました、というのは便通のことです。

私は菱川の家に下宿している間、その厠で一度も大便をしませんでした。私は、中年の女の沈んだ美しさを湛えたママ（節子がそう呼んだように母親のことを、こう書きます）と、瑞々しい若さに輝く節子のいる家で、ゆっくり落着いて大便を排出する事が出来なかったのです。大便は専ら学校の厠でしました。汚れ物は週末にうちへ持って帰って、幾らママにいわれても下着などママに洗濯して貰う訳にはいかないのでした。うちでもシャツや靴下は女中に洗わせましたが、パンツは必ず自分で洗いました。そんな私の内面に気付かない母は、そのことを感心だといっていました。

私の女、殊に美しい女（この範疇は私の場合可成緩やかなものでした）に対する変屈な気持は、何時の間にか船底にへばりついた貝殻のように私の心にべったりくっついてしまった劣等感に基づくものでした。美しい女へのおそれと憧憬、それは段々に私の性的成長に従って複雑になっていきましたが、花柳界で育ったのに母の教育が良かったせいか、生活力の強い母に全く庄倒されていじけていた為か、精神的にも性的にも発育が遅かった私は前の下宿にいる時は、未だひそかに「少女の友」を愛読していたのです。

節子は時々、足音高く階段をあがって来て「まあ、勉強家ネ、本の虫」と、大袈裟に感心したふりをして、参考書を読んで私の顔を覗いて、私の本箱から何冊か本を引出していくようになりました。「これだけ貸してネ、よごさないから」

小説本や詩集など、一度に五、六冊抱えこんで、階段の方へいきなぐらいます。学業に關係のない本を節子が耽読することをママは喜びませんでした。が、節子の成績がいいのであまりうるさくはいわないようでした。追々に解ったのですが、節子は案外だらしのなところがあって、こうして借りていった本



は必ずといっていい程毎度汚して返すのでした。新刊書の表紙は処々破れ、頁をやたら折ってあるのです。

愛書家で、小遣金は殆ど本に注ぎこんでいる私には、これは実に情けないことでした。が、それだからといって節子に幻滅を感じることもなく迎も出来ないことでした。頁の間に髪の毛が落ちていたこともありました。私は、はっとして、その渋黒というにはやや赤味を帯びた一筋の髪の毛を部厚い植物辞典の頁の間に移し潜めて、愛惜せずにはおれないのでした。

このような私の行為を差して、誰かがお前はもう節子を肉体的に想っているんだなどといったら、私はどんなに狼狽したことでしょう。私は唯憧憬という、きれいごとの世界にいる心算だったので、それは私も既に学校で、授業中に軟派のクラスメートが机の下から下へ廻して寄越すすべ光るあの写真を見ていましたし、うちの帳場で芸者が客と話している



てならないのでした。私はその頃読んだトルストイの翻訳物で早く少年の沙漠を越えて大人の世界へいきたいという意味の希望を述べているトルストイの少年期の思想に反対してクラスの文学少年達の嘲笑を買いました。

私は早起きのママのお陰で、毎朝早目に学校へいくことが出来ました。節子は寝坊で、殆ど毎朝駅までの坂道を脱兎のように駆け下り、駅の改札口、階段を走り抜け駆け昇らなければ間に合わないということでした。ママの御主人は節子の幼ない時に亡くなったそうですが、前途を嘱望された医学士だったとのこと、ママは節子を女子医専にあげる心算でした。節子もその気で、三年生の秋まで籍を置いた庭球部を辞めて、みっちり勉強をしている時でした。

——我儘者ですから……

その話のはしから男と女のあのことを生々しく想像することもありました。でもそうした事柄はその時分の私にはどうにも汚ならしく

と、ママは初めにいいましたが、節子は何といっても一人娘ですし、多分に甘い処のあるママの膝下で自由に育ったせい、相当に



気儘な、感情の伸幅の大きい少女であることが次第に解って来ました。

菱川の家は、回りに家作が四軒あって、暮らしては安気なようで、何時も陽気な、肥るのが唯一の心配といった風のママは、私を一下宿人でなく、家の者同然に扱ってくれました。私の母にいわせると、そこがその吉方へ移転したお陰で、そういう良い家が見附かったのだそうです。

ママは皮下脂肪を除く為もあって、毎晩お風呂に入りました。きれい好きで

「節ちゃん、下着取換えなさい。いわれなけや換えないのネ」

と、よく節子に注意していました。この言葉は私に到底虚心に聞き過ぐすことは出来ませんでした。節子がとてもすれば汚れた下着を平気で身に着けているという事実、それから広がる抑え難い想像のくらがりは、突詰めれば眩暈のしそうな刺激でした。節子は私が恥ずかしくてならぬことに、まるで無神経でした。誰もが普通日に一回か二回、大便の為に上廁するのに、その当り前のことを異性に恥ずかしがる私の前で、その間際まで茶の間で喋りながら掌の中で紙を握りしめて、柔らかくしているのです。今これから使用する紙を

人前で平然と揉んでいることは、私には驚くべき無頓着さであつたし、それから生ずる連想に私はひそかに苦しんでもいたのです。そして暫くして茶の間に戻った節子の着物にある厠特有の臭いが纏っているのを嗅ぐと、私は奇妙な興奮を感じるのでした。私は女の人に自分の排泄物を恥じながら、女の人の厠通い、それも大便の為の場合には不思議な刺激を受けるのでした。

時偶節子と帰りが一緒になることがありました。節子は駅の階段を私に合せて、ゆっくり下りて、家までずっと私の遅い歩調と同じに歩きました。節子は別に何とも思っていなかったかも知れませんが、こんな一寸したことには不具者はひどく感激するものです。私は節子が私の跛を嫌がらずに並んで歩いてくれるのが嬉しくなりました。特に通りすがりの若い男が私と美しい節子を見較べていく時など、何か得意な気さえたものです。私は自然と節子の気嫌を取るような言辭を選ぶようになりました。菱川家の書生でもないのに、何かお嬢様に対するような気持で節子がご機嫌の時は、私も心が晴々とするようになつていくのでした。そんな私の遜った内心のすがたは、やがて節子も見抜いたらしく、

漸く私に対する態度に変化があらわれしました。勿論それはママの不在の時でしたが……

ある日、私が玄関で靴を磨いていますと、何時の間にか後に立った節子は「あら、よく光るわネ、ついでに私のも磨いて。いいでしょ」と、いいました。

ある日、私が階下へいきますと、節子は厠の掃除をしていましたが、「ちよっと、男便所使うの、あなただけでしょ、そっちだけ手伝ってよ」と、いいました。

ある日、庭で呼ぶので、いってみますと「お池の水少しきれいにするの、手伝って」と、いいました。節子と私との間にあった壁、それを私は自分で薄手なものにしていたので、節子の槌の一撃で忽ち崩壊してしまつたのです。

女の方は、相手が弱いと見ると、仲々辛辣ないじめ方をすることがよくあります。私など肉体的には跛で、精神的にはマゾヒスティクな面が濃かった為に色々そういった経験がありますが、節子の場合にも何度か印象的ないじめ方をされたものです。



それは秋の、月のいい晩でした。私は節子に誘われて、『コンドル』という航空映画を観たその帰り道

「スリル満点なところあったわね、私、女流飛行家になりたい」

レールの青白く光る踏切を渡りながら節子はいいました。踏切の傍の何時も閑散なピリヤードで、カチンと玉の音がして、眠そうなゲーム取りの声がガラス戸の外に流れ、その辺の叢に虫が鳴きしきっていました。節子は浮き浮きと何かハミングしながら歩いていましたが、ふと立止まると

「ね、あなたステッキなしでも歩けるんですよ」

と、尋ねました。

「うん、小学校の時は突かなかった。でも今はもう離せない、ステッキなしだと背骨が曲るそうだし……」

私は何の気なしに答えましたが、この時、節子の眼がきらっと光ったような気もしました。もう悪戯を思い附いていたのです。

「そう、でも家の中じゃ突かないじゃない、ネ、ここから家まで突かないで帰りなさい、私にステッキ貸して」

と、いうと、節子は素早く私の右手からス

テッキを取上げてしまったのです。

「さ、歩いて、早く帰りましょ」

節子は、私のステッキを、よく時代物映画などで、武家の細君が夫の刀をあずかった時のように、着物の袖に隠すようにかかえると早速に歩き出しました。家までは普通に歩いて二十分ほどでしたが、ステッキを奪われた私は俄に歩きにくくなりました。跛の一步步々がひょこひょここと月明りに大きく揺れて、その影法師は吾れながら滑稽でした。

「節ちゃん、意地悪はよせよ、ステッキ返して」

「いいじゃないの、たまにはなしで歩いた方が悪い足が丈夫になってよ」

振向いた節子は、首を傾げて少し笑っています。私はよく経験することですが、ある事柄が前にも確かあったような気がする、そんな錯覚に捉われて、この時もずっと前に意地の悪い女の子にこんな悪戯をされたような気になるのでした。歩くうちに私は骨が折れるので、体が熱くなって来ました。

「節ちゃん、もういいだろ、ネ、これだけ歩いたんだから」

「聞えないわ」

節子はわざとのように可愛い声を出して、

三米ほど先を軽やかに歩を運んでいくのです。月の光に一層白く見える顔に、皮肉な微笑を浮かべているようでした。私が無理に駈出して取返そうとしますと

「わッ、つかまったら大変々々」

おどけて走り出します。白足袋が嘲けるようにチラチラして、それは、その夜の節子の恐らく自身でははっきり意識しない酷薄な心を私に暗示するかのようでした。

やっと家の附近まで来ますと、節子はくり振向いて

「はいステッキお返しします、御苦労さま、怒った？」

と、笑顔で私の顔を覗くのでした。愈々濃くなる月光に節子の左の頬にある小さな黒子まで見えました。私はびっしょり気味悪く汗ばんでいました

「節ちゃん、ひどいなア」

と、いうのが精一杯の抗議でした。節子は私を己れを一図に敬慕する弱者と見て、時に困らせてやろうという、丁度猿蟹合戦の猿が弱い蟹に青柿を叩きつけたようなことをしてみたくないのでしよう。そんな仕打を受けた私は私で、それが終わってしまうえば、節子と何かひとつの遊戯を為遂げたような気持にな



って、その最中の怒めしい感情は忽ち消えてしまふのでした。

神田の書店街へ参考書などを買いにいく時なども私を誘って、買いこんだ本の半分は持たせるので、私は節子と一緒に日には買いたい本も買わずに戻りました。それでも私は節子と出歩くのが、大きな楽しみであったのです。足の遅い私はどうしても後れがちになるのですが、節子の豊かな長い髪が背中中日差に光の波になるのを眺めながら蹤いていくことが何とも気の弾む一刻なのでした。人の心は、多面的なもので、節子には私を憐む心も意地悪をしかける心の半面にあったようです。冷たい雨の降り出した冬の夕方、先に帰った節子が駅に傘を持って迎えに来てくれたこともありました。

私には迎も考えられもしなかった節子との喧嘩、それは菱川家に下宿して二年目の初夏のある晩のことでした。その日は土曜日で、ママは午後から外出していました。

夕餉の後、暫くして節子がパイナップルの缶を持ってあがって来ました。学校で午後、バレーボールをして少し草臥れたといって、水色のスカートを大きく広げて机の傍に横坐りになりましたが、何か饅えたような臭いが

しました。私は、また節子が下着を換えずにいるのか知らんと思いました。

「私、医専にいかなくていいなら、うんとスポーツやりたいなア」

パイナップルの缶を切りながら節子はいいました。

「うん、人見絹枝のようになるかも知れない」

私は半分は、お世辞でない心算でいいました。節子にはやりと笑って、一寸私の顔を見ると

「あなたは運動が出来なくて可哀相ネ、でもあなたみたいな人って、案外腕相撻は強いネ」

と、いいました。

「いや、駄目だ。力を出すことは何によらず駄目だ、兵隊にいけない奴は駄目だと、この間学校で教官に怒鳴られたばかりだ」

私は首を振りましたが、何だか何時も節子と話す時の自分らしくない、にべもない、不快に聞えそうな答だと思いました。力業には本能的ともいえる嫉悪感を抱いていましたが、教官の暴言への憤懣まで臭わせることはなかったのです。それはやはり、その晩のいくらか物憂そうな節子の睨に触れたらし

く  
「ふん、それじゃ私とどお、いっぺんやって見ましようよ」

と、切返すようにいい出しました。薄緑のシエードをかけたスタンドの光に、節子の白い歯がきらきらして、巫山戯たようないい方の中に嘲けりの調子が含まれているのが感じられました。私は直ぐに節子がかでいららしているのではないかと気附きましたから「ぼくは弱いから、あまりやったことないんだ」

と、柔らかに阿諛するようにいつて手を差出しました。腕相撲など全く気の乗らぬことですが、勝負に執着しないと馬鹿にしたといつて腹を立てるかも知れないと思つたので、四回ほど真剣に向かいました。結果は完敗でした。尤も一度は左手で勝ちそうになりました。でも、懸命に堪えながら上眼遣いに私を見た顔が妙に真面目くさつていて、可愛らしかったので、つい力抜けしてしまつたのです。

「脆いのネ、どっちの手も弱いわネ、本気でやつてるの？」

節子は勝誇つて聞きました。私は汗ばんでいました。節子と固く手を握り合わせただけ



で、私は頭に血が昇るのが自分で解るくらいで、節子の顔がぐっと近附いて、大きな眼で見られると恥ずかしさに体が火照りました。誰にも見られている訳ではないのに、あまりに近い節子の息遣いが私の氣持をしゃちこばらせるのでした。

「ほんとの相撲でもこんなものかしら、ネ、お相撲してみない？」

調子づいた節子は途方もないことをいい出しました。驚いて拒みましたが、もうきくものではありません。

——子供の時から一旦いい出すと強情で……ママは、よく歎いていました。私もその家にいる間に、節子のそんな性格の一面を屢々認めていましたが、しつこく一事を追う時の偏執的な眼の光に、私はあるおそれと引入られるような盪惑とを同時に感じていたのです。

「女だからって、遠慮しなくてもいいわよ」

節子は立上がって促しました。その顔を見上げて、私を断りましたが、黙って首を振るばかり、何かこれから刑を行なおうとする人のように、表情に嗜虐的な翳りさえあらわれていました。困惑した私に、ふと小学校の低学年の頃、近所の染物屋の女の子と相撲を取

って、手酷く投げられた苦い記憶が蘇りました。また、もっと幼ない頃、預けられていた田舎で、お祭の日に見た女相撲の印象も蘇りました。肉襦袢を着た肥満体の群像は子供心にもおそろしく、いやらしい眺めでした。

「この六畳よ、いいこと」

節子は、白いソックスをはいた足を踊子のように挙げて、土俵の範囲を示しました。それからピンクのブラウスの袖を少くまくると、本当の力士のように仕切りに入ろうとして、流石におかしくなったものか、フッフと含み笑いをしました。

「後参するよ、節ちゃんにかないっこない」尚も私は後込みしたが、その時、節子は頭を下げてぶっかって来ました。

庭球などスポーツで鍛えた節子の体力で、私を倒すことは造作ないことでした。先ずいきなり私の悪い方の足の足に自分の強靱な足をかけて、鮮かに私を転倒させました。

「もう一番」

節子は笑いながら両手をひろげています。そして、今度は前に出た私の利く方の右足に深く足を絡ませながら上背を利して、強く押して来たので、肝心の足を制された私はたまらず仰向けざまにどっと倒れました。受身な

ど知る筈もない私のこと、後頭部をしたたか畳に打ちつけて、思わずうっとうしいと思いました。と、どうしたことでしょう、その時私の心に思いがけなく憎悪に似た黒い感情が初めて兆したのです。私は節子をいつ時怨ったことは度々ありましたが、憎らしいと思っ

たことは、この時ばかりでした。後頭をかかえて、やっと起きあがった私が挑戦しますと、節子は吾が意を得たりというように喜びました。

「その意気よ、一回ぐらい勝つものよ、男のくせに」

と、いつてまるで少々酒でも飲んでいたいのに笑いました。この笑いに挑発されたように、また何かに憑かれてもしたかのように私は咄嗟に右手を伸ばして、節子の喉輪を攻め立てました。嘲笑を浮かべたまま油断していた節子は、この急襲に忽ちのけ反って倒れそうになりました。

「う……………」

節子の唇から苦しそうな声が洩れると、普段の私なら凡そ想像もつかないし、第一嫉悪してやまぬ「女を責める男」の姿がチラと頭の隅を掠めました。自分がそんな姿になっ



発作的に打毀そうとする自棄糞な気分で、かつと頭を熱くした私は、もう一息と押ししましたが、やはり節子は倒れませんでした。喉輪攻めの手を払退けた手で、力一杯私の頬を張ったのです。大きな音がしました。ひるむところを更に一発烈しく張っておいて、態とそうした訳でもないのです。ようが、私の悪い足を蹴飛ばすように払いました。一たまりもなく倒された私は、ここで逆上してしまったのです。



も常に小心翼翼、節子の氣息を窺っていた私にどうしてそんな勇気が出たのでしょうか。女王に刃向かう奴隷、私に対して既に心驕って

いた節子の眼には、この時の私の反抗ぶりはそうも映ったことと思います。暫くは無言の争いが続きました。狂ったような私は、日頃

貴重な物のように眺めていた節子の豊かな髪の毛を掴んで、我武者羅に引張りましたので、節子の眼は吊上がり、息遣いも荒くなりましたが、体のいいだけに怒ると一層力が出る少女でした。暴れ狂う私を強引に下にすると、私の胃袋の上あたりに両足を開いて跨がりました。六十キロ余りの体重を乗せられては容易に跳返せませんので、私は髪の毛を掴んでいる手を離して、節子の不用意に開いている足を拘おうとしました。しかし、その手も両方共、逸早く膝を下ろした節子の白い左右の膝小僧の下に、きつく敷かれてしまいました。

「さア、起きられるものなら起きてごらんなさいナ。お相撲に負けたのが口惜しいんでしょう」

頻りに腕く私を見下ろして、節子はいいました。白い顔が美しく上気していました。私は、両足を高く挙



げて、足を節子の肩か首に引掛けて頰勢を覆えそうとしました。この手はよく学校で見ていたのです。雨の日の昼休み、柔道場へいくと、みんなそれぞれ相手を見附けて取組み合いをしています。そこでは声変わりした、体の大きな生徒が美少年を組敷いて、いい気になってもいるのですが、そういうのでなく、もっと威勢のいい方は組敷かれた生徒が両足を高々と挙げて、上になった生徒の首に絡んで、見事に相手を仰向けに倒す大技を度々成功させているのでした。その技を試みようとして何度も下半身を跳ねて両足を挙げました。しかし、私の意図を察した節子は直ぐにお尻の位置を私の胸の上に移しましたので、迎も節子の首にも肩にも届きませんでした。そのうちに私は、餌鉤を呑んだ魚が勢よく暴れ廻りながら漸次疲れ果てて参るようになり疲れして、ぐったりしてしまいました。大汗をかいて足掻く私を有利な態勢で、すっかり余裕を持った節子は、腕を組んで面白そうに見下ろしていましたが

「やっとな静かになったわね、もう跳返せないでしょ」

と、笑いながらいいました。私の怒りなどはや問題にしていなみたいで、私も何だか

狐憑きから醒めたような気になって、逆らう気力もなくなりました。もともと跋では喧嘩しても勝てる自信が乏しかったので、学校でも争い事などしたことの無い私です。私の沸騰した節子への憎しみの心もそうなると思ひ冷えていくのでした。そして、事もあるうに節子と喧嘩してしまった失態を悔いる念いが見る見る胸一杯に広がるのでした。

「参った？ いいわ、もうゆるしてあげる」  
節子は顔から微笑を消さずにいました。  
が、次の瞬間、その微笑みはすっと引いて「でも罰は受けなくちゃ駄目よ」

と、きつい声でいいました。やはり私の逆を簡単には許しはしなかったのです。右手をのばして、ソックスを脱ぐと

「これじゃぶりなさい、良い味よ」

と、改まった声でいいながら、私の口へソックスを押しこもうとしました。先に私が氣附いた饅えたような臭いがむつと強く私の鼻を衝きました。

「う、うううッ」

思わず首を振って避けようとしみますと

「駄目よ、口を開かなきゃ、ホラ早く」

と、いって節子は左手で、私の鼻をきつく摘みました。

「ううううう……」  
大分汚れているソックスが、こうして私の口の中へ突込まれたのです。

「フフフフフ」

節子の含み笑いは、段々高笑いに変って、大柄な体が私の胸の上で止めどなく弾むのでした。

翌日の日曜日、昨日の今日で、私はいさかいのしこりが胸の隅に残っている重たい心持で、洗面所へいきますと、日曜という割合早く起きる節子は、もう茶の間で新聞を読んでいた。

「おはよう」

と、さっぱりした顔付きでした。食事の間節子は冗談をいって、ママや私を笑わせました。童画風な金魚模様の浴衣を着た節子は、朝の光の中で初々しい、清潔な感じで、昨夜の妖婦然とした節子は私には夢の中の人のように思えるのでした。そして、昨夜のことは節子と私だけの秘密の遊戯であったかのような気になって、安心と歓びに私はほっと微かな吐息をついたのでした。あれから洗ったのでしよう、軒先にあの白いソックスが干してありました。

(おわり)



## 〔優秀緊縛フォト紹介〕

## 乳房責

略号

(きよ)

大手札型

三枚一組 二五〇円  
モデル 四方 清美

全く凄絶な責めである。裸にむかれた首から二の腕、胸、腹にはピンクの綿ロープがきびしくからまり、身動きならぬ女体の背後にはプライヤーを手にした辻村隆が可憐な乳房を思いきり挟む。忽ち上る悲鳴も、きびしく噛まされた猿ぐつわに消される。苦悶の表情は見る者をして思わず手に汗をにぎる凄さ。乳房責の圧巻、責めの圧巻である。

## 女囚独居

略号

(はつ)

大手札型

三枚一組 二五〇円  
モデル 柳 初子

哀愁を帯びた柳初子の美しい顔(十一月号巻頭口絵参照)が女囚六三号の囚衣をまとい、前手縛りに手首と肘とを括られて独房に幽閉された表情。そして手と足がアップで美しく描き出されている。陰惨な囚女の雰囲気モデルの美しさによって、ほのぼのとした口

マンチック・サジズムが発揮されている。

## 吊られた美女

略号

(けい)

大手札型

三枚一組 二五〇円  
モデル 絹川 文代

豪華なシャンデリヤに両手首を括られて吊り下げられている全裸の美女は、身をくねらせてこの華やかにも甘く厳しいムードによっている。うねうねともだえる裸身は見物人によって隅から隅まで眺められ、次第次第に増してくる苦痛は彼女の羞恥心を徐々に剥ぎとってゆく。

## 首縄と腰縄

略号

(せつ)

大手札型

三枚一組 二五〇円  
モデル 大塚 啓子

一点のシミもないスベスベとした柔肌の大塚啓子嬢が湯上りの全裸の肌を惜しげもなくさらけ出して後手高小手しぼりに首縄と腰縄を併用した縄目に足の先から長髪の上にまで緊張させたサジ・ムード満点の素晴らしいフォト。恍惚とした表情、凄艶なながしめ。あきらめきった諦観の表情。

## 全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺

三枚一組 二〇〇円  
モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンサーとして活躍する平野笑子嬢が一糸まとわぬすべすべとした姿態にロープをかけられて後手高小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフォト。

## 寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺

三枚一組 二〇〇円  
モデル 平野 笑子

ぐっと凹んだお臍、伸びやかな下肢、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベッド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作(みに)と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフォト。

## 全裸の羞恥

略号

(みろ)

大名刺

五枚一組 三〇〇円  
モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐な

BGのアルバイト作品。本人の希望によって特に口絵には大々的に掲載しなかったためお馴染みも薄いと思いますが、清純なフェイスと姿態の田原美佐子嬢が恥しさに耐えて衣服をすっかり脱ぎ去り、縄のいましめに哭くポーズ。

## 股間しぼり

略号

(みと)

大名刺

五枚一組 三〇〇円  
モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しぼり、首縄高小手手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもだえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

## 全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺

五枚一組 三〇〇円  
モデル 絹川 文代

全裸になった文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだら夢想的な股間しぼりのムードを全面にはのぼのともし出して、見る者をして恍惚境へさそい込む。





こう書いたからと云って別段今はやりの和装ブームに安直に便乗した訳ではない。

ブームなどというものには遅かれ早かれ、はやりすたりというものがあって、はやっていくうちにはよいが見向きもされなくなると兎角惨めなものだ。それはさて置き、

およそ女性が下半身の腰に巻くものを、現代語で簡略に『お腰』と呼んでいるが、パン

ティ類の完全普及した今日（そのパンティにも最近是非常に具合よく工夫された和装向が売れているというが）何かひどく時代めいた感覚を与えるようだ。勿論新聞やチラシ広告の印刷活字体は相変らず四角張った「腰巻」で通ってはいるが、何処かのたまりで愛称を兼ねて女性同志が軽く「お腰」と口ずさむ処にまだ一連のなまめかしさがふんわりとただ

よっていることは面白い。

一方、お腰を着用する女性側の年齢は、肩あげの取れないまだ小便可さい十代と月経閉止前後の頃合いを一応除くと（甚だ強制的な物の云い方で失礼千万ではあるが）馥郁爛漫として咲きほこる年齢層の女性ばかりが浮び上ってくる。

このあたりがそもそも少々味気ない「腰巻」から「お腰」となる分れ目であり「お腰」たる価値論を声を大にして云々する拠点なのである。

この日本独特とも云うべきお腰については色々と言えや夥しい文献があり、筆者も今まで折に触れ見聞いたことなどを精一杯本誌に御披露したつもりであるが若しこの「お腰」なる一物が飛躍して仏教で云う色即是空的なものであるならば、誠に結構の二字に尽き、大いに是空的な仮相を擲んで存分にその余香裡に身を沈めて陶醉してみたいものである。

処で、本年図らずも、さる処を煩わして筆者の書庫に飛び込んだ各種の絶版物を整理しているうちに偶然絶好の古雑誌を見出した：云うなれば月刊雑誌的新聞の一種に違いないが処も大阪で出版され当時ののんきな汽車



の旅に大いに利用されたという『滑稽新聞』、昭和二年創刊昭和七年廃刊、全五十九冊の浮世ニュースを中心に全頁にわたって意外にこのお腰事件なるものがわんさと賑わっているのにまず驚いた。勿論愚にもつかぬいわゆる「珍談」もあるであろうし、また当時の世相が初めからそうなんだと極めつけても一向にかまわないものだろうが、純白のブラウスに真赤なスカートの娘っ子と街でバッタリ逢い、すれ違った途端に

「やア赤い腰巻がウインクしたよ……」と近眼の老人が叫んだというこの一駒が、まだ現代の世相の何処に残されているものとすれば、今昔の間に一脈相通するものがあり、あながち紹介するの労も決して無駄にはならないであろう。先ず一番手取り早く庶民的なものはこの「お腰」を勇敢にかっぱらうことである。以下逐次項を追いつつ原文のまま掲げて謹んで敬意を表することにする。

### 『その一、弁慶も顔負け……』

午後十一時頃市内浪速区宮津町附近で風呂敷包を大切に抱えた若い男を難波署員が調べてみると風呂敷の中からいとも悩ましい赤の腰巻がズラリと八枚……この男香川県生れのルンペンで南田二郎と云い「へへへ腰巻

千枚の願がたった八枚で破れまして……」と恐れ入ったが、弁慶とは較らべものにならない。(五十八号)

### 『その二、少女の腰巻で悦に入る！』

京都市松原京極で通行中の娘を尾行する少年の挙動を怪しみ松原署員が取調べると宇治山田町生れで住所不定北原新三(十八)とて盛り場に出没して通行の美少女を尾行し居所を突とめて巧みに腰巻を竊取して悦に入っていた変態的不良少年であった。(四十六号)

筆者註：泥棒学ではないが巧みに腰巻を竊取して云々が仲々可愛い表現である。この双葉より香しい少年は寧ろこれが狙いだったかも知れない。赤に魅せられる以上にである。

### 『その三、赤湯巻続々発見！』

愛知県碧海郡矢作町杉原一男(二十)は稀代の変態性欲者であるが家宅搜索の結果、山なす赤腰巻が天井から押入から床下から出て来た、これは湯屋や物乾等からコソツと盗んで来たものであると本人平気で自白。(十八号)

註：この場合稀代だと極めつけたその実態を知りたい処だが山なす赤腰巻はここでもいかにオバーバーな表現で流石の係官も一枚一枚勘定するのが嫌やになったことだろう。忽

体ない宝の山ではある。

処で途中で話を混ぜ返えすようだが、時代が進むにつれ着用する頻度が少なくなり次第に影をひそめて来たこれらの日本式伝統のお腰なるものは一口に云えば上部に腰布と呼ぶさらし木綿の紐付白布に、べた赤か桃色(又は花模様)のモスリンかネルの一米半位な布切れをつけた一片に過ぎぬ代物であって、その着用の様相は東南アジアのマライかインドにでも行かぬ限り、今の日本で若い人達に対して特別の魅力的対象物とは到底思えぬかも知れない。

全身をきもので覆い、帯紐類で縛りあげられた女性が自他の如何を問わずチラッと白脛の出るのさえ大騒ぎした往年には、このお腰が単に人目に触れることを、それことをそれこそ神経がすり切れるように気に懸けたものである。極端に云えば絶対に人に見せたらいけないことになっていた。

筆者の友人がおこがましくも仲人を勤めた時、嫁側の持参した真新しいタンス、鏡台、たらい、下駄箱類に豪華な衣裳の陳列まで気を配ったまではよかったが思い過ぎた親切心から羽二重布団類に枕が二つ、それにあろうことか目も鮮かな燃え立つような真紅のお腰



を数枚御丁寧にもひろげてならべて置いた（未だに誰がやったか判らぬという）のが忽ち近所近辺の話題にのぼって、しばらくは嫁さんが洗濯物を夜間にそっと干すという始末、逢う度に泣きごとを聴かされた笑草がある。もっとも総員真赤な（少々くたびれてはいるが）腰巻一枚姿で踊りまくるストリップが平然と劇場で公演されている今日では転た今昔の感に堪えないと云えばそれまでだが……。

さて、こうして女の腰の肌身にじかに巻きつけられたお腰に対しても早や心底からの羨望にこらえ切れず、目的が奈辺に在るかどうかは別として直接行動に出ることは善意に申して極めて自然的な衝動には違いないだろうが、その結末は往々にしてこんなことにもなるものだ。

### 『その一、嫁の腰巻へ放火……』

この間の午後十一時頃此花区正岡町白井清次（三七）は同家表二畳の間で仮睡中の内縁の妻高月みその（三八）の腰巻に火をつけ、みそのの左足及び局部を焼き人事不省に陥らせたので、朝日橋署で傷害罪で取調べ中である、清次は常にみそのを虐待し、同日も終日食を与えず右の乱暴を働いたものであるとい

うが無茶な点において超越せる御亭主といふべきである。（五十四号）

註：寧ろ可愛さ余つてのいたずらと見てよい。脛からこぼれた赤い腰巻は彼に取っては恐らく添え物であつて問題は後半の虐待そのものではなからうか。但し細君が絶対に泣かないとすれば取調べる警官は何んと野暮な……こんな夫婦は放つて置くに如くわなし。桑原桑原……。

### 『その二、汚い女の腰巻で覆面！』

住所不定城山是利（三四）という男は東京品川西広町沢井キン（六〇）方へ女の汚ない腰巻で覆面して忍び入り一人娘静子（一八）の寢床にもぐり込んで捕えられた。汚れた腰巻で覆面すれば決して捕えられないおまじないがしてあつたにとグチをこぼしている。（二十一号）

註：この男には色々な要素を含んでいるものと云えよう。多分にM的であり居直ればSとなり序でにフェチという性癖で誠に欲張った先生だ。

しかし総じてこのおまじないなるものは案外日本では昔から根強いものらしい。

### 『その三、芸娼妓の消防隊……』

その典型的とも云うべきものは。越中禪と女

房の米騒動で有名な富山県下に今度は芸娼妓消防隊というものが出来た。同県礪波郡井波町遊廓では昨春秋同町大火の際廓内の芸娼妓が消防に努力したのに鑑み今回検査事務所を新築した剰余金八百円でガソリンポンプ一台を購入し、芸娼妓消防隊を組織し月一回の公休日には勇しくも消防訓練を習い、素破火事と云えば即時集合裾を端折って甲斐々しく消防に努力するという訳で、赤腰巻の威力でも火事よ消えずばなるまいと評判、評判。（第五十二号）

註：アラお火事よ、ホント火事だわ……なんて全員足袋はだしのまま集合して裾を端折っているうちに火は燃え盛り、折角のポンプも間に合わず、じゃ仕方がないわ、皆さんこれ振って……云うことになり兼ねない。思うに戦時中、筆者が某日用務で京都に在留中、たまたま祇園で奇麗どころの防火演習に出くわしたことがある。純白の割烹着に結いあげた黒髪の高島田もさることながら、正絹縮緬と覚しき真紅のお腰を存分に出しての黄色い声援裡の演習振り、久米仙ならぬアメリカの飛行機もさぞかしバツバツと落ちたことであろうに……その折のスナップも今やハイポ切れして色褪せたままアルバムの一角にな



まめかしい余命を保っている。このお腰に因むおまじないは中身が九分九厘までナンセンスなだけに罪が無くて寧ろ愉快だ。

勿論根も葉もない伝説じみたものが多いがこんなものもあげておこう。

#### 『その四、女の湯巻マツリ』

予此の頃私用にて尾州表へ参り、それより知多郡へ趣き所々見物しけるに、半田亀崎辺は殊に豪商多き中に或る造酒の大家のその地名を以て家号とする門に男女老幼群集雑沓するによりその故を問えば湯巻祭なりという。

余りに奇なる名目故我も内へ入って見るに奥の座敷に一つの神棚を架し、上に恭しく安置し奉るは赤の女湯巻なり。それを祭礼として年々参詣の老若婦女へ酒肴赤飯を与へつつあると。その因って起る謂れは、主人亀之助三十年程前富士山へ参りしに絶頂に婦人の湯巻棄てありしにその頃は女人禁制の場所なるに此の品あるは開運の時来れりと恭しく懐にして帰り厚く奉事せしが、次第に商業繁昌して僅の間に財宝山を成す身体に至りしかば右祝として年々是の如しという。一日の祭費千金に近しと、赤湯巻の福運無限なるまことに驚くべし——明治七年九月十日発行郵便報知新聞第四百五十二号。』(第三十四号)

註：東海道は駿河の国には白粉で化粧したふじ山も多いというから飛んだ旅の土産を女房の手前出し兼ねて苦肉の挙句一芝居打ったのであろう。遊女か妾の赤腰巻を自宅の神棚に祭って商売が繁昌するなら一つそのことよろず湯巻屋になって諸国一手販売はどんなものだろう。味のある面白い挿画が一枚添えてある。

#### 『その五、慰問袋と女の古腰巻』

大阪憲兵隊本部で庶務部の人々が台湾から届いたばかりの一通の書類を中心に議論を闘わした。書類というのは台湾憲兵隊から来た「満洲出動軍人慰問品中軍人侮辱的物品寄贈に関する件の報告」というもので、台北市連合青年会で満洲出動軍人の慰問袋を募集したところ台北大成青年団で募集した六百個の中に女の古腰巻桃色各一、古白足袋二足、中古赤茶褐メリヤス襦袢等の入っている袋を三個発見、軍人を侮辱するものとして送付を中止するとともに寄贈者を内査中というもので……云々折も折も丁度用務から帰隊して来た東村副官曰く女の古い腰巻は弾丸除けになるといつて日露戦役の時分には随分多かったそうだ……でどうやら侮辱否定論者に軍配が揚った。』(五十六号)

註：筆者が日華事変で大陸の戦地に居った頃、前線で中隊が移動するたび毎に慰安所勤務の女性の下着がプレミヤ付で中には一晚のうちに強奪されて紛失し苦情を云われて補償に泣きつかれたことがあった。もっともお互いが明日にでも戦死するかも知れない身ではないか、長襦袢や腰巻の一つ二つが何んだいと云えば大ていの妓は渋々と諒解はして呉れたが……。ただし現地人の女の人を使って洗

い、クリークの土堤の上にあからさまに干された万艦飾の日本婦人のお腰は野放しの猫に追われた鼠の如く安直にかっぱられ、苦情の持って行き処がなかったという……。兎まれ何れの辺に果つるとも女ならではの夜の明けぬ国のつわものどもの夢の跡である。

#### 『その一、けだし』

自分の知人で数年前まで東京で湯屋の三助をしていた男がある。その男の偽らざる告白に商売柄浴場における一糸まとわざる婦人の裸像にはさの魅惑も感じない俺が不思議に道



行く婦女の勇敢な蹴出しには思わず知らず心の緊張を感じるのとは一体どうしたのだろうか。と変な訴えをしたことがあった。へ蓋し（蹴出し）は人を惑わす者ぞや……とは孔子様の言葉でも何んでもないのだが古今往来さることながら罪深きものは女の蹴出しにぞあるである。

子の曰く、けだしは人をまよわせる

目で殺す罪より深しちらと見え

目で殺すで思い出したので御参考までに書添えて置く。自分が矢張り学生の頃、今はなき漢詩の先生が作詩法の講義に起承転結の要領を次の如き砕けた歌曲で教えてくれた。それは

起句——京の三条の糸屋の娘

承句——姉は十八妹十四

転句——諸国諸大名は刀で殺ろす

結句——糸屋の娘は目で殺ろす

というのであって結局糸屋の娘の濃艶さを目で殺ろすと表現した巧妙さに満場感服した次第であった。今改めて目で殺ろす罪より深しちらと見せの句を得て柳子の更らに更らに巧妙絶倫なる手法に驚く外はないのである。

けだしの軟文を左に二つばかり

へ後帯したる尻に聞せて俄かに足どり早く

なつて蹴かえし小棲までまぐれて今少しと思う程まで見えて久米仙が雲から落ちて腰をぬかせし（好色四季はなし巻三）

へお七「母さん、遅かったかえ、随分お前さまに追いつこうと思うたけれど、早う歩ければ息が切れて風で着物がこのようにこのようにと裾の開らくこなしあって、どうも歩かれるものぢやないわいなア……」（其往昔恋江戸染）（三十八号）

向い風嫁あわせてもあわせても』

『その二』

向い風、女のこまる電車道

裏表紙に絵入りの漫画を添してある。』（十号）

註：なかなかこの執筆者は学のある処を示しており、一層の親近感を抱かせるが、この蹴出しという言葉を実際に聴きたかったら下町に東京ならさしずめ浅草界隈あたりに行けばよい。単に言葉のみならず蹴出しを云々するにふさわしい雰囲気までが一部に温存されている。筆者もさる日浅草松屋から仲見世に行く風の吹き通る横断歩道で、何げなく立つことしばしの間に、真紅の蹴出し（お腰か裾除かの区別はつかなかったけれども）をした二十五六の女と三十前後の女二人、桃色のネ

ルと思われるものが意外に多くて七、八人ばかり、その他年配層の水色（青色）のもの一人と云う集計を得た。この団体と思われる女群の統計が示す数字に拘泥する意味ではないが戦後はお腰の赤色が急に減ったことは事実であつて先日も観光のため来日した外国人某は浮世絵時代の日本を想像して上陸はしたものの、風になぶられる歌麿描く美人連に出くわせなくて、がっかり。折角のカラー8ミリムービーが泣いていますよと何んどもなんども筆者に耳打ちしていた。事実作りもののモデルならいざ知らず今日の日本の都市または近郊で、不用意に赤い腰巻をした娘さんを探すこと自態既に困難であり、まして浮世絵風の有態を眼前に現出することは正に不可能に近いと思わねばならない。筆者が撮影遠慮を承知の上でその外人某をストリップ日舞ショーに案内したことは申すまでもない。

まあ、事程左様にお腰と云えば昔から赤いものだと定まっていたのであるが、その赤について面白おかしく書いたものを序でに抄出し紹介してみよう。

『その一、あかい世の中 名和岩根

つらつら浮世の事々物々を観ずるに世は実に赤き世の中なり。オギヤーと生れ出た赤ン



坊が女兒ならば衣類万端まで赤色赤混りの物で作りいよいよ成長して花も羞らう年頃ともなれば事毎に顔を赤らめ頭に赤き簪を飾り唇には紅をつけ裾には赤き湯もじを閃めかす、

赤の足袋等をうがち客を招きもてなす習慣もある。(後略)』(第四十九号)  
『その二、赤い話 赤面郎  
古い川柳に

緋縮緬虎の皮より恐ろしい  
という句があります。この緋縮緬というのは呉服屋の店頭に積上げてある反なりの緋縮緬ではなく大巾三尺五寸に裁ち切られ婦人の

俗謡にへ赤い湯もじに迷わぬものは木仏金仏石仏、千里も走る汽車でさえ赤い旗出しゃちよととまる……とある如く石部金吉の頑固親爺も妙齡美人の赤湯巻を見ては鼻毛を長くし涎を垂れてグニャグニャ乎とならざるを得ないであろう。然しながら赤い蹴出しに迷うたのが因果のもとい、果ては赤い煉瓦の中(刑務所のこと)で赤の衣服(昔は逃亡を防止するために赤や青の囚衣を着せていた)を身にまとい赤恥をさらす者もある。(中略)

さて男女ともに六十一才になれば還暦の祝としてその顔は梅ぼしの如き皺苦茶の老婆も赤の襦袢、赤の湯巻



滑稽新聞  
第二十六号 表紙

高志 寫

細腰に巻かれる腰巻のことである。腰巻にも色々あるが少なくとも緋縮緬の燃え立つようなものを、その腰へ巻き付けようというものには滅多に皺苦茶の姥はない、先ず年増だといっても精々三十七八、一番多いのは十八九から三十才まで位のおぶら切った水々しい婦人連である。

何故そうした婦人の愛用する緋縮緬(戦後の今日若し締めるとすれば踊りの場合か花嫁位なものだろう、昔はふんだんに召したものと見える)がアノ獐猛惨虐な虎の皮の褌を常用する強悪な鬼共よりも恐ろしいというのは、一体どういう訳か……などと尋常科(現在の小学校生徒の意味)に話をするように一々事細か



に説明せずとも苟くも賢明にして万事に大通であらせられる本誌（勿論滑稽新聞のこと）の愛読者方には何も彼もスッカリお了解の事

と思いますので、くどくどしくは述べませんが、兎に角鬼の如く只単に人間の生命を奪うというだけではなく、親代々の家屋敷から財

## トイレ覗き談義

森 洋 三

便所——それは神秘である。決して他人のいない自分一人の世界である。故に興味はひとしおである。だから私は——と雄三は書きかけて、ちょっと考えていたが、その後が続かない。続かないというよりも、自分の頭にある考えるものが、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりで統一がないため、どれを書くかという事が解らなくなつたのである。

終いには、面倒くさくなって、その文章の上に、やたらと線を引っぱった。そしてゴロリと寝ころぶと目をつむった。するとあの時の光景——まったく光景であった。——が暗やみの中から、あざやかに浮かび上った。

そのアパートは新宿の歌舞伎町のすぐ近くにあった。そこには田山竹雄が居た。

雄三と竹雄は高校時代からの友達であった。友達といっても、同じ級にいて、学校の中で他の連中たちと騒ぐだけの薄い交友であった。大学へ入ってから、二カ月ぐらいは二人共、彼の名は憶い出す事はなかった。

それが或る日、新宿で偶然と会った。しかもバーである。雄三がカウンターを挟んで女給と冗談を言いあっていた時、奥の方で「佐竹」という声がした。彼はこんな所で知ってる奴はいない筈だと耳を疑ってそっちを見ようと心が動いたが、女給を相手にしていた方が、面白いので顧みずにした。そのとき、隣に坐っていた三人連れの客が立って、その場を退くと、田山が彼の横にきて、肩をたたいたのである。「あら、あんた達、お友達なの」

産家具は元より山でも田でも山林でも何の苦もなくアノ緋縮緬に引っくりくるみ、塩を振りかけられたなめくじのように皆溶かしてうとうとという誠にこの上もない大魔力をアノ緋が持っているもので、かくうたったのである。

国を傾け城を傾けようたわれたのもこの緋縮緬である。総ての犯罪の裏には女が在るといわれるのもまたこの緋縮緬をさしているのである、思えばホンに怖ろしくもまたおそろしい訳である。（中略）総て緋色赤色は万事危険を意味するもので婦人の月経を赤玉と称するの男子にその不浄と危険とを示すために赤を用いているのである。女賭博師などが少し負け色が立って来ると立膝をして態とこの赤いところをチラリチラリと見せつけるが大抵の負け戦は皆大勝利に転換されて了うというそれだけ相手方に取ってはこの赤が危険なのである。（中略）

まだまだ幾らでもあるがそれでは愛読者から赤字を出される（赤ンベエの意味か）に達しないのでコノ辺で御免を蒙ることにするがいくら虎の皮より恐ろしいものでも構わぬからどうか心行くばかりアノ搗き立ての餅のように真白でそしてムッチリとした腰を包む緋縮緬と一緒に包んで貰いたいものだ、ああ緋



顔のうすいその女給は、雄三のコップにビールを注いだ。そして「貰っていい」といって、ぐぐっと一気に飲みほした。それを見ながら竹雄は言った。

「おれのアパートに来ないか、すぐそこだよ。」

「あれ、以前からの知り合いか、そいつは知らなかった。」

酒気のせいもあって二人は気安かった。

「ここが、そうだ」

ビールのたばをかかえなおし、薄明りの門灯の下ドアを押し、その前にある階段を昇った。そこで二人は飲んだ、話は色々と飛びでてくる。

「ここはね、部屋が上下で十ある。男は俺まぜて二人だけ、あとは皆女給だぜ」

竹雄の話がだんだんともつれてくる。

「だから、おもしろいぜ」

と、チーズをつつきながら、ニヤリと笑う。

「おれが学校を休んでよ、一時頃起きるだろ、そしてドアを開け放しにして薄いカーテンをかけるんだよなア、そしたら、トイレに行く女給がよ、すきとおるネグリジェ

で、その前をパタパタ通るんだ。パンツの色まで丸見えよ、ハハハハ」

「それは面白そうだな」

雄三は相づちをうった。

「今日とまれよ、今日、暑いから、フトンなんかいらねえな」

翌日、起きたのが十時頃だった。窓からさす強い光と暑さをビールで張った下腹にせきたてられて雄三は飛び起きた。

トイレまで身体を心持ちかがめながら歩いた。そこには二つのドアがあった。彼は近い方のドアを開けてタイル張りの上を素足であるき、三つ並んでいる木ドアをあけ放尿した。さっぱりした気分になってハッと気がついた。ここは女子用であった。しまった、と思ったが、キーイと音のするのが聞え、その便所を出られなくなった。

彼の入っているトイレの前の木ドアをバタンと荒々しく閉めの音がした、と思うと彼の目の前の板に矢の印がエンピツでしてありチリ紙の丸めたのが見えた。そこは板の欠けている所だった。それは、その前の便所内をまるつきり見渡せる程の大きな穴だった。

縮緬はエーロ、エロ、エロ!!』と結んでい  
る。(第五十七号)

御高説通り誠に緋縮緬のお腰は怖ろしいと云いたい処だが、こう品薄となつては死んだ子供の齡と勘定するようなもので、寧ろ何んとかして妖美とも云うべきこのお腰の復活を図りたいような気がする。何故にこんなまで敬遠されたのであろうか。勿論、洋装に較らべて格段の不活潑さが嫌われたためであることは判るが今仮りに黒髪をした肌の白い(より健康的ならクリーム色で)女性が純白の腰布付の真紅のお腰を紐で結んでびったりと巻きつけた姿を想像する時に、先ず第一にその配色の妙に感嘆する(そんなことで感嘆するのいかとケナす人もおるだろう)その第二は裾の解放感である。その第三は見えざる肉たを暗示するお腰の皺目である。第四は布団よりは小さく座布団よりは大きく屋外に干すに手頃で闇夜ならいざ知らず、如何なる背景ともマッチして心をやわらげるもの、それは日本式のお腰である(と思うがどんなものだろううか、ただし斯く申す筆者、不幸にして真紅のお腰を神前に祭る程解脱しておらず、徒らなる遠吼の数々、平らに御容赦を乞う次第である)





長篇MS小説

# 宇宙のどこかで

△或る無期徒刑囚の告白から▽

佐 治 麻 造

## 土建会社の苦役 (一)

その会社は土木建築の請負いを業とする会社で、社長はその地方のボスの旗頭級なのでした。ブームで仲々忙しいらしい様子です。私達奴隷は倉庫の一隅を改造した檻の中に入れられ、毎日工事現場に駆り出されたり、或いは工場で雑役をやらされたりする訳でした。奴隷の群の一員に追い込まれた私は、他の奴隷達に混ってホースの水で体を洗いました。

「てめえか？ 今日来た新入りは。」  
鞭を片手に握った頑固そうな男に睨みつけられた私は震え上りました。

「ハ、ハイ。お、お慈悲を…。一生懸命に働きますから…。なにとぞ…」

「フン。これから少しヤキを入れてやる。立て。」

先ず腕立て伏せをやらされました。

「五十回だ。足りねえだけ鞭でしばくぞ。」

とても五十回は無理でした。容赦ない鞭が全身に二ダース程鳴りました。

「次は駆足だ。この倉庫の回りを走るんだ。他の者は餌を喰ってよろしい。餌の時間は十分間だ。その間に三十回まわれ。出来なきや出来る迄やらせるぞ。」

重い鎖錠をつけられた体です。無理なのは最初から分っていました。



た。ともすれば鎖の重さに足を取られそうになりながら喘ぎ喘ぎ走る私は、他の奴隷達が奴隷食を囓っているのが羨ましくて堪りませんでした。十回も回るともう眼が昏んで来て一回まわる間に三度も四度も転びました。奴隷係りの男は煙草を吹かしながら一回り毎に私の尻や背に鞭を当てて笑うのです。

「馬鹿野郎!! 十回も足りねえじゃねえか。そんなことで、うちの奴隷が勤まると思うのか。あと百回だ。這ってでも回るんだぞ。他の野郎共もそこに坐って見てろ。おい、一号、お前数を数えろ。いな。」

男はどこかに姿を消しました。私の胸は苦しさに張り裂けるばかりですが一号奴隷は非情な大声で数を正確に読み続けるのでした。最後の数回は殆んど這いずって回りました。男が出て来て、死んだように地べたに倒れている私に鞭を当てました。

「少しはシャッキリしたか?」

「……ハイ……」

「声が小さい。もっと大きな声でぬかせ。」

「ハイ。ありが……とうござい……ましたっ。」

「よし。勘弁してやる。おめえは今夜は餌抜きだ。明日から喰わせてやる。じゃ皆来い!!」

私達は敷地の奥の方、崖の下の空地に追われました。横一列に、互いに二米程の間隔で崖に向いて地べたに正坐した私達に号令が掛りました。

「では、今日一日のお礼を申し上げる!! 始めっ。」

私は訳が分りませんので隣りの奴隷を横眼で見ていると、彼は両手の手錠をカチャッと鳴らして合掌し、そのまま両手を頭上に延

ばしたまま上体を倒して顔を地面にすりつけました。すぐに真似をしました。動作が一番遅れたのは仕方ありません。途端、近寄って来た男の鞭が背に鳴りました。こみ上げる怒りと口惜しさと恨めしさを悲鳴と共にようやく押えます。あたりは大分暗くなって来ました。

「こらっ、何故動く!! この野郎。お前達が、こうして毎日生きておれるのも誰方様のお蔭だと思ってるんだ。」

三つ、四つ鞭音が聞え、喰いしばった悲鳴が細く絶え入りしました。短かくて二十分間、長い時は一時間近くも身じろぎ一つ許されなくて拝み続けさせられる訳で、心の底から悲哀を感じさせる毎日の日課なのでした。男は時々いなくなるようですが、どこから監視しているか分かりません。額が地面から離れるのが最も悪いこととされていて、もし見付けられたら最後、半死半生になる迄鞭を喰う事を覚悟せねばなりません。幸い私は懲役囚時代に典獄夫人によって平伏動作強制機に何度も掛けられていますし、その後も正坐平伏には慣れていきますから余り苦痛には思いませんでしたが、仕事一点張りの所にいた奴隷や社会生活から直接ここに買われた奴隷達に取っては仲々苦しいものらしく、呻き声をあげたり喘いだり身動きしたり等して、鞭痕のみみず脹れの数をふやす連中が毎晩二、三人はいたものでした。

みじめな日課をようやく済ませた私達は檻に追い込まれました。十五、六米に五、六米の広さの檻の床には長い辺に平行に二本の丸太が置いてあり、隅には用便桶が数個、蓋もなしにおいてあり、悪臭と薬剤の香りとが半ばして匂っています。檻に追い込まれた私達はようやくほんの少しばかりの自由が得られるのでした。足錠、首



環、腰鎖は外すに由なく、手錠も勿論嵌められたままですが、姿勢は自由でなし、檻の中ではどこにいてもいいのです。但し横になる際には必ず丸太棒を枕にしなければなりません。

「あーあ、これで今日も終わったか。」

鉄格子扉を音高く閉めて施錠し、中の奴隷達を一わたり鋭く睨み回した男が立去るのを見送った十五号が大きく溜息をついてゴロリと横になりました。用便桶の所では先を争う声が少し聞え、すぐに静かになりました。

「お前、腹が減ったろ。」

十五号が手錠の手で不自由そうに脇腹の鞭痕を撫でながら声を掛けました。

「畜生奴。とことん迄こき使いやがる。ああ疲れた。」

十五号は秀でた鼻筋の横顔を見せて、忽ち軽いいびきを立て初めました。苦役が余程えらいのでしょう、他の奴隷達も新顔の私には全く関心も示さないで丸太を枕に死んだように眠りに落ちて行きました。私も空腹と渴きに悩みながらいつしか眠ってしまいました。久し振りに全身に喰った鞭痕が床に摺れる痛さと、腰鎖の金具が腰に当る鈍痛、そして鉄の首環のうるさい圧迫感とに何度も眼を覚まして寝返りを打ち、明日からの苦しい奴隷勤めを思っては涙を流したのでした。絶えて久しく枕等を使って寝た事がありませんので眼覚める毎に丸太棒から頭が落ちていました。

何度目かに眼覚めて暫くすると奴隷係りの男の足音が聞えて来ました。ハッとして丸太棒に頭を乗せ、眠っているふりをしていますと、男は荒々しく鉄格子扉を開いて檻の中に入って来ました。突然ガンと脳天に一撃喰ったような衝撃を受けて飛上がりました。男が

持って入った大きなハンマーで丸太棒の切口を一撃したのです。他の一本の丸太も壊られ、奴隷達は嫌だに眼を覚めました。

「二十三号と二十九号は枕を外していたな。今朝は珍らしく二匹もいたわい。お前達二人は今夜鉄砲を背負わせてやる。」

二十三号と二十九号は泣きそうな顔で哀願のまなざしを見上げましたが、すぐにうなだれて諦めたようでした。用便を済ませ、戸外に曳き出された私達は地べたに坐って奴隷食を喰りました。久し振りの奴隷食の悪臭も空腹の私には気にもなりませんでした。

「立て!!」

直ちに今日一日の労役に出発です。

「今日もいい天気だ。気合を入れて働けよ。」

一号奴隷が私達の手錠の鎖に太い捕縄を一本ずつと通して芋蔓式に一列に繋ぎ合わせました。歩き出すと、昨夕駆足で痛めつけられた足首が鉄枷にこじって思わず呻く程の激痛でした。これからは四六時中、足枷のままで過さねばならないのです。これが当然の奴隷の姿なのですが、今迄は本当に有難かったなあと思っていました。

足枷がどんなに痛かろうとも鉄で打込まれた枷がどうなるものでもなく、珠数繋ぎの身は立ち止まる事も許されず、齒を喰いしぼって吊鎖の動揺を手錠の両手で押え、呻き呻き約二軒も山手の方の工事現場に曳かれました。工事は丘を切り開いて宅地にする段階で「何某家別荘新築工事」と書いた立札が立っています。芋蔓を解かれ、外された手錠を左腰に吊った私達は鞭に追われて苦役を始めました。

ツルハシとシャベルで崩した山土をトロッコに積んで谷に捨てる単調で苦しい作業でした。重いトロッコを押して行く時には足枷の



痛さに泣き出し度くなる位です。しかしものの五日間も辛抱すれば固まって楽になる事を今迄の経験で知っています。同じ枷なら苦痛は最初だけです。枷が変わる度に味わねばならなかった苦痛なのですから呻きながらも頑張りました。少しでも動作が鈍いと情容赦なく鞭が鳴り、数分おき位に絶えず奴隷達の悲鳴が丘の風に乗って流れました。

私はあの生地獄のような監獄の苦役、そして又あの炭坑での奴隷勤めを想い出しました。しかし「炭坑では労役中は足枷を除いて呉れていたように思うが、ここじゃひどい事をするもんだ。これじゃ懲役と同じじゃないか。」と考えますと少し腹が立って来ました。

全くこき使うという言葉がびったりする程の苦役でした。昼食も十分間で済まし、その他は全然休み等ありませんし用便も垂れ流しなのです。永い永い一日がようやく終りかけて陽が沈みかけた頃にはブツ倒れそうでした。それでも監視の男の鞭が自分の頭上に振り上げられますとビクッと体が動くのです。鞭というものは、何年経っても恐ろしくも痛いものなんだあとつくづく思いました。

「まあ、一日でずい分はかどるものねえ。」突然若々しい婦人の声が爽かに響きました。横眼で盗見すると、明るい格子縞のワンピースにサンダルを素足に穿いた娘さんが白い小犬を連れて工事場の入口に立って眺めていました。傍らにポロシヤツ姿の青年が立って娘さんの腰に腕を回しています。

「おや、若奥様。昨日もお見えになって、又今日もですか。ハ、ハ、おや、旦那様も御一緒で。」

「ウフン。だって早く出来て住みたいもん。ねえ、あなた。」

「そんなこといったって仕様ないじゃないか。ホラ御覧よ。奴隷達

が汗水垂らして働いてるじゃないか。約束した日迄には作って呉れるよ。ね、そうだろう。」

「いやあ、そうおっしゃられると恐れ入ってしまいますな。しかし奴隷共は本当に仕様がなないもんでしてね。ちょっと眼を離すとすぐ怠けやがるんで……。この野郎!! どこ見てるんだ。貴様達は唯働いてりゃいいんだ。」

運悪く私が槍玉に上って三つばかり鞭を喰いました。

「ねえ、奴隷達の足の鎖外してやったらどうかしら? もっと能率が上がるんじゃないかって?」

「ハ、ハ、ハ、そりゃそうかも知れないけどさ。そういう訳には行かないよ。」

私の他にもう二人程の奴隷に鞭で悲鳴をあげさせた監視の男が再び口を挟みました。

「しかしお二方。ここはいい眺めですぜ。これだけの眺めはちょっとありませんな。大抵の観光旅館やホテルなんか足許にも及びませんや。」

「そりゃそうよ。パパが何年もかかって、手に入れた土地なんだから。」

彼等夫婦は、それからなおも、あの辺は何になるかと、庭のその辺に花壇を作って等と楽しげに語らい合い続けました。

「ようし。今日はこれでやめ。」

ようやくのことで待ち焦がれた号令が掛り、私達はその場に崩折れそうになる体に鞭打って用具を片付け、そして一列に並んで腰の手錠を抜き出して順番を待ちました。若奥様の連れた白い小犬が私達に向って可愛らしい声で吠え立て、彼女に頭を撫でられながら抱



き取られました。ガチツギリギリギリという嫌な音が順に近寄って来て私の番になりました。

「お願い申し上げます。」

重い手錠を押頂いて監視の男に渡しながらいいますと

「余計な事ぬかすな!!」

と猛烈な往復ビンタを喰いました。ビンタの音に振り向いた若奥様は微かに美しい眉をひそめ、私が差出した両手に手錠が掛けられるのを見やりました。

捕縄で手錠を芋蔓式に繋がれた私達が、張り詰めた気も弛んで重い鎖錠にふらつきながら若奥様の眼前三米程の所を曳かれて行きますと、彼女は小犬を抱いたまま一、二歩後退りました。

「近くで見ると随分太い鎖なのねえ。ああ、マギーちゃん、よしよし、よしよし、いい子ちゃんだねえ。おとなしくするのよ。」

えもいわれぬ香水の香りが仄かに匂い私達は唇を噛みながらうなだれて彼女の顔をジャラジャラと引き立てられて行ったのでした。

## 土建会社の苦役

### (二)

頭数を数えながら私達を檻に追い込んだ監視の男は

「じゃ、おとなしく寝な。喧嘩なんかしやがると、唯じゃおかねえぞ。」

鉄扉をガチャーンと施錠して立ち去りかけました。

「あ、旦那。あの…」

先程から何かいい掛けてはやめていた二十三号が思い切った様子で足鎖をガチャつかせて鉄格子の傍に急いで近付き、鉄棒にしがみついて声をあげました。

「何だ?『錠』を外して呉れっていうのか? あと十日程したら外してやらあ。辛抱してろ。フ、フ、フ。」

「ち、ちがいます。あの…今朝私が枕を外して寝ていましたので…。」

「ああ、そうだったな。」

鍵束を取出してジャラジャラいわせながら監視の男は戻って来ました。

「出て来い。しかしおめえ仲々感心な奴だな。」

檻を這い出る二十三号に続いて

「旦那。私もでございます。」

と二十九号が足鎖を鳴らせました。

「お、そうそう、お前もだったな。こら、何故今迄黙ってやがった?」

蹴り倒された二十九号は這いつくばったまま手錠をコンクリートの床にこすりつけながら全身を震わせました。

「お前さんてば、未だこんな所にいたのかえ。あんまりおそいから見に來たんだよ。」

嬌声と共に一人の女が現われました。年の頃は三十二、三才、短目に着た和服に赤い前垂れを締め、色白で男好きのするおかみさん風の女です。髪に挿したかんざしを抜いて大きく見せた首筋の辺りを掻き掻き上目使いに監視の男へ色っぽい流し目を呉れて

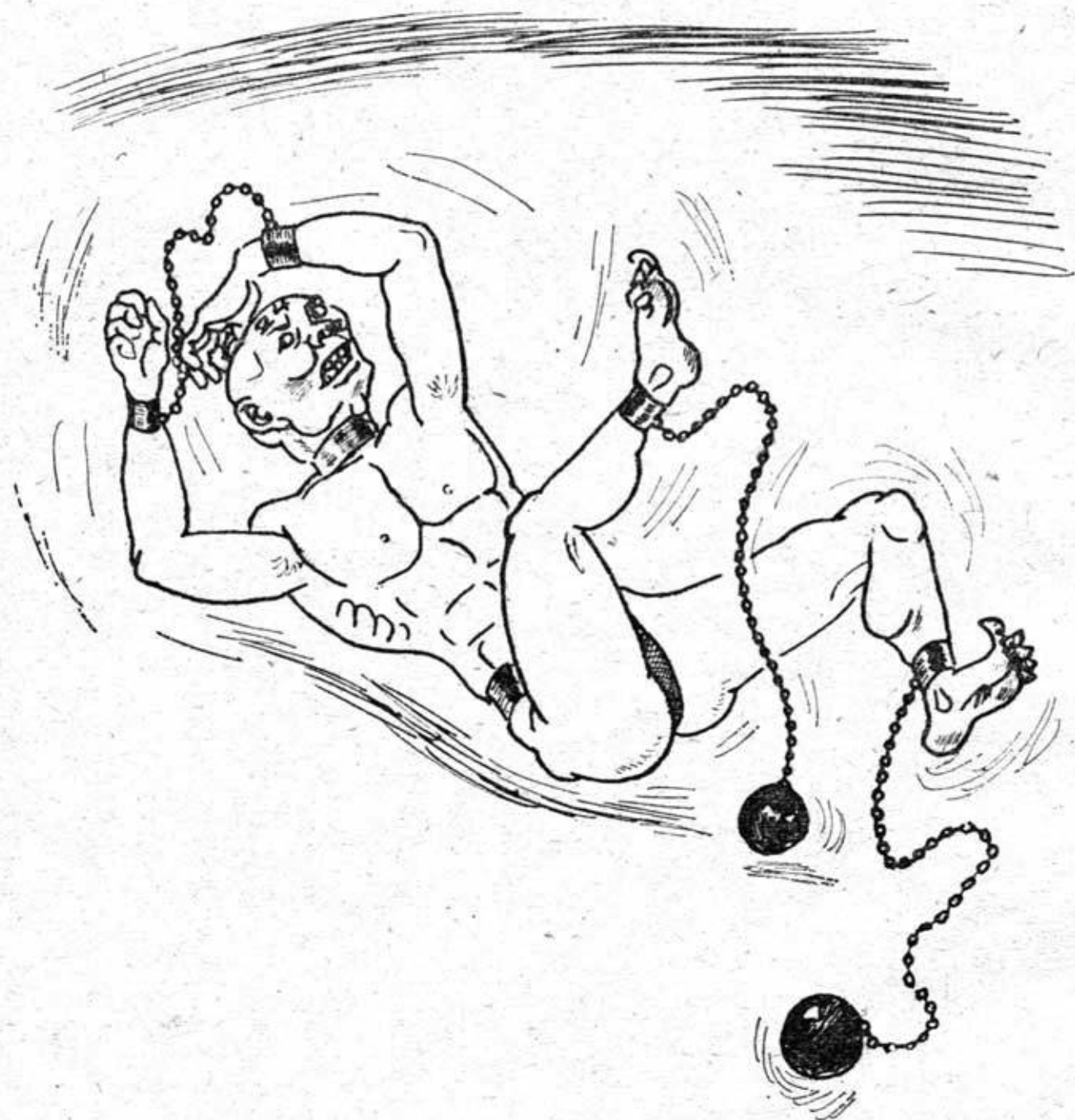
「早く帰っておいでよ。今日は馬鹿におそいじゃないのさ。わたしや待ちくたびれてしまったよ。」

男は女房に甘えられて相好を崩し

「まあ、そういうなよ。仕事はあとがつかえてるし、それに今日も



若旦那御夫婦が現場を見においでになったんだ。気張ってる所を見せにやならねえしな。こら、右手を上から後ろに回さねえか!!」  
 おかみさんは檻の内外をジロジロ見回して



「お前さん、何だか臭いわねえ。あら、この二匹どうしたの?」  
 既に鉄砲手錠にされた二十三号は上体を真直ぐにして正坐し顔をゆがめております。二十九号の右手が肩の上から背に回され、既に

鉄環の嵌まった左手首の方へ無理に押し下げられてU字環の中に捕えられました。手錠の蓋がギリギリと鳴って二十九号は低く呻きます。

「何ね、ちょっと懲しめてやるのさ。さあ、とっと入りやがれ!!」

胸を大きく喘ぎながら這いずり込む二匹の奴隷の尻に革鞭が鳴りました。

「苦しそうねえ。一晚中あしとくのかえ? 可哀想みたい。」

「フ、フ、フ、こんなの罰の中に入らねえさ。こら、二十九号。おめえは三晩程そうしとくからな。二十三号は神妙だったから今夜一晚で勘弁してやらあ。」

施錠の音が薄暗い電灯の光の中でやけに大きく響きました。

「誰奴も此奴も、精も根も尽きたようなつらをしてるじゃないの?」

おかみさんがそういういながら亭主のくわえた煙草に火をつけてやりました。

「お前さん一緒に帰ろうよ。」

「そうは行かねえんだ。これから大将の所に行って仕事の打合せをしなきゃ。」

「そんなに働かなくてもいいじゃないか。体をこわし



でもしたらどうするのさ。わたしや、お前さん一人が頼りなんだからね。」

「嬉しいことをいって呉れるじゃねえか。」

彼等の体がつれ合うような気配がして

「じゃ仕方ないから、わたしや先に帰ってるよ。一風呂浴びて一本つけて待ってるからね。一日中、奴隷達を追い回すのは疲れるだろうねえ。お前さん、ちょっと待ってよ、薄情なったら、ありゃない!!」

おかみさんは襟の辺りを直しながら下駄の音を響かせて男の後を小走りに追って行きました。仄かにお白粉の匂い残り、やがて消えて行きました。囚われの身の習いで、監視の男がいる間は身を固くしていた私はホッとして、丸太棒の枕に頭を載せて横になりました。他の奴隷達も溜息を吐きながら思い思いに体を寛ろがせます。鎖錠が触れ合う音がしきりして、あちこちでいびきも聞え始めました。

「やかましくって寝られやしねえ。おい、ちょっとどいて呉れ。」綿のように疲れ果てた寝入りばなを、誰かに頭を蹴られました。

「済まねえな。ああああ、今日も一日過ぎたか。辛れえなあ。」

私の横に割り込んで横になった十五号は、大きく伸びをして吐息をつきました。

「いびきをかく野郎は、一かたまりになって離れて寝ろっていうんだけど仲々いう事を聞きやしねえ。」

鉄砲手錠にされている二人の奴隷は横になる事も叶わないで壁にもたれて喘いでいます。特に二十九号の呻き声は本当に苦しそうでした。

「おい、おめえ達。もちょっと静かにしろやい。可哀想だが身から出た錆だぜ、喚いたって仕方あるめえに。」

巻舌で口を利く十五号は少し小柄ですが、しなやかな筋肉質の体をした三十才前の男でした。

「あの二十九号の野郎は、背が高い癖に腕が少し短かいらしんだ。眼を白黒させて苦しんでやがる。ざまあ見ろってんだ。彼奴は気に喰わねえ野郎なんだ。ところでおめえ、新顔だな。あと何年だい？十五年位だっけ？　そうか、羨ましいや。俺はたっぶり三十年あらあ。想い合ってやっと一緒になれた女房を喜ばせてやり度くてさ、ほんの出来心で泥的をやらかしたんだが……。」

彼は女房を思い出したものか、切なげに身もだえしました。

「おかみさんに見つかって騒ぎ立てられたのが運の尽きさ。おかみさんも命を落すし、こちらも終身懲役という次第。ああ、畜生。一緒になって三月と経たねえ仲なんだぜ。」

彼はしなやかな体をビクビクさせ、額に脂汗を滲ませて呻きました。見やりますと、足指は反り返り堪え切れなくなった彼は「錠」をまさぐり肩を震わせて男泣きを初めました。

「現場で坊ちゃん嬢ちゃんが今日も見せつけやがったし……。まあ、それは身分が違い過ぎるから諦めもするけど、先刻は頭に来ちまったよ。それにあのおかみさんが俺の女房にそっくりなんだ。『お風呂に入って一本つけて待ってるわ』か。畜生!! 気が狂っちまいそうだ。」

この土建会社を買われて繋がれてから、かなり長いらしい十五号は、一日の苦役もさしてこたえないらしい様子で暫時の間もがき回っていました。



「女房の奴、今頃どうしてるだろうなあ。パクられてから一度も会いに来ても呉れねえが。」

その時私と反対側に寝ていた男が大声で怒鳴りました。

「いつ迄詰らない話をしてるんだ。喧ましいじゃないか。」

「何を!! 借金を踏み倒すなんてケチな事をしやがっただけのおめえじゃねえか。黙ってろい。」

二人の奴隷の小競合いを耳にしながら、私はいつしか眠ってしまいました。

## 証拠物件 第二号

整地作業や道路工事、そして職人達に口汚なく罵られながらの下働き等に毎日々々汗水垂らして追い立てられて約半年ばかりを過ごした或日のこと、突然やって来た官憲の手で私は検事局に連れ去られたのでした。

その日は朝から大雨が降って私達は少しは楽な目が出るのを喜びながら倉庫の整理や工場の雑役に追い回されていました。重い型钢を相棒と一緒に一生懸命積み直していてフト気が付きますと、地味な洋装の二人の婦人が鋭い眼で私達を棒で小突きながら一人々々調べています。側に立った事務所の男はペンを耳に挟んだまま不安気にそわそわしていました。

「ホラ、矢張りいたじゃないの!!」

黒っぽいスーツを着た婦人が、登録番号を刷られた私の額を棒の先でグイと押えて鋭くいいました。

「36M二八二五と……。間違いないわ。あんた嘘ついたのね。あとで出頭して貰うわよ。」

事務所の男は真蒼な顔になって

「ほ、ほんとに知らなかったんで……。ただ三十号という事だけなんでして……。へえ、申訳ございません。」

「ちょっと、お前だよ。こっちへおいで。」

一人の婦人がハンドバッグから、キラリと光る手錠を取り出しました。無意識のうちに両手を揃えて差出した私は、婦人達が当局の係官らしいのに気付いて体が震えました。

バシッと両手首に鳴った手錠は、奴隷用には販売使用を禁じられている警察手錠でした。恐ろしさに膝がガクガクして口中が乾いてしまいました。事情を訊ねる勇氣等とはとてもなく、全身が萎えたような私にはお構いなしに

「おいで。」

手錠に結んだ捕縄を婦人係官が引張りました。

「じゃ、これ。押収品受取書よ。ここにあなたのサインして……。」ペコペコしている事務員の男を尻目に、婦人係官達は雨の中を走り出しました。重い足鎖とぬかるみに二、三度滑って膝をつき、お構いなしに引張られる手錠に両手首を締め上げられながら、門の外に待っていたジープに追い上げられました。

「先刻押収品といったようだけど、私が何の押収品なんだろう?」

と考えるながら婦人係官の靴の先を見詰めて着いた所は検事局でした。昔と違って建物の中は大分明るくはなっていますが、重々しく陰惨な雰囲気があるのは致し方ありません。既決や未決の囚人の男女が重い戒具に打ちひしがれて行き来しているのをチラチラ見ますと私は泣き出しそうになってしまいました。

「あの土建会社に来る前は、どこにいたの。」



「……。」

「どこにいたのかって訊いてるのよ。」

革鞭が容赦なく胸に鳴ります。

「ヒーッ。ハ、ハイ。あの……白樺荘という旅館に……ハイ。」

簡単な取調べの後、地下足袋を取上げられてシャワーを浴び、首に大きな木の札を鎖でつけられ、手錠だけは外して呉れて、そのまま拘置所の未決檻の独房に放り込まれたのでした。少し落着いてから、首の木札を苦心して読みました。

「早乙女光枝、中林建吉、選挙違反の件。」

証拠物件 第二号

中林建吉というのは、あの土建会社の社長で、私達奴隷が毎晩遙拝させられていた人物である事は直ぐに分りましたが、早乙女光枝とは誰だろうと暫く考えた末、はたと気付きました。

他でもありません、あの、やさしかった白樺荘の奥様の事なのです。あの方の事は本名などで考えたこともなかったので急には思い出せませんでした。大切な旦那様の選挙のため懸命に奔走しておられた奥様でしたが、その奥様が違反で法に問われているのだと知りますと、おいたわしさに胸が一杯になりました。今どうしておられるのだろうか、恐らくはこの拘置所の一隅でシヨンボリしていらっしゃるに違いはないと思いますと、我が身が品物同然に扱われている口惜しさ等はどこかに吹飛んでいても立ってもいられない気持ちになってしまい、思わず鉄格子にしがみついて力一杯ゆすぶってしまっただけでした。

「何してるの!!」

スカートをひるがえして忽ちやって来た婦人看守は私を房の外に

曳き出すと腰の革サックから手錠を取出し、私の片手を背にねじ上げました。されるままに後手錠を掛けられながら私は頭の隅で

「若い女の手というものは冷たいものだなあ。」

と詰らない事を考えたものでした。

「お、お慈悲でございます。奥様に……早乙女光枝様に一目だけでも会わせて下さいまし。お願いです。」

到底許される筈もない事を夢中で喚きますと、もう一人の婦人看守が走って来て固く嵌口具を嵌めてしまいました。

「暫くそうしてるがいいわ。お前は証拠物件なんだから勝手な姿勢でいていいよ。気持が鎮まったら外してやるわ。」

蹴り込まれた私の頭上で鉄格子扉が音高く閉められました。

「けど、此奴一体どういうのかしら? 奥様っていう女が恋しいのかしらね。笑わせるじゃないの。」

「ホホホホ。あの首環や足枷、鋏で打ち込んであるのよ。」

「あら、ほんと。珍らしいわね。」

「あ、又あの腹ばて女が騒いでるわ。嵌口具取って来るわね。」

房内での自由を許された私は床の上に横になりました。久し振りの嵌口具は顎が痛い程きつく締められ、首を回す事も出来ない位でした。こうなった以上はどうしようもありません。奥様を裁く法廷に証拠物件第2号として曳き出される日を待つしかないのです。

それからの約二十日間というものは、苛酷な苦役に呻吟していた身にとっては天国のように楽な日々でした。独房の床にひねもす横になっていきますと過ぎ来し方の事どもが、いろいろ想い出されました。追放されていた時の元スチュワーデスの事、そして白樺荘に現われた客達の数奇な物語り等……。

(つづく)



## 〔映画通信〕

## 最近のショッキング緊縛映画

東 山 映 史

松竹の「切腹」洋画の「世界残酷物語」が大ヒット、世はあけてショッキングな残酷物語がうけている。これに負けず劣らず、時代劇はもとより現代劇まで、女性の緊縛はもとより男性責めなどさまざまなものが多い。

現代ものでは、東宝の谷口千吉監督の「山猫作戦」で、演技派の水野久美が大いに可愛がられている。水野久美扮する大陸芸者染丸は親日派の中国人、実はゲリラの隊員に見染められ、ドサクサまぎれに誘拐される。和服の上から縄をかけられ、後手に縛って猿ぐつわをはめられ、足もくくって箱詰めになれ、運び出される、ゲリラ隊に捕えられた日本の二人の将校は拷問に屈せないで、そのおとりとして、染丸が拷問される、真っ赤に焼けた鉄の棒を女の顔に近づける、染丸は恐怖に身もだえる。また、彼女は三人をおびき出す手段として利用される、木を背負わせて後手

に縛りつけ銃殺刑を行なおうとする、女は紫色の布で猿ぐつわをされ救いは呼べないが、呻き声だけはもれる。また星由里子が中国娘で、服の背中を破られて、鞭打たれそうになる場面もいたいたい。

東宝映画では、「暗黒街の牙」で、水野久美は三千万円拐帯犯人の情婦として、トルコ娘で働いているが、ボスの佐藤充に、男の住所を白状せよと、首をしめられ殺されそうになる、大いに被虐的色気を発散させている、この映画では、夏木陽介ら男性スターが、椅子に縛りつけられたり、火に焼けた鉄棒を足にくっつけられたり、水の中に顔をつけられたり責められている、日活映画のギャングものでは美女の緊縛シーンが多いが、「危いことなら銭になる」で、浅丘ルリ子が穴戸錠、長門裕之らと、後手に緊縛され、地下室でガス責めにあうシーンが長くて十分マニアを喜

ばせてくれる、ニセ札争奪物語だが、ついに捕えられた彼女は、一人一人縄で後手に縛られ、地下室へ閉じ込められる。そしてガスが噴出する。後手に縛られ、足までくぐられた浅丘は床にうつぶせになっている。そして穴戸錠にズボンのポケットにナイフがあるからとてくれと頼む、縛られた後手で、錠は浅丘の尻をさぐる、ポケットならぬ尻にさわられた浅丘は「ボケね」とおこる、このところお色気のある緊縛シーンだ、中平監督は良心的に緊縛された浅丘の後手をはっきり探し出す、楽しい一駒だった。

時代劇の圧巻は大映の「忍びの者」「真空地帯」で男性責めを見せた山本薩夫監督は織田信長暗殺で捕えられた中村典の投げの与八は吊し責めにあう、ついに両耳をそがれる、このシーンは心臓の弱い女性は卒倒するすさまじさだ。ついに、関節をはずして縄を抜けるながらも、追いつめられて人相を隠すため、自ら顔をはいで果てる。また、女忍者タモ（真城千都世）も信長暗殺に失敗し、生き埋めにされる、はだかで土中に埋められ、口から血をたらしながら、虚空をにらんだ真城の顔はすさまじかった。

× × ×



## アブチック・ストーリー

## ピアノ責め

雪ゆき俊とし遙はるか

—

ピアノの音が急に止んだ。初音（はつね）は読みかけていた本の上に腕を出して時計の針を見た。いつのまにか、もう二時間経っていた。襖をあけて教室の中へ入って行くと、水母椅子のグリーンのビロードの上に肉づきのよい少女の尻がむっちり横に張っているのが目についた。バイエルの教則本を畳の上に落して、屈み込んで拾っているところだった。

「もうお仕舞ですの。」

「ハア。」

血が上って赤くなった顔を上げて少女はニコリと笑い、教則本をピアノの上に戻すと、立上って定期入れの中から回数券を取り出した。色褪せた紺色のズボンの尻は、立上ってしまうと小さくしぼん

でいた。興覚めた思いで回数券を二枚受取り、玄関まで送って行く。脳裏にはたった今見た少女の張切った尻が消えずに残っている。自然にその尻を芳江のそれを較べる気持になった。

少女を送り出すと初音はピアノに向って暫くトルコ行進曲を弾いていた。

玄関のベルが鳴る。期待に胸を弾ませながら飛んで行くと、果して芳江が立っていた。

「少し遅れたわね。」

「エ。」

「いけない子。その分もお仕置してやるから。サ、早く入りなさい。」

初音は小娘の様にいそいそとして敷石の上に降り立った。いつも



の様に門と玄関に鍵を掛けて来ると、電燈の光で太い項を真珠色に輝やかせながら、芳江は向う向きになってカーテンを引いていた。

初音は机の抽出しから鞭とベルトを持って来た。羞恥に顔を赧らめてさしうつむいている芳江の、ローブとペティコートを重ねた儘上に捲り上げ、巾広い革のベルトで腹の周りをしっかと締め上げた。それからドッロースを、丁度裏返しに太股へ下し、剥出しになった尻をビロードの上に当てて水母椅子に坐らせた。

「十二分遅刻したから十二回よ。」

ピシッ、ピシッ、ピシッ、と気持の良い音を立てて篠竹の鞭が、椅子の上に乗せられて豊かに張り切った芳江の臀部を襲った。芳江は真赤になって下を向き、身じろぎもせずに、お仕置を受けている。力を加減しているの痛くはないのだが、真白な柔かい肌は十二回も続けて叩かれれば薄赤く色附いて来る。

お仕置が漸く終ると初音はチェルニーの楽譜を開いて芳江に弾かせた。目は間断なく譜面と芳江の指先に等分に配られ、鞭は右の肩の上に構えられている。芳江の顔からも羞恥の翳が消え、真剣な表情になった。一箇所弾き間違えても篠竹の鞭が、今度は力をこめて彼女の尻に当てられるのだ。スリルに富んだ、それは素晴らしい遊戯だった。音楽に浸る喜びと、サドルマゾヒズムの愉しみとで二人はジリジリと尻上りに熱中して来る。

## 二

初音はもう五十に近い老処女（スピンスター）で、埼玉の奥では七十過ぎの老父と弟一家が多少の田畑を持って百姓をしているが、東京には誰一人寄辺を持たない。呑気と言えは呑気。淋しいと言えは淋しい暮しだった。

彼女は昭和の始めに師範学校を出た。没落しかけていたとは言え、徳川時代からの大地主だった家柄なので、東京市に編入される前の荏原村の小さな分教場に勤めながら、同時に家から仕送りをして貰って、当時の職業婦人としては仲々贅沢に暮したものだ。ピアノや音楽を習ったのもその頃で、支那事変中、その分教場が生徒数、千人を超える大きな小学校に発展した頃、貯めたお金でピアノも買った。結婚しなかった故もあって音楽に打込んでいたので、空襲下でもピアノを焼かず、戦後農地改革で完全に家が没落し、竹の子生活をやらなければならなかった時にも売払わなかった。その頃、最古参とは言え、女教師の収入などではとても食べて行けなかったので、ピアノ教授や貸ピアノを始めたが、半年間一人も客が来なかった程だった。学校をやめてピアノだけで食べて行ける様になったのはつい三、四年前からの話だ。

戦後も十数年となると庶民の生活も安定して来たのか、名の通った音楽家でもない彼女の所にも、習いに来る者が常時廿人を越えている。女の一人暮らしで余り金が掛らないのと、もっと大型の最新式のピアノを購いたいので、小金は貯めている。勿論銀行に預けているが、当面二、三カ月間の生活費とは別に、彼女はいつも二、三十万円の現金を用意している。戸閉りは厳重にしているが、如何にせん女の一人暮らしだ。ピアノ教授なら此の辺に多い中流サラリーマンよりも金を持っているだろう……、と目をつけられて、いつ泥棒に入られないとも限らない。それだけの現金を渡して、命だけは……、と泣きつければ、滅多に命までも取られはしまいと計算している。サディズムの気があるだけに、少しばかりの金では、こんな筈はあるまい……と拷問されるかもしれないと恐れている。



此の恐れは全然根拠のないことでもなかった。空襲が烈しくなった時、ピアノと一緒に父の家に暫く疎開した。小川一つ隔てた向うの谷合の低地に、小綺麗な新築の家があって、東京の何か大きな会社の社長の思われ者だという女が、母妹と三人で疎開していたが、東京から時々自動車で物資を送り込んで贅沢な生活をしているという噂だった。日頃から乱暴な初老の駐在巡査が、統制令違反で調べたところ、意外に獲物が少なかったもので、どこかへかくしているだろう……、と女三人を一晚責め抜いたというのだ。下水工事の為に使った土管が二つ三つ裏に転がしてあった。親娘は裸にされて後手に結え上げられ、首から脇の所まですっぽりとその土管を冠せられて、腕縄を木の枝に吊されたのだという。爪先が地表に辛うじて届く程だった、とか、土管の重味で上半身が直角に前へ曲った、とか、五百米程離れている一番近い農家では一晩中悲鳴が聞えた、とか。胸をわくわくさせる様な噂だったが、デマの多い時代だったから、すっかり本気には出来なかった。

初音は其後此の女に会ったことがある。抜ける様に色が白く、ほっそりした身体つきで楚々たる風情のある、和服のよく似合う古風な美人だった。噂通りの拷問姿を当てはめてみて、初音は酔った様な気持になった。初音をさえ、東京の女だと特別の淫らな目で見廻す様に此の辺の農夫達が、空想の中で彼女を裸にし、縛り上げ、むごたらしく苛んでみたくなるのは無理のない話だ。あの噂は恐らく彼等の切ない空想が寄集って一片のストーリーを形作ったものだったのだろう。土管を冠せて木の枝に吊すという異様なアイデアから初音はそう見当をつけた。

こんな噂は別にして、五十年も生きて来たのだから、初音自身に

も嗜虐の思出は幾つかあった。忘れ難いのは戦争末期の軍国教育時代で、女教師が遠慮なく女生徒をピシピシ撲ることが出来た。尤も思いついてそんなことを盛んにやったのは大勢の女教師の中でも初音一人だった。初音は気性の烈しい女で、その為に結婚を逃した位だから「あの先生なら……。」と誰もが見逃して呉れた。薙刀を頭上に持たせさせて校庭に立たせる。満々と水を張ったバケツを両手に持たせて校庭を何回も廻らせる。悪い生徒は居残りさせ、頭や顔を撲るのは良くないからと言聞かせて尻を捲らせ、鞭で叩いた事もある。女の子というものは、自分の習った女の先生には卒業後もずっと懐いているものだが、此の時のクラスには在校中から彼女に懐く生徒は一人も居なかった。彼女の方でも自分は嫌われ者と決めてかかっていた。自然懲罰は一層残酷になる。

生徒達は八人宛六班に分れていて、級長級の優等生が班長だった。指導者原理の裏返しで、班員が悪いことをすれば班長が罰せられた。不思議に班長になる程の子は顔も賢くそうで気品があった。当然彼女等の折檻される度数も多くなる。初音は今でもその子達の顔と同時に尻の形や色艶、肉付き工合まで思出すことが出来る。一人だけ優等生の癖に、顔色が悪く容貌魁偉と言った感じの娘がいた。芳江だった。背が一番高く、男の子も敵わない短距離の選手で、五年の時既に乳房がかなりふくらんで大人びた身体になっていた。柄に似合わない立派な優しい、素直でおとなしい子だったが、マスクが気に入らないので毛嫌いし、他の美貌の子が少しでも成績を上げて来ると直ぐ班長を取換えてしまった。

戦後五年も経ってから此の子達がクラス会を開いて初音も呼ばれた。併し生徒達は同時に呼んだ、他のクラスの担任だった先生の周



困で騒いでいるばかりで、彼女の傍には寄りつこうともしなかった。明かに彼女は儀礼的に呼ばただけなのだ。流石に彼女は淋しかった。少し遅れて芳江が入って来た。顔色は依然悪かったが、肥って、顔も身体も丸味が出来、あたり前の女学生だった。初音が一人ぼっちなのにすぐ気附いて話しかけ、ずっと彼女の傍を離れなかった。

「先生。私ピアノを教えて頂きに行つて良うございますかしら。」  
「夕方か日曜ならいつでもいいわ。今は客商売だから昔みたいに叱らないわよ。」

こんな会話が機になつて彼女は毎週来る様になった。邪気のない娘なので直ぐ可愛くなつて来た。男に頼らず一人で生活を立てている初音を、芳江は女学生らしく尊敬さえしているらしかった。

何日か指を取る様にして教えた或日。初音は可愛さの余り、修理屋の置いて行つた傷んだピアノ線で、彼女の両掌の指を縛り合せてしまった。上に持上げる様になっている両掌が細かく震えていた。うなだれているので顔は見えないが嫌がられていないことは明かだった。初音は更に大胆になり、今度は芳江のセーラー服を脱がせ、裸の二の腕を後手に縛つてみた。肉附きの良い太い腕肉に細い鋼鉄線がキュッと喰込んだ。初音は思わず吐息をついた。

それからは芳江を教える時だけ、手に鞭を持つことにした。『お仕込』が終ると、ピアノ線や、赤、青、緑、紫、黄、黒。極彩色の真田紐で手足を縛つた。それは一人身の、行き場所のない欲情を自分自身に向ける為に、初音が昔から愛用していた責具だった。

もはや芳江にマゾヒズムがあつたことは明瞭だった。小学生時代の初音のやり口を覚えていて、もう一度あんな目に遇いたくて近附

いて来たのか、そう考えて初音は一寸鼻白んだが、あの芳江がそんな計算家とも思えない。

まもなく芳江は高校を卒業した。スーツを着、お化粧をし、パーマをかけ、ハイヒールのをはくと、見違える様に美しくなった。肌も滑らかになり、美しい光沢が出て来た。

### 三

広場に面した槐の樹の下へのベンチの黒い影が揺れる様に動いた。口にくわえた煙草の火で、男の顔が真直に此方を見ていることが解つた。芳江もそれを目掛けて真直に歩いて行つた。

「待った？ 健吉さん。」

「うん。もう直ぐ演奏会が始まるよ、早く行こう。」

立上つた健吉は長い腕を芳江の肩に廻して強い力で押す様にした。尻に受けた鞭の跡が、微かだがまだヒリヒリと痛む。公会堂の階段を昇る時、痛みは更に少し強くなった。

「どうにか間に合つたね。」

健吉は笑い乍ら隣に坐つた芳江の片手を引寄せた。ヒヤリとしたが折よくベルが鳴つて場内が暗くなりかけたので、芳江は安心して目をつぶり、健吉が白いレースの手袋を脱いで暗い中で指先を觸るのに任せた。自分の恋人の手首に、つい先刻別の女がピアノの脚にくくりつけた縄目の跡がまだ薄く残っているのだとも知らず、健吉は柔かな音楽を聞きながら、芳江の掌を愛撫し続けていた。

曲が変わつて、あの、固くて軽快な小球を水晶の床の上に忙しくまろばす様なトルコ行進曲になった。芳江は思わず溜息をついた。先程の自分の姿が、夢の様に脳裏に浮んで来る。チェルニーの『お仕込』の時間が終ると、



「芳江さん、すっかり裸におなりなさい。」

初音に命じられて彼女は裸になった。次のお弟子さんが来るまで二、三時間の間が空いている。というよりわざと初音が空けてあるので、その間はいつも二人だけの秘楽の時間なのだ。

「先生。今夜、お友達と音楽会へ行くことになっているんです。ですから余り強く縛らないで下さい。」

眩しい程美しい肌の身をピアノの下に仰のけて、両手を合せて彼女は哀願した。黙って肯くと初音は跪いて芳江の両手を縛り、両足を縛った。冷たい素足が乳房の上と腹の上に載せられ、ペダル代りに芳江の柔肌を踏拉きながら、力をこめて初音はピアノを弾いた。土踏まずの所で腰の周りを柔かく撫でたり、足をぐっと横に伸して腋の下や咽喉から唇まで弄んだり。初音の足の動きは変化の妙を極めていた。縛られたまま芳江は身悶えて声を挙げた。

——健吉さんは私のおんな姿を知らないのだわ。もし知ったら、どんなに驚くでしょう。——

芳江は薄く目を開いて健吉の様子を窺った。左手を上に向けて芳江の掌を載せ、右手は下に向けて芳江の掌の背をゆっくりと優しく撫でながら、彼は舞台から目を離しそうもない。

健吉は芳江が高校時代に知ったボーイ・フレンドで、只の友人の積りでずっと附合っていたら、去年の春、大学を出て勤める様になるとまもなく突然求婚された。その時は、『心臓が停る程』驚いてしまったが、一応求婚を拒絶して、そのままずるすると又友達附合を続けている内に、何となく結婚しても良い様な気持ちになって来た。

いつか誰かと猛烈に情熱的な恋をして、そこで結婚生活に入る。

漫然とそんなロマンチックな事を考えて女子高校から二流の或る女子大の家政学科へ入ってみたのだが、それも出て、二十四才の今日までこれと言った恋の相手も現われず、一生を託す程の職業も思いつかず、年令を考えて、自由放任主義の家族から催促されなくても少し焦り気味になりかけていたのだから、安サラリーマンとは言え、体格も良く、温和で優しい健吉は、女にとって悪い相手ではない。それに彼女も少年時代から喧嘩一つせずに附合って来た彼には友情としては最高の物を感じている。問題はどうしてもそれ以上には彼女の心が燃上らないということだけだ。それというのも、彼女は健吉との夫婦生活に不安があるからだ。健吉は微風のように柔かで優しく、とても芳江を満足させはしない。しかし芳江もどちらかと言えば内気な方なので、とんでもない変質者の様に健吉に思われるのが怖くて、もっと残酷な目に遇わせて下さい、とは言えない。言ってもそんなことの出来る男かどうか疑わしい。

それでも此の頃、芳江は結局健吉と結婚するのが自分の運命なのだろうと思っている。初音との関係をまさか一生続けて行く訳には行かない。今日も初音に、結婚するかもしれない、と言おうかとも思っていたのだが、気性の烈しい初音の嫉妬が恐ろしくて言いそびれてしまった。

「いい演奏会だったねえ。」

外へ出ると驟雨が降っていた。頭からビニールの風呂敷を冠って、芳江の肩をやさしく抱きかかえて、健吉は歩き出した。

「うちまで送って行こう。」駅を降りて、駅前楽器屋の前を通りかかった時、何気なく中を覗いた芳江はハッとして思わず身を縮め、健吉の身体のかげにかくれる様にした。店の奥の、明るい螢光ラン

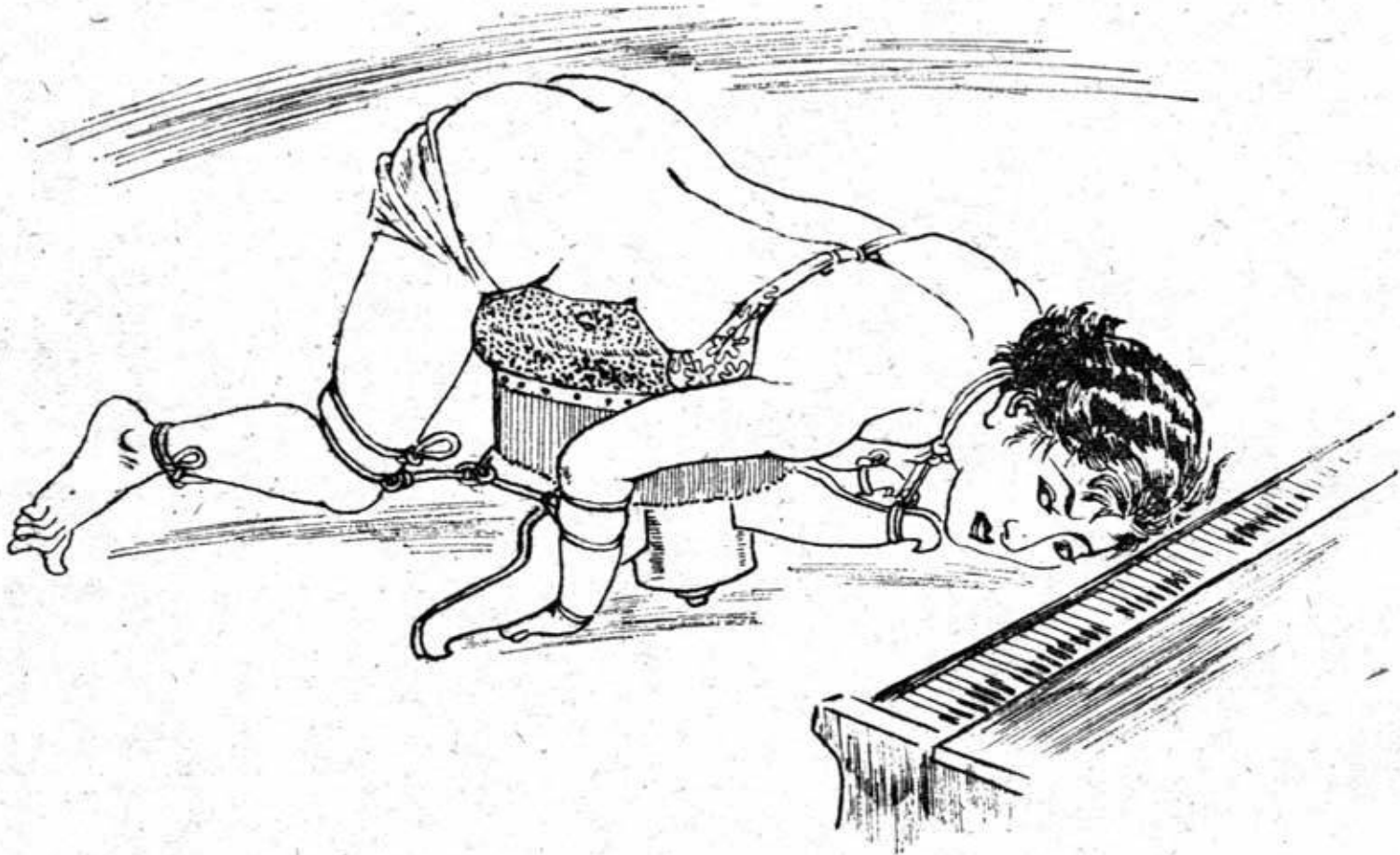


プの下に並んだ幾つかのピアノの間に初音が立っていたのだ。初音は一台の波形ピアノに手をかけて下を覗き込んでいた。

## 四

「芳江さん、こんなお仕置どう？鏡を御覧なさい。」

初音は篠竹の鞭でうつむいてる芳江の顎をぐっと迫り上げた。可愛い顔が正面を向き、のけぞった白い咽喉に痛々しく喰込んだ縄目が見えた。両腕を横に拡げ、尻を突出して前屈みに跪いた姿は、巨きな白い怪鳥の様だった。芳江の背中には小さな矩形の和卓の腹がぴたりと冷たく当たっている。上から見ると机面には十文字の麻縄が掛けられ、両端に掌、上端に首、下端に丸い尻が白く覗いている。手首や頸部や腰を麻縄で括って横面の梁に縛りつけてあるのだ。前から持っている箱形ピアノや、新しく買った波形ピアノの上に、仰向けや俯伏せに乘せてみたり、ピアノ裏に磔にしたり、様々



なポーズでピアノ脚につないだり。そんなお仕置は一通りやってしまったので、初音は責具を変えてみた。丸く持上っている豊満な尻を力をこめて鞭で打据える。一週間の禁欲の堰が切れて二人共ハアハアと息づかいが荒くなった。芳江は痛そうに顔を斜めにのけぞらせ、跪いた両膝をじりじりと畳に喰込ませ、磔にされた両手の指を悩しくくねらせて、鞭の痛さをこらえている。喰いしばった皓い齒の間から微かな呻き声が洩れた。

漸く初音のお仕置は終わった。

珍らしく和服姿で、芳江は初音の前に手をついた。肉付きの良い重そうな丸い腰ぶりや、黒い羽織が二十七、八の年増の様な色っぽさだ。手首と咽喉に赤い縄目の跡がまだ残っている。

「先生。私、来月の始めに結婚するんです。」顔が火照って赭くなっているのが自分でも解ったが、芳江は下を向かなかった。心配そうに初音の目の色を窺っていた。初音の目は一瞬陰しく光った。烈しい驚きと嫉妬の色が老い固まったコブラの様な顔に浮んだ。併し流石に年で彼女は直ぐにあきらめた。第一彼女はいつかは、こんなことが起るのを既に覚悟していたのだ。一生を処女で通した彼女に



は忍従の婦徳もいつか備っていた。

「随分、急なのね。」

「前から話があったんですけど、先生に言えなかったんです。ピアノも止したくないんですけど、都内にいい家がみつからなかったの浦和で立売の家を売ったんです。ア、私の父と先方の父がお金を出し合って買って下さったんですけど。だからもう先生の所へも来られませんわ。」

初音の表情が和んだので、芳江は元気になり、いつになく少し饒舌になった。

「そう。芳江さん、じゃ来週後一回だけ来られるわね。来て頂戴ね。」

「ええ。」

玄関口で芳江は和服なのにレースの手袋をはめ、風邪でも引いた様に咽喉には白い繻帯をぐるぐる巻きつけた。こんなカムフラージュの方法も初音が教えたのだった。

次の週に芳江が行くと、初音はもうすっかり用意を整えて待っていた。小さい方の箱形ピアノは廊下に出され、脚には丈夫な綱をつけ、芳江の身体を縛る真田紐や鞭が廊下に並べてあった。

「芳江さん。今日は最後だから私の取っておきのアイディアでいじめてやるわ。さあ、お洋服を脱いでここへ来なさい。此のピアノを曳くのよ。これは車がついてるけど八十貫もあるものなのだから、相当馬力のある娘じゃないと動かせないわ。貴女なら大丈夫ね。」

洋服だけに手早く裸になりかけている芳江の、体格の良い身体に目を光らせて初音は言った。

「そんな重い物、よく先生部屋から運び出せましたこと。」

「おバカさんね。楽器屋の男の人に来て貰ったのよ。さ、裸になったらここへ来なさい。チェルニーは先週限りよ。」

芳江は廊下に立たされ、真赤な真田紐で後手に縛られた。

「さあ、曳きなさい。」

ピシリッ、と鞭が鳴る。芳江は力一杯綱を曳いたがピアノはびくとも動かない。

「女の力じゃ無理かしら。もう一ぺんやってみよう。」

ピシリッ。もう一度初音は鞭を打ち降した。後手姿のまま芳江は上体を前へ倒し、腰に渾身の力をこめて前へ出ようとした。丸い尻、太い腿、白い脛に、なだらかな筋肉の凝りが盛上った。ギシッギシッと小さな鉄の車がきしって、ピアノはかすかに前に動いた。「それも一回。」

ピシリッ。勢がついて、ピアノは一尺程前に進んだが、力を緩めるともう磐石の様に動かない。芳江の足の構えは逆になり、爪先から足首が細かく震え、腹部には肌もちぎれんばかりに綱が喰入った。濯々とした白い肉体に汗が滲んで来た。五、六歩歩く内に彼女の全身の肌は汗に濡れて美しく電燈に光った。腹の皮に傷がつかない様に、初音は結び目を緩めて腹綱を二、三纏上にずらした。

「さあ、もう一度。」

ピシッ。ピシッ。

「ウウウッ。」

初音にしても芳江にしても、これは生れて始めての烈しい体験だった。五米ばかりの廊下の端から端までピアノを搬ぶのに予定の時間をすっかり費ってしまった。縄を何度もずらしたので芳江の腹から胸に、肌も裂けそうな赤い筋が何本も縊の様に刻まれた。尻や背



や腕には鞭の跡が縦横に走り、縄を解かれた芳江は精も根も尽きた様にぐったりと廊下に倒れ、息を切らしていた。蒼ざめた顔が汗でテラテラ光っている。初音の方も疲れて息を弾ませていた。

「次のお弟子さんが来るから、もう門をあけるわよ。芳江さんは暫く此方の部屋で休んでらっしゃい。それから、その傷は四、五日消えないでしょうから、その間他人に見られない様によく気を附けるのよ。」

そう言つて初音はあわただしく廊下を走つて行つた。襖をあけ、カーテンを引く音が聞えて来た。芳江はやつと立上り、廊下の端の扉をあけて、洋風の初音の居間にはいり込み、ベッドの上に倒れ込んだ。初音が又忙しく走つて来て、扉口の所から芳江の衣類を身体の上に抛り投げて呉れたが、それを着るのも物憂い位だった。

## 五

誰の目にも芳江は初々しい可憐な新妻に見えた。彼女の内気そうな優しいそぶりは傍目には、こよなく好もしかった。だから近所の人達も健吉の会社の同僚や上役達も、いや健吉自身でさえ、彼女は此の新しい生活に安住しきつていて、幸福なのだろうと思つていた。だが芳江の真の幸福は、こんな、生温いお湯の中に身を浸している様な生活の中にはなく、もう少し刺激の強い、柱に縛りつけられて頭から無理に熱湯を冠せられる様な生活の中にあるのだ。

健吉のやさしい愛撫を受けている時、芳江は懸命に初音からいろいろの『お仕置』を受けている自分の姿を想像していた。最後の『お仕置』が思いがけず烈しいものだったことは、初音に対する思慕の思いを一層強くしていた。あんな『お仕置』が始めから加えられていたら、彼女は健吉との結婚を運命の様に思い込みはしなかった

かもしれない。それでも芳江はやはり、こうなつてしまつた以上、新しい生活に従おうと思つていた。

台所仕事の最中。針仕事をしている時。庭先の草花を見ている時等ふつと白昼夢の様に被虐の想像が又様々に形を変えて蘇つて来る。△ああ私をあんな目に遇わせて呉れる人はもう私の人生からは離れてしまつたのだわ。これから先は空想の世界にしか私の喜びはないのだわ。▽寂しい悔恨の思いで芳江は唇を噛んだ。

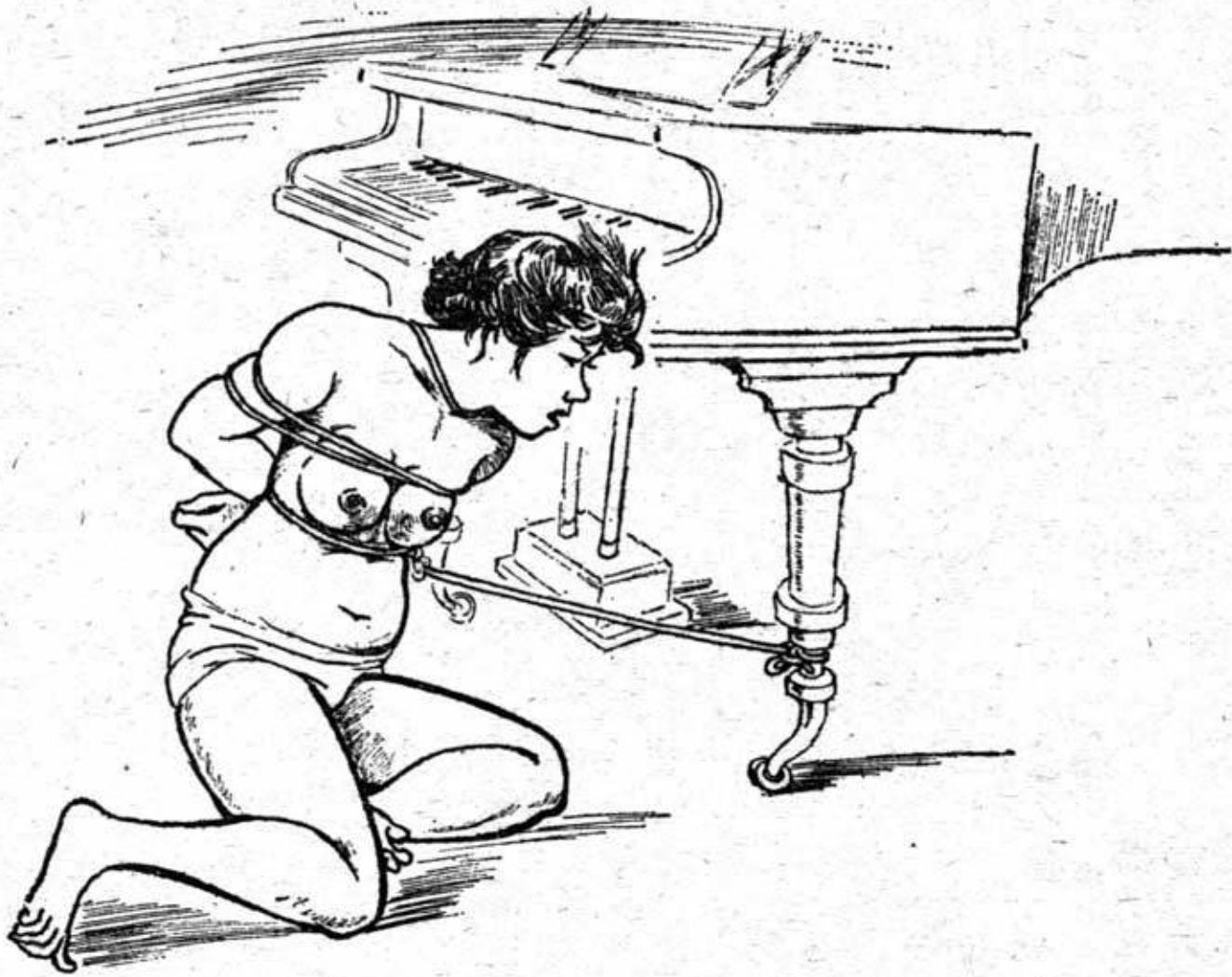
日曜になると健吉は跣になつて庭へ降り、深く土を堀起して新しい草花の苗を植えたりする。雨上りのしつとりと湿つた黒土はいかにも肌に快さそうだった。芳江はふと、初音によつてその土中深く埋められる自分を想像してみた。大きな穴の底に杭を打つて、そこへ自分の身体が縛りつけられるのだ。両手は後手に廻され、荒縄は岩乗に肌に絡んで、勿論彼女は身動き一つ出来はしない。ひんやりと冷たい湿つた土が、爪先から、膝、腿、腰を埋めて行く。彼女は目を挙げ、許しを乞うて哀願するのだが、勿論初音は、自分を捨てて嫁に入つた芳江を許して呉れはしない。尻が埋り、臍が埋り、鳩首まで土は達する。……

その時、健吉が声を挙げて何か言つた。が、被虐の空想に溺れていた彼女はその言葉を聞逃した。健吉は足を洗つて来て、芳江を抱きかかえると家に入つた。

「どうしたんだね、芳江。目が潤んでこんなに顔がほてっている。」健吉から、やさしく言葉をかけられながら芳江は、今の空想の話の余韻を夢中で反芻していた。理由はわからないが、よそよそしい、そんな芳江の態度に健吉は厭な顔をして横を向いた。芳江は酷く後悔した。



二、三日後。芳江は又夢中で初音に責められる自分を想像していた。突然健吉に言葉をかけられて、思わず返事をして、はっとし



た。健吉は妙な顔をしてまじまじと芳江の目の奥を覗いている。

「何？ 健吉さん、どうかしたの？」

「……。」

無言で健吉は芳江の顔を見つめていたが、あとの言葉を続けようとはしなかった。一瞬、無気味な気まずさが、二人の間に漂った。翌日会社へ健吉を送り出してから、芳江は昨日の晩の心のこだわりを思い出して、それをいろいろと弄ってみていた。ふと彼女は何かの小説で読んだエピソードを思出してギョッとなった。女主人公が夫の前で、夢中で昔の愛人の名を口走ったという話だった。何か大きな音を立てて崩れ落ちた様な気がした。芳江は健吉との間にどうしようもない隙間が出来ていることを今になって、はっきりと感じた。

六

玄関のベルがけたたましく鳴った。

「ハアイ。今すぐ行きます。」

返事だけ大声で返しておいて、初音は廊下のピアノにつないだ自縛の縄を殊更にゆっくりと解き始めた。こんな時慌てると縄が締ったり、絡んだりしてかえって手間取ることを彼女は経験で良く知っている。まして今日は、動きもしないピアノを無理に曳いてみようとして、やせた肌になく縄目をきびしく喰込ませてしまっているのだ。

次のお弟子さんの来る時間には、まだ大分間があるのだから誰か臨時の客だろう。そう思いながら玄関をあけた。

「先生。私です。別れて来ましたの。やっぱり私は先生が一番好きです。」



「マアッ。芳江さん。」  
 一瞬初音は目を見張った。  
 「さ、おはいんなさい。淋しかったわ、私。ピアノもあの時のまま廊下に出してあるのよ。」  
 芳江を入れると、初音はガチャガチャと音立てて、再び鍵を掛けた。

「芳江さん。もう私から離れては駄目よ。」  
 「又ピアノを曳かせてやりましょうか。」  
 「ハイ。先生。」  
 「直ぐにお洋服を脱いでここへ来なさい。」  
 「ハイ。先生。」  
 「サ、急いで。急いで。……。」

# 〔新版〕女体悦虐フォト七十選

## Z組七十集

大手札判印画紙(9×13 ㎝) 焼付

### 各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z 1	ゴム猿轡 (梨花悠紀子)
Z 2	囚女六三号 (柳初子)
Z 3	猪手足吊り (梨花悠紀子)
Z 4	逆エビ縛り (大塚啓子)
Z 5	ローソク責 (東浦ひかる)
Z 6	豊臀責め (絹川文代)
Z 7	淫らな縛り (愛川悦子)

Z 8	ザリガニ (梨花悠紀子)
Z 9	引き回し (東浦ひかる)
Z 10	全裸後手縛 (加茂良子)
Z 11	豊満被虐 (大井小夜子)
Z 12	黒髪いじめ (大塚啓子)
Z 13	足吊り嬌態 (絹川文代)
Z 14	黒縄高小手 (四方清美)
Z 15	強烈荒縄責 (梨花悠紀子)
Z 16	喰込む白縄 (東浦ひかる)
Z 17	くの字の足指 (桜井葉子)
Z 18	裸身の受縄 (前本妙子)
Z 19	無茶な猿轡 (竹野ひろ子)
Z 20	ハリッケ (梨花悠紀子)
Z 21	臍なぶり (大塚啓子)
Z 22	逆手足吊り (東浦ひかる)
Z 23	美肌いじめ (絹川文代)
Z 24	鼻ゼメ仰向 (加茂良子)
Z 25	恐怖の瞬間 (若原明子)

Z 26	火箸責め (梨花悠紀子)
Z 27	全裸海老責め (熱海容子)
Z 28	ベッドの痴態 (絹川文代)
Z 29	足の裏擦り (大塚啓子)
Z 30	閨の女体飾 (竹野ひろ子)
Z 31	首絞めゼメ (大塚啓子)
Z 32	鼻孔責め (若原明子)
Z 33	悦虐放心 (梨花悠紀子)
Z 34	手枷足ぐさり (四方清美)
Z 35	寝室のプレイ (花本京子)
Z 36	猿轡の妙味 (梨花悠紀子)
Z 37	首縄柱しばり (絹川文代)
Z 38	巻煙草責め (大塚啓子)
Z 39	尻立てポーズ (桜井葉子)
Z 40	エビ責 (東浦ひかる)
Z 41	彼女の好物 (竹野ひろ子)
Z 42	ワンピース (花本京子)
Z 43	荒縄竹棒責 (梨花悠紀子)
Z 44	浣腸責ポーズ (大塚啓子)
Z 45	鏡に映す裸 (山路ミヨ子)
Z 46	苦悶に喘ぐ (大塚啓子)
Z 47	酔後の緊縛 (絹川文代)
Z 48	逆十字エビ (大塚啓子)

Z 49	全裸猿轡 (東浦ひかる)
Z 50	欄間宙吊り (梨花悠紀子)
Z 51	全裸逆エビ縛 (絹川文代)
Z 52	荒縄仕置室 (梨花悠紀子)
Z 53	庭園の惨虐 (館典子)
Z 54	被虐の果て (大塚啓子)
Z 55	痛めた全裸像 (大塚啓子)
Z 56	鏡の中の全裸 (愛川悦子)
Z 57	セーラー服 (梨花悠紀子)
Z 58	檻の緊縛裸体 (愛川悦子)
Z 59	全裸股間縛り (絹川文代)
Z 60	オムツ逆エビ (田中芳代)
Z 61	胴縄の重量感 (桜井葉子)
Z 62	ゴム人形 (竹野ひろ子)
Z 63	縄トゲ責め (梨花悠紀子)
Z 64	女大生恥態 (田中芳代)
Z 65	白肌全裸縛り (絹川文代)
Z 66	強制的開股縛 (絹川文代)
Z 67	強烈な全裸晒 (愛川悦子)
Z 68	亀甲乳房責 (梨花悠紀子)
Z 69	ベッドの悶え (愛川悦子)
Z 70	恥しさに耐えて (館典子)



## 栗瀬長

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集  
Y組六十集 大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

大刺判(9×6.5) 印画紙焼付

YYYYYYYYYYYYYYY  
22212019181716151413121110987

逆十字後手縛  
裸身の捕われ人  
逆エビ後手足吊り  
全裸ねわの縛り  
なまめかしき緊縛  
全裸フトンむし  
蒲団賣裸またぎ  
初々しき裸全身像  
ヌード股間しほり  
全裸脚拳股間縛  
セーラー後手縛り  
庭園ヌード縛り  
全裸全身軀自慢  
豊満双丘くらべ  
追いつめられた裸女  
逞ましきヒツプ

(愛川悦子)  
(愛川悦子)  
(愛川悦子)  
(愛川悦子)  
(緋川文代)  
(山辺砂登子)  
(絹川文代)  
(岩井知子)  
(大塚啓子)  
(大塚啓子)  
(花坂道子)  
(田中芳代)  
(愛川悦子)  
(愛川悦子)  
(愛川悦子)

YYYYYYYYYYYYYYYYY  
41403938373635343332313029282726252423

ハダカ縛り人形	強烈後手首縄締	椅子またぎ裸後手	妖艶閨のしぼり	全裸椅子またぎ	亀甲股間縛正面	縛り腰巻色模様	開股一番一直線	ベツド縛りのポーズ	全裸強烈股間縛	囚女後手柱縛り	鎮座する縛り女神	全裸縛りの全身	むしられたズロース	もうこれで許して	麗人受難の巻	胸のボリウム自慢	縛り正面正坐	大の字晒し
(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(花坂道子)	(益田房子)	(益田房子)	(愛川悦子)	(絹川文代)	(絹川文代)

YYYYYYYYYYYYYYYYY  
60595857565554535251504948474645444342

エビ賣めの表情	聖壇のさらし者	股間縛開股の絵	前手錠全裸像	膨隆突出した臀部	緊縛女体の開陳	カメラに晒す全裸	不行儀姿態の美	柱縛り観念の図	手吊り裸身の乱舞	ワンピース縛り	長襦袢後手しばり	振袖令嬢後手賣め	全裸寝台羞恥賣め	全裸後手壁ハリツケ	後手立木縛り	全裸変形股間正面	あられもなき開股	濃艶ハダカ縛り
(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)

の薬、サルファ剤、抗生物質、ホルモン剤などの坐剤もあります。これは坐剤を作る時、昔のようにカカオ脂で固めるだけでなく、薬が体によく吸収されるような基剤を使う研究が進んだからです。

しかし肛門坐剤でも、局所作用を目的とするだけではなく、最近では全身作用を目的とする薬も坐剤の形で使われています。たとえば解熱鎮痛剤や催眠剤、ぜんそく

坐剤は薬が胃や小腸などを通らずに、直接直腸に吸収されますから、はき気やむかつきなどの胃腸障害がなく、薬が分解すること

これはサンデー毎日、十二月十六日号の六十八頁にのった「クスリの知識」である。

少なくなります。薬の吸収も注射について良好で、内服よりもよくききます。薬をきろう乳幼児にも、また苦くてのみにくい薬の場合は大人にも便利です。

フランス、スイスなど欧米では、坐剤が広く使われています。全身作用を期待する坐剤は排便後に使うのが普通です。坐剤は冷たい所に保存するようにして下さい。

(東大病院薬剤部長野上寿)



のも恥しいとばかり敬遠されていたのが、時代の進歩とはいえ、こうして堂々と代表的週刊紙のホーム・シリーズの紙面を、しかも東大病院薬剤部長名でにぎわすとは何と楽しいことではなからうか。

たしかに坐薬といえば、色気のない話だが、痔の薬か、浣腸に代る便秘薬位にしか考えられなかったと思う。それが、直腸に直接吸収され易い形で作られるようになった医学の進歩は驚くべきものがある。

もっとも、既に滋養（栄養）浣腸として口から食物を受け付けない重病人に対して、栄養分が肛門から点滴直腸に注入されている事は、如何に直腸の吸収力が旺盛であるかを証明している。

それにしても、局所作用（これは主として便秘薬としての下剤、痔治療のための痔薬をさす）を目的とするだけでなく、直腸の吸収作用を利用しての全身作用を目的とした坐薬が使われるようになったとは喜ばしい。それも、解熱鎮痛剤、催眠剤、ホルモン剤などのように、巷間使用されるポピュラーなものであることに意味がある。

「今夜も眠れないわ、そうだわ、催眠坐剤

入れようかしら。」

妙齡の独り寝のBGが、アパートの一室なるが故の気安さから、誰はばかりすることもなくパンティを下げ、自分で浣腸する時の図よろしく豆粒程の催眠坐剤を肛門に挿入する――

「あなた、背中におできが出来ちゃって、痛くて、しょうがないのよ。」

「そりやいかね。瘍疔でにもなったら大変だよ。そうだ、おできにはサルファ剤がよくきくんだ。いい薬がある。今度発売された坐剤だ。」

「坐剤って？」

「肛門に入れる薬さ」

「え、肛門に。いやだわ痔じゃあるまいし。」

「そうじゃないんだよ、内服よりもよく直腸から吸収して、注射について全身に作用するんだよ。おできには、切開する外は、これに限るっていうわけだ。どれ、ズロースぬいで一寸横になってごらん、肛門の奥深く、挿入するだけだから。」

「いやーん、恥しいわ。」

といった様な会話が、或は独り言が、若い女性の口から洩れるであろうと想像するだけでも楽しいことではなからうか。

フランス、スイスなどでは坐剤が広く使われていると書かれている。ドイツ医学が直輸入された我が国では、例えば検温は腋下がドイツ方式で普通であるがフランス、スイス方面では、舌下か、肛門検温が一般的である。腋下では、すべり落ちたり、汗のために、兎角検温も不正確となり勝ちである。一方肛門内直腸検温は常に正確である。

こうした点からも、合理的な直腸検温が行われると同様、吸収性がよいとなれば、どんな坐剤を使用する欧米を見習う必要があると思う。

使用に際しては、排便後に使うべしとある。坐薬挿入直後、排便してしまつては勿論意味のないことである。従つて、自然排便後というのは勿論であるが、急を要する場合、便秘勝ちの場合は、浣腸が附随することであろう。

「さ、浣腸しましょうね、うんこが出たら坐剤を入れましょう。」

といった風景が、これから所々方々で見られるようになったら……マニアの夢は尽きないのである。



## — 女体切腹秘話 —

## 遙かなる山河

(前篇)

飯

森

潔

## (一) 爆音

「わたし、今夜、切腹しようかしら。」

妻の典子は、一郎に寄りそって歩きながら浴衣の上から、心もちふくらんだ下腹のあたりを、そっと、切るまねをして見せて、笑いを含んだいたずらっぽい眼付になった。一郎は、そんな妻がとても可愛くて、ぐっと、強く手を握りしめてやる。

東京の郊外の畑の中に伸びているこの細い道は、一郎夫婦の散歩道だった。此処に住んで十五年間、一郎と妻は、こうして、この道

を何度歩いた事だろう……。中学二年と、小学六年の二人の娘は、学校が夏休みに入ったので、今日から、埼玉県の田舎にある一郎の生家へ遊びに行った。妻が、久しぶりに「切腹」などと言いつ出したのも、そんな二人だけになったゆとりの故なのかもしれない。

陽は、地平線に落ちかけていて、積乱雲がうららかに輝き、涼しい風が静かに二人の浴衣にからまり、野菜の葉をそよがせていた。あの「雪子」に似て心もち下ぶくれの円やかな顔に、黒目がちのつぶらな眼を輝やかせている典子の唇が初々しく濡れている。一郎は、

抱き寄せて口づけしてやりたい衝動をかりうじて抑えた。

その時、突然、すさまじい爆音が、空気をつんざいて、すべての空間を覆った。二人の頭上を、銀色のデルタ翼が、低く、かすめるように飛び去って行った。と、また一機、形容しにくい異様な爆音をあげながら、翼をもった巨大な魔物のように頭上の空間をつんざいて飛び去った……。横田基地の米軍機だ。この基地の近くに住む二人にとっては、これは毎日の事で、珍らしい事ではなかった。しかし、この軍用機の爆音がひびき、この



グロテスクな機影が頭上を覆って過ぎる度に  
一郎の脳裡には、あの遠い記憶があざやかに  
浮かび上がってくるのだった……。

## (二) 女子飛行兵

昭和二十年。あのいまわしい太平洋戦争が  
日、一日と敗戦の色を濃くしていた頃、一郎  
は、南方のM島海軍航空基地に、戦闘機分隊  
の分隊長として任務に就いていた。四月のあ  
る日、一郎の許に三人の若い女性が配属され  
たのだった。

「海軍一等飛行兵曹、中条雪子！」

「同じく、佐竹八重子！」

「同じく、斎藤武子！」

三人は、パツと挙手の礼をして自分の名を  
申告した。一郎は、どぎまぎして、顔が熱く  
なるのを感じながらも、かろうじて威厳を保  
って答礼した。

「私は、海軍飛行中尉野村一郎。これから諸  
君の分隊長として勤める事になった。諸君  
は、初めての現地勤務だそうで、困る事や、  
不自由な事もあると思うが、困った時には遠  
慮なく言って来てほしい。」

一郎の同僚達は間もなく、この三人を「お  
姫さま」と呼ぶようになった。

「おい野村、貴様、運のいい奴だな、おこれ  
よ。」

「みんな別嬪じゃないか。俺の分隊にも一人  
派遣しろよ。」

一郎は、しばらくの間は、寄るとさわると  
そんな冗談を聞かせられる運命になった。

たしかに三人とも美しい娘だった。雪子だ  
けが二十一才、八重子と武子はどちらも二十  
才であったが、雪子は、顔こそ日焼けしてい  
たが、時に襟元からチラッとぞく肌は、そ  
の名のようにハツとする程白かった。やや円  
みを帯びたおとなしい感じの顔立ちだった  
が、黒目がちの眼が大きくて美しく、形よく  
引きしまった口元には、芯の強さが感じられ  
た。八重子は、どちらかというと現代的な顔  
立ちの娘で、背も三人の中で一番高く、すん  
なりと伸びた体が美しかった。武子は、淡い  
小麦色の肌をもった牝鹿のような感じの娘で  
やや受口の人なつっこい感じの唇が、笑うと  
愛嬌があった。

しかし、どうしてこの三人の若い娘たちが  
看護婦ならいざ知らず、事もあるうに飛行兵  
として第一線に来たのか、分隊長も話してく  
れなかったし、一郎も興味はもっていたが、  
毎日の訓練が忙しい上に、相手が若い女性

たちなものでから、何故か気おくれして尋ね  
ても見なかったもので、その理由を知ることが  
できないでいた。

しかし、一郎は、相手が女性だからといっ  
て、訓練に手心を加えたりはしなかった。来  
る日も来る日も実戦そのままの猛訓練を続け  
た。娘たちは、その訓練によく耐えた。決し  
て弱音をはかないで、男たちと同じように頑  
張った。

「野村、あんまり可哀いそうじゃないか、少  
し加減してやれよ。」

見かねた同僚たちが、そんな事を言う程、  
一郎は容赦はしなかった。その一郎の心の中  
には、甘くしていると見られたくない、とい  
う見栄もあった事は確かであったが、何より  
も、訓練に私心を加えてはならないという鉄  
則が彼をしばっていたからであった。だから  
一郎は、三人の娘たちが、眼に入る汗をぬぐ  
おうともせず、みんなに後れまいとして歯  
をくいしばって訓練に打込む姿を見る度に、  
その娘たちを「いじらしい」と思うようにな  
っていったのだった。

雪子は、三人の中でも一つ年上のせい、操  
縦にかけても一番すぐれていたし、何かに  
つけて三人のリーダー格であった。特に、剣



道師範である父に教えを受けたというその太刀筋はするどかった。雪子のはにかみながら語ったところによると剣道二段ということであつたが、三段の免許をもっている一郎でさえ、三本に一本、時には三本の中二本までもとられる事があつた。そんな時雪子は、いつも乙女らしい恥じらいをみせたが、一郎にはそんな時の雪子がとりわけ美しく見えた。

はげしい訓練の明け暮れの中で、一郎は次第に、三人の中でも特に雪子に強く心を引かれ始めていった。しかし一郎は、それを絶対に表わすまいと努めた。

三人は、誰も、部下としての節度を守りながらも、分隊長、分隊長といつて一郎を頼りにした。家から来た手紙なども見せに来てくれることもあつた。しかし三人とも、ひとりで一郎の部屋に長く話し込むというような事はしなかつた。用件がすむと、すぐに帰ってゆく彼女達ではあつたが、激しい一日の訓練の後での、そのような彼女達がおとずれる事のある一刻を、一郎はいつの間にか心まちにしようになつていた。彼女達が誰もおとずれる事の無かつた夜は、何か物足らなく落着けなかつた。特に雪子に対する愛を意識しはじめてからは、雪子の来ない夜が無精にさび

しく、空虚ないらだたしさをさえ感ずるようになった。

そうしているうちに七月になり、戦局は日ましに悪くなつていった。毎日毎日空襲が続き、その度に幾人かの命が奪い去られていった。その頃から三人は、出撃させてくれとせがむようになつた。しかし一郎はそれを上官に伝えなかつた。この可憐な命をむざむざと散らせてしまいたくはなかつたからだつた。しかし遂に、そうしてはいられない日が来てしまつた。

### (三) 出動志願

八月二日の夜だつた。

三人が連れだつて一郎の部屋に入つて来た。一郎は、その三人の思いつめたような表情を見て、思わずハツとした。そして、今夜は今までのような事ではすまないと思つた。

「分隊長、私たちは、何時になつたら出撃させていただけるのでありますか！」

三人を代表して、訴えるように尋ねる雪子の眼が光つていた。一郎は、その視線を胸の底に痛く感じながらも、今までと同じように強いて笑いながら答えた。

「まあ、そう急ぐこともないだろう。椅子に

でもかけたまえ。」

だが、彼女達は、立つたまま、燃えるような眼で一郎を見つめたままだつた……。

と、急に、雪子の眼がうるんで、涙が落ちた。

「分隊長、分隊長は、今までずうっと、私たちを女だと思つて、かばつていてくださったのです。……でも、私たちだって帝国海軍の軍人です。お国のために死ぬつもりで来んです。……分隊長、本当に、隊長にお願いしてください。お願いします！」

涙に濡れた雪子の眼がキラキラ光つていた。

この娘たちは、自分達の願いがいつも握りつぶされてきた事を知っていたのだ。一郎は何と答えてよいか、とつさに言葉が出なかつた。一郎が黙っていると、雪子は、

「もし、お願いしていただけないのでしたら私たち、お役に立たないのでしょうから、この場で潔く自決させていただきます！」

頬を紅潮させ、一途な願いを込めた眼で一郎を凝視したまま言つた。一郎は、今でも、その時の雪子の顔をあざやかに思い出すことができる。それは、一郎が、今までに見たさまざまな女の顔の中で、最も美しい顔の一つ



であった。その一途な表情は、若し一郎がこれ以上決断をしるるならば、本当に自害もしかねないように見えた。

しばらくして、漸く一郎は言った。

「解った。必ず出撃できるように、隊長にお願いしてみよう。」

彼女達は、安堵したように、急にニコツとして顔を見合わせると、

「分隊士、お願いします！」

と言って部屋を出ていった。

彼女達の足音が遠ざかってゆくと、一郎は崩れるように椅子に身体を落した。言い様のない無力感が彼の心を締めつけていた。

あの可愛い娘たちを、死の運命から救い出すことができない。抗うことのできない巨大な歯車の回転……。その中にずると引きずり込まれ、粉々に砕かれてゆく自分達の姿を、一郎はまざまざと見た。……

「雪子。……雪子！」

一郎は、何度も、薄暗い部屋の虚空に向ってその名を呼んだ。涙が、後から後から流れた。……

## (四) 決意

自分達の部屋に帰った三人は、誰からとも

なく、しっかりと手を握り合った。

「司会が、許してくださいさるかしら……。」

不安そうに武子が言った。

「大丈夫よ。きっと！」

雪子は、みんなの不安を打ち消すように、そう言った。雪子にも、ぜんぜん不安がないわけではなかったが、今度こそ大丈夫だという確信みたいなものがあつた。

「そうよ。きっと大丈夫よ。」

八重子も、自分の不安を打ち消すように言った。今度こそ野村中尉は、隊長に頼んでくれるに違いないことは信ずることができた。問題なのはその後である……。

しかし、まだ不安は残るにしても、今度こそは可能性があるのでということは、誰の胸にも理解されていた。そして、待ちに待っていたその可能性が、真直ぐに「死」へつながっているという事も……。

自ら望んで燃え尽きようとする、自分の若い生命に対する乙女らしい凛々しい感傷が、三人の胸に湧き上っていた。

しばらくして、伏目がちに何か考えているようであった八重子が、顔を上げて、思ひ切ったように言った。

「切腹の仕方、知ってる？」

雪子と武子は、ハツとしたように八重子の顔を見つめた……。

「よく知らないわ。……でも、どうするの？」

そう答えた武子の声は少しかすれていた。

「わたし、若し万一の事があつたら、軍人らしく切腹しようと思うの。……でも、お腹の切り方、よく知らないのよ。」

同じ決意を胸に秘めていた雪子は、高鳴ってくる胸を押えて、恥かしげに頬を染めている八重子の顔を、まじまじと見つめた。自分の他にも、女の身で切腹を希っている人がここに居る……。

「まあ！切腹……勇ましいわ。」

武子は、驚きを込めてそう言うのと、しばらく八重子の顔を見つめていたが、やがて、その愛くるしい顔に決意を浮かべて、きっぱりと言った。

「切るわ！わたしも、切腹するわ。」

雪子は、思わず二人の手をとっていた。

「わたしも、切腹するわ。わたしも、ずっと前からそう決めていたの。」

三人は、上気した顔を見合わせて、しっかりと、手を握り合った。

話はきまったが、誰も腹の切り方をよく知



っている者はなかった。相談の末、武子の提案で、分隊士に聞こうということになった。

女が、切腹の仕方を尋ねるなどという事は、何か、はずかしい気持ではあったが、それより他に方法はないように思われた。雪子は、野村中尉に切腹の仕方を教わるのだ、と思うと、頬がほてってくるのをどうすることもできなかった。

「切腹……今度は本当に切腹するんだわ」

雪子は、自分に、はっきりとそう言って聞かせた。雪子が先程「ずっと前から決めていた」といったのは、女学校一年生の時に遡る思い出があるからであった。

雪子が、女学校一年生の秋、近所から同じ学校に通っている同級生四人で、日曜日に、近くの弁天山にピクニックに出かけた時の事である。

三百米程の小高い山の上に登った彼女達の目の下には黄金色の平野が広がっていた。四人が見晴しのよい松の根方に腰をおろした時、A子が、

「飯盛山みたいじゃない。」

と、言った。

ら、A子が言う前に、雪子も同じ事を考えていたのだった。

「そうね。……白虎隊も、こんな処で、お城が燃えるのを見て、切腹したのね。」

「切腹、痛かったでしょうね。」

「きつと、すごく痛いよ。自分のお腹切るんですもの。」

四人の少女は、それぞれ、腹切る時の痛みを切なく思い浮かべていた。

「えらいわねえ。……自分のお腹を……。」

「きつと、痛くても、思い切って、ひと思いに切ってしまうのね。」

F子が、自分の腹を切る仕草をしながら言

った。

「どんな気持かしら。お腹切るとき。」

「わたしなら、きつと、泣いてしまうわ。悲しくって。……でも、白虎隊は、勇ましくお

腹を切ったのね。」

「わたし、できるかしら。……切腹。お腹を切ったら、血がいつぱい出るんでしょうね。」

T子が、感に絶えたように、そつと、自分の腹を押えながら言った時、

「ね！みんな。白虎隊ごっこしない。」

と、A子が提案した。

潔よく腹切って果てた少年達に、憧れに似

たものを感じていた少女達は、人里から遠く離れた山の上にいる気易さも手伝って、すぐに同意した。

白虎隊ごっこといっても、何も芝居がかった事をしたのではなかった。

四人が向い合って座ってセーラー服のスカートをまくり上げ、ズロースを押し下げて、弁当の角箸を短刀のかわりにして、思い思いに腹を切るまねをしたのだった。

でも、雪子は、その時、三人の友達が、真剣な目差して、自分のまだ小さな下腹に突いた箸先を当て、力を込めてギリギリと引き廻していった姿の切ない美しさを忘れることができなかったのだった。そして、それよりもなお、自分の腹に突いた箸先を当てた時の興奮と、力一杯引き廻した時の痛みが、疼くような快感を伴っていた事を忘れることができなかったのだった。

その時から雪子は、死ぬ時は、女ながらも立派に腹を切りたいと、心ひそかに希うようになったのだった。

その次の出来事は、雪子が女学校三年生の時の事であった。

一年生の時から、バレーボール部に入っていた雪子は、この年、中衛のセンターとして



の好守備に人々の眼を見張らせるまでになつていた。

雪子の通っていたM高女は、バレーボールでは強い伝統をもっており、今年も府下の優勝候補の一つと目されていた。

試合の日が近づくにつれて、バレー部に対

する声援と期待は日ましに強くなって、バレー部も、それに応えるために連日猛練習に明け暮れるようになった。その日々の練習の中で、雪子の技はますます磨かれていった。どんな難球も、雪子の守備範囲で地に落ちる事はないとさえ言われるようになり、全校の雪

子に対する期待は、日に日に大きくなっていた。

いよいよ明日は試合だという日の夜、雪子は、いつもより早く入浴してから、久しぶりに、妹の典子と一時間程話し込んだ。

翌朝まだ暗いうちに眼覚めた雪子は、頭がフラフラし自分の体が熱っぽい事に気づいた。そっと体温を計って見たら、三十八度の熱であった。

でも、雪子は、その事を誰にも話さなかった。熱があることを気づかれまいと、努めて元気にふるまった。

運動着を着ると、身ぶるえるような寒気を感じた。

試合が始まった。相手は、やはり優勝候補の一つに数えられているA高女だった。

雪子は、気力だけで頑張った。第一セットは漸く勝ったが、第二セットは敗れた。その原因は雪子の不調であった。雪子がいつもの雪子でない事が気づかれ始めた。

第三セットに入ると、ボールが、あらゆる方向から自分にだけ向って集中されているように感じられ始めた。しかもその球は、いやに素速く、そして重かった。あせればあせる程、体が自分のものでないよう





に動かなかった。雪子は、何度か失策を重ねた。はげしい目まいが雪子を襲った。

そして遂に、雪子は、コートの上の上に、崩れるように倒れた。

病院に運ばれた雪子は、入れかわり立ちかわり、級友や先生が見舞いに来てくれたのを、おぼろげな意識の中で感じていた。

やがて二日目になり、意識がはっきりしてくるにつれて、第三セットが挽回の余地なく敗れ、優勝候補であった母校が第一戦で消え去った事を知って、激しい責任感にさいなまれた。

優勝を期待されていたバレー部が、相手が強敵とは言え、第一試合で敗れてしまった事は、何といっても自分の責任だと思った。もし、自分が、風邪など引かなかったら……と思うと、大事な試合の前に、不注意から病気になるってしまった自分が、情なく、恥かしく嫌悪すべきものに思われた。殊に、その活躍を期待されていた自分だけに、その期待や希望を裏切ったことは、許せない不注意として、切なく雪子の心をさいなんだ。

先生や級友、あれ程期待し、声援してくれた人々に、どうしてお詫びしたらよいだろうと思ひ続けた。

雪子は、級友が見舞にくる度に、

「申し訳ないわー!」とだけしか言えず、顔をそむけて、むせび泣いた。やさしい慰めの言葉よりも、思い切り悪く言ってもらった方がどんなに楽かしれなかった。どんなにみじめな思いをさせられても、例えば、死ぬ程鞭で打たれたとしてもその方が楽だと思われた。

「どうしたら、お詫びができるかしら……。」

雪子にとって、それは、もはや言葉ではなくて何らかの行為でなくてはならなかった。

悩みに悩んだ果てに、雪子は、遂に、切腹しようと思いつめた。昔の武士は、切腹してお詫びしたと言う。その切ないまでに激しい自虐の形式は自分にとってもふさわしいと思われたのだった。

「そうだわ。切腹するんだわ! このお腹を切り裂いて、わたしの、この切ないお詫びの気持を見てもらうんだわ!」

雪子は、布団の中で自分の腹を切なくさずりながら心に誓った。

はじめは四十度を超えていた熱は三日目には三十七度になり、四日目には、雪子は車で家に移された。

家に帰ってから、雪子は、静かに全快するのを待った。

父も母も、一時興奮していた雪子が、平静に帰ったのを見て安心したのか、家の中にも笑い声が起きるようになった。

退院してから三日目に平熱に戻り、雪子は体力が回復して来たのを感じた。

雪子は、この日を待っていたのだ。

「いよいよ今夜だわ。立派に切腹するのよ。」雪子は、何度も自分にそう言い聞かせながら夜を待った。

夕食を控え目にし、入浴した雪子は、六日間の汚れを洗い落した。体の隅々まで、念入りに洗った。

風邪をひいてからは、一人で別間に寝ているのが幸いだった。早く床に入った雪子は、父母と、妹の典子が寝静まるのを待って、スタンドの灯をつけ、父母、妹、級友、先生宛に遺書を書いた。さすがに心がふるえ、涙があふれた……。

書き終ると、雪子は、布団のシーツを新しいものに換え、昼間のうちにそっと持ち出して置いた母の懐剣を取り出して前に置いた。

雪子は真新しいパンティにはき換えると、真白いシュミーズ一枚になって、布団の上に正座した。

「いよいよお腹を切るのだわ。本当に切腹す



るんだわ。」

雪子は、鼓動の高くなってくる胸を押えて、眼をつむった。

「お父さま、お母さま、許してください。……雪子は、今、お腹を切ります。」

呟くようにそう言うと、眼を開いて、懐剣の鞘を払った。枕元のスタンドの光に、刃が白く光った。

雪子は、刃先を二寸程残して白いハンカチを巻きつけて右手に持つと、そっとシュミーズをまくり上げ、静かにパンティを押し下げた。

雪子は、皓く息づいている自分の腹を、いとしみを込めて静かにさすった……。

今日こそは、真似ごとではなく、本当にこの腹を切るのだ。そして自分は死ぬのだ。死んだら、父や母や妹は、どんなに悲しむだろうという思いが、今更のように雪子の脳裡を占めた。涙が思わずあふれて頬を伝った。

それは、絶ちがたい生への執着であった。父母や、妹、親しい級友の顔々が、消しても消しても次々と浮かび上ってきた。

「未練だわ。今になって！」

雪子は、自分を叱って、涙を拭くと、ぐっと唇をかみしめ、思い切って左下腹に懐剣の

切先を当てた。

チクツという鋭利な刃の感触が、ジーンと体を貫いて走った。

今、この刃を突立てて、思い切って引き廻せば、この腹は一文字に切れて、そこから真赤な血があふれる……。何という美しさ……。

「だが、それで総ては終りになる……。今死ぬのは、本当に正しい事なのかしら……。」再び、消しても消し切れない生への執着が、潮のように雪子の心を襲った。雪子は、

思わず刃を持つ手の力を抜いた。

「卑怯よ。今になって！切腹しなかったら、どうしてお詫びすればいいの！切るのよ、立派に腹を切るのよ！」

雪子は、再び狂おしく自分を叱りつけると、懐剣をギュッと握り直した。

その時である。

「雪子、まだ起きているの？」

廊下で母の声がした。

切るなら今！切腹を止められるなんて恥かしい！止められないうちに切らねば……！

追いつめられた思いで、雪子は、懐剣を腹に突立てた！

ザクリッという感じがした。どの位切込んだのか確める心の余裕もなく、雪子は腹をせ

り出すようにして、上向きに空を見つめたま

ま、ギリギリと、一思いに刃を引き廻した……。ゾリゾリッと、身のすくむような感触。

「切れている！確かに、お腹が切れている！」雪子は、夢中で、つかれたように腹を割いていった。

だが、刃が臍下を漸く過ぎて、まだ右わき迄切り終えないうちに、雪子の手は、しっかりと握まれていた。

母であった。

「お、お母さま。切らして！立派に切らして！」

雪子は、身もだえして、母の手を払おうとした。

だが母は、きびしい燃えるような眼で、じっと雪子を見つめたまま、手の力をゆるめなかった。

雪子は、初めて自分の腹を見た。切口は二分程口を開き、血が押し出されるようにあふれて腹を染めていたが、懐剣の刃先は五分程しか入っていなかった。

「死ねなかった」

そう思った時、雪子は、思わず母の膝に体を投げ出し、母の体にしがみついて激しく嗚咽した……。ただ切なく、そして何故か無



精に母が懐しかった……。

雪子の腹の創は、一週間程で治り、一年程過ぎたら、具合よく創あとも殆どわからなくなつた。

この年の四月、雪子が、願ひかなつて戦地に行くことになつた日、休暇を終えて家を出ようとする雪子を、母は自分の居間に呼び寄せて、あの懐剣を手渡した。

「辱しめを受けてはなりませんよ。その時こそは立派にお腹を切りなさい。」

雪子は母の顔を見た。母は、優しくいつくしみを込めた眼で雪子を見ていた。

「お母さま。お腹の切り方を教えて。」

母は笑みを含んで言った。

「いいのよ。あの時のように切ればいいのよ。ただ今度は、もっと深く切るのよ。深く切ればもっと痛むでしょうけど、思い切って引き廻せばいいのよ。」

雪子は、あの時のいつくしみを込めた母の顔を思い浮かべた。

「お母さま。今度こそ立派にお腹を切りますわ。みんなに負けないように、きつと立派に切腹して見せますわ。」

雪子は、心の中で、そう母に語りかけた。

雪子の脳裡には、あの腹を切った時の刃の感触と、痛みと、一文字に切れて血を吹き出した自分の皓い下腹の妖しい美しさがまざまざと思い出されていた。

今度こそは、ためらいなく切腹できそうであつた。今、自分は軍人で、お国の為腹を切るのだから、日本の軍人の名誉にかけても、立派に切らねばならないと思つた。

そして、あの時より深く、長く切り割いたら、もっと傷口は大きく開いて、血ももっと多く出るに違ひないと思われた。そうしたらうんと痛いに違ひないけれど、それは又、どんなにか美しいだろうと思うと、雪子は、一文字にではなくて、いっそ十文字に、軍人らしく、雄々しく、腹を切ろうと心に決めたのであつた。

## (五) 切腹のねがい

それから一時間程過ぎて、一郎は、重い足を隊長の部屋に運んだ。

隊長は、黙然として話を聞いていたが、しばらくして、「解つた。」とだけ言つた。沈んだ重い口調であつた。

翌日、遂に命令が出た。任務は、偵察であつた。

この基地には、もう偵察機が一機も残つていなかったから、戦闘機で偵察することになつたのは当然として、偵察に、四機も一時に出動させるということは、司令の特別な配慮である事は、一郎にも解つた。

一郎は、三人を呼んで、それを伝えた。

「特攻」でなく、「偵察」だと解つた時、彼女達は、明らかに不服そうな顔を見せたが、それでも出動できるのを喜んだ。

「出発は、明朝四時、今日はゆっくり休め。偵察だからといって、甘く考えてはいけない。偵察の目標は、敵機動部隊だ。いつもグラマンが待っている。だが、よく知っているように、戦闘するのが目的ではないから、見つかつたら、どんどん逃げるんだ。どんなに攻撃されても、全機無事帰るのだ。いいな、わかつたな。」

と、一郎は念を押して言つた。それがせめてもの心遣いだった。

「ハイ！解りました。」

三人は一緒に答えた。

一郎は、彼女達に何か言つてやりたかつた。上官としてはなしに、ひとりの人間として、やさしい言葉をかけてやりたかつた。彼女達が、この部屋を出ていってしまわない



うちにそれを言わねば、永久にその機会はなくなってしまうように思われた。

だが、すぐに帰るとばかり思っていた彼女達は、なぜかお互に顔を見合わせて、もじもじしているのだった。

「何か、用事があるのか？」

あれ程、何か言ってやりたいと思っていた自分なのに、口を開くと、自分の心とは何の関わりもない言葉しか言えない自分に、一郎は、やり切れないいらだたしさを感じた。

「はい。」

思い決めたように、八重子が、漸く口を開いた。

「分隊士。切腹のお作法を教えてください。」

一郎は、思わず耳を疑った。

「切腹！……この娘たちが切腹！」

あまりにも思いがけない事だったので、一郎は、何と答えてよいか迷っていると、雪子が、恥かしそうに頬を紅らめながらも、思いつめた様子で後を継いだ。

「私たち、相談したんです。若し、万一の事があったら、軍人らしく、潔く切腹しよう……でも、私たち、切腹のお作法をよく知らないんです。」

女だてらに……。と、思われるのを恥じ

てか、三人は、頬を染めて、恥かしそうにうつむいてしまった。

切腹！この初々しい娘たちが、その清らかな腹を、自らの手で切り裂こうというのか！本当なのだろうか？

一郎は、頬を染めてうつ向いている彼女達をまじまじと見つめた。

一郎にしても、女の身で、吾れとわが腹を切り割いて果てた人々がいた事は知っては居た。しかし、今眼の前に居るこの可憐な乙女達が、*「腹を切りたい」*と言ひ出そうとは……。

確かにこの乙女達は、今、*「軍人らしく腹を切りたい」*と言った。乙女の身でありながら、男にも難かしいと言われている切腹を望んでいるのだ。

一郎は、この乙女達が、真実腹を切り割いて果てる事を望まなかった。しかし、そのいじらしいまでに健気な心根に、抱きしめてやりたい程のいとしさを覚えていた。

そして又、この乙女達が切腹するさまは、どんなにか哀しく、どんなにか美しいだろうと思った。

そう思うと、一郎は、何故か頬がほてり、咽喉がからからに渴いてくるのを覚えた。

「解った。消灯後に来なさい。」  
一郎は、漸く、それだけを言った。

## (六) 雪子の日記

(この日記は、雪子が、一郎の隊に配属されてから、書き始められたもので、たん念に、妹に宛てたものとして書かれている。)

八月七日

典子、今日は久しぶりで空襲のない静かな日でした。でも、わたしにとっては、とても大切な事のあった日でした。

今日、出動の許可が出たのです。

お兄さまったら、必要な事以外は何も言うてくだらないの。(でも、これは、いつもの事ですものね。)

昨日の日記に書いたように、わたし達「切腹」のお約束したでしょ。それでね、思い切ってお願ひしたの。

お兄さまは、ハッとした様子で、しばらく何もおっしゃらなかったの。

「女のくせに、切腹なんて。」って言われなかつたと思うと、顔がほてったわ。

でもね、お兄さまは、最後に、「解った。消灯後に来なさい。」っておっしゃってくださいました。うれしかったわ。



「女のくせに」なんて言われなくて。

消灯になるのが、こわいような、待遠しいような気持だって、切腹って、お腹を寛げてるんでしょ。お兄さまの前で、お腹を見せるなんて、思っただけでも恥かしい事ですもの。

消灯まで、わたし達は、とても落着かなくて、ほんとに困ったわ。

消灯になってから、三人して、お兄さまのお部屋へ行ったの。

驚いたわ。お兄さまは、ちゃんと、わたしたちの腹切りの座をつくっておいてくださったのよ。

お部屋をきれいに掃除して、ござを敷いた上に、真白なシーツを巻いた毛布が三枚、きちんと並べてあったの。



お兄さまって、いつもは厳しくて、むっつりだけど、本当は、こんなに私たちの事を思っていてくださったのね。

とても嬉しかったわ。感激って言った方がいいかしら。

雪子、もし本当に切腹するのなら、こんな所で、そしてお兄さまの前で（少し恥かしいけど）立派にお腹を切って、見ていただきたいと思ったわ。

ここで切腹のお作法を教わるのかと思うと胸がどきどきして、顔がほてって困ったわ。

お兄さまは、切腹のお作法の前に、お腹を切る事の意味や、女の人の腹切りの歴史など詳しく話してくださったの。

女の人の腹切りの話は、雪子も少し知っていたけど、お兄さまは、とてもよく知っていたらっしゃるの。女の

身で、腹十文字に切った人もあるのよ。

雪子も、切腹する時は、立派に十文字に切ろうって決心したわ。だって、雪子は帝国海軍の軍人ですもの。

いよいよ切腹のお勉強がはじまるという時お兄さまは、わたし達に、一ふりずつ、ペーパーナイフをお渡しになったの。それを頂く時、本当に切腹するみたいな気持になって、手がふるえたわ。

三人が並んで座ると、お兄さまは、私たちの前にお座りになって、上着とシャツのボタンを外し、バンドをゆるめて、下腹までゆったりと前をお寛げになったの。雪子、とってもまぶしかった。

お兄さまは、右手にナイフを取り、「先ず、一文字に。」

とおっしゃって、お腹を静かにおなでになると、グッとわき腹にナイフを突立てなさったの。雪子思わず声を出したところだったわ。でも、お腹はグッとくぼんだけど、あまり刺ってはいなかったの。

「このままでは、深く入らないから、ここでこのままぐっと引く。」

とおっしゃると、お兄さまは、そのまま、ナイフをぐっとお引きになったの。切れないナイフだから浅いけれど、それでも刃先が少しお腹の中に入ってしまったの。

驚いて、「あっ」と声を出したら、お兄さまは、「大丈夫。」とおっしゃって、そのまま





雪子、とっても切なかったわ。自分のお腹が裂けるようで、切なかったの。

わたし達も、お腹を寛げて、一人ずつ、お兄さまの前で腹切りをしたの。

八重子さんも、武子さんも、カ一杯引いたので、二人ともお腹に血がにじんだわ。

いよいよ、雪子の番。心を静めようと思って、お腹をさすったけど、お兄さまが見ていらっしやると思うと、どうしても興奮が静まらないの。

思い切って、下腹にナイフを当てて、両手でグッと押したら、チクチクと痛んだわ。でも、少しもこわくないの。息をつめて、その

ままグーッと引いたわ。ゾリゾリッという感じがしたの。前にお腹を切った時と同じ感じだったわ。わたしは、夢中で、お臍の下を大きく一文字に引き回したの。そしたら、その後から、血がスーッと浮かんで、たらたらとお腹を流れたの。

「中条、大丈夫か？」って、お兄さまが心配なさったけど、その時お兄さまは、一文字に割けて血に濡れた雪子のお腹を、燃えるような眼で、じっと見つめておいでになったの。みんなのお腹に、血がにじんでしまったせいかしら、お兄さまは、十文字に切るところは説明だけになさって、ほう帯と創薬を出してくださったの。

お腹の血を拭いて見たら、わたしのお腹は、五耗程の深さに、二十糎程切れていて、武子さんも八重子さんも、「見事だわ。」って、うらやましそうにほめてくれたわ。

その時、お兄さまは、つと寄って、わたしの手を払いのけるようになさって、雪子のお腹をおさえ、創をごらんになって、「よく切ったね。こんなに……痛まないか。」っておっしゃったの。

あっと思う間もない出来事だったので、お兄さまの手を払うことも出来なかったのだけ

一気に、右わき迄、お臍の下を引き廻してしまわれたの。ブリブリって、お腹の皮膚の裂ける音がしたわ。創口に見る見る血がにじんで、二筋程お腹を伝って血が流れたの。

お兄さまの切腹！



ど、お兄さまの手が、お腹に触れた時、電気にふれたように感じて、急に体中が熱くなつたわ。

「痛まないんです。思ったほど。」って、漸くそれだけ言ったの。

わたしが、お兄さまをお慕いしているように、お兄さまも、雪子を愛してくださっているのかしら。……もしそうだったら………：雪子は、いつでも心残りなく死ねると思うの。

その後で、三人して飛行場に出てみたの。半月が、まだ西の椰子林の上に残っていて、気持のよい風が吹いていたわ。

わたし達は、転がっている空ドラム罐の上に腰をおろしたの。

興奮にほてった頬に、風が快よくて、みんなしばらく黙っていたの。

すると、武子さんが、あの「ふるさと」の歌を唱いだしたの。

うさぎ追いしかの山

小ぶな釣りしかの川

夢は今もめぐりて

忘れがたきふるさと。

八重子さんも、わたしも、合わせて唱った

わ。

なつかしい歌。………唱いながら、涙がこぼれそうになりました。

「お父さま！ お母さま！ 典子！」って、心の中で何度も呼びました。

典子、あしたは出勤です。偵察ですから、決して自決はしません。必ず帰ってきて、報告するのがつとめなのです。

でも、若し敵地に不時着でもして、最後の時が来たら、雪子は、愛機に火を放って、潔く自決します。日本の軍人らしく、女ながらも、きつと、立派にお腹を十文字に切って見せます。

いとしい典子。お父さま、お母さまを頼みます。そして、いつまでも幸せに生きてください。雪子の分までも………。

雪子が、管制下の暗い電灯の下で、この日記を書き終えた時には、八重子と武子は、狭い吊床の中で、もう微かな寝息を立てていた。

雪子は、ペンを置いて、そっと自分の下腹部に手を当ててみた。少し強くおさえてみると傷口が微かに痛んだ。

「切ったのだわ。此处を、お兄さまの前で……。」

あの、中尉に腹をおさえされた時の、衝激に似た思いが、あざやかに思い出された。

あの時、わたしは、切ったお腹を、お兄さまの前にさらけ出したまま、眼をつむって立っていた。………

それを思うと、雪子は、切ないまでの恥かしさと、慕わしさに、思わず熱い息を吐いた。

## (七) 愛

誰も聞いている筈のなかった娘達の歌を、一郎は、飛行場の片隅で聞いていた。

やわらかな、澄んだ歌声だけが、空間の総てを支配しているように思われた。

歌は、美しいコーラスになっていた。

三人は、腰を下したまま、身じろぎもしないで歌っている。

月を背にした、その三つの黒い影を、一郎は、凝然として見つめていた。

このような彼女達を、一郎は、初めて見た。今まで四ヶ月の間、男のように振舞い、そしてつい先程は、男まさりに切腹を希い、自らの腹に刃を当てて見せた彼女達。しかし



今こうして唱い続ける彼女達は、まるで別な人々に見えた。身動きもしないで唱い続ける三人の黒い影は、永遠に座し続ける塑像のように見えた。……………

突然、平和への狂おしい程の憧憬が、一郎の心をゆさぶった。

平和！ 一郎は、彼女達と暮らすようになってから、時々、ふっと、深い憧憬を込めて、それを思うようになっていた。

それは、遠い故郷の青く澄んだ空や、まぶしい様な金色の日の光を映してサラサラと流れる清冽な小川の水、そして青白い月の光の下に静かにひろがっている深い夜のしじまを思い出させた。

その思いの中で、一郎はいつも雪子と共に居た。

一郎は、満ち足りた平和をいとしみながら畑を耕す。一郎の足の下には、黒々とした大地が生命を秘めて拡がっている。一畝毎に、夏の陽をはねかえして鍬が光る。

さわやかな五月の若葉が、風にそよいでいる。汗がしたたる。……………

一郎は、腰を伸ばして、雪子を振返える。

雪子も、腰を伸ばす。

二人の眼が合って、二人はニコッと笑う。

雪子の額にも汗が光っている。……………

一郎も、雪子も、そこでは軍人ではなく、平和な農夫であった。

一郎は、今もまたその幻影を追う。渴く者が水を求めるように、平和への灼けるような願いが、一郎の心を満たしていた。

歌は、「ふるさと」から「故郷の廃家」に変わった。一郎は、彼女達が立ち去るまで、そこを動くことができなかった。

一郎は、ベッドに入っても、なかなか寝つかれなかった。

青白い月の光の下に、塑像のように座っていた彼女達の黒い影の上に、腹切った雪子の、その訴えるような眼差しとが、重なって脳裡に焼き付いていた。

俺は雪子を愛している。いや、もっと烈しく求めている。だが、雪子は……………

あの時の雪子の眼は、何を言おうとしていたのだろうか？ 雪子も俺を愛してくれているのだろうか？ もしそうだったら……………

一郎は、渴くように雪子を求めている。

だが明日は、雪子たちを連れて死地に飛び立つのだ。……………そして、自分が死ぬか、雪

子が死ぬか、二人共死んでしまうか……………

そうなれば、もう永久に総てはこのままに消え去る！

その前に、一言、一言でいいから、「愛している！」「愛しています！」「愛して言われたい。自分の愛が空しくない証しがほしい。

「雪子！」「雪子！」

一郎は、浮言のように、何度も、何度も、名を呼んでもだえた。

しかし、一郎は、どうしてもあきらめ切ることができなかった。

彼は、夢遊病者のように、軍服を着けると、部屋を出た。

会いなくともいい。せめて、少しでも雪子のそばに行きたかった。彼は、何か悪い事でもするかのように、足音をしのばせて、雪子達の部屋に近づいた。……………

彼は、思わずハッとした。もう寝てしまっているものとはかり思っていた部屋から、明りがもれている。

その部屋の前に立って、彼の胸は、早鐘のように鳴った。部屋の中は、しんと静まり返っている。

「どうしよう。……………入ろうか、……………入



るまいか。……”  
 “こんな夜更けに、部下とは言え、女の部屋に……”

一郎は、ためらった。

しかし、入らなかつたら、永久にその機会は無くなる。……たとえ、雪子が起きていなくとも、その寝顔を見るだけでもいい……

彼は、からからに渴いた咽喉に、ぐっと唾を飲み込んで、低く、ドアをたたいた。

人の起つ気配がした。……足音が近づいた。

ガチャッと、ドアが開いた。

そこに立っていたのは、雪子であった！

「アッ」

低い驚きの声が、雪子の口から出た。

「雪子！」

呼ぼうとしたが、声が出なかった。

何も言えないで、一郎は、ただじっと雪子の顔を見つめていた。……

雪子顔のが、さっと紅くなって、見る見る眼がうるんだ。

一郎は、引きずられるように、部屋の中に入った。

雪子の紅い唇が、わなわなとふるえた。……

……そして、その両の眼から涙があふれた。もう、一郎の行為を止める力は、何も無かった。

彼は、手を出した。雪子の手がその上に重なった。……やわらかい、あたたかい手だった。

彼は、力を入れて、その手を握った。四本の手が、一つになった。

雪子の頬に、涙が光って流れ落ち、何か言いたげに、乾いた唇があえいでいた。……

「愛している」という一言を、彼はついに言えないでしまった。しかし、それは、言わなくとも、もうよかったのだ。

彼は、もう一度強く、雪子の手を握りしめると、

「早く寝なさい。」

と、言った。そして、彼は自分の言葉に驚いた。雪子の顔にも、一瞬、とまどいが浮かんだが、すぐに、

「はい。」というて、ニコッと笑った。

彼も、笑って見せ、開け放しになっていた入口から外に出た。

雪子が、入口まで従って来た。

彼は、外に出ると、急に涙があふれた。彼は涙を見られまいとして、ドアの外に立って

見送っている雪子の視線を背に感じながら、足早やに自分の部屋に戻った。涙が、後から、後からあふれて止まらなかった。

彼も、雪子も、お互いに愛の告白こそしなかったが、彼が雪子を愛していると同じように、雪子も彼を愛してくれている事は疑いなかった。どの程度に愛してくれているのかは、はっきりしなかったが、今は、もうそれでいいと思った。

涙がかけると、安らぎと、あきらめの感情が彼を支配した。……彼は眠った。

# △代理部だより▽

○マゾ資料Mフォト三十態、略号(ま30)の分譲を一応打ち切ります。御希望の方には三十枚一組大手札型印画紙に焼増二五〇〇円にて致します。○一月号、二月号の代理部だよりで記しました通り、「悦唐写真集決定版」百枚一組、略号「プロ」の分譲は中止いたしておりますので御諒承願います。○尚、モデル着用の下着についての御照会がよくあります。○代理部分譲品は毎月新しいものを追加してゆきますから誌上の広告に御留意願います。





## 〔奴隷国探検〕

(第六回)

翌朝、僕は曳きだされた軽い罪の女奴隷たちの姿を見て思わずふきだしそうになった。かの女たちはその手枷と足枷とをシリンド―錠一つで連結され、その上首枷を長い太い鎖で数珠つなぎにされ歩かせられているもの

だから、丁度あひるが首を連結されて歩かせられているように、尻を振り、首を伸ばし、よちよちと歩を運ばねばならなかったのだ。その恰好は拘置所で見ていて知っていたはずなのだが、僕の心に笑いが浮かんだのは、

ここでの日常生活に慣れてきたことと、僕の心にある余裕が生れてきたためでもあるだろうか。

かの女たちは、ナハール君の前に膝まづくことで、やっとその困難な歩行を止めることができた。

その云うところを聞くと、軽い罪というのはナハール君をまともに見つめたことか、手で食事をしようとしたとか、ビニールの水着に顔をしかめたとか、全くとるにも足らぬ罪を犯した女奴隷たちばかりだった。

しかし僕の顔に浮かんだ笑いを認めたナハール君は愉快そうに冷酷な命令を下した。

「その儘の恰好で、広間の隅から隅まで、しばらく歩いておれい」

女奴隷たちの苦難の歩行が、そうしてはじまった。

かの女たちは懲罰を恐れてか、不満や不平がましい様子などいささかも見せず、わずかに悲しげな諦め切った様子を示して歩きはじめた。実際、とるにも足らぬ罪のために、これほどまでにいじめられねばならぬとは、全くやりきれない思いだろう。

「あいつらを熱板の上で踊らせてやろうと思ったが、ああして歩かしておく方が手間が省



けて良いよ。あの姿勢はなかなか大変な苦しみを伴うものなんだよ。三時間も放置すればぶっ倒れる者もあるからね」

女奴隷たちは、苦しさに腰を落としたり、背筋を曲げたり、首を俯向けたりしたら、女監督に鞭で打たれたり、小突かれたりして姿勢を矯正された。そしてそのたびに、かの女たちはぴくりと身体をけいれんさせ、あわてて曲がってしまった背を伸ばし、首を真っ直ぐに立て、不自由な恰好で歩きつづけた。

女人夫や料理を運ぶ女奴隷たちは、おそろしげな表情でいながら、見て見ぬふりをしていた。且ての自分の同僚であり、同じように金の鎖や枷をちゃらつかせ、口で餌を食べていたのが、今では奴隷囚として懲戒を受けているのである。それは何時、かの女たちにふりかかってくる運命が分らなかった。

本人ではそれと意識せず、またそんな不遜な気持がなかったとしても、ナハール君の僅かな不興が、どんな苦痛を招かぬとも限らぬのだ。

「さあ、グレタ医師の実験室へ案内してあげようか。何時までもあいつらの行進を見ていても仕様がなからね。帰ってくるまで歩かせておいてやろう。」

僕たちは女人馬に乗った。

実験室は館の地下にあった。

女人馬は僕とナハール君を乗せて、ゆっくりゆっくり石の階段を降りていった。

しかし地下にあるのは、実験室ばかりではなかった。

ナハール君がしばしば口にした発電所や水汲み場が実験室とはさほど遠くないところにつくられていた。

ナハール君は実験室へ這入る前に、それらを見物するよう僕にすすめた。

重々しい鉄の扉の覗き窓から僕は先ず発電所を見た。

そこには一本の巨大な軸棒があり、それにたくさんの水車のような車がとりつけられてあった。

女奴隷たちはおしめカバーを穿かされ、水車の上に、軸棒と平行してわたしてある鉄棒を握み、水車を足で回転させていた。

かの女たちの両手は枷と鎖で鉄棒に固定されているので、水車を踏まねば、その回転と共に足を踏みはずし、宙ぶらりんにならねばならない。

もちろんそうなれば、たえず鋭い監視の眼を光らせている女監督たちのきびしい鞭の雨

を浴びなければならぬが、足が遅れ、曲げ加減に鉄棒をつかんでいる両手がすこしでも伸びたりしただけでも、鞭は容赦なく女奴隷の背や太股に当てられていた。

「この仕事は極めて重要なんだよ」

ナハール君は後ろから僕に云った。

「この館で使っている電気はすべてこうしておこされているんだ。あの軸棒の両端に発電機がついており、歯車によって凄く速さで回転するようになってるんだ。あいつらには一日の中休みは食事その他を含めて六時間しか与えていないのだ。休息を長びかせてやると電気の使用量に発電量が追いつかないからね。もちろん両手の枷は食事中といえども解かれないんだよ。監督が棒の先に餌をくっつけ、それぞれの奴隷の口先に持っていくってやるという寸法だ。すれば奴隷は、足踏みをとめることなく、丁度パン食い競争のように口でその餌にむしゃぶりつくという訳だ。そのため身体を毀したりする奴隷もいることはいふんだが、罪を犯す奴隷が多いので補充はすぐつくという訳だ。おむつカバーも排泄のための時間を奴隷に与えないための工夫から穿かせてあるんだよ」

その部室の反対側は水汲み場だった。



そこでは軸棒を中心にして回転する横棒にそれぞれ女奴隷が三人ずつつながら、懸命な表情で横棒を押していた。

かの女たちの恰好は、手枷と鎖とおむつカバーという発電所での奴隷たちと同じものだった。

軸棒は数十本あり、それぞれに女監督が鞭を構えて監視していた。

すこしでも歩みののろい者、押し方のまだるっこい者には、鞭が容赦なく当てられていた。その顔に笑いはなく、悲しみと諦観のみが見られた。

「可哀いそうに、自由にいられたら恋愛でもして存分に楽しめたらうに」

僕はその中に極く苦い、そして割と美しい混血の女奴隷を認めて心の中で考えた。しかしナハール君の手前、それを口にすることはばかられた。かの女たちはナハール君のためにもみ奉仕を強要され、それ以外になんらの欲求も認められていないのだ。生かそうと殺そうとナハール君の意思次第である。それにかの女たちは、理不尽なものとはいえ、禁じられたことを犯して罰せられているのである。

「あの軸棒は下の部室でポンプに連結され、

地下水を汲み上げているんだよ。しかしわが国では水が極度に不足しており、地下数百メートルも掘らねばならないのだ。あいつらの仕事が多量過重になるのもやむをえないことなんだ。ここでも休息は一日六時間と定められているんだよ。食事や排泄はもちろん押しながらだよ。二日に一度おむつカバーを脱がせてもらうんだが、たいへんなよろこびようだね」

グレッタ医師の実験室には最初から度胆をぬかれしまった。

鉄と格子の二重扉を押し開いたところにある廊下のように細長い部屋の両側に、まるで猛獣をでも入れるような頑丈な、そのくせ腰を折らねばどうしても入れぬほど小さい鉄の檻が三十ばかりもずらりと並んでおり、二、三の檻を除いて、中には枷と鎖をまとわせられた女奴隷がうずくまっていたからである。そしてその中には、昨日矯正所から曳き出されてきた女奴隷も混じっており、転倒した二人はすりむけた皮膚に赤チンを塗られて痛そうにうずくまっていた。

檻は頑丈であるばかりでなく、ずいぶん残酷に出来ていた。

床は三角形の鉄材が一面に並べられ、奴隷

たちが決して楽々とは寝られぬ仕掛けになっていた。その上天井や両側に当る鉄の格子には、鈍角の刺が無数に突き出ており、奴隷たちが立ち上ったり、身を凭せたりできぬようになっていた。

そして女奴隷の腰には、それぞれゴムのズボンが穿かされていた。

まとわされている枷や鎖は、僕が今迄見てきた奴隷囚のものと同様で、その首や手首や足首で鈍く光っていた。

女奴隷たちは、女人馬に乗って入ってきたナハール君と僕たちを、一斉に恐怖の表情で眺めた。

「実験室に入れられる奴隷どもは、どのみち片輪にされる刑を受けなければならないものたちばかりなんだよ。矯正所でそれをやろうと、実験室でグレッタ医師がそれをやろうと、刑の執行という点では、それ程変りはないからね。この奴隷囚は殆ど矯正所から連れてきたものばかりなのだ。矯正所でいろんな目にあわされるより、同じ片輪になるにしても、グレッタ医師の素晴らしい頭脳に役立つことが出来れば、こいつらにとっては光栄なことだろうじゃないか」

次の部屋は、檻の中の女奴隷たちに見えな



いようちよつと曲った廊下によって連つていたが、それがグレッタ医師の実験室だった。

部屋の中央部に手術台があり、今しも実験中と見えて、一人の女奴隷がステンレスのパイプで太股、腕のつけ根、臀部を固定され横たわっていた。実際にはそれで女奴隷は身動きも出来ぬはずだが、更に革バンドが手首と足首を手術台にしっかりと固定していた。

グレッタ医師は白衣の上にゴム引きの前掛けをつけ、ゴム手袋の手にメスを握っていた。かの女はぼくたちの方をちらっと眺め、目礼を送っただけで手術を続行した。

よく見ると、それは麻酔のない手術らしく固定され横たわる女奴隷の眼は、恐怖と苦痛に大きく見開られ、その表情は歪んでいた。悲鳴がないのは、嵌口具が全く完全なものであるせいと分った。

メスは滑り、みる間に女奴隷の乳房の片方をえぐりとってしまった。そして止血。

グレッタ医師の手は、まるで死体を解剖するように冷静で事務的だった。

手術台の傍らには、金の枷だけで鎖をつけられていない女奴隷が二人、助手として控えており、これも不思議に無表情にグレッタ医師の手術を手伝っていた。

切りとられた乳房の跡には、プラスチックのお碗のようなものがとりつけられ、針と糸で縫合された。

それではじめて僕は知ったのだが、既に反対側の乳房は切りとられた後らしく、プラスチックのお碗が縫いつけられていた。

手術が終ると、グレッタ医師はゴム前掛けと手袋を助手の女奴隷に渡し、僕たちの方へ白衣のまま歩いてきた。

彼女はナハール君と二、三言葉を交わした。そしてナハール君は、しばらくして僕に云った。

「グレッタ君は全く素晴らしい医者だよ。僕とその趣味性において完全な一致があるので、あらゆる意味で僕たちは話があつてしまふんだ。今、あの奴隷にとりつけられたプラスチックの容器は、癒着してしまふと、完全に奴隷の肉体の一部として作用するようになるんだ。あれをとりつけられた奴隷は、身心共に奴隷としての身分を甘受するようになるんだよ。あのプラスチックの容器に、すこしでもなにかが触れれば、奴隷は大声で喚きたくなるほどの苦痛を味あわねばならないのだ。嵌口具がなければ、恐らくこの部屋は苦痛のうめきでいたたまれないほど騒々しいことだらう。

麻酔をしないのは、疼痛を増してやるためもあるんだが、癒着を早くするためなんだよ。」

グレッタ医師が何か云い、それをナハール君は説明した。

「癒着は、ほぼ三日くらいすれば完全らしいね。それまで奴隷は固定して放置しておくのだが、どんなものになるか観物だね。」

グレッタ医師はそれから、彼女が実験的に手術したかすかすの奴隷を見せてくれた。

それらの奴隷は手術室の隣りにある部屋、つまり僕たちが這入ってきたところとは反対側にある鉄の扉のついた部屋に入れられていた。

最初の奴隷は、両手を枷と鎖で壁に吊られて立っていたが、おどろいたことに唇が縫合されていた。これでは一体食物はどこから摂るのだらうと考えていると、グレッタ医師は奴隷の咽喉を指さした。

なるほどそこには、丁度水道の蛇口のような金具が埋め込まれ、物欲しげに黒く小さい口をこちらに見せていた。

「咀嚼のよろこびを、この奴隷はとりあげられた訳だね」

ナハール君は興味深かそうに、その金具を



指でいじっていた。

その次の奴隷は机のような木の台に、上半身だけ俯向けに固定され、下半身は腰を曲げて立った姿勢で足首を革バンドで固定されていた。

よく見ると、かの女の背中は一大部分だけずるむけになっていて皮膚がなかった。

グレッタ医師の説明を聞いたナハール君の話では、そこへ猿の皮膚を移植するというのである。しかしこの実験は今迄にも幾度か試みられているのだが、一度として成功したためしかないそうである。

消毒が完全でなかったため細菌が侵入して縫合した部分が腐敗したり、癒着したかと思っている、細胞組織の相違から何時の間にか離脱してしまうということであった。しかしそれが成功すれば、猿の皮膚は次第に拡大してゆき、やがては奴隷の全身をおおうにいたり、猿の毛をはやした女奴隷ができ上るということだった。

次の奴隷は、首枷だけで壁に固定されていた。かの女はちょっと見たところ腕組みしているように見えた。しかしよく観察すれば、かの女がそうさせられているのだということが分ってきた。つまり腕組の形で、左右の腕

が離れぬよう傷口をつくり、その傷口と傷口を合わせて縫合されていたからである。

次の奴隷は、その変形で、後ろ手に縫合されていた。

この縫合手術はグレッタ医師のお氣に召したらしく、更に数人の奴隷が、さまざまの変形を見せて腕や脚を縫合されていた。その中で尻に手を当てた恰好のまま縫合手術されている奴隷の姿は、いささかならず滑稽なものであった。

グレッタ医師は、更に頬に手を当てた恰好、あるいは自分の鼻をつまんだ恰好で縫合手術をしてやる積りだと述べた。その外、尻と尻をくっつけさせたり、乳房と乳房をくっつけさせたり、肩と肩をくっつけさせる手術もグレッタ医師の頭の中に計画されているとのことだった。

そしてそれらの奴隷たちとは、少しはなれたところに巨大なガラスの水槽があった。中には首だけ出して女奴隷が全裸のまま入られており、しかも水が首のところまで満ちてあった。

これは液体の人体におよぼす影響についての実験であり、既に女奴隷の体は白くふやけて、ぶよぶよしているように思われた。

その他にもなおグレッタ医師の冷酷な実験物を観せられたが、その詳細は控えておこう。これ以上記せば多少グロテスクのそしりを免れないからである。

ただ筋肉の伸張力にたいする忍耐力を試すための実験と称して、数人の女奴隷が身体各部分を枷や鎖や革バンドで拘束され、舌、耳、唇、乳房などをそれぞれ引っ張られている有様を記すことは許されるであろう。

グレッタ医師は、なお次の実験にとりかからねばならぬという理由で、実験室の入口、つまり三十あまりの檻に女奴隷が押し込められている部屋まで僕たちを送ってきたが、直ぐ檻から女奴隷を一人引き出し、実験室へとって返した。

僕たちは女人馬にまたがり、石の階段をゆっくり上り、広間へ引きあげていった。

途中ナハール君は、重ねてグレッタ医師を賞讃して云った。

「かの女の頭の中は素晴らしいアイデアで一杯なんだね。僕もそういう点では人後におかない積りでいたが、かの女の構想には完全に兜を脱ぐよ。僕は妻帯などしない積りでいたが、かの女とならそんな気持も消え去るよ。今後僕も、かの女に物質的にも精神的にも





太い鎖で首枷を連結された女奴隷たちは、ナハール君の前に崩れるように膝まづき、懲戒のお礼を云わせられた。

「よくその苦痛を覚えておくがよい」

ナハール君の表情は厳しく、声は重々しかった。

「奴隷の身にあつては、僅小の罪ものがれることはできぬのじゃ。その方たちは奴隷見習期間中に犯してはならぬことをとくと教育されておるはずじゃ。それにもかかわらず、その方たちが禁を犯したということは、その心になお不遜のものがひそむからに違いない。次の禁を犯せば、その方たちは、もっときびしい懲戒を受けねばならぬのじゃ。そしてやがては矯正所が待っておろう。このことをよく頭に藏って熱心にとめをはたすがよい」

女奴隷たちは、やっと首枷の鎖を解かれた。そして鉄の枷の代りに、金のしなやかな枷と鎖をつけられ、そのおのの元の位置に戻ることを許された。

女人犬は女人犬の群へ、料理を運ぶ女奴隷はその群れの中へ、風呂場奴隷は風呂場へ……等々。

それからナハール君と僕は、昼食と夜食を

あらゆる援助を惜しまない積りなんだ。そしてこの館を奴隷の苦痛のうめきで充満させてやる積りなんだ。僕のそういう構想に賛成なら、君だってどしどし着想を知らせてくれ給え。」

広間にはなお軽い罪の女奴隷たちが、不自然な姿勢で歩かせられていた。

かの女たちは、耐え難い苦しみに顔をしかめ、ともすれば曲がり切って動けなくなる腰に鞭をあてられ、やっとこさ歩いているといった有様だった。

ナハール君は女体安楽椅子に腰を下し、その様子を面白そうに眺めていたが、やっと行進を中止させた。



兼ねたような食事をしたためた。そして寝るまでの長い時間を休息と雑談に費した。その時ナハール君の喋った長広舌の一端をここに披露しておくのは、決して無意味なことではないと考える。

つまりナハール君は、サディズム、マソヒズム、フェチズムなどと、人類がその長い歴史を経て、智慧を集積させた結果あらわれたものであると主張した。その昔、人類が言語を持たなかった時代、暗黒の畜類と等しい生活を送っていた時代においては、ただ動物的な欲情、自然なもの、平常なものと呼ばれる単純な性生活のみが存在した。しかし人類が社会生活を営むようになり、支配と被支配の関係が成立するに及んで、漸次サディズム及びマソヒズムの芽が萌え出て、社会システムが複雑化するに従って、それらの形態も複雑化するに至ったというのである。それが証拠に原始の時代においては縄、あるいは木切れがその道具であったのに反し、文明が発達するにつれ、木の板でつくった枷、そしてやがては鉄の枷や鎖によって道具もまた進化していったのである。ましてフェチズムにおいては歴史はもっと後世にその芽生えを記している。ゴムの発見されなかった中世以前にお

いては、人類はその萌芽をすら知らなかったし、それで結構満足していた。ましてビニールの発明されたのは二十世紀になってからである。人類の創意工夫は常に性の発展拡大に尽してきた。性の領域における高分子化学の果たした功績は大きいといわねばならない。

これらからして、サディズム及びマソヒズム、そしてフェチズムの発達深化は文明の優越性を示すものに他ならない、というのである。人類がその智慧を深めることなく、未開の、野獣に等しい生活を送っていたなら、それら変形の決美がもたらす歓喜は、遂に人類社会に訪れなかったであろう。それが証拠に、アマゾン流域の土人、オーストラリア原住民などは未だ鞭や鎖や枷、あるいはビニールの存在を知らないで暮しているし、我々でも十数年前まではビニールを知らなかった。アフリカにおける土人も、奴隷化される以前においては木の棒を枷に用いることぐらいしか知らなかったものであり、ヨーロッパ人により、鉄の鎖や枷を教えられるに及んで、それらの感触を愛するようになつていった。鎖を解かれた奴隷は、再びその鎖を恋しがるというのは、未開野蠻の黒人にすら、サディズム及びマソヒズムの決美が理解されるよう

になったことを示すものに他ならない。

現今、数多の国々において、奴隷が解放され、枷や鎖のたぐいも精巧になつてゆく反面、柔弱になつてゆく傾向のあるのはなげくべきことであるといわねばならない。文明が発達し、工業が発展するにつれて、枷も比例的に発達するのが普通であるのに、人類はむしろ逆の方向に歩いているように思われる。独り、わが国のみがこうした風潮に反逆し、人類の最も正常な発展の方向へ歩いているのは当然であるとしても嬉しいきわみである。やがてはわが国の正常なるべき方向、すなわち残酷な拘束具、檻、刑罰のたぐいが、他の文明諸国にもとり入れられ、共同の研究により、飛躍的な発達を見るであろうことを期待している、というのであった。

僕は、そうした意見に原則的に賛成だったが、ナハール君ほどには樂觀的になれなかった。この点について二人の意見が分れ、互いに論争しあったが、ナハール君も頑強であり、遂に結論は出なかった。

そしてその日は論争は疲れて、それ以上何もすることなく、風呂へ入った後、女体ベッドへ横になった。



△オムツの虜となつた若い看護婦からの手紙▽

# 奇 妙 な 告 白

多 摩 一 郎

○  
津津久雄さん。今夜は美しい月夜でございます。

晩秋の高原の夜空は凍てつくように冷く澄んで、明るい月光に照し出された遠い山脈の山肌がくっきりと浮び上って見えます。

二年前に、殆んど貴方から逃げるようにして、この療養所の仕事を志願してやって来たのですが、一年も過ぎぬ中に私自身が胸を侵されて、病床に就くようになってしまいました。

それから約一年も病床に病いを養いましたが、経過は悪く、日一日と衰弱の度も加わり、このままでは神のお召しのある日も、そ

う遠くはあるまいと思います。若し召されて天国へゆき、神のみ前で此の世の罰の審判を受けた時は、私はこの世で犯した大きな貴方への罪をあますことなく神のみに告白し、謹しんで神の裁きを受けるつもりでございます。私の愚な罪も私の奇妙な性癖故で、それをお知りになったならば、神様もきっと哀れな女だとお憐み下さることだと信じます。

私の此の世に於ける罪深かった一生も、まもなく終りを告げようとしています。その前に一度、貴方に私の奇妙なあまり類のない性癖を卒直におあかしした方が、やはり心おきなく天国へ召されてゆけるように思えるのです。そして天国へ参りましたら、こんどこそ

○  
本当に清純な気持で、いつも貴方を見守っていてあげましょうね。どうぞ哀れな女の愚かな手記を終りまで読んで下さいませ。そして、少しでも私を可哀そうだとお想いになりましたならば、時々は想い出してやって下さい。

○  
私がオシメに対して奇妙な執着を抱くようになったのは、内科病棟勤務だった私がある日友人に誘われて、手術室へ結核患者の整形手術を見学にいった時のことが主な原因の様に思えます。

一人の若い男の患者が、手術台に寝かされて手足を動かぬように、しっかりと結かれて





居りました。局部麻酔をかけられていざ執刀  
と言う時に、きつと恐怖感からでしょう、突  
然に尿意を催し看護婦に、それを訴えました  
が、すぐには間に合いそうもないので、一人  
の看護婦が慌ててオシメを取りにゆき素早く  
患者にあててしまいました。若い患者は衆人  
の前での羞恥の為と苦痛に身もだえしていま  
したが、観念したように眸を閉じてしまいま  
した。やがて手術が終るとさっきの看護婦が  
「まあ大きな赤ちゃん。オシメはぐっしょり  
よ。」

れ続けるのでした。

まだ充分に大人になりきれない清純な感じ  
の青年に、嫌がるのを無理にオシメをあてて  
恥かしさに泣きそうになっている所を想像し  
たり、又ぐっしょりと濡れたオシメを取り換  
える時に、「いいのね、大きな赤ちゃん。今  
気持ちよくしてあげるわよ。」等と軽くからか  
ったりしたら、それこそ羞恥の為に死ぬ程の  
想いをするのじゃないかしらと……等と思  
うと私は烈しい興奮に身のおきばもない程に  
なるのでした。

と言って、その  
時はもう意識を半  
ば失っている患者  
の濡れたオシメを  
処置しているのを  
見ていて、私は本  
当に奇妙な、得体  
の知れぬ興奮さえ  
感じるのです。  
その時以来、若い  
男性とオシメとの  
結びつきは私の心  
を奪ってしまい、  
奇妙な妄想に悩ま

貴方が私の受持ちの病室に入っていたら  
のは丁度私が、日毎につのるこんな奇妙な幻  
想に唯一人悶々とした日を過している時でし  
た。生来丈夫でない貴方はS大受験の為に無  
理をし湿性の肋膜炎になってしまい入院した日  
から絶対安静の状態でした。然し病気の発見  
が早い上に治療に最善を尽したので、すぐに  
明るい兆候が見え、それ迄ずうと傍に附添っ  
ていられたお母様はお家に帰られ、代りに私  
が総べてのお世話をすることになりました。

貴方はまだ本当に子供ばさが抜けきれず、  
大きな澄んだ眸や、いつもつやつやと口紅を  
つけた様に濡れ光って赤い唇が印象的で――  
確かに貴方は美少年でした。貴方も初めての  
馴れない病院生活が珍しいらしく、私のこと  
をそれは姉のように慕って下さいました。

私は貴方より五つもお姉さんでした。親し  
さが増してくると、貴方はいろいろと貴方の  
お家の事情なども、ぼつぼつと話して下さい  
ました。お母様と唯二人であることや、お母  
様は叔父様と一緒に事業をなさっているの  
で、始終忙しいこと等を――。

こんな風にして親しさが加わってくると、  
日頃私の抱いていたあの奇妙な性癖が頭をも  
たげ、私の妄想の対象に貴方を心の中に抱く



ようになり、やがては、私はとうとう恐い事を思い付いてしまいました。

その頃、貴方は未だ床から起き上ることは全然出来ませんでした、尿や便のお世話は全部私がしていました、貴方はそれを私に頼むのを非常に恥しらしく、なるべく我慢なさっている様子でした。

ある日の午后から夕方にかけて、私は気附かれぬように必要以上の水分を貴方に与え、夕食後の投薬を、わざと就寝前までおくらせ、睡眠薬を混入して水と一緒に飲ませてあげました。

この私の恐い、奇妙な性癖を満足させる手段の為の行為を、なんら氣附くことなく、貴方は何時もの様に「おやすみ」と言っただけにっこりと笑ってみせるのでした。

翌朝、私はある期待に心はずませ、病室を訪ねると貴方はまだぐっすりと眠っているにやいました。そして今時なら夜半に用を足していっぱいになっている傍の尿器は今朝は空っぽです。思わず私は貴方のベッドに手を入れますとお布団はぐっしりと濡れていました。私の計画は美事に功を奏しました。やがてお食事の時間になった頃、私は何時もの様に洗面の用意をして、再び部屋を訪ね

ると貴方はもう目を覚していました。

私はわざと、今日は体を拭きましようね。

そしてシーツやねまきも取り換えましようねと、なにげなく言う、瞬間貴方の顔になんとも言えない困惑の表情が流れたのを素早く見てとると、私は烈しい喜びに身が震える程でした。私の心の中に徐々にふくらんで来る意地悪めいた心を、精一杯押えるようにして尚言葉を続けるのでした。

「お食事の前に取り換えましようね。」

「……………」

「どうしたの？」

貴方はとうとう恥しい想いで消え入らんばかりになり小さな声で私に言いました。

「僕、恥しいな。だって、おねしょをしてしまったのだから。こんな大きくなって。」

勿論私は続けて同じ様なことを繰り返しました。そして就寝の時に、

「今夜は「おねしょ」しちゃ駄目よ」と言う

と「大丈夫さ。今朝はごめんね。」と無邪気に言うのでした。然し、こんな風にして貴方は三晩も続けて私の為に無理やりに恥しい思いさせられてしまいました。

「津久雄さん。きつとどこか悪い所があるのよ。先生に御相談してみましようかしら。」

「先生に言うの？誰にも言わないって約束したじゃないの。」

「だって、三日も続けて「おねしょ」をするのですもの……。もうなさらないって自信があること？……。」

「……………」

「毎朝お布団を乾しにいたり、おねまき洗うも大変だわ……。ねえ、じゃ今夜からオムツをしてねましようね。」

「赤ちゃんの使うあれ。僕恥しいや、そんなの……。」

「では先生に相談してもいいこと？」

「嫌だよ。そんなの……。」

貴方はとうとう泣き出しそうになってしまいい、私がとどめをさすように

「じゃ約束をするわね。オムツをしましようね。」と言うと貴方は顔を深く布団の襟布に埋めたまま黙って、こっくりをして見せるのでした。

私はとうとう永い間の思いを、ここに実現することが出来たのです。永い間にひそかに作りためておいた沢山のオムツの中から自分の氣に入ったユカタの模様のオムツを幾枚か用意すると貴方の部屋へそれを持ってゆきました。貴方はさんざん駄々をこねましたが、



とうとう私の思う様に大人しくオムツを当てさせましたが、その間中、顔を真赤にして睨を伏せて居りましたね。オムツカバーの代りに私のズロースをはかせるとふつくらとふくれ上り、裾ゴムの間から清潔な藍色のオムツ

の端をのぞかせて腰をすっかり包んでしまいました。ねまきの裾をかき合せながら、「さあ、安心してお休みなさい。洩してもいいのよ。」

と軽く言葉をかけるのでした。翌朝になっ

てぐずぐずに濡れているオムツを処置する所を想像すると、私の体内にむくむくと妖しいまでの興奮感が湧き上ってくるのでした。

○

やがて二カ月近い病院生活に貴方は全く元通りの健康体になりましたが、夜尿の癖はとうとう治りませんでした。貴方が退院なさりお別れすると私は前にもまして私の奇妙な性癖に悩まされる日が続き、ほとほとてあましてしまいました。殊に私の代りにお母様に毎晩私がしたようにオムツの世話をして頂いてるのかと想像すると烈しい嫉妬に似た感情さえお母様に対して抱いてくるのでした。

こんな感情を整理する目的で信州の療養所へ転動を試みたものの、やはり私自身では奇妙な性癖を処理することは出来ませんでした。

そして私は発病し、再び貴方にお目にかかることさえ出来なくなっていました。

哀しい一つの宿命とも言える奇妙な性癖を持った私は、それ故に此の世では、罪と誤ちに充ちていた愚かな女でしたけれど、神様はきっと憐み許して下さいでしょう。そして貴方も、あなたの身に受けたおろかな女の罪をどうぞ許して下さい。

(完)

## 奇譚クラブ旧号の在庫案内

### 〈復刊号の部〉

本誌の旧号も漸次売切れの分が増加してまいりました。只今在庫の分も残りが大分少なくなってきました。文献的価値を誇る本誌の旧号のお手元にはない方は売切れにならない中にお申込み願います。特に復刊号に限り定価の半額に奉仕いたします。但し残部がいずれも僅少ですので、御注文の節、御注文の品以外に売切れの際の代品の月号の御指定をして下されば幸いです。

復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円

復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第一集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第二集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価三百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価三百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価三百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価三百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価三百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価三百円

この欄に掲載洩れの分は売切れですから、御諒承願います。

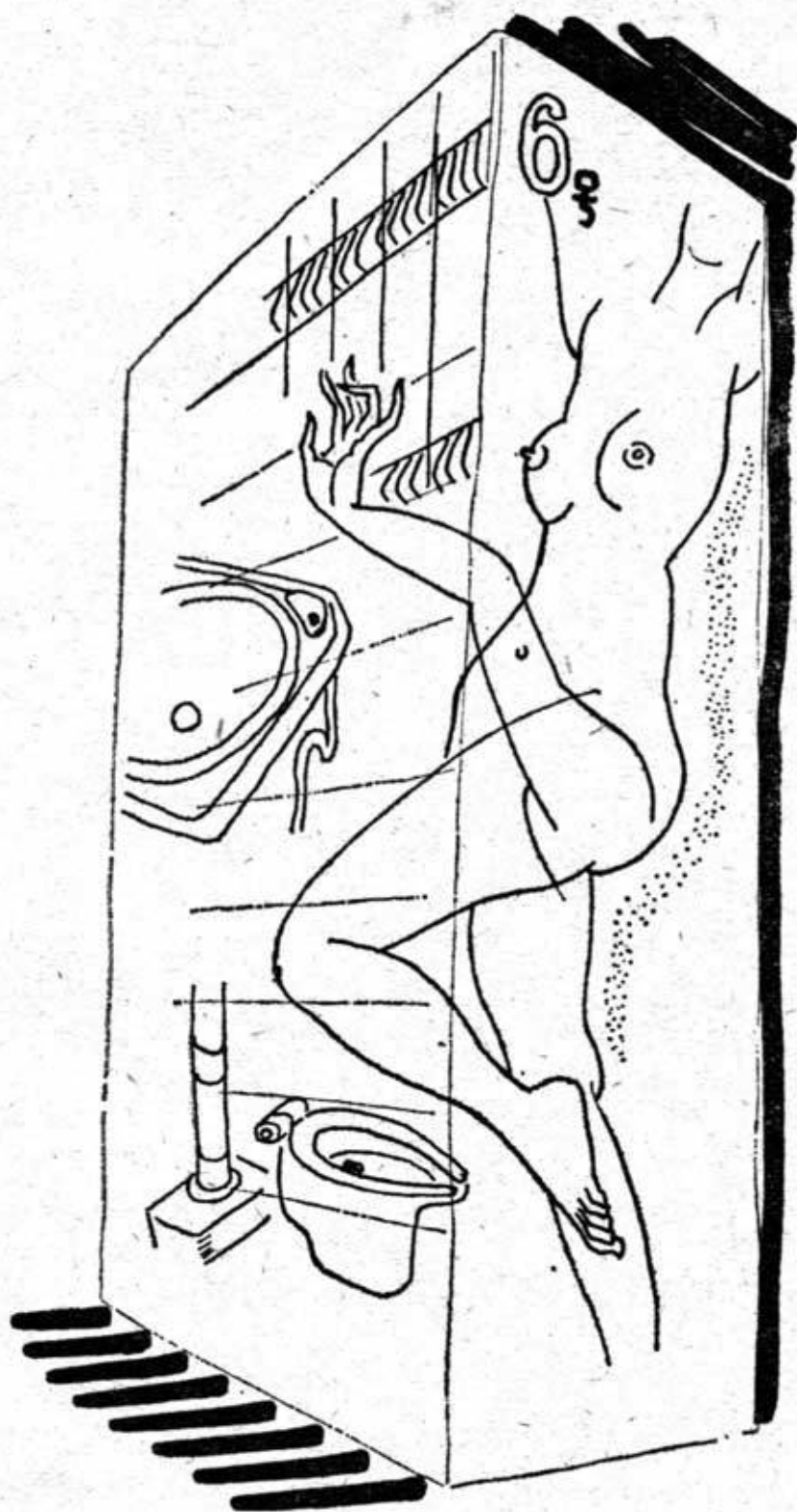
特に定価の半額に奉仕いたします。



## △体験告白手記△

## 「K 子 の こ と」

野々山 慎二 郎



一  
想い出すと、もう五年も前のことである。私はまだ十代の域を出ない、文字通り青い麦の——そう、あれは昭和三十三年の八月のことであった。

その当時、私の家は極度に左前で、内情は火の車だった。私の家は小さな文房具屋を営んでいたが、多くの家族を抱えた父は重なる負担に気を病んでか、始終イライラしていた。

結局、古い商法にしがみつく父の保守的態度は、新しい経営を消化することが出来なかった。その上、八人も居た肉親は皆バラバラな気持で、父や家運に対しては冷ややかな態度をとったので、家庭生活は暗く日々の営みは牢獄のように灰色で、私のところは満たされなかった……。

高等学校を卒業して一時ブラブラしていた私は当然我が家には余り腰が落着かず、しきりに荒れ狂う本能のまま、そこいらをうろつきまわっていた。

その頃親しくつき合った友達にMと言う男がいた。小さな鉄工場で働いていた労働者だったが、気の強い体の頑丈な男で、私は彼と組んで夜な夜な怪し気な行動をしていたこと



を告白する……。

こんな奇矯な行動を書くのは、至ってお恥ずかしい次第であるが、少なくとも当時の私にとっては真剣な生活であった。奇巧の読者諸君には信じてもらえることだと思うが。

## 二

Mと私が深い友情に結ばれたのは、同期生と言う点も無論あったが、何より実は二人に共通する異常な性癖に依って、であった。

いつとはなしに二人が知り合ったことは、お互いに奇妙な興味を汚物に抱いていることで、気の合った私達二人は町の東寄にあるアパートを又とない獲物にしていた。と言うのは、病院を改造したアパートの便所は二つしかなかったため、二十人近い居住者の使用度は頻繁で次々と倦くことなく覗き見が出来たからである。しかも便所の下窓は、金網を張っただけのことであったから、内部はほとんど素通しで都合が良かった。

便所の周囲は、竹ヤブになっていてゴミ山が幾つもあったので、人はほとんど寄り附かない。凡ゆる意味で都合で良かった。

私とMは、毎晩と言って良い位竹ヤブに忍びこんで、じっと座りつめた。そして、目だけ大きく光らせて、小さな長方形の下窓に展

開する排泄行為をギラギラ観察した。

異性が、秘密な時間に何をするのか——私を見た。

そんな或晩（確か十五日であった）——Mが猛烈にイキリ立って、小声で私の耳に熱っぽく囁やいた。と、私は我が目を疑った。

私の目には、少女の下半身（それも、しゃがんだ恰好の）しか見えなかったが、足下に新聞紙を拡げて、「スカートと黒いズロースは、すみの方に丸めてあった。

兎も角、私達にとっては強烈な刺戟的シーンであった。今、想い出してさえ血がたぎるように奔走して、胸が疼く……。

チリチリ……と、つき射すような烈しい水勢が、高らかに音を立てる。私はうっとりした。得も言われぬ心地にカッとなった。

次に高窓が開いて、少女が私達の方を探るように見た時、私とMは思わずあわてふためいてしまった。竹ヤブは真っ暗に近かったから、じっとしておれば発見される気使いは先ず無かったのだが——。

少女は、しばらく目をこらして、着衣の動作を続けていたが、やがて「あっ！」と短かく叫んだ。

かくして私達の窃視行為は発見されてしま

った。美しい顔立ちの、その少女がK子なのであった。

## 三

K子は、アパートに間借りしている女教師の娘だった。当時、十七才になっていたと思う。隣のN町にある私立女学校に通学していた。淫奔——と言うほどではないが、かなり早熟だったように思う。体恰好は比較的小柄な方だったが、相当ませていた。

そんなK子を、Mは易々とモノにしてしまった。どう言う手段で彼が実力を発揮したのか、迂濶なことに当時の私は、詳しく注意を払うことさえしなかった。私が気がついた時には、既にK子はMの支配下に置かれ、Mはトクトクとして恋人の地位を誇っていた。

Mは、K子の秘密を掴んだ意味から、有無を言わせず思い切った態度に出るようになって、ずい分、大胆になった。

K子の母親と言うのが、日中はほとんど留守勝ちなので、Mはそこを狙って火曜日に休みをとると強制的に彼女を学校に行かせなかった。そして、アパートの昼間は人が余り居ないので、ドアに鍵をかけさえすれば午前中ならば先ず絶対と言って良い位安全な時間を得られたので、ますます助長した。



そんな或日（もう八月も末近く）——火曜日の午前十時、と言う約束で私はK子の部屋を始めて訪問した。

八号室と書いたラベルの部屋は、二階の北向きの一番端にあり、私がノックすると、

「誰？」とK子の上ずった声。「ボクだよ」

と私が答えると、何とMがニヤリとして扉を開けた。

「誰にも見られないだろうな？」

「大丈夫だよ……時にK子さんは消えちゃったのかい」

すかさず室内に身を入れて、私は軽口をたたいた。するとMは、ちょっと顔を凄ませて「断つとくがなあ、K子はオレのスケだぜ、ただどアンタには初めからのイキサツもあることだ。オレも堅いことは言わない、タレ位はまわしてやる。任しときな」とタンカを切った。

Mの言うタレとは、文字通りの意味であった。つまり、K子の排泄物だけは自由にさせてやると言う御託宜に他ならない。「悪かないね」と私はボヤいたが、少々照れて、バツが悪かった。

二間続きの部屋は、雨戸を密閉して、電燈をつけているので、凄くムシ暑い。Mはパン

ツにランニングという恰好で、「来いよ、愉しませてやらあ」と先に立って、次の六帖間へ入った。続いて私も入ると、「いらっしゃい！」と驚いたことにK子に嬉し気な声で言った。見るとK子は御膳の上に乗って両手を背後で括られている。

「良く来て呉れたのね。お茶位出したいんだけど、Mさん許してくんないのよ」と、K子が眉をしかめるとMは「ナマイキな口をきくな！」と一喝して、竹の物差しでピシリ／とK子の尻を打った。

K子是小柄ではあるけれども、太り肉の引き締った見事な肉体、それもツヤツヤした持ち主であった。乳房は丁度レモンを伏せたような恰好にピンと張っていて、実に可愛らしく上向きに尖っていた。なだらかな腹部の曲線と言い、肩と言い、申し分なかった。何より私にはプリプリした臀部が、堪らない魅力であった。唯、美しかった。

#### 四

「フフ……フ、あんた妾に気があるって、本当？」

K子が露骨に質問した時、私は何と答えたものか戸惑った。すると、Mが「このスケ、どうもツケ上るんだ」

と言わざま、左手でK子の髪の毛を掴み、右手で物差しを振り上げると、続けて真っ白な臀部を打擲しはじめた。……ビシッ／ビシリ／と小気味良く音が立つたんに、ヒイ、ヒイK子は悲鳴を上げた。身をよじるようにして――。

ギリギリ、K子は歯を喰いしばって、ともすれば体制が崩れそうになる。Mは彼女のブラジャーを取ると、

「ホラ、これでもう、ギャーギャー、騒げなくなるだろう」

と、彼女の口に押しこんだので、ウツ、ムフフ……と声は静まった。

「サ、言われた通りヒンなよ」

と、Mは打擲の手を、緩めずK子に命令した。見る見る、K子の真っ白な尻は赤く染って目に痛かったがMはニヤニヤ目を血走らせて、一向に止めようともせず、ますます愉しそうに手を振り続けた……。

私は、目の色を変えて洗面器を持ったまましばらく、鼻をうごめかせて匂いを嗅いだ。私は思わず唸った。こんな新鮮なゆばりは、初めてであったから……。

プーンと鼻をつく若い娘特有の臭みのある



湯気は、私にとってかけがえない、豊かな芳香であった。黄金色の暖かい液体は、果実のエッセンスさながらに私の鼻の粘膜を、ヒリヒリとくすぐった。

「ああ」と、K子が消え入るような声を上げた、その時——がば、と身を起したMが、私の行為を目撃して声を発した事実を早くも確認すると、猛烈に目をムイテ怒った。

「このアマノ甘く見やがって……」

とK子をつきとばして、乳房をねじり上げた。

「痛い？フフ……泣きたきゃ泣け泣け」

「イヤ、乱暴しないで……苛めないで！」

K子は頻りに悲鳴を上げた。

あられもなく足をバタバタさせるので、私は目の置き場に困った。

しかしながら、私は考えた。K子は結構悦んでいるのではあるまいか？Mの奴も、第三者の前で露出的快感を味っているかも知れない……。私は苦笑して、敢えて介入する愚を中止したのであった。

# 五

後、一日すると九月が来ようと言う夏の終り——そう、丁度八月の三十日に私はK子から手紙をもらった。

Mは妾が好きだと言って可愛がって呉れるが、妾にはどうも信じられない。

貴方は何も言わないで、じっと妾を見つめるだけだけれど、何故か愛情と言うものはそんなようなものだと言う気がしてならない。どうか……云々。

結局、逢って欲しいと言うのが目的で私は指定された場所へ、夕方の六時に出向いた。

町端れの、神社のある小山でK子は待っていた。白いブラウスに、青いフレアのスカートの良く似合った清楚な服装で、この美少女があんな痴態を演じた等とは、とても信ずることが出来兼ねた。

でも、やっぱりK子はK子であった。変な言い方で恐縮であるが、これほど実感の籠った言葉は、他には求めようが無いとさえ思われる。

彼女は裏山でMを詰って、人非人とさえ極言して憚らなかった。

「ムヤミに虐めるの。それも理由なんかありはしないんだわ。すぐに殴りつけるので始終、怯えてるでしょ、……チットモ気が安まらないの。」

言いながら寄り添って来た。

「オレは、K子さんとMの仲は至極うまく行

ってる、とばかり思っていたんだが、そうかね、K子さんがそんな気持なら卒直にMの奴にオレが話をしてやっても良い。キッパリした方が良くはないかな？」

と私は親身になって答えたが、彼女は聞いてもいなかったよう。

「ねええ……この間みたいに飲んで下さる？」と大胆に誘惑した。

まだあたりは明るかったので私達二人は、灌木の茂みに入りこんだ。下は一面に芝生がはえて、適当な凹みもあり、少なくとも覗く積りで近着いて来ない限り、人目を十二分に避けることが出来た。

それから正に疾風迅来、完全にK子が主導権を掌握し、積極的にテキパキ行動した。Mが狂わんばかりに愛した気持が分るような気がした。

その時の、私の気持を何と言った判ってもらえるであろうか。まことに、筆舌に尽し難い心境を、私は味った。

私の抱いている快楽を、若い異性であるK子までが求めている——この興味は男ばかりじゃなかったのだ。善なる哉、善なる哉、私は随喜して涙をこぼさんばかりであった。実際、私はバカみたいに欣喜雀躍したものであ



# ガン作マニアのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

A、パンティ売ります

「いいこと教えてやろうか」とA。

「またストリップですか」と私。

「そう」

「教えてもらっても、東京以外じゃ、いそ

がしくて行けませんよ」

「今度は近い。中央線だ」

「どこですか」

「荻窪」

「Aさんじゃない」

「そうなんだ、うれしいじゃないか」

「全ストですか」

「いや、全ストなんてもんじゃないんだ」

「何かするんですか」

「ストリップの女の子の、脱いだパンティ

をくれるから、行って来い」

「本当ですか」

「一枚五百円」

「売るんですか」

「ストリップパーたちの珍商売」

「使ったやつですか」

「そうさ、古くなって、捨てるやつを希望

者に売るんだ」

「買う人いるのかしら」

「いますよ、そりゃ」

「さては、買ったな」

B、男

梨香が勢よくドアを押した。

「おそいぞ」とA。

「デイトしていたの」

「あれだ」

「カカオフィズ頂戴」

「はいはい」

「おかわり」

「おいおい」

「いいじゃないの、二杯や三杯、スクリュ

ードライバーにして」

「それはいいですよ、かまいませんよ。だ

けど……」

「だけど、何よ。ねえ、マスター、Aさん

った。

どっちにしても、K子は満悦して機嫌は良かった。

「ネ、また時々こうして逢って下さらない」  
最後にK子は、念を押した。

「ああ、良いとも」

私は答えたが、Mが何と言うか気がかりでそれに、この美少女K子の底知れぬ毒気にあてられたようで、我ながら心許なかった……。

三十日の逢引が、K子との最後のチャンスであって、それ以後、MはK子を完全に独占して、私は彼等から遠ざかってしまった。

Mは、K子と結婚するつもりだったらしいが、失敗して、二年もしない内にK子は逃げ出した。

そして、温泉で有名なI町から、K子が私に手紙を呉れたのは、つい一年前のことである。

うすいピンクの便箋は、最後に一ヶ所ポツチリと汚点が附いていて、何とも言えぬ感慨を誘ったもので、私は胸を締めつけられるようであったが、思う所あって返事は出さなかった。

K子とは、それ切り。私の生活も変わった。もはや昔のことである。



たらね、てんでHなんだ。いやになっちゃった」

「何を云いつけるつもりだ」とA。

「この間の月曜、Aさんとデイトの約束したでしょう。すっぱかしたら、のこのアパートまで来たのよ」

「日曜は洗濯日そだから」と私。

「そう。洗濯で一日終っちゃうんだ。でねアパートまで来たのはいいのだけど、窓の下にだまって突っ立っているの」

「それはそれは。梨香の部屋は二階じゃない？」

「そうなのよ。洗濯したばかりのパンティをまとめて窓に乾しておいたの」

「七色パンティどころじゃないよ」とA。

「うるさい。そのパンティのしずくがぼとぼと落ちるのにね、Aさんたら、その下に平気で立っているんだ」

「ははあ」

「口を開けてさ、しずくの落ちるのを待っているの、馬鹿みたい」

C、ミンクとハイヒール

「東京新聞夕刊の芸界ゴシップに、いいこと書いてあるよ」とA。

「見せて」と梨香。

「(ブリジット・ベルドールは、このほどパリのある友人のパーティに招かれて出席したが) いいか、これからがいいんだ。(ミンクのコートとハイヒールだけでほかは何もまとわず現われ) いいですねえ、このカンジ」

「あら、ミンク買ってくれたら、ミンクとハイヒールだけでAさんとデイトしてあげるわ」

「モヘヤじゃいけませんか」

「そうね、高級品なら、考えてもいいわ」

「約束しますか」

「いいわよ」

「梨香に、そんな勇氣あるかな」と私。

「あるわよ」

「ますますうれしいね」とA。

中南米産ヒョウネコ毛皮のコートを、この冬梨香は新調したけれど、それがAのプレゼントかどうか、私は知らない。

——夏の日、K子と私との間にあった奇妙な交渉のことを、私は告白した。

若くて、美しい女性に対しては、汚いものが汚く感じられないばかりか、それが普通人にとつて、汚ければ汚いだけ、私にとっては強い魅力となつて迫ってくるのである。

それは、汚物嗜好という、常人から見れば最も恥すべき行為である。それにしても、驚くべきことには、あのピチピチとした乙女の美しさをすべて備えたK子も、私と同じ嗜好を持っていたということである。

私は自分の恥べき性癖と「K子とのこと」をあからさまに告白した。

蔑すまれるかも知れないが、私にとっては貴重な、その甘美とでも言おうか、なつかしくはかない想い出の一つである。

以上をもつて、私の拙い告白を終るが篇中実在の名称は一切省略したことを御断りしておきたい。現存する人名も勿論、仮名に近い。話が比較的、新しい事実なので止むを得なかった。以て諒とされたい……。

(終)

△編集部注▽文中、公開に適當でないと思われる箇所を大幅に削除しましたことを、筆者並に読者にお断りいたします。



## 事實小説

## 悪夢

南京中華門にて

梶

孫

夢

悪

灼けつくような八月の最中——。  
所謂聖戦たけなわの頃で日本軍が破竹の勢で中国大陸の奥地へ奥地へとひた押しに進撃して行った昭和十五年の頃。

田島班長以下七名の兵隊は二列縦隊となつて、炎熱の中華路を南京南端にある中華門に向って行進して行った。城門衛兵交替の為である。

駐屯部隊のある繁華街の三叉路から中華門迄約三キロ強——。軍衣も軍袴も水を浴びたような汗がにじみ出て、担った小銃を投げ出してしまいたい程の重量感が加わり、この行進は可成辛いものであった。南京へ進駐した

のは新緑の五月で最前線が膠着状態の儘、一時停頓して再攻撃が開始される迄、当分の間待機の姿勢であった。その間、南京城を囲むいくつかの城門を各駐屯部隊が分担して守備に当たっていた。

私の部隊はこれから行く中華門と通済門と雨花門（鉄道門）の三つの城門の警備を担っていた。勤務は一週間交替で毎土曜日に申受け申送ることになっている。

私は雨花門と通済門は勤務済みであるが、この中華門は始めてであった。数ある城門の内でも、この中華門は十七世紀の古城を偲ばせる巨大なレンガ積みからなり立って隣県の

蕪湖へ通ずる唯一の軍公路が続きかなりの重要地点ともいえ、従って日に数万の人が出入し、その混雑はおびただしいものであった。

中国人独特の大声で喚く話術の交換、傍で聞いていると喧嘩でもしていると思われそうだ。鼻をつく異様な臭気、品物の分けがつかぬ程蠅が真黒にたかっているも平気な顔の食べ物屋、行進する私達を物珍らしそうにゾロゾロついて来る汚い小輩（子供）

「これから一週間か、つれえなあ——」

衛生係の小池上等兵がいまいましたに呟く「何を言やがる。お前は立哨しねえからまだいいや、俺達歩哨は辛いのを乗り越して死に



「そうだよ」

第一歩哨の村田一等兵が怒鳴りかえす。

「何を——」

血相かえて小池が睨みつける。

「何でえ——」

村田も負けてはいない。私達は工兵である。彼等の前職が木工、鳶職、或いは土方、漁師等で占め殆どが召集兵であつた。言葉たるや荒っぽく性格が粗暴だ。兵隊同志の階級など無視していがみ合う。時には派手な取組み合いも敢て珍らしい事ではない。彼等には軍規など七面倒なものは通用しないのだ。このような分隊の班長も統卒責任者として又辛きかなである。

午近くになろうか、我々は中華門衛兵所へ到着した。間もなく下審になる勤務兵達は、あと数分で開放される喜びを顔に現わしてニコニコしていた。その筈だ、今日は一日休養して明日の日曜は楽しい外出だ。田島班長は下審の沢本伍長から何かと申送り事項を受けて正午きっかりに異状なく交替を終った。直ちに第一歩哨の村田が立哨した。

中華門は左右二門あつて、第一門は車馬専用であり、第二門は歩行者の通用門であつ

た。私達は第二門が受持ちである。第一門は南京憲兵隊が警備して居り上等兵の肩章をつけた補助憲兵が立哨していた。

私達の衛兵所は第一門際に憲兵隊と隣り合せて並び、建物は厚い壁で仕切られているが裏へ回ると炊事場も便所も共同で使用する事になっていた。

憲兵隊の建物は赤煉瓦の二階建て二十坪からある広さである。尤も世帯も多く衛兵司令の憲兵軍曹以下十八名は居るらしい。私達の衛兵所は赤煉瓦でこそあれ、平屋で天井が低く控え室が約二坪余り、奥の仮眠所が四坪程度だ。それに窓がなく室内へ入ること、うだるような暑さには閉口した。此所で一週間送るかと思うとウンザリする。

やがて一時になった。歩哨係の私は第二歩哨の宮崎を引率して村田と交替させた。村田は直ちに控え兵となる。立哨一時間、控え二時間、仮眠一時間と、四人の兵隊が交替で行うのだ。衛兵所には衛兵司令、衛生係、歩哨係、控兵二名が常備している。炊事は控兵が一時間犠牲となつて食事当番を奉仕する。それにこの猛暑では昼間は連も眠れたものではない。そこで彼等は裏の空地の大樹の蔭に二、三枚のアンペラをひいて禪一つの裸にな

つて僅かの仮眠をむさぼるのだ。

「おい梶、憲兵隊はいいぞ。扇風機が五つもあつて、でかい冷蔵庫の中に美味そうな物がこつてりあつてさ、奴等毎晩チャン酒食って騒いでやがる」

いつも、こまめに動き廻つて、あらゆる情報が一番先に伝えて来る村田が、早くも隣家の様子を私に囁いた。

「憲兵軍曹がいつでも夜来いとさ、酒がいくらでもあるから飲ましてやると言つてたぜ。畜生、うまくやってやがる。今夜行かねえか、え？」

盛んに彼は私を誘惑した。私も酒は飲めない方でもないのにニヤニヤ笑つて決断を下さずにいた。憲兵軍曹と言えば司令の潤米軍曹の事であろうか、先程田島班長から聞いていたので名前だけは知っていた。執拗に食い下がる村田を好い加減にあしらつて私は体でも洗おうと極彩色に飾られた洗面器を持つて裏の水道へ出た。

そこには先客が一人居て、こちらに背を向けたまま陽灼けした逞しい裸の上半身を濡れたタオルでゴシゴシ摩擦していた。ふと傍に軍曹の襟章のついた開襟シャツが脱ぎ捨ててあるのが目に入った。



裸の男は気配を感じてか振返った。私は反射的に敬礼した。(潤米軍曹だナ)彼はニヤリと笑顔を見せながら

「暑いなあ、工兵さんも楽じゃないだろう」

と私にタオルを渡して

「済まんが、これで背中を強くこすって呉れんかナ」

と人なつっこく背中を向けた。憲兵隊と云えば定めし鬼をもひしぐような豪傑揃いと言ふ先入観がある私には、若い潤米軍曹の柔和な態度には暫しとまどった感があつた。どこか九州訛りを思わせるような錆びのある声は親近感を抱かせるものがある。

タオルを手にとって私は彼の体をふき始めた。実に素晴らしい裸身である。日本人には珍らしい濃い胸毛が夏の風にそよいでいる盛上った両腕の筋肉。陽に灼けて浅黒く光る見事な肌、この彼の体にさわれるとは――。

私の胸は早鐘のように鳴り出した。私は女には用のない男であつた。兵隊達の逞しい裸体が至る所で私の目にふれ、むんむんとむせかえるような男の体臭が私を暫々興奮させた。彼の均整のとれた見事な肉体は眠れる私の煩惱を呼び起した事は云う迄もない。特に私の好みとしては潤米軍曹のような体をあげ

たい。年令は二十七、八才位であろうか、どこか童児を思わせる涼しい眼。濃い浅黒の眉毛、キリッと引き締まった唇、笑うと彫りの深い片えくぼが現われる。

私は左手で彼の肩を掴みタオルを持つ手に力を入れて上下左右に摩擦した。無意識の内に私の視線は軍袴の方へ迄のびていった。チラリと白い越中褌の端が見えた。思わず生つばを飲み込んで不必要な迄に腰の当りを盛んに摩擦した。出来れば軍袴も脱がして彼の太股までもさっぱりさせてやりたい衝動にかられたが、私の理性がそれを許さなかつた。

「もういい、有難う有難う」

彼は振り返って例の人なつっこい笑顔でタオルを受取った。まぶしい程の彼の胸毛が目に入り込む。

「ああ、さっぱりした。夜にでも来ないかね、ビールがあるよ」

彼は傍のシャツを小脇にかかえて悠然と立去って行った。

それ以来、私は潤米軍曹とは会わなかつた。勿論寸暇を盗んで村田と共にコッソリと隣家へ馳走になりに行った事も二回程あつたが、彼は留守で、本部か或いは蕪湖へ連絡に

行ったとかで、あの男性的な風貌に接する事が出来なかつた。

事故らしい事故もなく、勤務の六日間は無事経過した。愈々明日は衛兵交替の前日であつた。連日の猛暑にすっかり疲労し切つた兵隊達も、明日の交替を控えて、心なしか顔色も冴え極めて御機嫌である。楽しみな外出が待っているからだ。ひょうきん者の村田も大はしやぎである。だが今日の暑さはどうだろう。夜明けと共に始まる城外を流れるクリークでの洗濯女の棒叩き交響楽は、いつもより静かなようだ。彼女等もこの暑さには流石にヘキエキしたらしい。

夜のとりきが下りても、そよとの風もなく、私は仮眠所へ仰向けになった儘、寝苦しい夜を持て余していた。薄明るい電光の下を白い蛾が飛び廻っている。歩哨交替を終えた許りで私には二時間の仮眠が与えられてあつた。ふと時計を見ると十二時を少し廻っている。傍で三番歩哨の藤崎が汗にまみれて死んだように眠っていた。コトリと音を立てて裏庭へ通ずる観音開きの扉が外から開いた。入って来た。村田の眼が異様にギラついていたのを私は見逃さなかつた。



「梶、凄いものを見せてやろうか、来いよ」

——何かあったナ——

私は彼の只ならぬ態度にひかれて寝苦しさから開放されたさに再び裏庭に出て行く彼の後に従った。

「どこへ行くんだ」



先に立った彼は無言のまま手招きして、小走りに憲兵隊の黒い建物へ向って行く。私は少し焦々して来た。なつめの大樹の下を通り抜けて左を見ると建物の窓が見える。燈りが皎々と輝いていた。彼はその窓下へ私を導いて相変らず無言のまま中を見ろと云う動作を

した。

貴重な睡眠を妨げられた私は、多少中っ腹でけだるそうに窓の中をのぞき見た。その瞬間、全身の血が逆流するような烈しいショックに襲われた。阿呆の如く口を開いたまま両足はその場に釘付けになってしまった。殺風景な部屋の中央に一糸まとわぬ裸体の男が両手両足を引き裂ける許りに拵げられ天井から吊されている。両足の爪先が僅かに床に届いているのみだ。若い中国人で筋肉の発達した珍らしく逞しい体だ。そして適度に毛深い。(元来中国人の男性は無毛体質が多い)その精悍な顔は度重なる苦痛にみにくくゆがみ、固く結んだ唇からは鮮血が糸を引いている。

この男を二人の若い補助憲兵が前後から交る交る帯革で打ちのめしているのだ。尾錠のついた方で踊り上るように気合いを入れて振り廻している。二人共軍袴一つの半裸体だ。ばしっ、ばしっ、と異様な音響が私の耳をつんざく。更に私を驚かしたのは、少し離れた所で椅子に掛けた儘、この光景を悠然と見上げている潤米軍曹の姿を見た事であった。初対面の時に見た柔和な彼の面影はどこにもない。あの涼しい目付きは今や爛々と輝き恰も餌を狙う黒豹の如き残忍さが現われている。



私は始め別人かと思った程であった。二人の部下が行う拷問を冷然たる表情で見詰めている彼はサジストか？ 鬼をもひしぐ憲兵隊の裏面をのぞき見た私は慄然とした。

責められている中国人は相当に気丈な男で呻き声一つあげない。それが彼等には面白くないのだ。凄惨な形相で胸と云わず腹、太股と所嫌わず力まかせに打ち据えている。ふと潤米軍曹は立上ると着ているシャツを脱ぎ軍袴を取ると越中褌一つとなつてしまった。下半身の毛深い太股が私の目にまぶしくやきつく。打たれている男は水を浴びたような汗にまみれ、何やら訳の分らぬ言葉をぶつぶつぶやいている。吊された裸身は所々皮膚が破れて赤黒い血が吹き出している。

「手榴弾を三個持っていたんだとき、テロ一味の片割れらしいんだ」

村田が耳打ちに囁く。

「背後関係の泥を吐かせているんだ」

南京駐屯以来頻々と起るテロ事件には軍部も手を焼いていると聞いた事がある。上層部も血眼になって彼等の行動を追求し全機能をあげて捜査に当たっているとも聞いた。私はまじろぎもせず、この光景に食い入った口は渴き得も知れぬ快感が体内を駆けめぐった。

憲兵の一人が流石に疲れたらしく帶革を投げ捨てて、彼の頭髪を驚嘆みにして乱暴にゆさぶる。

「快々の 諒話諒話 慢々の不信 辛苦多々の」(早く白状しろ、言わぬと未だ痛い目に合うぞ)

所謂日本式の中華語である。それでも結構要点は通ずると見えて

「不答不答」(言わない言わない)と喚きかえす。

「この野郎、てんでしぶといチャンコロだ」真赤な顔をして憎々しそうに荒々しく頭をこずく。

「班長殿、どうします。もっと続けましょうか」

打つ方も疲労を感じてか別の拷問を期待しているようだ。潤米軍曹は白い歯をチラリと見せて焦燥的に舌打ちし、血まみれになった裸身をべつすると

「よし今度は丁寧にさすってやれ、ジワジワと氣永にナ」

彼の逞しい裸身が私の身近に迫って来た。濃い胸毛や脛の毛が数えられる程だ。私の方は窓外で暗い為彼からは見えない。思わず生っぱをゴクリと飲んだ。

「ロープを出せ」

間もなく長時間水中に浸しておった長いロープが持出された。タツプリ水を含み恰も鋼鉄の如くこわばっていた。二人の憲兵が、そのロープの両端を握り吊された裸身の大きく開いた股の間へ通しピンと張った。そしておいて太股の内側の柔かい肌をジワジワと摩擦を開始した。

「あっいけねえ、交替時間だ」

腕時計をすかして見ながら村田が慌てて

「梶さん、俺は行くよ。ゆっくり見ていな」

暗黒の中へ姿を消して行った。私は殆ど上の空で聞き流し次に加えられる凄惨な拷問を凝視していた。

「僞快々の諒話不答不信 火弾奈辺奈来？」

(貴様早く言え、手榴弾をどこから持ってきた？)

軍曹が早口できめつける。流石の中国人も相次ぐ責苦に吐く息も苦しげだ。

「冷水冷水進上」(水を呉れ)

「冷水不要快々の諒話」(水はいらん早く白状しろ)

すかさず軍曹は怒鳴りかえす。張られたロープは盛んに摩擦している。太股は柔肌の為見る見る内にすり切れて鮮血がしたたりポタ



りと床上に落ちる。

「こん畜生っ、これでもかっ」

血を見て興奮したのか尚も強くロープを前後に運動させる。吊された裸身を最大限にそろして、少しでも苦痛から遠去かろうとするが、ロープは容赦なく吸いついたように離れない。

食いしばった唇から白い泡のようなものが吹き出て来た。相当な苦しさであろう。だが中国人は馬か豚位しか考えていない彼等は情容赦もなく盛んに痛めつける。

「ぎあっ」

断末魔を思わせる無残な絶叫をあげて中国

人は苦悶する。眼腔は半白となり汗と涙と鼻

水が顔一面に流れ凄しい形相だ。

「こんどは左足をやれ」

潤米軍曹が冷酷に命令する。

再び無疵の内股が引き破られていく。私の胸の内を電流の如き戦慄が走った。誰かが盛んに私の腕をゆさぶっているのが暫くの間、気が付かない位だった。

「梶上等兵殿、班長殿が呼んでいます。早く来て下さい」

はっとして吾にかえると私は慌てて迎えに来た藤崎に、部屋の中の光景を見せまいと彼の前に立ちはだかって追い立てるように、こ

の場を離れて行った。

今日も又相変らず暑い。衛兵交替を悉く申送り、私達は重い銃を担りながら軍隊へ向って中華路を行進して行った。一週間前のそれと変らぬ街の風景だが、私の胸は鉛を飲んだように重苦しい。何かしこりが支えているようだ。

昨夜のあの凄しい拷問風景が私の脳裡から離れないのだ。あの中国人は如何なただろうか、あれ程責められては逆も生きてはいないだろう。温和な目付きをした潤米軍曹に、あのような惨忍な反面があったのだろうか？ 憲兵隊の拷問は極めて残酷なものだとは薄々聞いてはいたが、実際に見たのは始めてだった。

みにくく歪んだ中国青年の風貌、嵐の如き鞭の乱打怒号、呻声、全ては真夏の夜に訪れた悪夢なのか、騒々しい街の喧噪も私の耳に入らぬ程、虚脱状態で行進を続けて行った。

(終)

## 懸賞 (告白と手記と体験) 原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

### ☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしてもでも発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

(注) 登場人物が殆ど現存しています。

すので仮名を使いました。

御了承下さい。



# 「奇譚三十九夜」物語

## △第二十三夜▽

辻村 隆

巷に氾濫する、クリスマス・イブの狂燥曲を遁れて、愛すべき屈男達は、インターナショナルクラブ「K」のスペシャルルームで、静かに聖なる夜の盃を汲み交しておりました。扉を閉すと、防音ルームは外界の騒音を見事に遮断して、なごやかにさんざめく、めんめんの語らいだけが、部屋に籠るのでした。ホステスも去り、ボーイも退けたあと、聴て、ジェキル博士の窮屈なマスクを脱ぎ捨てた、人々の自由の時間が始まるのです。

ゴルフ氏が目顔で一同を制すると、口を切ったのです。

## 第五十四夜 残酷の一夜

「最近、世界を挙げて残酷を求めているようです。『世界残酷物語』『残酷特集』——残酷——残酷……。世の中が平和になると、

平和に飽きた人々が、強い刺激を求めて、残酷なるものに媚集するのです。その残酷さを代表するのが、イエスキリストの、受難像ではないでしょうか——。判で頭をしめられ、掌に釘をさされ、無惨に十字架にはりつけられたキリストの姿に、或る者はその受難に脅え、或る者はその姿を渴仰し、或る者はその嗜虐に胸をかきむしられるのです。十字架を胸にする者にとって、その信仰心と共に、絶えず、嗜虐の像を日夜、夜毎見続けて行かねばならぬのです。

その余り——キリストの受難の像を雛型として、クリスマス・イブの夜に、一夜を残酷そのもので送る風習が残っている部落が、今も九州のS地方にあるのです。

御存知の方なら、ああ、あそこかと気付かれる方もあると思いますが、今宵、クリスマス・イブに、その地の風習を語るのも亦、聖



夜にふさわしいかも知れません。

前置きはこの位にしておいて、扱て……」

山嶺に囲繞された谷間のK部落——嘗って島原の乱で、最も抵抗の激しかった、この部落の人々は、今も聖母観音を拝礼し、血塗られた祖先の魂の復活を希って、伝来継承されて来た、祖先の拷問と屈辱の足跡を、いつ迄も記憶する為、聖夜には、輪番制で当った家が、家族ぐるみ拷問の洗礼をうける風習が、欠けることなく続けられていた。

輪番で、その年の試練に当った家は、家長始め、子供、孫に至るまで潔斎のあと、部落の人々が押し寄せるのを静かに待つのである。陽が昇ると、部落総出でこの家に人々は集ってくる。家は忽ち群集に満たされて、寄ってたかつて、衣類を剥いだり、首に縄を巻きつけて引曳ったり、太い丸太に猪吊りに吊り下げたり、ぐるぐる巻きにして担いだりし乍ら、一族を、谷間のきれ目の崖と崖の間をよじ昇り、見晴しのきくR岳の中腹の広場へと揉みにもんで連行して行くのである。

ゴルゴダの丘と人々はよびならわすこの高見に、その一族の数だけの十字架が立てられてあって、家長を中心に、親や妻、子、孫と順々に十字架に縛り上げられてゆく。

十二月暮れの、寒風吹き荒ぶ高原で、はりつけの一族は、その儘、夕陽の沈むまで、じっと十字架の苦痛を背負わされていなければならなかった。彼等をはりつけにし、縛り、責めたのは、殆んどが、彼等の近親の者達であった。それ程に、この部落は、排他的で近親結婚を以て、何代となく、お互いがやったり、貰われたりして来たのであった。

夕陽が沈み、一族の肌に夜寒が泌み渡る頃合、かがり火をかかげた人々が、続々と、クルスの周辺にむらがり集ってくる。

口々にデウスを唱え、ハライソを念じ、古めかしい、古典的な耶蘇イズムを固執する人々は、新しいキリスト教の在り方など、我れ関せずで、今は判然とK部落式の方法にのっとり、聖いこの夜を、謳歌するのであった。

かがり火に赤々と照らし出された、家長のキリスト受難像の雛型に、人々は口々に祈りを呟やき、懸命の願いをこめて、ぬかづいた。いつしか、祈りの声が合唱に代り、夜空にこだまして、コーラスが響き渡る頃、十字架上の家長の顔は、誇りと歓びに生々と輝やき、檜舞台に立った名優さながらに、ひととき大きくて高いクルスに、全身の喜びをまざまざと現わして、全身の痛みを忘れて一同をへいげいするのであった。

お祈りとコーラスのあと、人々は盃をあげ、肉を焼き、聖夜を、屋外の宴会で飾るのである。今日の輪番に当った家長が、クルスより降され、宴の中心になる事は云う迄もなかった。

こうしたキリスト受難を偲ぶ行事が年々歳々行なわれて来たが、昨年に限って一寸した異変が起きたのであった。

六十七年目に廻ってきた金井家は、幸か不幸が、家長の金井みよしを始め、子供三人がすべて女人だったのである。

みよしの夫は、シベリヤ抑留の噂を残して、遂にこの部落へ帰って来なかった。恐らく異国で病死したに違いなかった。

みよし後家と、三人の娘、万亀子、千鶴子、百合子の四人暮らしで、万亀子と千鶴子は双生児であり、百合子はその翌年産れた、としごであった。上の二人は共に二十一才、百合子は二十才——揃



いも揃った美女許りのこの家は、部落の若い者達の憧れの的であった。草深い山村から、博多や、長崎に出ようとしても、部落の者達が、寄つてたかつて出稼ぎに行かそうとしなかった。都会に出たあとの母の困惑を考えれば、三人の娘は、若い身を都の空を見る事もなく、纏ては部落内の、いとこ、はとこのたぐいと結ばねばならぬ宿命にあった。

良太郎、辰夫、吉司、倉一、昭三、九二松、節夫、功、一郎、郁雄、清、源二郎、等々……。

三人の娘をめぐつての争奪戦に、これらの若者は熱中し、虎視眈々と機を窺い、噂にのぼらぬ男も含めたら、やもめの親爺から、やきもち女房にくさる亭主族まで、キリがなかった。

六十七年目に巡つて来た、金井親娘の、聖なるいけにえの夜を、野郎達は一日千秋の思いで待ち焦れていた。

それに反比例して、彼女達は日一日冬の訪れと共に近づくイブの日を戦々競々として脅え出した。

ゴルゴタの丘まで担いで行く道中、拷問の洗礼は如何なる行為も無礼講になっていた。事実金井母娘も、毎年のこの夜は、人々と出掛けて、途々、いけにえに当った若い娘が、村の若者達によって裸にむかれ、太い丸太に左右の足首を藤づるでくられ、股を思い切り開いた逆さ吊りの姿で、エッサエッサと、みこしの様に丸太をかついで上って行く現場に居合し、眼を蔽った事もあったのだった。

去年までは他人事だった行事も、今年は自分達が直面するとなると、彼女達は、羞恥と、屈辱とで、血の気が引く思いだった。

村の若者達の噂によると、みよし後家も含めて四人を、四匹の牝馬に仕立て、山道を這わせて、部落の村長をのせた馬車を馬代りに

曳かせて、ゴルゴタへの道を上らす計画だと洩れてきた。

聖夜に三人の娘は、恐らく唯の体では済むまいという噂もしきりだった。

その噂を裏書する様に、若者のうから、やからが抜けがけに、そつと後家の戸を叩いては、当日、母娘を守つてやろうと、騎士の役目を申し出てくるのであった。

婉曲に断わると、若者達は、気味の悪い嘲笑を残して、イブの日の覚悟はいいな。と捨てぜりふで帰っていった。

後家と娘達は、ひたいを集めて相談した。降誕祭の行事にかこつて、自分達を衆前で囃りものにしようと云う、この部落から遁亡する事を必死になつて考えた。

四人が力を合せてやっけてゆく気であれば、草深い田舎より、遙かに都会の方が暮しやすく思われた。それに加えて、娘達は余りにも美しすぎた。

「絶対、野蛮なこんな土地から離れるべきだわ。私達二人の、ひなびた唄で、こまどり姉妹や、ザ・ピーナッツのように、旨くゆけば売出せるかも知れないわ——」

千鶴子は、きらきら光る黒耀石のような瞳を輝やかせていった。

「この土地や、山を売った金で、スリーシスターズって純喫茶やるのよ。私達腕によりをかけたなら、きっと繁昌疑いなしだわ」

百合子も眼もクリクリさせ、真剣に母に云った。

「お前達を商売の術に使いたくないけどね。みんな、いい人が出来て、幸福になれたら、お母さん、何も云う事ないわ——。それにつけても、私はもう五十才に近いのだから、何とか我慢出来ても、お前達が、散々弄あそばれ、裸ではりつけにされて、部落全部の眼に、



何もかも曝すなんてこと、思っただけでも身震いするわ——」

「おお、いやいやいや。五年前に、上の家の仲良しの、清ちゃんが、あの年の降誕祭で、十字架から降されたあと、若い者五六人に担がれて、谷に連れ込まれたのよ。何があったか知らないけど、上のじいさんが心配して探しに行ったら、左右の手を藤蔓で雑木の根本に縛られて、血だらけになって凍死しかかってたそうよ。あの娘、その後、別府に行ったけど、自棄を起したって話よ。まるでけだものより集りね——」

百合子は蒼ざめた顔をふるわせた。

「逃げるって云っても、もうイブまであと一週間足らずよ。皆んなで、どうして逃げるの——」

双生児の姉の万亀子が分別気に皆を見廻した。

「若者達は、それを恐れて、交代で見張りしているって話よ——」

「キリスト様を恨みなくなるわ……」

「どうせ、べんべんとしていてもイブの日は、どうなるか分ったもんじゃないのなら、思い切って、皆で逃げましょう。捕まったからと云って、村の年より達もいる事だし、まさか殺しもしないだろう。」

後家は最後に結論を下した。両三度秘かに出逢って、人目を憚かって谷間に隠れたことのある、栗原の庄さんとの、情熱のかけらは、娘達の手前胸に秘めて、せめて、その庄さんに、今夜でも、最後の別れをして行き度い気で、後家は、娘達に身の廻りを整えるように云いつけた。

十二月の二十一日に、毎年恒例の、白木の十字架が四本、若者達の手で新らしく造られた。準備はすべてととのい、あとは、二十四日のイブの日を待つだけとなった。

H町で落合う約束で、先ず百合子が夜蔭にまぎれて二十一日の夜、山をかきわけて、部落から歩一步遠ざかっていった。幸いその夜は、百合子の脱走を誰も気付かなかった。

金井家の表をうろつく若者に、後家は監視と知って、わざと、酒を振舞ってやって、

「イブの夜はお愉しみだね。娘達も覚悟して、どうやら婿えらびする氣でいるよ——」

と嬉しがらせておいた。ジロジロうちらを覗く若者に、

「百合子が風邪をひいてね。その日までに癒してしまわないと、折角のイブの夜が台なしになるから、大事をとってねかしてあるんだよ——。ホレ、ああして寝てるだろ——」

と、奥の襖を開いて、夜具に布団をつめて、こんもり盛り上った、寝床を見せてやったりした。

二十二日の夜、みよし後家は、庄さんと、藁小屋で忍び逢った。

瞬間の情熱が後家の思慮を忘却の彼方に追いやった。

「あたしと世帯を持つ氣なら、私をつれてここを逃げ出してくれない？」

夢中でそう持ち掛けると、かねて、年に似ず若々しいポリウムのある後家の体に、ぞっこん参っている庄さんは、とうのむかしに女房と秋風が吹く仲だっただけに、一儀に及ばず、その氣になって、忽ち意気投合すると、ほんのどちらも風呂敷包一つの身軽さで、駈落ちして、百合子のあとを追って山を降っていった。

二十三日の朝早く、庄さんの女房のはなが、部落中を駈け廻って、庄さんとみよし後家の駈落ちを、氣狂がいのように告げて廻ったので、忽ち部落中は、蜂の巣をつつく大騒ぎになった。二人の跡を追





う者——、金井家の家を取囲むものなど、イブの前夜を控えて、騒ぎは大きくなる許りである。何しろ、祖先伝来、引継がれて来た行事を嫌って、逃げ出した者は、部落始まって以来の大珍事である。万亀子、千鶴子の双生児姉妹は最早観念した。この大事のさなか

に、逃亡など奇蹟に近い。それにつけても、母親が庄さんと駈落したショックの方が、姉妹の方には大きかった。こんな大事になることをしりつつ、情事の前には女の脆さを露呈した事に対して、二人は母の女の弱さに同情するより、母を憎くむ気が強かった。しかし無事に通げてくれることを血縁の娘達はやはり祈らずにはおられなかった。

気狂がいのようになって、女房のはなが駈けこんでくると、

「尻軽女の後家の娘を逃がさない様にしておくれ。イブの日はどうするか、見ているがよい——」

と怒鳴りつけ、男共に、しっかり監視を頼んで、そそくさと走り去っていった。

キリストの受難を想起し、祖先の血の抵抗を忘れ得ぬ為、つくられた降誕祭の行事も、末世となると、本末は顛倒し、唯、残酷を好む、野性の輩の、年に一度の、黒い欲望のはかしどころに過ぎなくなっていた。

プロレスを好む心理から、女は顔を蔽い乍らも、残酷に胸を疼かせ、老人は若き日の、イブの夜の一夜を偲び、若者は野獣と化して、ドス黒い欲望を存分に吐露し、幼少はそれを眺めて、童心に残酷の興味を胚胎させた。

そして、部落の大半が、又、既に、イブの日の残酷の被害者でも



あった。

やられたから、自分も一層、それに輪をかけてやってやろう。秘かな日頃の復讐、反感への正当な報復——。そんな気が誰にも充ち充ちていた事はいなめない。

その年、年によって、残酷さの多寡はあっても、部落全部で六十世帯の家族は、すくなくとも六十七対一の割合で、六十七年目にしか一度廻ってこなかった。既に神聖な行事として、何十年前にいけにえとなった者は、その年、年のいけにえに、一掬の同情を禁じ得なかったが、近々、昨年、一昨年、三年、四年前にいけにえとなった家族程、翌年への拷問や、嗜虐は強かった。幼ない娘を抱えてすました者は、内心、娘の無事を思って、再び巡り来る六十七年目には、娘が既に老年に達するを考えて安堵したが、娘盛りを抱えて、輪番に当たったものは、その被害が一番非道かっただけに、復讐も一きわ激しかった。

人間の一生を支配する運、不運が、祝福すべきイブの日を境として、急転直下にどちらかにきまった。

だからして、金井母娘の如く、美しい妙齡の娘許りの母系家族に廻って来た事は、天の配剤とは云え、彼女達にとって不運の極みであったが、部落の若者達にとっては、一生のうちでも又とない、恵まれた、喜ぶべき降誕祭の夜だったのである。

二十三日の夕方になっても、沓として、百合子も、庄造みよしも見当らなかった。

追手に捕まったが最後と、三人は、それぞれの思いで、必死に逃げているに違いなかった。

過激派は遂に、金井家へドカドカと上り込んでくると、土間の煤

けた大黒柱に、双生児姉妹を縛りつけて逃げられぬ様に監視した。

流石にそれは長老の鶴の一声で、まもなく二人は縄をとかれたが多くの衆目が、二人の一举一動を凝視して、軟禁していた。

はばかりに行くにも、スワと許り、数人がドヤドヤと雪隠をとり巻いた。

娘にとっては壺に落下する、小水の音にすら、憚らねばならなかった。

「いよいよ明日ね、私、自分はどうなっても構わないと諦めているけど、私の眼の前で、千鶴ちゃんが、口にも云えないような非道い目にあわされるのを見るのが辛いわ——」

万亀子は、鏡で自分の顔を見ているような、毎度の錯覚に襲われ乍ら、瓜二つの千鶴子の顔をみつめて、涙をこぼした。

「それは私も同じ事よ。万亀ちゃんが、散々、男達に非道い目にあわされるのを見るなんて、ほんとに死んでもいやよ——」

二人はひしと抱き合って、泣いた。

併し陽は又昇る——。容赦なく、苛酷なく姉妹にとって呪われたクリスマス・イブの、降誕祭の朝が訪れてきた。

二人は身を潔め、惜しげなく香水を全身にばら撒いて、白無垢の聖衣をつけ、胸にクロスのペンダントを抱いた。

夜明けと共に、待ち兼ねた若者達を先頭に、部落の大半が、金井の家をぐるりと取巻いた。乗り込まれる迄もなく、万亀子、千鶴子の姉妹は、物怯じず、悟り切り、透み切った気持で、必死に、聖なる神に祈りを捧げて、静かに、赤々と輝やいた太陽の下に、朝霜を踏んで現われた。

覚悟の前で、二人とも白無垢の聖衣の下には下着一枚、下履一枚



つけず、裸身だった。

ペンダントが朝日に反射して、神々しく、キラキラと姉妹の胸で光った。

黒い欲望を押えかねた若者が、どっと二人に群がろうとした時、

突然、うしろから、

「待てッー」と大きく声を掛けた若者があった。一同はその声に振向いた。

男は上の家の一郎であつた。五年前のイブの夜、妹の清子が、若者達の為に散々弄あそばされ、凍死寸前まで追いこまれたのを人々は思い出し、清子を弄あそんだ連中は、刹那の良心の苛責にフト首垂れた。

「皆聞け——。俺の妹の清子は、五年前の降誕祭の夜を境にして、幸多かるべき身が、今は別府の温泉宿で接客婦に成り下っている。

あれから五年、幸か不幸か、クリスマス・イブに若い女のいけにえはなかったが、待ち望んだ日が遂に來たのだ。脱走、墮落と、神の

思召しをわきまえぬ不詳事が次々と起って、俺達は、この姉妹に、

後家と百合子の分まで負担して貰わねば、神の趣旨に反すると思う。どうか——」

「そうだ。色後家と、妹の分までやれッ！」

「一同の意見は分つた。二人にイエスの荆の道を歩かせてやる。妹のやられた分を、俺がやってやる。文句のある奴は云え——」

一郎は、かねて噂に聞き知っている、妹を犯した連中を次々と睨めつけていった。

「よしッ、異議なしノやれッ！」

一郎はツカツカと蒼ざめた姉妹に近よると、手にした藤蔓で、二

人を後手に犂々と縛り上げた。

二人の縛つたつるの余りを、二人の後手のところであつないで通し、ついで、別のつるで姉妹の左右の足首を一緒に縛つた。二人三脚の姿である。

「よし、素足でゴルゴタの丘まで歩ゆむのだ」

背を押されて、二人はよろよろとよろめき、倒れかけたが、一郎のぐいと引張つた縄尻で、辛うじて態勢を戻して、そろそろと並んで歩くと、霜のおく山道を歩んだ。

打擲、殴打、吊し責めなど、もっと激しい拷問を期待していた一同は、姉妹の美しい縛しめの姿に、多少期待外れだったが、楚々として歩ゆむ、二人の白衣の姿は、残酷さを超越して、女が美しく、瓜二つの美女であるだけに、氣をのまれて、ゾロゾロと前になり、うしろになつてついていった。

いわばそれは、残酷美とも云えようか——。

小石にけつまづき、凹みに足をとられそうになつて、倒れかかる、一郎が巧みにつる尻を引いてかばつた。

ゴルゴタの丘には、長老達が待っていた。毎年の如く、型通りの祈りが終ると、万亀子と千鶴子は、一郎の指揮の下に、人々によって、犂々と十字架に縛りつけられた。一郎は胸から腰、そして太腿にかけて、故意にぐるぐると縄をしっかりと巻きつけて縛つた。

まるで分身のようにそっくりな、二人の美女が、三尺高く、十字架に掛ると、人々は今更のように、その美しさに眼を細めて眺めた。二人は天使のように清らかで、澄んでいた。今は、軽い仄かな微笑みすら、マリアの如く頬に刻み込まれていた。

夕陽が落ちる頃迄、若者は走りかねて、夜をその場で待っていた、



黄昏が濃く、夜の幕と共にかがり火が焚かれ、二人の美女を中心に、円周になった人々は、祈りを終え、そして宴に入った。

皆の手で二人はクルスから降ろされた。

どっと、若い男の手が、二人の全身に飛んだ。その時――

「俺がさらってゆくぞ――。文句のある奴はついてこい――」

一郎が脱兎の如く二人の手を両手に攬むと、風を巻いて、山を駆け降りていった。

「何を――」

「二人もいかれてたまるか……」

どやどやと一団が、それを追って走った。

樹が鳴り、梢が揺れ、風が捲き上ったが、やがて、一人又一人、気不味げに戻ってきた。一郎と、万亀子、千鶴子の姿は、宵闇の山中にまぎれて、探せなかったのだ。

「俺は、清子のように二人をしたくなかったからだ。聖なるべき夜に、犯されて不幸になった女は妹一人で沢山だ。」

一郎は、前日に木蔭に隠しておいた、黒衣を二人にきせかけて、白を黒にかえて、闇にまぎれ、目星をつけておいた、窪みに身を潜めていたのだった。

「何もなかったのだ。あんた達は、部落を去ってもよし、この部落にいてもよい。幸い、長老は、この悪習と化した慣わしを廃止する事に踏切った。俺の努力が実った様だ。しかし、俺は清子が犯されたと知って激しい憎悪にかられ、妹を手籠めにした連中を片っ端から殺してやり度いと思った。そこで俺はもう一度反省した。魂をきよめ、世界をあげて祝福している、クリスマス・イブに、俺達は、慾望の吐け口を見出していたのだ。と云っても、この部落の風習を

都会の奴等は、果して笑う事が出来るだろうか――。イブに名をかり、凡そキリストに縁なき衆生が、クリスマスに便乗して、商売人は必死に売りまくり、アルサロ、バー、を始め、スタンドに到るまで、パーティ券を出して必死の客集めに奔走している。偽而信者、一日信者は、もっともらしく『聖しこの夜』を酔興に唄って、オルナイトの夜の、連れ込みホテルは満員で、肉の饗宴に狂っている。何ら変るところがないではないか。楽しみの薄い山村で、クリスマス・イブに発散する、若い男の慾望――、それを怒る前に、俺自体、清子が犯されていなかったら、恐らく皆と同じ様に狂っていただろうよ。日本國中、若い男の黒い慾望は、あんたの方が美しいだけに、どこへ行ってもつきまとうだろう。部落の男達も、根は善人なんだ。年に一度の許された悪習が、善人を悪魔やけだものに変えてしまうのだ。あんた達を触らせたくない許りに、十字架に縛るに胸も腰もしっかり縄でしめておいたのだよ。

朝まで、ここで潜んでいたら、家へ帰りなさい。今後、おそらく誰もあんた等にいんねんをつける者はいなくなるだろう――、じゃあ……」

一郎は立上った。二人は同時に「呀っ」と声を立てた。同時に恋をしたのである。

「聽て、今年もイブの今宵を迎えました。K部落では、恐らく、長老を中心にして、嬉しい、聖なる――、誠、聖なる、イブの宵を、神に感謝しているに違いないでしょう。」

えっ、万亀子と千鶴子は、一郎とどうなったって……。さあ、それまではネ……この回答は、いずれ、ザ・ピーナッツか、こまどり姉妹が、誰か一人を同時に恋をした時に、その回答を与えてくれ



る事でしょう。」

ゴルフ氏の話は終わりました。

防音の扉を、排気と、立ちこめる紫煙を追い出す為開くと、途端に夜の巷から、ジングルベルの狂燥曲が、これ聞えよがしに流れ込んで来ました。一同苦笑——、扉を閉ざして、静寂が戻って、ついでナイロン氏が二番手の語り手として口を切りました。

## 第五十五話 続、残酷の一夜

「こうしたゴルフ氏の話の風習は世界どこにもある様です。『世界残酷物語』にも、警官の制止を振り切って、硝子の破片で、我れとわが腿を、脚を傷つけ、血みどろになって、走り廻る、これも謂わば、キリストの受難を偲ぶ、自虐のひとつの現われでしょうか。」

今こうして集う、私達も、クリスマス・イブに名を藉りて例会を開いたものの、何らイブとは関係ないのです。一日信者、偽而信者と、そこまでは思わなくとも、世間のクリスマス景氣に、何となくじっとしているのが勿体なくて、忘年会のつもりで、許されたオールナイトの一夜を、年忘れ気分で遊んでいる輩と云ったところが、案外本音ではないのでしょうか。ジングルベルに浮かれ、アルサロで、メリークリスマスと叫んだ連中が、正月には、神妙に神詣でをし、テレビの『越天楽』の雅楽に、正月らしい気分になり、まろびやかな琴の音にききほれて、洋酒で乱癖騒ぎした一週間前をケロリと忘れて、おとそを有難がって、勿体らしくのみ、ぞういを啖っているのです。

これから話をする、戸波浩三君も、謂わばこうした連中の、悪気のない一人と考えて下さればいいのです。」

ボーナスを貰った途端、課長から呼ばれて、一枚金二千五百円也の、クリスマスパーティー券を、半ば強制的に買わされた時には、流石に戸波君もぐっと来たが、そこは宮仕えの悲しさ、有難く押し戴いて、二千五百円を課長に手渡ししてそそくさと、自分のテーブルに戻った。

「うん、君、恩にきるよ——だって。畜生ノ来春の定期昇給で、手加減しなかったら、承知しないから——」

将来の布石のつもりで、一枚買わされたものの、チャイナサロン『香蘭』の毒々しい赤いパーティー券には、彼は余り食指が動かなかった。イブの夜に行けば、二千五百円のパーティー券ぼっきりで絶対済まない事を、戸波君たりとも知っていたからである。

△二千五百円ありや、ゆっくりあの娘と、ダンスパーティーに行つてメシが喰えるのになあ——▽

それでも翌日の黄昏れが近附くと、やはりそわそわして、社が引けるのを待ち兼ねて、彼は、お目当てのチャイナサロン『香蘭』のドアを押していた。大阪キタの盛り場はネオンに空の色まで、妖しくピンクに染まり、近頃名物となったスモッグが、冬の街を、ソフトに包んですべてが朧に霞んでいた。

「御指名さんは？」

丁寧ながら押付がましいボーイに、

「ないよ——」

彼はブッキラ棒に答えると、テーブルに案内された。腿まで割れたチャイナ・ドレスに身を固めたホステスが、今宵限りと、ここを先途と右往左往するうちに、本番の女が向いに座った。何となくソ



ワソワしているのは、かけもちなんだろう。二千五百円が泣き出し、たくなる様な、クリスマス・スペシャルセットと銘打つ料理も、知る人もなければ、何となく味けなく、辺りの馬鹿騒ぎにもついて行けず、戸波君は、キリストの受難像そっくりの非道く物悲しい顔付で、やたらに煙草をふかしていた。



「ちょっと……」とホステスは去り気なく立上った。交際いきれなくなつたのだろう。

ポッネンとしていると、軽く彼の肩を叩いた者がある。うんと最低のルックスに落したホール内で、一瞬誰かと、じっと眼を据えて、彼はあつと声を挙げた。

「町野さんじゃないか——驚いたなあ……」

町野と呼ばれた娘は、婉然と笑って、チャイナドレスの裾を軽く捌いて、彼の横に坐つた。

「ヘンに沈んでるのね」

「面白くなくてね。課長に無理矢理買わされて来たんだが……それより君は又どうして……」

「会社止めちゃってこいよ……昼は洋裁——」

課長に十枚許り買わせたのよ。ううん、買わせるだけの理由大ありよ。その一枚が戸波さんの手に廻つたってわけネ——」

「買わされる原因って、課長に何か……」

「大ありよ。現在、課長を飼育してやってんだもの……」

「シイク??」

「飼いならすってこと。お分りかな……」

「?……」

町野妙子は大きく笑った。

「私、オールナイトは御免だわ。十一時にこ



こ出るから、裏口で待っててネ。飼育中の実況を見せてあげるから……」

× × ×

妙子と戸波を乗せたハイヤーは、大阪府下のマンモス団地K園へ、行き交う車を、巧みに縫って、夜を裂いて京阪国道を走った。今夜のアヴァンチュールに、俄然戸波の胸はチャールストンを踊り出した。

妙子の口から、軽い洋酒の酔いの匂いが吐き出されて、ムーッと甘く、戸波の鼻腔をくすぐった。

いつもは寝静まっている団地も、イブの今宵は、夜の十二時過ぎと云うのに、あちこちの窓に灯がまたいたっていた。

町野妙子はタイプピストとして、戸波の会社に就職し、ナンバーワンの存在であったのに、急に何の原因もなく、会社をやめた。

部長、課長から、随分うるさく云いよられたのが原因だと、もっともらしく云うせんさく好きの社員もいたが、新進の戸波にとって、余りにかけはなれた美人すぎて、到底、所詮は高嶺の花と、秘かに眼を慰さめていたに過ぎなかった。

その彼女と、同じ車中で膝もすれすれに、しかも心なしか体をもたせかけてきている。男冥利これに過ぎたるはなく、戸波としても、夢でもいいからと云った心境にならざるを得ない。

車を団地の入口で捨てると、妙子は自分から、戸波の腕に手を組んできた。

「夕方六時から十二時まで——都合六時間、随分待ちくたびれている筈だわ——」

「えッ、誰が?……」

「課長の籤田よ——」

「ここに居るの……」

「彼が私の為に借りてくれたのよ。課長の分際で生意気とは思わない……」

「さあ——」

「部屋へは戻って入るのよ、そして、私の命令通り動くのよ。分つて?……」

「いいよいいよ」

「部屋に入れば私は女王——。やがてその意味分るわ——」

謎めいた言葉を投げかけて、妙子は三階に昇ると、一二号室の錠に鍵を入れた——

眼で合図して、人差し指を口にあてると、シートと云う素振りや、彼女は足音を忍ばせた。扉があいて、右手の壁のスイッチをあげると、ポツと部屋は螢光灯の間接照明で明るくなった。デラックスな洋室である。

カーテンの奥から、その時、ウームームと、動物めいたうめきがきこえた。

戸波の足がピタリと震えた。

妙子は静かに戸波の体を押して、ステレオと洋酒棚の隙間に体を入れさせ、かがませた。

「声を立てずに見ているのよ。何が起っても驚いてはダメよ——」妖精のような笑みを溢えて、妙子は右手で顔の前で丸をこさえると軽く振った。OKねと云う意味だろうか。戸波はやたらに咽喉がカラカラに乾上ってゆくのを覚えた。

「おとなしく待っていたのね。よしよいい子だ。少しラクにして



あげるよ——」

妙子はカーテンに声をかけて、素早く衣服を、軽やかなネグリジェめいたゆったりと胸の開いた服に換えると、カーテンをサッと開いた。

そこに展開した光景に、戸波は思わず、呀っと声を立てそうになつて息をのんだ。

彼も既におなじみの、あの威張りくさった課長の簀田が、中年肥りの肥軀をさらして、股にサポーター一つの姿で、横ざまに転がっていたからである。両手に手錠をはめられ、両脚にも足錠をはめられて、手錠と足錠が、サポーターと見た腰の革褌のバンドの尾錠に細鎖でつながっているのである。首には軽金属の金の盆が首枷のようにはめられ、盆につけられた鎖が、ベッドの鉄枠につながっていた。しかも、簀田の舌がぐっと口中から突き出されて、舌端をとげのあるクリップのようなもので挟まれて、クリップの先が、盆の上の小環とつながっていた。舌を思いきり出した、この恰好で手足を拘束された儘、課長はこうして、妙子の帰りを待っていたのだらうか。ハアハアと吐く息と、あああと云う苦しげな声ならぬ声が、簀田の口から絶えずもれていた。

妙子は近寄って、両手足をつないだ、腰の尾錠の鎖を外してやった。尺取虫のように彼は手足を不自由氣に屈伸させた。舌のクリップを外してやると、簀田は泣声で大きく訳の分らぬ事を口走った。

「又、よだれね——、こんなに首の盆をぬらして……。駄目じゃないの。未だ未だ私の奴隷としての用は足せないわ」

「ごほうびを下さい——」

「待ったごほうびなの——。一人前に催促するのネ。ホラ、口を開

けて……」

妙子は鼻をツーンと嚙り上げ、口をもぐもぐさせて、口中に唾液や鼻汁をためると、アトンと口を開いて四ッ這いになって首をもたげている課長の口に、ツーンと糸を引いて、一塊の唾液を四、五十センチ上から流し込んでやった。ペチャペチャと味わうように課長は嬉しそうに舌を鳴らした。

「あらッ、又もらしたのネ。濡れてるじゃないの床が、すぐ掃除するのよ——」

「ハイ」

課長は素直にうなづくと、不自由な体をねじらせ、床に顔をつけて、舌を出して、自分の体内から洩れたものを、ペチャペチャとなめて、ほこりと共にのみ込んでいった。

「愚図だよお前は。さあ、もっと早く早く——」

妙子は容赦なく、スラリと伸びた真白い素足で、課長の頭を力一杯蹴飛ばした。

「今日は特にお客さんがあるので、トイレに行くけどね、便器は綺麗になめておそうじしておくのよ。いいネ。そのうち、お客さんに逢わして、お前のその愚図で間拔けで、情ない姿を見せてやるからね——」

「ハイ、奥様、光栄でございます。お客様は芳美様ですか、小百合様ですか、それとも、三ツ矢夫人でございましょうか——」

「女じゃないの、男よ——。それもよく御存知の人よ——。もう出て来てもいいわ——。出ていらっしやい」

と、云われても、戸波は足がふるえて腰が立たなかった。余りの意外さに度胆をぬかれたのである。



オズオズとそれでも、戸波はやっと、明るい床に現われた。

戸波を見上げて、ギョッと課長は顔色を変えた。

「貴様は戸波——」

怒りに震えた声だった。

「何よ今の言葉——。それがお客様に対して奴隷の云う言葉なの——。罰則第八号を直ちに適用するわ。戸波さん、その机の上に鞭があるでしょう。それで、こいつの体のどこでもいいから、三十回、力任せにぶってやって頂戴——」

「そ、そんなこと、ボ、ボクに出来やしない——」

「ダメね。人間や課長と思うから出来ないのよ。これは家畜人と称する奴隷よ。こうして打つのよ——」

妙子の手に鞭が握られて、いきなり、たるんだ課長の腹に鞭が風をきって飛んだ。

「グエーッ——」

課長の体はえびの様にかがみ込む——。

「こいつ、女のお客様さんなら、喜んで迎えるのに、男だとこんな素振り見せるとは、けしからんわ——」

「で、でもボク——」

「命令よ——打つのよ——」

妙子はいつしか、戸波にも女王のように振舞い出した。

おずおず鞭を握り、ゆるく、軽く、四五回打つうち、日頃の反感がムラムラとよみがえり、戸波の鞭に力が入った——。

「ウーム。おのれ……」

課長はうなり、咆えた。

妙子は精巧な嵌口具を手にすると、課長の口をこじあげ、口中深

く押し込んで、強くしめた。言葉がもれなくなった。

「どう、戸波さん、良い気持でしょう」

「ハアハア息を切らして戸波はうなづいた。

「戸波さんの前だから、今夜はよしとおくけど、この家畜人は、人間のたべたかすを食物にしているのよ。喜んでのんだりたべたりするわ。」

「いろいろ調教の方法があるのよ。もっと見たい？」

「ボ、ボクは……」

「見たいの——そう、じゃ続けるわ。その黒い袋をこいつの頭からスッポリとかぶせて頂戴。首でしめるのよいいわね。心配しないで息抜きの穴はチャントつくってあるから——」

云われる儘に戸波は課長の首許までスッポリと黒い袋をかぶせ、首許で紐をしぼって結んだ。妙子は近附いて、馴れた仕ぐさで、手錠の両手の間隔の鎖をひろげ、両脚の鎖も広げた。

「十分間——よしと云うまで這うのよ。立上がったら、戸波さん、そのムチで殴りつけて頂戴——。いいこと、ハイ……」

盲猫がソロソロ這い廻るように、課長は四ツ這いになって這い出した。

妙子は、右よ——左……と、わざとものにつき当るように掛声をかけ、ゴッソと頭をぶつつけると、手を叩いて笑った。

ぐるぐると這い廻る課長を、ベッドから眺め乍ら、妙子は戸波を手招きした。

いきなり戸波は体を抱きしめられ、妙子の熱っぽい唇が彼の唇に重なった。

唇を離すと、妙子は、課長に聞えよがしに、ウーンとかアアと



か、甘い溜息をきかせて、ベッドの上で体に弾みをつけた。ベッドがきしみ、妙子の偽りの媚声に、課長はビクリととまり、そして哀れに何時までも、中止の声のかからない儘に、ぐるぐると床を這い廻っていた。

悪夢の一夜を過ぎた思いで、重い瞼をこすり乍ら戸波が出社すると、簀田課長は一足先に課長の椅子に背をもたせ、ジロリと彼をべつした。

ムラムラと戸波に反感が湧き上った。ツカツカと課長の机の前まで進むと、丁寧に一礼して、開き直った調子で云った。

「課長、昨夜は分けて戴いたパーティ券のお蔭で、凄く愉快な一夜を送ることが出来ましたよ。」

「それはよかったね」

課長はニコリともせずに出て、ピースをとり上げた。カフスの口から覗いた手首に、歴々と昨夜の手錠の残痕が、薄黒く跡を残していた。

午後、総務部長によばれて、恐る恐る室に入ると、T県の奥の電源開発の現場出張所に転勤を命ぜられた。十二月二十六日附で転勤である。正月は山奥だ。戸波はこの人事に課長の蠕動をありありと感じとった。

一夜の秘密を知った結果、戸波は恐らく定年まで、うだつの上らない、地方廻りの平社員で過ごさねばならないだろう。

部長の前で、簀田課長の醜行を洗いざらいぶちまけた上、会社をやめたくなった彼は、口を切ろうとして、諦らめて貝殻のように閉じてうなだれた。

何気ない動作で、手を挙げて頭を撫でようとした部長の手首に、課長にも勝る、黒い手錠の残痕がありありとしるされていたからであつた。

部長も課長も同じ穴のむじなか——。

町野妙子と云う、世にも美しい妖精の女王に踊らされる、男共は、総務部長や、簀田課長以外にもまだまだいそうに思えて、戸波浩三は、一枚裏の世の中の機構と云うものは、何が何だか、薩張り分らなくなってきたのである。

「ああ、俺も飼育して貰いたくなつた——」

「兎角、浮世は倒錯的なものが、幅をきかせる時代になりました。

一概に云えませんが、経験から割出して、筋肉質の神経的な細い男性はサジスト、豊軀、デップリの重役タイプはマゾヒスト——。そうも云えませんかねえ」

ナイロン氏はそんな言葉で話を閉じました。

「我々ここに居る男性は、それじゃ殆んどマゾヒストで、スバル氏ぐらいが中間的存在になるって理論だぜ——」

「だから一概には云えないって断つたよ——」

「とかくサラリーマンは残酷物語の最たるものさ——。世の中、すべからず無責任野郎がいるって時代さ」

人々は誰からともなく立上りました。オールナイトを謳歌して、無責任野郎のウジャウジャとうじゃつく、クリスマス・イブの巷へ、八人の退屈男達は、三々五々散って行きました。

今夜のお話は、ハイこれまで——。



# イエロー・セックス

芳野眉美

## 性傾向

ぼくはSでもMでも無い。ぼくは女性の尿に関心を持っているだけだ。

この性傾向に理由は無い。同傾向のグループしか理解されない性傾向だが、ぼくは失望していない。

概念的な学術用語で理論的に裏付けする興味は無い。その必要は無い。そのことに何を考えねばならぬのだろう。考えることは何も無い。求めればいいではないか。

そうしたい衝動を考えるとなしに咄嗟に行動に移せないのが現代の欠点だ。性傾向の

要求に対して、簡潔に、スピーディに、兇暴に、そしてあくまで無表情に行動に移行することは誰もがどこかで望んでいることではないだろうか。

ぼくは自分の性傾向を愉しむ。

中野安太郎さんに会うと

「飲みに行こうか」

とか、

「飲みたいな」

と、これが挨拶のかわりだ。酒の話では無い。銀座の喫茶店で話をしているのだが、別に声を小さくしているわけでもない。和服のウエイトレスがコーヒーを静かにテーブルに

置いてゆく。ぼく好みの丸顔でふくよかな髪はアップで、グリーン一色の和服に、かかとの高い草履のウエイトレスが化粧室のドアを押すと、ぼくの腰は落着かない。

「飲みたいか」

と中野さんは笑う。

「マダムや彼女たちのネクタールをタンブラーに入れて飲ませるバーはないか」

「ネクタールオンザロックですか」

「冷たいとまずいな」

「ホットネクタールなら」

「沸すのかい」

「まさか、オールドファッションングラスを暖



めておいて、直接に注げばいいでしょう」

「黒いレモンピールが浮いているわけか」

ぼくは原忠正先生から中野安太郎さんを紹介された。ネクタールに関しては国宝的人物である。以来兄事している。二人の対話に不潔感はない。その時呑んだのが如何にうまかったかという話である。あそこのバーテンは腕がいい、カクテルがうまいという話と同じである。いたずらに卑屈になったり、屈辱を感じたり、劣等感を持つことは無い。各々愉しんでいるだけだ。

「この間はむやみに飲みたかったな、飲みたくなるとどうにもならなくなる」

中野さんは女学生以上であれば別に好みは無いそうだ。特に中年の婦人のが好きだ。ぼくも誰でもいい。この頃肥満した女性が妙に気になって仕方がない。妊婦でさえひきつけられる。イメージがあるからだろう。中国服の婦人には全く弱い。

「吞ませてくれる人が居たら教えろよ」

「吞ませてくれる婦人を求むって広告しましょうか」

## 共通の恋人

(S氏の手紙)

……女主人は私にウロラグニイを要求します。人間らしい態度を取ることは許されないので。女主人は私をスレーヴと呼んでいます。

この頃、奴れいを飼うから探せと命令します。それで、貴兄を紹介しようと思います。ネクタールを通して二人の共通の女主人にしようではありませんか。女主人は貴兄をスレーブ二号と呼んでいます。

どうにもならない欲望を絶望感から少なくも逃れることが出来ると思います。これからはいたずらに内攻的に煩悶している時ではありません。あくまで自分の性傾向に従ってノーマルに健康に生活していきたいと思えます。

貴兄が女主人とどんな関係になろうと私はジェラシイはありません。コキユの味もまたいいものです。(以下略)

その女性はハイヒールを履くとぼくより背が高かった。とても十九才とは思えなかった。眼が大きくきらきら輝いて印象的であった。声が一寸鼻にかかって愛らしかった。浅草のバーで種々と話をした。

「私とてもロマンチストなの」と彼女は云った。

「Sを本当に飼ってやろうかしら」

その後のS氏の手紙だと、S氏は彼女と別れたらしい。たまに思い出してなつがしがっている。今何処に居るだろう。もう一度会いたいものだ。忘れられない。

(K氏の手紙)

……貴兄に私の女王様を紹介したいと思えます。女王様は緊縛と舌による奉仕を好みます。その時の緊縛フォトをお見せしましょうか。

貴兄と二人で女王様に責められたら、さぞ楽しいことでしょう。女王様もそれを望んでいます。バストイレ付のホテルで女王様のネクタールを吞みましょう。(以下略)

その女性にはある事情で会えなかった。残念であった。緊縛フォトは見せてもらった。サディスチン春日ルミのマゾフォトだと思えばいい。リアルでここには現せない。

(A君の手紙)

……僕は高校二年生です。僕はなにかにつけ従姉に責められています。従姉は鷹野めぐみさんそっくりです。バーで大学のお友達と呑んで来た時はきまって従姉の尿を吞まされます。従姉はぼくをからかって舌人形と呼ぶことがあります。鞭打ちはあまり好きでないよ



うです。打たれたことはありません。

上京した頃はそうでもなかったのですが、婚約してから僕がびっくりするほど綺麗になりました。従姉はグラマーです。背も胸も僕より大きいです。体重でもかありません。婚約してもこの奇妙な癖は直りません。結婚したらどうするつもりなのでしょう。従姉は笑っています。

芳野さんの小説を読みました。読者通信欄で住所を見つけたので手紙を書きました。従姉もお会いしたいそうです。よろしかったら何かプレゼントしたいものがあるとか。(以下略)

目印はジャンジュネの「泥棒日記」で、新宿のバーのある喫茶店で待ち合わせた。定刻から二十分待った。自己紹介するまでは妙にテレしてしまうものだ。勇気がいるのに気がついた。

「婚約中だそうですね」

と云うと、

「途中下車ですわ」

と笑った。ブランドーを飲みながら、

「プレゼントが知りたい」

「ここではお見せ出来ませんわ」

「見せられないのですか」

それに答えず、

キスオブ ファイヤー

美徳のよろめき

彼女はイヤと云わなかった

昨夜の出来事

と並んでいるバーのメニューを読んでふつと笑った。ポピュラーなカクテルだが、国産でオーソドックスではない。

「どこで戴けるのです」

「どこにしましょう」

笑うと眼が細く両頬に二つのエクボができた。肥満しているというほどではないが、かなりのポリウムであった。その見事な乳房の隆起だけで、ぼくはA君と交代してもいいと思った。その肉体に圧倒された。

「Aは空想家なんです。Aの手紙に書いてあることなんかウソですわ」

と否定し、

「コルセットが苦しい」

と酔ったようであった。そして急に、

「恥かしい」

と頬をおおった。

プレゼントをA君から受取ったのは、それから一週間ほどしてである。手紙があつて、「御希望どうり、汚せるだけ汚してさしあげ

ました」

見憶えのある赤いナイロンパンティであった。それから二度彼女は途中下車をした。昨年の春女子大を中退して挙式した。

A君は大学ではぼくの後輩である。

(E夫婦の手紙)

ぼくの要求に対して、E氏から、「妻さえよければかまいません。要求が要求ですから妻に相談して下さい」

という内容の手紙を受取って、あらためてE夫人にあからさまに手紙を書いた。その返事で、

「私の排泄物を呑みたいなんておかしいですわ。夫は承知してくれました。でも困ります。私、そんな趣味を持っていないのですもの。なにしろ、芳野さんの要求が要求ですものね。どうしたらいいのでしょうか。芳野さんに吞ませてみるのも面白いって夫は云います。夫の前でもいいかしら。」(以下略)

E夫人は廿七八、どっちかといえばS傾向の女性で、鞭に興味を持っている。

「男を裸にして自由を奪ってから鞭で打つのが好きです」

と簡単に云うE夫人の印象は強烈で生々しい。日本人はなれのしたセンスがあつてやり



きれない。

「傷跡は一週間消えませんが」

一月前座談会が終った夜M傾向のぼくの友達達が事実実験台になったのだから、小説を読

んでいるのと違って、どうしても実感がこもる。だからぼくの要求に対して、

「鞭なら今夜でも」

とお茶をだしながら人事のようにE夫人は

云う。しかし、ぼくは鞭には興味が無い。

E夫人の豊満なヌード・フォトを見ていると、鞭を持った裸のE夫人に縛られてみたいと思ひ、鞭のかわりにその次のシーンの責めを変えるわけにはいかないだろうかといつも思うのだ。E夫人のヌード・フォトはぼくを苦しめる。どうにかならないものか。

E夫人のショーツを盗んでくればよかった。台所に汚れものを入れておく籠があったのに。

### アウトサイダー

自分の性傾向に従った生活をする人をここでアウトサイダーと仮称する。その意味に於てこの言葉を使う。アウトサイダーはインサイダー（社会人）としての生活の外に、自分の性傾向に於ての生活をしている人である。

自分の性傾向にコンプレックスを持ち、アブノーマルを卑下したずらに不健康な考えにと苦しめられている人は含めない。それはアウトサイダー以前である。いわゆるノーマルとアブノーマルの境の悩みをモチーフにした純





文学作品で読めばいい。ここでは問題外である。あくまでアウトサイダーに就いて触れたい。といつてもただ例をあげて説明するだけである。ぼくはまだ批評する知能も経験も持ち合わせていない。なんとなくぼくが考えていることを書くだけにすぎない。

アウトサイダーがぶつかるのは、従来の道徳や常識であり、いわゆるノーマルな観念や概念であり、社会人としての家庭的社会的地位の壁だろう。インサイダーでありながら、その性傾向に於てアウトサイダーにならないければならない故に、そこに問題があるのだ。

KKの愛読者座談会で種々な人に会った。

B氏はS傾向で、女性を緊縛することに興味を持っている。何人かパートナーを見つけてプレイをしたものらしい。だが、まだ満足したわけではない。その相手にB夫人を教育しようと考えたのだ。B夫人にそんな趣味は無い。KKなど読む人ではなかった。それで家庭にSMプレイを持ち込むB氏のプランは失敗した。教育したプレイは相手が反応が無ければそれだけの興味は薄れる。プレイはあくまで対等でなければならぬ。B氏は、「Mの女性と結婚したら、どんなに幸福だろうか」

と云った。そして家庭は家庭として、プレイだけのパートナーを求めている。しかし夫人の教育は失敗しても、夫人がMになって夫に従わなくても、B氏は夫人の愛情は疑っていないと断言した。日常の生活では夫人の愛を受けて幸福なのだ。

「離婚しようなどとは思いません」

とB氏は話を結んだ。

「私は離婚しました」

とS氏（前に手紙を紹介した）が云った。

ノーマルな性生活にあきたらずS傾向の女性と結婚したというのだ。

「妻は自分に対して私がマゾであることを喜んでいます。そして、私以外のマゾの男性が妻に仕えるとしたら、大変愉快だと云っています」。

SとMの結婚で同席した人々から当然祝福された。

ここでやめておきたいのだが、最近の手紙に、

「結婚という現実にはマゾ感を減じます」

とあった。どうもうまくいかないらしい。

「外でプレイだけの相手を求めています。プレイだけでは嫌気がさす時があるのです」  
ぼくは返事を書きようがなかった。

アウトサイダーとしての生活を家庭生活にまで持ち込むか否かで中野さんや、中野さんに紹介された名前もなつかしい『三吉』氏と話しをしていた。（森山美歌さんの「ロマンチックなサディズム」参照。）

「NでもMでも性傾向を家庭の中には入れたくない」

と云うのが『三吉』氏で、

「結婚は考えない」

中野さんはそれを評して、

「彼は経済的にプレイだけのパートナーを見つける実力があるから、それでいいかもしれない」

と云い、

「ささやかに妻を教育して満足しているSやMもあって不思議じゃない。教育されて次第に興味を持ってくるのが夫婦の仲だ」

「家庭の幸福を味あいながら、外でプレイを楽しんでいる人もいるわけだ」

「ぼくは家庭を犠牲にしている」

と『三吉』氏は笑った。『三吉』氏は独身だ。

E夫妻や羽村京子夫妻をうらやましく思うという結果になった。典型的なアウトサイダーの夫婦ではないか。それがたとえ演出され



たSでありMであっても、家庭生活と性傾向に従ったアウトサイダーとしての生活を一致させたのだから。サラリーマンにとっては会社の仕事は生き得る為の生活の一手段にすぎない。セックスを考えた場合、家庭生活、夫婦生活こそ自分の時間であり、自分の生活なのだから。

アウトサイダーとして行動することは種々な障害や不安が絶えずつきまとう。スキャンダルに巻き込まれたインサイダーの生活、即ち自分の生活を根こそぎ抹殺される可能性もある。スキャンダルを利用して、スキャンダルの上でうそぶくような自我の強い人でないと、アウトサイダーとしての生活をするには無理なのかもしれない。アウトサイダーの問題も畢竟自らの問題であろうか。単にプレイだけのパートナーを求めるにしても、性傾向に従った結婚に入るにしても、如何に自分を強く表現するかしないかで求める結果も違ってくる。

アウトサイダーとして行動する場合は、いわゆる従来の道徳や日常の常識ではあてはまらない。普通の恋人などと云うと三角関係と誤解されるのがオチである。恋人の貸借関係というのはアウトサイダーの世界しか成立し

ないのである。すべてはインサイダーとアウトサイダーの根本的な考えとの差なのである。はっきり区別して行動に移るべきだろう。自己の性傾向に従って、自己を強く表現し、行動に移行することは困難だ。しかし行動に移してこそ、アウトサイダーとしての生活があり、そこに自由がひらけるのだ。

「ぼくたちは天使みたいなものですよ」と『三吉』氏は笑った。ぼくは頷いた。

### 夕美夫人

ある日の昼すぎ、夕美夫人の部屋でお茶を飲んでみると、夫人が立ちかけた膝を折って

「のむ？」

とぼくに聞いた。返事もしないのに、

「湯殿がいいわね」

ふと小菊紙を持つとうとして、

「あら、いらなかったわね」

と微笑した。

夕美夫人はSでもMでも無い。そういった趣味とは全く無縁な人だが、これは一種の昼の情事に違いなかった。

夕美夫人に対して、ぼくはMを感じていない。夕美夫人はぼくの親しい従兄の恋女房だ。二人の間に子供は無い。従兄とは子供の頃一緒に寝た仲なので、結婚してからよく遊びに行った。新婚家庭が高校の帰り道にあったためもあった。

夕美夫人がぼくの性傾向を知ったのは偶然であった。KKに投稿した際、従兄の住所を無断で拝借していたので、贈呈されたKKを知らずに夫人が開けて見てしまったからだ。従兄に話しておかなかったのは不注意であった。まさか開けるとは思わなかった。それも十二月の三十日の夜であった。

「読んだの」

「読んだわ」

「そう」

「うそでしょうあんなこと」

「註」ぼくは女性の尿が呑みたい、と書いたこと。

「ほんとだよ」

「いけないわ」

「夕美さんにわかるものか」

「こわい顔」

「——」

「怒ったの」

「——」

「勝手に読んだから怒っているのね」

「——」



「どうしたの」

「帰る」

新年の挨拶に来た夕美夫人を、ぼくはさけた。夫人に知られたことがなんとなく嫌であった。夫人がぼくの小品を読んだことがどうしても許せなかった。二階の部屋で壁をにらんでいた。しばらくして障子が静かに開いた。私の手にお年玉が置かれた。

「まだ怒っているの」

「怒ってなどいない」

「前のも読んだわ」

「そう」

「あの雑誌買うのとても恥しかった。夫には内緒にしてあるの」

「云ったっていいよ」

「こっちを向きなさい」

「――」

「向かないのね」

ぼくは机の上に頬で手について正面の壁をにらみ続けた。

「うそでしょう、あんな小説」

「うるさいなあ、ほんとだよ」

「やっと私の顔を見た」

「ちえっ」

「そんなに女の人のが呑みたいの」

「呑みたい」

「不潔だわ」

「夕美さんなんかにはわからない」とぼくはまた繰り返した。

「どうして呑みたいの」

「呑みたいから呑みたい」

「だっ子ね」

「早く帰れよ」

「おお、こわ」

ぼくはやにわに夕美夫人の和服の胸をおしひろげた。一瞬の兇暴な衝動であった。ふんわりと丸い、睡水仙のような感じもあり、西洋梨のような感じもある。無量感がそう感じさせるのだろうが、ぼくが従兄にジェラシーを持ったら、この豊満な乳房のせいだ。小さな乳首がまっ白な乳房に埋まっていた。染ひとつのない美しい肌であった。

ぼくが夕美夫人のネクタールを呑んだのも偶然であった。出張の従兄を送りに行った帰り、夫人とその頃はまだ珍しかったスタンドバーに寄ったのが発端だった。酔った夕美夫人が本通りからそれて横道に入ったとき、不意に中腰から和服の裾をまくったのだ。

それから夜散歩をすると、夕美夫人はたまにこのいたずらをやるのだ。

アップの和服のウエイトレスを見ると、中野さんと話をしながらぼくは夕美夫人を思い出しているのだ。従兄が転勤になって、現在仙台に居る。

### 小狸の記憶

その中年の夫人の名前は知らない。日本人ではない。外国婦人なのだが、それがアメリカ人だかイギリス人だか、それとも、白系ロシア人だったのか記憶にない。そんな区別は子供は無関心だ。憶えているのは、その外国婦人が肥満した中年の夫人だったということだけだ。日本人には見られない重量感であった。金髪だったかシルバーヘアだったか、その外の記憶は薄れる。

ぼくの家の裏は高級住宅街で、外人住宅が町の一角をしめていた。中に南米の公使館があった。どの家も玄関先の庭や内前にハイヤが置いてあった。庭は芝生が美しかった。これらは生活環境を異にする子供にとって驚異なことに違いない。最近この一角が都市計画の中にあり、潰されて国道になった。その外国婦人の家も無くなった。まだ完全に舗装されておらず、ごろごろした小石を敷きつめただけの国道に、白い埃をあげながらバスや



トラックがスピードをあげている。

その外国婦人の家の庭に柿の木があった。この柿を盗みに入ったのが発端になったのだから、この事件が起ったのは秋だったのだらう。別に季節には関係の無いことだが。一人

で垣根を越したのではない。そんな勇気があるはずがない。二三人連れたガキ大将が居たはずだが、その小さきボスの顔が二三重複して名前と顔が一致しない。戦前と戦後では、生れた町とはいえ、町の地図は大きく変って

いる。小学校のクラスメイトでさえ殆ど残っていない。

ボスにそそのかされたものに違いない。まだ小学校にあがる前のことだらう。それとも一年生だったのか、そのころもはっきりしない。とにかくその頃の年だ。柿の木にぼくが登った。竿で落さなかったのは、そこに竿が無かったからだらう。洗濯物はロープに乾されてあったのは違いない。気の小さい弱虫のぼくが木に登ったのだから、頂度家が留守であり、また柿の木も比較的登り易かったのだらう。勿論ボスは尻をついたのだらう。そこまではよかったのだ。

木の下でボスたちに柿の実を落しているうちに、買物から買った(と思う)メイドに発見された。捉ったのはぼくだけである。ボスとその客分は木の上のあわれな舎弟を見捨て素早くずらかった。そんなところだ。メイドはぼくの名を知っていた。ぼくの家の女中と職業柄友達でもあったのかもしれない。メイドは日本人である。

ぼくは腕をつかまれて強引に台所に引きずりこまれた。子供ながら不貞腐な顔をしていたのかもしれない。泣きはしなかった。きつとメイドの弱点をついた子供らしからぬ憎ま





## 切 腹 偶 感

法 谷 四 郎

映画「切腹」は凄絶な腹切りの情景に正面から取組んだ作品として素晴らしいものだった。殊に、幾度くりかえしても、若い弾力のある肌突きささるうともしない竹光に、全身の重みをかけて、「ぐうっ」と呻き乍ら、のしかかる一瞬こそ、おそらく切腹マニヤにとつての最大の興奮を呼ぶシーンであつたろう。

腹からべつとりと溢れる鮮血も生々しく傷口も腸こそ見えないが、迫真の出来で、黒白映画とはいえ、カラーの「叛逆児」以上の凄惨さだった。

唯、これに加うるに、途中で舌をかみきって死ぬという設定でなく、十文字にかきさばき、腸をひきずり出す所までやってもらえたら……と願うのは、僕ばかりではあるまい。

しかし、この「切腹」や「叛逆児」が契機となつて、今後奇麗事に終っていた日本映画の切腹シーンがリアルな美しい残酷さを加えていくのではないかと期待できる。

そして、これらの映画や文芸の中に、こうした機運を醸するのに「奇ク」の中康氏、藤山氏などの思潮がやはり大きく働いているのではあるまいか。事実、「切腹」の中の台詞や、又、三島由紀夫氏の「叛乱」などには、どうしても「奇ク」の中のあるものを読まれたのでなければ……と考えられる箇所が確かにある。

何れにしても、同じ頃上映された「残酷物語」とは異った陶酔的な無惨さ、追いつめられたものの、自虐による悲壮美が画面に溢れて凄じい限りだった。

中康氏、藤山氏などの御感想も、おききたいのは、僕ばかりではあるまい。

所で、しばらく前に掲載された中康氏の「法谷四郎論」には感激のあまり身がすぐむ想いでした。僕の心の深部——暗い日陰に、そつと咲かせた曼陀羅の華を、かくも見事に分析され、実質以上に評価して頂いた。誌上をお借りして氏に厚くお礼を申し上げる次第です。たしかに、あの一編の図

れ口をきいたことだろう。彼女はかなり乱暴にぼくを取扱った。彼女は決して美しい女ではなかった。山出しの大女であつた。

ここで、彼女が何故カチカチ山の御伽噺をもちだしたのかわからない。

「オイタをしたタヌキはオジイサンに四本の足を縛られて逆さにつるされました」

ぼくは床の上に仰向けに転がされると、腹の上で手足を一緒にまとめて縛られてしまった。それまで隙を見ては逃げようとし、あばれていたに違いないが、そう素直に彼女の意のままに縛られるわけがない。その前に柿を盗んだことを家に云いつけるとおどかされたのかもしれない。子供の弱点を見事についたのだ。それに違いない。手足がしびれるほどきつかった。台所にあつたロープみたいなので、彼女は馬鹿力をだして縛ったものだろう。

彼女の名前も知らない。彼女の記憶は、上下にめくれた部厚い唇と、その間から覗いている部厚い舌に要約できる。

不意に彼女が周章てたのは誰かが帰って来たからだつたろう。手足を縛った紐を解くにもあまりにもきつすぎた。彼女は解くのをあきらめ、ぼくを抱きあげると台所の隣室のド



絵は、なんの筋も物語りの必然性もなく、唯腹を切るという情痴だけで押しとおしたもので、お恥しいかぎりです。実はあれを聞いた頃、僕はある少女と海をこえての恋につつまれて居り、その盲目的であった心のうごきが、ああした風にあらわれたのではないかと考えている次第です。

それ以後の続篇は未だ中途のもので、何れ又かいていきたいテーマがいくつかありますが、これらに対して「機上切腹」「フアッションモデルの割腹」の方は、前の曼陀羅図絵が何れも日本女性のやや小柄で、きりりと引き締った肉体をかききるという悲壮美であるのに対して、僕がもっているもう一つのイメージ——切腹などは全く程遠いと想われる白人の女、或は日本人であっても均整のとれた肉体をもつ現代女性に腹をきらせて見たいという、別の欲望によってかいたものです。

真白な下腹を鋼鉄の刃がブリリと裂くに つれて思いもかけぬ太い腸管が勢よくはみ出てくる……。こうした肉感的な切腹は所謂悲壮美だけでは、とらえられない別の美しさをもっているように思われるのです。

そして藤山さんあたりに、どしどしこいうものをかいて頂きたいと願ひ、更に何等かの方法で藤山さんと一度お会いして合作して見たいなあと思うのです。とても御無理だとは思いますが……。

藤山秀緒と法谷四郎、お互いが、お互いであることを示し得るのは原稿を交換し合えば直ぐ分りましょう。藤山さんの文体は僕には直ぐ分ります。又、僕のものもきつと直ぐ分っていただけでしよう。何時か時を得て、凄烈な腹切図絵を二人してつづって見たいものです……。

さて、新しくつくられた四馬孝氏の二組の切腹絵と腸露出の写真、何れも素晴らしいものでは是非このシリーズは続けて頂きたいものです。四馬氏の絵の中では横向きの腰元の割腹が特に好きです。写真の方は迫真の出来で、このテクニクをつかつて映画8ミリも作っていただけでないでしょうか。最後に、藤山さんの作品が少いのが残念です。

どうか、貴女でなければかけない血染の絵巻物を綴って下さるよう、お願いいたします。

アを開けた。タイル張りの小さな部屋は、真中に白い容器が一つあるだけだった。湯殿ではない。彼女はその容器の黒い蓋をあげると、ぼくをその中に入れたのだ。手足を腹の上でまとめて縛られたぼくはうまい具合に安定した。まるで子守籠だ。ひやりとして冷たかった。中は綺麗だった。少しも汚れていなかった。彼女はぼくの口に猿ぐつわをするのを忘れなかった。声など出しはしなかったのに。エプロンのポケットに押し込んである汚れたハンケチと台所のタオルだったのだろう。彼女はかなり狼狽していた。彼女が居なくなつて、ぼくは始めて不安になった。

その不安は長く続かなかった。入口のドアが静かに開いて、誰やら入って来たのだ。入口に頭を向けているぼくは、それが誰だかわからなかった。ぼくの顔を覗いたのはこの夫人だった。夫人はすぐぼくの猿ぐつわをとってくれた。ぼくはまた子供のあの無意味な笑顔を見せたことだろう。何も云うことはなかった。しかし、夫人はぼくを自由にはしてくれなかった。猿ぐつわをはずしただけであった。

夫人は自国流に、その白い容器に腰をかけた。



## お臍と切腹

須藤 律 夫

お 臍 と 切 腹

之は昔からの筆者の持論であるが、『お臍と切腹』ちょっと変わった取り合せであるが、この二つはあながち無関係ではない様に思う。若し之を心理学的に解明すれば、其処には複雑多彩な関係が華やかに展開されるのではなからうか。それは他日に譲る事として、今日は最近読んだものの中から、特に関心を持った二、三のものを御紹介してみよう。

女一人原始部落に入る

アフリカ、アメリカ体験記

桂ユキ著 (光文社刊)

この本の六十八頁には「にわか看護婦とし

て手術を見る」と題して、アフリカに於ける土人の帝王切開を次の様に紹介していた。

バンダ族の女性は骨盤が狭く、死産も多いが、進歩的な女性は、自分から病院に相談に来て、帝王切開手術で赤子を生む者もいた。にわか看護婦の私は何の役にも立たなかったが、それでも消毒衣をつけて、その手術に立ち合ったりした。

手術の前にラルテ先生はゴム手袋をはめて最初に内診したり、またラッパ型の聴診器を妊婦のよりあがった腹にあてて、胎児の鼓動を聴いたりし、私にもそれを聴かせた。妊婦

の腹に顔をよせ、聴診器の口に耳をあてると、いきなり、ドック、ドックと意外に大きな音の、胎児の鼓動が妊婦の腹の中から聞えて来たので、私は驚いた。それは大人と同じに、正確に、しっかりした音をたてていて、何かが私に語りかけてくれるような気分におそわれた。

アルシャンさんは慣れた手つきで、妊婦の下腹部に生えている、まるで岩にはりついた苔そっくりのちぢれ毛を剃り、腹部一帯を消毒し、腰椎麻酔、そのほかの注射をしてから、妊婦を手術台の上に寝かせた。ながながと横たわった一糸まとわぬ黒色の妊婦の体と



言うものは、なんとも言えない感動的なものだ。パリのロダン博物館で、この巨匠の手になる黒色のブロンズの女体の発散する、異様なまでになまなましい肉体のいぶきを私は感じて、ショックを受けたものだが、これはそれ以上のものだった。

大きく長い乳房が、胸の上に盛りあふれて腕を越して左右にはみ出し、台の上にうず高くもり上っている。大西瓜ほどにふくれた腹部と細い手足と全体が、

一つの黒紫色に輝く美しい異様なオブジェであった。足の指が、らっきょうの様に並び、そこだけ黒くない足のうらが印象的だ。――(中略)――

妊婦は全身を白い消毒布で包まれ、黒人の助手がその鼻と口に麻酔をかがせた。ライト先生は様子を見ていたが、白布の間から僅かにのぞかせてある腹部の真黒な皮膚にさっとメスを入れた。下腹部から一気に臍まで、

一直線に切りさいた。妊婦は少し動き、うめき声をあげた。

黒色の皮膚の一枚の下に、真白い脂肪が現われ、脂肪の層を深く切りすすむと、突然桜色の肉が出た。黒、白、桜のあざやかすぎる色別は、息もつけないでいる私の目に、強烈な印象となってとびこんだ。腹膜がさかれぶりぶりした赤黒い内臓の肉塊が腹じゅうに漲り溢れて見えた。――(中略)――

赤黒い内臓を先生の手がぐっと押しのけるようにすると、その下から赤紫色の大きな堅そうなる玉が現われ、電気的光線を反射して光った。赤子のはいつている子宮だ。新しいメスでその子宮が左から右へ、真横にぐぐっと切られたと思ったとたん、ぐさりと先生の左手がその切り口につつまれ、あっと叫ぶ間もなく、もう其処には、濡れた鼠色の髪の毛を持った胎児が頭から引き出されていた。臍の緒の真白で長いのが、強く私の目をひいた。

――(後略以上原文のまま)――

帝王切開も本質的には、切腹と何等変らない。前者は生きる為め、後者は死する為め、そして、無痛との対比は一寸奇異にも感じられるのである。又こうした文の表現には、必ずと言っていい位臍が引き合いに出される。少し旧聞になるが次の記事を御紹介しよう。

(三十七年七月二十六日、読





売新聞所載)

○二十五日午後二時頃、東京都、新宿区の前田外科病院に、腹を切った若い男が救急車で運び込まれた。患者は同町新宿二丁目のKさん(二六)。この日は昼頃から酒を飲んで、いたが、午後一時半頃又飲みに出ようとしたところを兄貴分にみつけれ、『酒は体によくないからやめるように』とたしなめられたのが事の始まり。

○『俺の胃は弱くない、見せてやる』と酔った勢いで切り出しナイフを持ち出し、右脇腹からお臍にかけ長さ二十センチばかりをかき切った。深さが二、三ミリだったので全治十日間の傷で済んだが、お互い『酒は百薬の長』位で止めて置き度いもの。

次に十一月二十九日発売された『一〇〇万人のよる』一月号に『切腹したがる若い女の告白』と題して黒崎敬一氏の記事が載っていた。話題になった松竹映画『切腹』に論を發し、本誌でお馴染の切腹記事が書かれているが、筆者が私の知っている人の様な気がして一寸興味を持った事である。文中実例その他の資料は中康弘氏提供とあり、又挿入画の一枚はその筆数が、私には見覚えがある様な

気がするのである。

ところで私は数年も前から中康氏とは度々資料の交換をしたり、作品発表に就いての相談やら、又氏の作品の翻訳助成、興味ある記事の速報等々非常に昵懇に願っているが、その交友記文でも優に百枚以上にはなるであろう。それは扱置き、私は又二年程前から或る会合に出席していたが(それは熱心で真面目な切腹研究の集いであつた。会員はむしろ先輩の方々が多く、職業も医師、著述業、建設会社課長、協会役員等々何れも錚々たるメンバーで、不肖私など吹けば飛ぶ様な最低であつた)

会合の折、皆さんの持ち寄る写真、絵画など、その絵の中に同じ様な筆風があつた事を記憶しているのである。話は余談に涉るが、この会(私はH会と仮称していた)も毎月の事なので次第に参集者も僅かりなり、現在は一時中絶の状態である。各自多忙の身である為め、年二回位にしたら、或は交換の資料や話題も豊富となり、永續するのではないかと残念に思うのだが。

同じ誌のグラビヤ(一一〇頁)に『お臍を清めてお目出度う』と言う七枚の組写真があ

つた。グラマの美女が母親の教訓? を守り、毎年暮になると体中の穴を浄めると言う想定である。その中の一枚のアップは右手でお臍の脇を押さえ、左手はヘヤーピンを臍窩に入れているところ、一寸珍らしい写真である。惜しむくはポーズが少し前かがみなのでお臍の穴がよく覗かれない事だ。

蛇足ながら、このグラマ、一女性の腹部を観察すると、脂肪も豊かに、雄大な純白なスロップを展開している。その豊満な情欲よりもむしろ直接に食欲をそそるかの様に、又そのスロープの中央に、ポコリと深く窪んでいるお臍。名匠が大胆且つ適格に、のみでグッとえぐった様な黒い深い影、それは女の腹部の中で、最も有力な發言權を持つものである。又日本婦人の場合、腹部中央のお臍の位置が最も美しいのではなからうか。

蓋し人類学的に大別して、西段人はお臍が腹部上位にあり、南洋の土人は下位にあると言ふ。

してみると日本婦人はその中庸を得て、臍穴もほどよい位置にあると言つたところか。

—完—

☆ ☆ ☆



四馬孝画 (女斗ファンと裸女血斗マニアのために)

## 大奥裸女決闘場面

略号

(おく5)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

### ○大奥の裸女格闘

大奥の広間を舞台として繰りひろげるフンドシ一本の豊満な裸女、腰元対腰元の必死の格闘。髪をふり乱したハダカの二人があられもなく取っ組みあう勇ましくも目ざましい光景。脚を巻きつけ首を締め。止めをさそうとする腰元と、懸命に耐えてはねかえそうとする下になった腰元の必死の形相。

### ○禪裸女の争い

灯籠のある御殿の庭。二人ともきりきりと締めた六尺禪一本のりりしい姿の腰元、その真白な裸身を白日の下に惜しげもなく、さらけ出しての争い。乱れ流れた髪を掴み合つての立芸。御殿に仕えたときの淑やかな物腰も今は、その影すらなく、互いにすきを狙って相手を倒そうとする鋭い目つき。

### ○庭での果し合い

互いに懐刀を手にした二人の腰元が、フンドシ一つの裸身で斬り合う惨忍な果し合い。一人の刃先が肩口に、更に二の腕、脇、太股へと四太刀くれて、忽ち鮮血に彩る白い肌。禪裸女の激しい死斗が血にまみれながら続けられてゆく。やがて、いずれかの首級が挙げられるまで、この争いは終らぬだろう。

### ○首級を挙げる

金屏風のかげ。争いに破れた腰元の一人がフンドシ一本の逞ましい裸女に馬乗りになられて組み敷かれている。上になった腰元は勇ましく股を開いてまたがり、懐刀をぎして首を挙げるべく切りつけた。下の女の必死の抵抗でも刃はそれで頬に傷を与えたが、この死斗は更に凄絶に続けられてゆく。

### 一、首吊り屍体発見

二階の手摺りから縄を垂らして首吊り自殺を遂げたワンピース姿のうら若き洋裁生。何気なく部屋へ入ってきて、プラリプラリとぶら下る首吊り屍体にびっくりして「きやっ」と恐トの悲鳴を挙げて身動きもできないでいるその友人。屍体の口からは、だらりの涎が流れて、足は力なく伸びている。

### 三、縊死体の検屍

「他殺の疑いがあるから縄は切らぬように」そう注意しながら検事は靴を脱いで机の上に上った。シユミーズが盛り上った豊かな胸。キャバレーかアルサロに勤めていたか、二十前後の美しい女だった。口から出たものをハンカチに受けて。彼は職業を離れた気持で、この咲ききった花の女の興味を指った。

## 四馬孝画 (若き女性の美しくもいたましい変死体)

### 変死女体惨酷場面

略号

(へし4)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

### 二、溺死体の検屍

河原の荒ムシロを警官がめくると、そこには輝くばかりの白い若い女の溺死体があった。生けるが如く豊かな肌の女だ。半ば口紅のはげた口からは水が静かに溢れている。検屍官は手帖を出して、この土の上に放り出されたうら若い女体の死後三時間の屍体を仔細に検屍してゆくのであった。

### 四、溺死体の解剖

変死体は、どんなに花恥しい妙令の乙女であっても、こうして全裸に剥かれて、頭の皮から足の先まで、否、咽喉元からお腹まで真二つに切り裂かれて解剖されるのです。数時間前まで動いていた、この肌が冷たいメスによってズタズタに切りちやちやくられてゆくのです。



『焰』  
ほのほ

と

泥』  
どろ

桑 田 健 一

## 一

薄暗い電灯が一つ、ぼつんとついている部屋。その光が周囲の壁にあたってはねかえり毒々しい黄色の光線が天井の低い狭苦しい室内でぎしぎしと交射している。にぶい光の交射は部屋を中心に近づくにつれて密になり、最後には円形の光線の束となって中央の畳の上に落ちる。

その凝集した光の真下で女が一人、後手に縛られて横たわっている。盛り上った白い胸には細引が二筋、深く喰い込んで、むっちり

とした二つの乳房をくぶりあげている。黒い布が顔の下半分を締めつけていて、時々その下から苦しげな呻き声が洩れる。眼は閉じたまま、豊かにウェーブした髪が濡羽色に輝き、そこから甘い酔う様な匂いがたちこめる。むき出しにされたまるい腹部。そのぬめぬめとした柔く白いふくらみは、真中で細引に締めつけられて横に真二つに断ち切られている。それからぴっちりとか合わせて括られた肉のよくしまった太腿。傍にはぎとられたシユミーズ、ブラジャー。

つと男の手がのびる。それは私だ。さっき

から部屋の片隅で女を見つめていたのだが眼でなめまわしているだけでは、もう我慢がならない。女の胸に巻きついて細引の間から飛出したよく弾む乳房を、手一杯に握み上げ押し潰し、ねじり上げる。女は猿轡の下で呻き、全身をよじらせて身悶えする。豊かな肩からくびれた二の腕、太腿へと私の手は柔肌を残酷につねり上げ揉み上げる。女は身も世もあらぬ表情を浮べ、締めつけられた胸を高く波打たせて喘ぎ乍らのたうちまわる。それが更に私の狂暴心をかき立て、次々と責めが続く。



仰向けに転がされていた女は悶えている間にうつつ伏せとなり、固く縛しめられて薔薇色に充血しているなよなよとした手が私の目に入る。私は狂気のようにその白魚の手を掴みしめ、そのふっくらとした指の付け根にいきなりかぶりつく。無残な歯形が美しい手に刻まれ、そのあとがピンクに充血する。何をされても女は芋虫の様にからだをくねらす事しか出来ない。思わず喉をついて出る悲鳴もびったりと嵌められた猿轡に押さえられて惨めな呻き声となって洩れるだけである。

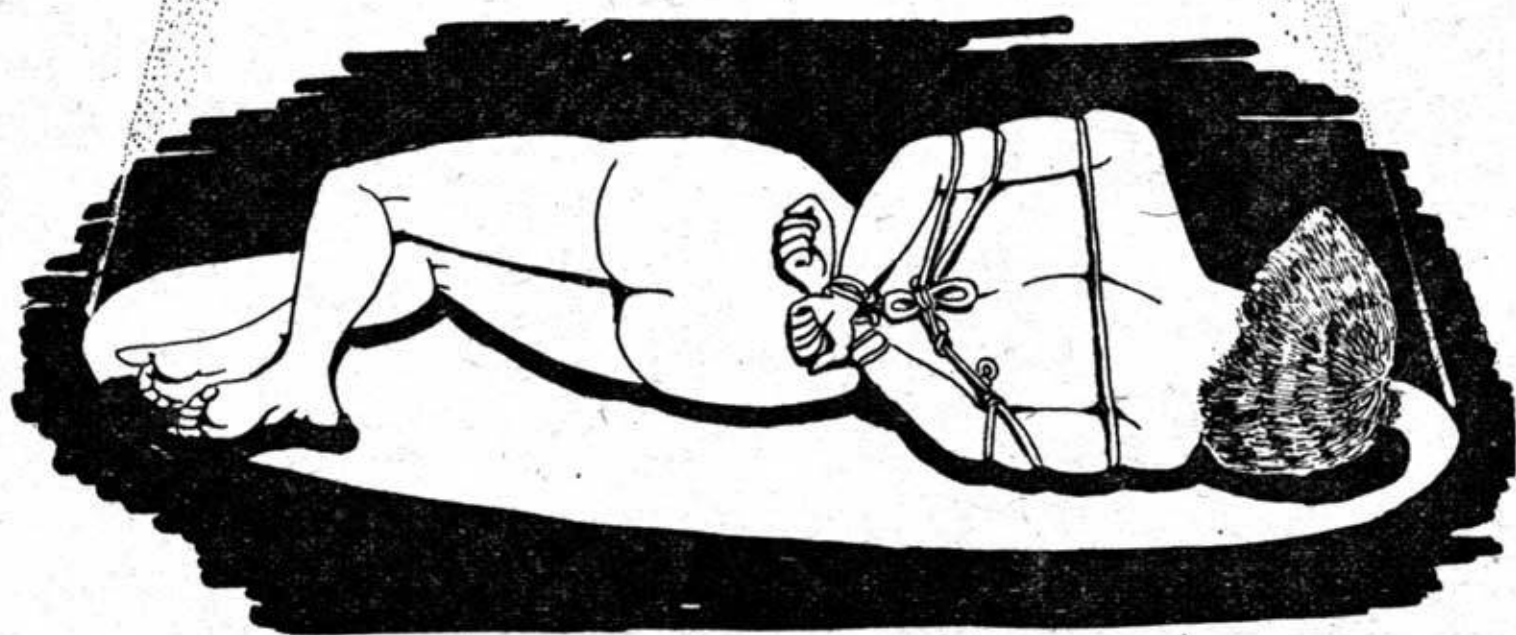
屈辱と苦痛と敗北感に打ち挫かれて女は畳に顔をすりつけて泣き始める。だが私は許さない。この女が憎いのだ。それにまだまだ苛め足りない。

妖しく蠢く脂肪の乗り切った豊満な臀部。

私はそのはちきれん様な肉塊を掴み潰そうとする。しかし、その限らない豊かさは私の両手では掴み切れない。苛々して私は矢庭に自分の腰から革のベルトを抜き取り、立ち上って力一杯、双丘目がけて振りおろす。続いて二打ち、三打ち、四打ち、打ちおろす度毎に女の肌がピシヤリと小気味よく鳴って、女は縛られたままころがり、のたうち、畳の上に妖艶な白い女体の乱れ模様を描き続ける。時

々電灯が揺れて光と影がめまぐるしく回転した。

しばらく女を打ち続けた私は、ベルトを投げ出して勝誇った目つきで冷やかに女を見下す。女の名は恵子。二十六才の人妻だ。腑抜けで病弱の夫の、薬を取りに医者をしている私の所へ度々やって来る。この間、彼女の妖しい色香に血迷った私を、牽きつけるだけ牽きつけておいて、その後で散々辱しめ、侮り罵倒して帰って行った高慢な女だ。その時の彼女の憎々しい嘲笑を私は忘れない。それを見た時の私の煮えくり返る様な口惜しさと憤りも。今夜夫の薬を取りに来た彼女、実を云





えばそれにかこつけて私を又もなぶりに来たこの淫蕩な年増女に、私は睡眠薬の入ったコーヒーを飲ませ、やがてぐったりとなった女を抱きかかえて、二階のこの部屋に投げ込み縛り上げてやったのだ。目を覚ました時の女の驚き。気味のよい怖れの表情。それにしても猿轡とは便利なものだ。

私がやっと責めの手をゆるめたので彼女はぐったりとなり、大きく喘ぐ度毎に高く波打つ絹の様な胸肌細引が一層強く深く喰い込む。あの人を馬鹿にした様な平素の恵子の太々しい表情は影もなく消えて、今はもうただ目に涙を浮かべて哀願することしか出来ない

一人の女であり、その嬌慢な誇りを蹂みにじられて絶え入るばかりに悶えている女となっているのだ。しかもなお、私を見上げる瞳にうるんだ哀願の眼差し奥深く、男の心を蕩し込もうとするかのように淫艶な媚びを秘めた黒い瞳は、この地獄の苦しみから早く許されようと望んでいるかの様である。

悩ましく蠢く恵子の美しい肢体。女が動くにつれて、むんむんとたちこめる私の鼻孔をしびれさせる様な、甘酢っぱい匂いが狭い室内に充満する。時々洩れる女の呻き声が耳底に絡みつく。狂ほしい激情が私の全身をかけ

めぐり、堰を切って溢れ出ようとする瞬間、私はそれをぐっと押しこらえる。まだ許してやるのは早い。恵子の挑発に私が応じてしまえばそれで終りである。だから私は彼女にこのあさましい一人相撲をさせて置くことにする。自分が今、どんな姿態をしているかをこの姦婦にまざまざと自覚させてやったら女はどんなに絶望するだろう。もう恵子は一生拭われない心の汚点を私に対して持つ事になる。そして私は今後、いつでもこの誇り高い女にそれを思い出させ、彼女の心を見えない鎖でくびり上げ、意のままに彼女を屈伏させることが出来るのだ。

私は薄笑いを浮かべ乍ら、恵子の顔を冷やかに見下すことしかない。

反応のないのが不安になったのか、おそろおそろ恵子は閉じていた目をあけて私を見上げる。私の冷笑を見た時の彼女の驚愕と、それに続く羞恥の表情。猿轡の下で真赤になった顔。恵子には私を蕩し込む豊満な自分の肉体の魅力に自信があったのだ。そうでなければこの気位の高い女が責めを逃れる為だとは云え、あさましい挑発をしよう筈はない。私の冷笑はまずこの女の自惚れを無慈悲にへし折り、次に恵子は以前なら相手にもしなかつ

た様な男の前で破廉恥な独演をさらしていたということをも痛烈に思い知らねばならなかった。それは彼女の日頃の誇りやかな自尊心を粉々に打ち砕きそして彼女は消えも入りなん羞恥地獄に身を落して、縛り上げられたからだをうつ伏せにして激しく身悶えし始める。その身悶えしている恵子目掛けて、私は力一杯革のベルトを続けさまに打ち下す。ムチ音が高く鳴るたびに白い肌の上に痛々しく赤い帯が描かれる。絶望してあがき、のたうち、転がりまわる恵子。

が、今度は私はすぐに許してやる。

もう動かない恵子。苦しげに喘ぐ荒い息づかいが漸くおさまる頃、かまされた猿轡の下から彼女の嗚咽が洩れ始める。喰い込む細引に胸を締めつけられ、後手に縛られ、転がされ、その上どうする事も出来ない恵子。あれ程の人一倍高い自尊心と嬌慢な気位とを一瞬間の内に汚辱の泥沼に迄引き下されてしまった恵子。身も心も完膚なき迄に打ち挫かれ叩きのめされ、もはや私の完全なる生贄として観念した恵子。

しばらくじっと彼女を眺めていた私は、うつ伏して嗚咽を続けている恵子を抱き起し、彼女の鼻と口とを固く閉ざし込めていた黒い



布を解いて、そのままぎゅっと腕を掴んで私の前に引き据える。いたたまれず彼女はうなだれ、私の胸に顔を埋めてさめざめと泣き、むれた乱れ髪が私の鼻先で強烈に女の甘い臭いを発散させる。

幾筋もの鞭の跡が痛々しく浮き上った彼女の肌、後に廻され、細引が深く喰い込んだふくよかな両腕。しっとり汗に濡れた肩から胸にかけてのぬめぬめとした柔肌。私はこみ上げてくる愛ほしさに駆られた。

「痛かった？」

泣き止んでいた恵子の目に見る見る涙が一杯溢れて来て力なく瞼を閉じた頬をはらはらと伝う。口では答えず目をつむったまま彼女はこっくりと首を縦に振り、しほらしくうなだれて又も私の胸に顔をすり寄せる。

これが嘗て若い私をあれ程愚弄し侮辱した高慢な女なのだろうか。これが嘗て多くの男をその膝下にひざまずかせては得意になり、ほしいままに男を操り、果ては嘲弄し、遊閑のプレイを楽しんでいたあの不貞な人妻なのだろうか。

私は彼女の足首に巻きついてゐる紐を解いてやり、痛々しい縄目の跡を接吻でおおう。それから白いふくらはぎに喰い入っている紐

も解いてやる。

「許して下さるのね。」

始めてほのかな笑みを浮べて恵子は口を開く。そのしたたる様な声の響きの艶かしさ。

が、それには答えず手首と胸の縄は解かず、そのままにして置く。そう迄しなくても、もはや恵子は絶対屈従する事は解り切っているのだが、私はこの美しい女を、私の完全なる奴隷としなくては満足出来ない。恵子も幾筋かの細引が喰い入った自分の胸をちらりと見おろして、少しからだをよじらせ、

「手は解いて下さらないの？」

「女奴隷にそれ程の自由は許せないね。生意気云った罰にもう一度ぶってやる。」

私は荒々しくベルトを握って立ちかける振りをする。

「御免なさい、悪かったわ。それだけは、もう勘忍して。」

後手のまま、がっくりと膝に頭をつければかりに恵子は嘆願する。その声のなかばうるんだ切々たる響きの中に、一種の陶醉があるのを私は聞き分ける。

## 二

これが私が恵子を責めた最初であった。其

後、彼女はかなり繁々と私の家へ通う様になり、どうしても私の家では具合の悪い時にはホテルの一室で渴を癒やしたりした。

丁度その頃、私に縁談が持ち上り、急に私の周囲が騒がしくなり始めたが、それはそれでいい加減にあしらい乍ら毎日恵子の来るのを待ち焦れた。恵子とても、如何に相手が臍抜けの夫とは云え、そう毎日毎日、家をあける事が出来ず、時によると一週間も顔を見せない様な事もあった。

その間の私の淋しさと空虚！ 続けて来ない時には大抵は電話で連絡をしてきたが、その度に私が電話口で彼女を詰ると、如何にも辛そうにくどくどと云い訳をした。だが、そうした後での再会の際の責め味は又格別であり、刺激を追って次第に責め方は苛烈になり残酷になって行った。

父が亡くなって以来、母と女中と私の三人暮しだが（看護婦は夜には自分の家へ帰るので）如何に年老いた母と田舎から出て来たばかりのあどけない女中とでも、恵子が度々来る様になると私は少々面映ゆくもあったし、又それ程広くはない家なので、二階の鞭の音なども、あまり派手にはたてられず、何処かいい場所はないかと毎日思索していた。そし



て或る日の事、私は階下の書斎で書き物をしていた、ふと床に目を落した時、床の隅に三尺四方位の切り込みがあるのを見つけてはたと膝を叩いた。それは戦時中、父がその頃の流行に従って床下に作った防空壕の入口の蓋であった。今から思えば他愛のない話だが、その頃はそんな待避所でも充分安全に役立つ積りで、凝り性の父が特に大きく堅牢に作らせたもので警報が鳴ると私達は其処へ入って解除になるのを待ったものだ。食糧やら家財等も一杯入れてあり、ラジオなども置いてあった。要するに人がその中で生活出来る様に作ったもので、天井も壁もコンクリートのままだが丁度四帖半の広さの床には当時は畳迄敷いてあったし、書斎に通ずる階段が天井の隅から降りていて、ベンチレーター迄ついているという念の入ったものなのである。

中に入れてあったものは、もうみんな出してしまっており、床の畳もめくり取ってあるので、四方コンクリートのこの密室は恵子を責めるのに格好の部屋であった。此処なら書斎からすぐ入れるし、どんな物音でも外に聞える心配はないし、それに私は日頃からの習慣で私が呼んだ時以外には書斎に人を入れない様にしてあるので家の者に感附かれる心配

もない。ひとりほくそ笑んだ私は、その地下の密室に様々な責めの道具、ロープだの鎖だの首環だの鞭だのを用意して恵子のやって来るのを待った。

その翌日の午後、彼女は肌の透いて見えるナイロンのブラウスに黒いブリーツ、四寸はあると思われるハイヒールといういでたちで私の家に姿を現わした。私はかねがね、密室に彼女を入れてから縛るよりは、簡単に縛り上げてから急に地下の暗い部屋に投込みたいと考えていた。恵子が来た時、私は書きさしの手紙を書いてしまってからやつつけてやろうと思い、机に向ってせっせとペンを走らせていたので、それに、いつもの部屋ではなくて、しかもつららしい書斎へ通されたので、まだまだ始まらないと思ったのか、彼女は吞気そうにお茶をすすりながら、私がわざとテーブルの上に置いておいた女の縛り写真に熱っぽく眺め入っていた。

上の空で手紙を書き終えてちらと彼女を見るとまだ熱心に写真に見入っている。頃はよしとばかり私は窓のカーテンをさっと閉じると、椅子に坐っている彼女の後から手を廻して、両の乳房をぎゅっと押し握む。思わず彼女がちいさく「あっ」と叫び、「こんな所で

許して」と云いかけて開いた口に素早くハンカチをねじ込み、真黒な絹の布でその上から固く締め上げると、今度はブラウスを荒々しくはぎ取りシュミーズを引下し、ブラジャーをめくり取って上半身だけ裸にし、乳房の下に細引を廻し、簡単に後手に縛り上げてからストッキングを脱がせ、玄関から彼女のハイヒールを持って来て不審がる恵子にそれをはかせ、足首も二つ揃えてきっちり括ってしまおうと、隅の床板をめくって地下室への入口を開く。これには恵子も驚いたらしく、不安そうに、しかし好奇心に満ちた目でばかり開いた入口を見ている。が、そんな事にはお構いなく私は彼女をかかえ上げると、地下への階段を降りて行き、固い床の上に彼女を転がすと部屋の隅のランプに灯をともし、くると彼女に背を向けて階段を駆け上り、書斎に帰って入口の蓋をわざと大きな音をさせてぱたんと閉ざす。それから素早く覗き穴（これは私が作った。下からは一寸気がつかない）から下を覗く。丁度石牢に一人投げ込まれた格好の恵子は、始めの間は珍らしげに天井や周囲の壁を見まわしていたが、彼女の背中の側の壁にとりつけてある大鏡に気がつく



おり、何度か失敗した後で起き上り、鏡に写った自分の妖しい姿に、私が覗いているとも知らず見惚れ始めた。まだ本格的な縄はかかっていないが、それでも要所は一応堅く縛められ、猿轡もはめられている。上半身はむかれてしまっているし、下半身にまといついている襷の多い黒いプリーツも乱れて白い太腿をあらわにし、ピンクのズロースが少しのぞ

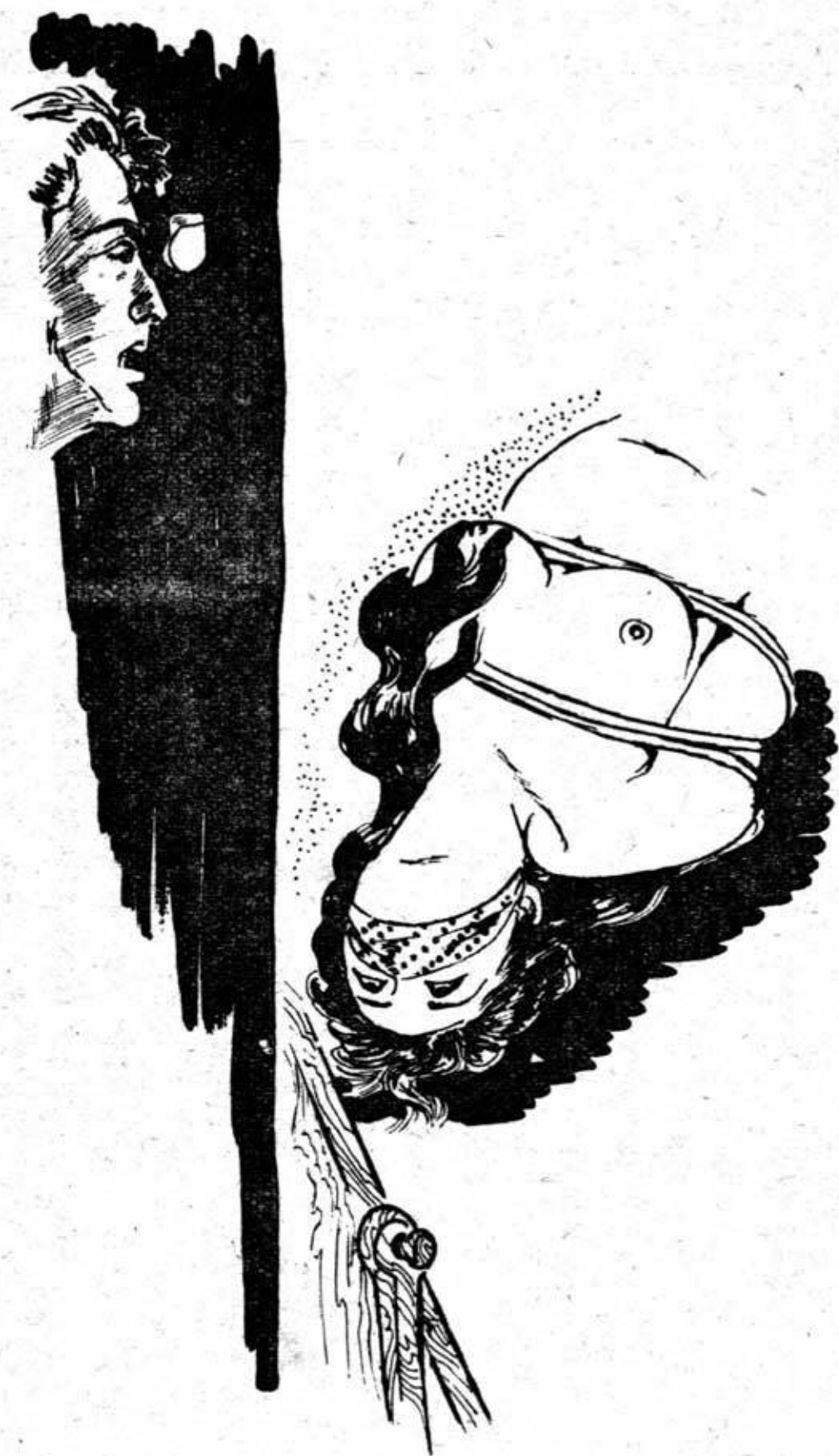
いて見えるのも、脂の乗り切った人妻だけに何とも云えず艶かしい。

女は時々身をくねらせたり、よじらせたりしながら鏡に写った、邪怪な細引の巻きついた自分の胸に見入ったり、あらわな太腿を、それでも一寸恥かしそうに眺めたり、猿轡をはめられた顔を苦しそうに喘ぐ表情にしたりして、長い間鏡に見入っている。かと思えば

辺りを見まわし、溜息をつき、やがてうなだれて観念した様に眼を閉じる。本当に観念したのではない。恵子は今、目を閉じて今しがた鏡に写した自分の姿態を頭の中で反芻している所であり、そして自分にこう云い聞かせている所なのだ。

「可哀そうな恵子。私は今、裸にされ、縛り上げられて身動きもならず、助けを呼ぼうにも無慈悲な猿轡をかまされて、この恐しい暗い牢屋に投げ込まれているのだわ。固い壁に冷い床。私はもう永久に此処に監禁されていなければならぬ。それに、もうすぐ私を此処へ押し込めた、あの残忍な男がやって来て、むごたしく私を苛むに違いない。やって来たら、どうしよう？ どうすることも私には出来ないの。ただあの男にされるがまま。責められ、辱められるのだわ、ああ、誰か私を助けて！」

そこで彼女は顔をのけぞらし、世にも惨じめな表情を浮かべ、再び無残な自分の姿を鏡に写して恍惚とするのであった。





覗き穴から見えていた私はもう我慢が出来なくなつて、この部屋に似合わない様にと特別に用意した黒いパンツを着け、上半身は裸、歩く度にガチャガチャと鳴る拍車をつけた長い黒革の編上靴をはき、黒革の手袋をはめてをヒュッヒュッ鞭と鳴らしながら階段を降りて行く。恐怖と期待におののく恵子。

細引を解いて、今度は麻縄で高手小手に縛り上げる。今迄許してあったプリーツを引きづり下し腰の所で止まっていたシュミーズも脱がせてしまう。自由を奪った女から着物をむしり取る時の誇らしさ。勝利感に酔いしれた私がズロースに手をかけた時、今迄大した抵抗もしなかった恵子が急に、必死に身悶えして逃れようとし、猿轡の下からしきりにうめき声の哀願をするので、私はゆるゆる楽しむ積りで征服者の寛大さをもって、それだけはつけたままで置いてやる。

やっと私は気がついた。彼女はズロースの下にメンス・バンドをつけているのだ。メンス・バンドを男に見られる事が女にとってどれ程恥かしい事なのか、男の私にはよく解らない。しかしズロースを取られそうになった時、恵子が嘗て無い程激しく悶えた事から見て、それは余程の事なのだろうと思った。だ

が私は恵子のズロース位、そうする気にさえなれば縛り上げたられた彼女がどんなに拒んだ所で、易々とむしり取ってしまう事が出来る。とも角、私は彼女の足首も麻縄で締めなおし膝もきっちり合わせて縛ってしまった。

天井から下げた縄と手首の縄とを結び合わせて、彼女は腰を浮かせた恰好の半吊りにして、しばらく鏡の前に曝して置く。時々恵子はちらと鏡をぬすみ見るが、後は頭を深く垂れて、ひしひしと喰い込んで来る縄目の痛さをじっと堪えている、その姿のしおらしさ。

「この部屋はどうだ。気に入ったか？」

嫌だと云えば鞭が飛んで来るに決まっているので彼女は力なく首を縦に振る。

「そうか。気に入ったのだな。じゃこれからずっと此処に置いてやろう。僕は給仕になつて食事を運んだり、身の廻りの世話をしやるよ。縄つきの石牢の女王様に仕えるのも悪くはないな。先ずはからだを洗って差上げるとしよう」

彼女の豊かなヒップに五六度続けざまに鞭が鳴る。ここえかねて恵子が逃げようとしても、天井から下げた縄がそうはさせない。ヒップを打たれる度に腹部が突き出て、顔のけぞり、腰が浮いてよろよろと前後左右によ

ろめくが、天井からの縄がすぐに彼女を元の位置の元の姿勢に引き戻す。彼女が元に戻るか戻らない内に、次の鞭が高々と鳴って彼女は又も無惨に踊る。手首と膝の縄が愈々強く喰い込む。

しばらく恵子を鞭で苛んでいた私はそれに飽きて、今度は彼女を床に転がし、靴にとりつけられたキラキラ光る拍車で、彼女の柔肌を責めつける。拍車の齒は適当に丸くしてあるので余程力を入れて踏みつけない限りは肌に突きささる様なことはないが、それでもぎりぎり腹部をこすりつけると、脂汗をベツとりにはじめた恵子が、無益と知りつつ必死になつて転げまわる。不自由なからだを悶えて逃げ様とする彼女を苦もなく足で捉えて押さえつけ、責めつけては又わざと逃がしてやり、又捉えては白い絹の様なぬめ肌に、ぎりぎり拍車を喰い込ませ、彼女の苦悶の表情を見下す時の快さ。グロテスクな編上靴の下で彼女の高貴な肉体が無残に蹂みにじられ、許しを求める呻めき声が、ひっきりなしに洩れて出る。

だが本当は、私はさっきから彼女のズロースをはぎたくてうずうずしているのだ。足の縄が解かれ始めるや彼女はすぐそれと直覚し



たらしく、又もや懸命に抵抗し、哀願し始めた。今度も私は彼女の願いを容れてやる。その代り私は恵子に新しい労働を課せずには置かない。

恵子を抱き起し、鎖のついた革の首環を彼女のしなやかな首に嵌め、転げまわっていた間に脱げてしまったハイヒールをはかせる。

そして今度は両足にどうか歩ける程度の間隔を置いて鎖を巻きつけて錠を下す。首環の鎖を片手に握り、片手に鞭を唸らせながら私は彼女を後から追いたてる。おそろしく踵の高い靴なので彼女が苦しい一步を踏み出す度にズロースに包まれた豊かな臀部が一層後に盛り上り、左右に妖しく揺れて、私の鞭を持つ手がうずうずする。ぴしゃりと一打ちすると恵子は思わず前にのめり、鎖で縛られた足は、すぐには踏み出せないでぎこちなくよろめく。くずおれようとする所を、私は首環の鎖をぐっと引きつけてどうにか彼女を立たせる。そして軽く彼女の腰や臀部を連打しながら、部屋の中をぐるぐると周らせる。そうして恵子を追いつて乍ら私は彼女に唄を歌えと命ずる。後を顧った恵子の、「勘忍して」と云いたげな眼が私をじっと見つめる。

「さあ、早く唄え。唄はお得意の筈だろう」

私はずっと目を下に向けて、彼女の或る一点にじっと視線を振りそぐ。私の眼が何処に吸いつけられているかを知った恵子の世にも情けないふるえた声が猿轡の下から、今にも泣き出しそうなブルースのメロディとなり、そのなまなましいアルトサクスのやるせない音色は嫋々と狭い室内に流れ始める。そして私は鞭で追いたてることを止めて、そのメロディに合わせて踊ることを要求する。首環の鎖は離さない。

「さあ、君が最初の夜に僕を蕩し込む為に縛られたままで、転がったままで踊ったあの踊りを今度は立って、君のメロディに合わせて踊るんだ。」

黒い二つの瞳から今迄こらえていた涙が、はらはらとこぼれ落ちる。それでも彼女は泣きながらも、私の云うがままに自分の涙に濡れた唄に合わせてブルースのステップを踏み始めるのだ。そしてそれは、さっき普通に歩かせられていたよりも一層彼女の姿態を魅惑的なものにした。よく発達した二本の脚の筋肉がステップを踏みしめる度にきゅっとしまつて盛り上る。高すぎるハイヒールと後手に縛られている為、それに足の鎖も解かれていないので、ともすれば平衡を失つてよろめき

倒れかかる。よろめいて倒れまいとする彼女の腹部が悩ましく動く。猿轡の上にぶりかかる乱れ髪、揺れる乳房、それからズロースに包まれた豊かなヒップ。絶えだえになり乍らも悲しい唄は続いている。

薄暗い灰色の部屋の中に、彼方の白い肉体がくねくねと舞い、彼女はもう恍惚として踊り続ける。

私は一体何をしているのか？ 私にもはっきりとした意味は判らない。たとえそれがどんな意味を持つにせよ、私はそうせずに居れないから、そうするだけのことだ。悲しいことか？ まあどうでもよい。しかし私は恵子が本心から止めて呉れと云った時には、如何に私がそれを欲しようとも、止めなければならぬと思っている。もう私は彼女を充分愛しているからだ。

そうだ。今こそ私は、恵子と愛するとともに女体責めに対して異常なまでの関心を有しはじめているのだ。このロマンチックの甘さとセンチメンタリックな悲しさを合せ持つムードの魅力に完全に参ってしまった。

これこそ、焰と泥の交錯する情熱と汚辱の甘美な世界でなくてなんであろう。



## 読者体験小説

## 女工

谷 操 子

(名古屋市市中村区大宮町三の四五)

女 工

夕焼け空が赤く燃えるここ数日、でも私にとっては、それは悲しい思い出を蘇らせる日和なのである。

昭和二十年春、私は女子学生の一として名古屋の築港近くにある航空機工場に動員されて、半年程の工場生活を過していた。右も左も、うず高く積まれた機械や部品の単調な環境の中に私は少女、否、私は早熟であったのか、それとも女子工員達の刺激に無意識的な感化を受けていたせいか兎も角他の温順な女学生の典型とは云えない精神的にはかなり成熟した内面を有っていたので表面では模範

生らしく無口で、仕事熱心な私であったが、日常の工場生活に飽き飽きして時を過ごしていた。

私達の工場は此の頃迄、不思議と無傷であったので生産には少しの支障もなく慌しい増産の掛け声に追いまくられていた。市中の傍系列の会社は勿論、小さな部品を製造する町工場に至る迄、無傷と云う工場は他になかった。今度はこの番だ、きっとこの工場を大爆撃するんだわ私は密かに背いていた。ガチャガチャと軍刀を吊った足音に怯えながら、その監督官の見廻りの隙をみては私達

の配属されていた班の女子工員達は私に話しかけるのだった。

「谷さん、此の次はこの番なのよ、いくら一生懸命、あなたが飛行機造ったって到底だめよ。組み立てを終わってこの工場を出てゆく迄には、一撃で滅茶苦茶になってしまうんだわ、もう造らない方が却って得よ。何の役にも立たないものを造ることないじゃないの」

啓子と云う私より三つ姉になるこの班では器量の良い工員は、そう云いながら私に紙片を手渡すと、耳許で私語いた。

「よくって、此の手紙あとで手洗いへいって読むのよ。誰にも見られないように、そうし



て読んだら便器の中へ捨ててしまふの、いいわね」

私は呆氣にとられて当初は啓子の言葉に順応することができなかったが、好奇心も手伝って興味を感じられた。

「ええ」

力強く頭を下げたので啓子も安心した微笑を泛べながら、休めていた手を形式的に再び動かして作業を始めた。

私は何のことか、勿論見当もつかなかったが、直ぐに便所に立ってゆくことを躊躇いながらも、妙に其の紙片の内容を知ることとをせき立てられてならなかった。誰か私の同僚が見ていなかっただろうか、私はその時になって静かに首を廻して周辺を氣遣った。幸い誰の視線も感じた氣配もなく安らぎを得たのだ。そうなると思はれもう落ちつきを失って、じっと作業を続けることができない。足はいつの間にか各班の通路を抜けると早足で傍らの女子用便所と書かれた扉を開け入って腰をかがめた。矢も楯もたまらぬといった状態で取り出した啓子の呉れた紙片を開きながら読み始めていた。

「今日あなたを招待したいのです。私の部屋で珍しいものを御馳走してあげますから、是

非来訪を待っています。場所は焼け残りの家です。すぐに分ります。一班の光子さんも一緒ですから誘ってきて下さい。光子さんは私の家を知っています」

そうして、余白の部分に略図が書かれてあった。工場の程遠からぬ場所である。私は便器にまたがった儘、紙片の文字を二三度、繰り返し読んだ。私は異様な興趣を感じたが、同時に余り話しもしたことのない啓子が、何うして私に御馳走する氣になったのか不審であった。米の飯はなく、芋ならば上、満州の大豆粕、芋づるを主食にしていた頃である。尤も工場内では、それでも大きな井に混ぜ物は入っていたが米のめしがたっぷり食べられたので空腹を感じることにはなかったが、私は、何か美味しいものを食べてから死にたいと云う欲望を絶えずもっていたのであった。

私は思ひもよらぬこの勧誘に少なからぬ喜びを得たのだ。ここが便所の扉の内部であることも忘れて、幼少の頃の思い出に耽った。テーブルの上に盛り上げ並べられた幾種類もの御馳走がまるで今夜の食卓でもあるかのような現実感との錯覚に陥って、しばらくそこから抜け出られなかった。思いを達した欲望の満足を感じたとき私は自然的にその

ままの姿で放尿していたのであった。

私は此の時に至る迄、斯うした肉感的な空虚さを自分の体内に抱いていると意識したことはなかったが、単純で無彩色な工場生活と、そこに加えられる人間の虚無感とが混和されて私達の様な青春時代を此の中心に迎えた者にとっては、何か強烈な刺激を求めるのは至極当然のことであった。熱を入れてやり遂げることがないのである。勉強など形容詞の一つに過ぎない、無駄な労力を使ってみても明日の生命は誰が保証し得よう。一撃の下にそれこそ一片の肉塊さえ止め得ないで一生に終止符を打たねばならないのである。そう云う状況に私は幾度か接していたので尚更に私としては強い信念のようなものを抱いていたのだ。だが、それがどの様な種類のものにもせよ、それには共鳴者、同調者が必要である。勿論私は啓子なる人物を充分知り尽くしてはいなかった。相手は女子工員であり私は女子学徒である。

事実、教師監督官達も、学徒に対しては一般工員との接触は必要以上になされないように注意していた。そうした工場内の空気が一枚の紙片になって私の手許に達したのである。私はそれが何であれ、こころばらく忘れ





ていた生活の中の光明のようなものを感じとった。(久し振りで御馳走が食べられる!) 私はやはりその期待を描きつづけながら一日の作業の終るのを心待ちに待った。その日の作業は、そのために手が軽かっ

たので能率が上がった。私は終業時間前になつて、もう一度、先刻入った便所に入った。私は受取った紙片を流すことを思い出したからである。先刻は読み耽つて次々に余分なことを考え続けているうちに紙片を便器の中に

流すことを忘れて、そのままポケットに捻じこんでしまったからである。私は今その紙片をそっと取り出して拡げて再び目を通し終え、と、漸くホッとした気持ちで便器の中に投げ入れた。

私は此の時から便所の中だけが安楽な休息所であることを知った。ここだけは誰の監督も及ばないのだ。私は男子の工員がいつか便所の中でパンを交替に持ち込んで噛つてくると云う話を立ち聞きたのを思い出して成る程と思った。気付いてみれば便所の内壁には忌わしい絵図が精細に描かれてある。よくもこんなに手数をかけたものだと思ふ。よくも納めるのだが、誰の実感も同様なのだ。とやうと納得できる事態に自分の位置が置かれた今日、無下に卑劣な愚行だと罵ることもできない。いわば人間最終の本能の発散を唯一の残された自由の密室とも云うべき狹隘な便所の一室に於て若者達がそれぞれ、思い思いに仕遂げることによって、せめてもの忿懣をぶちまけているのであろう。

そこには戦争、特に敗戦を身近に感じとっている人達の自棄的な本心を露呈した偽らざる告白ともいうべきものが汲みとれるのである。だがここは女子用便所である。男子禁制



の便所にさえ、落書が施されている。しかも寄せ書きのように、幾つかの手の異なるもので絵、文章が描写されている。私はその時迄、気に止めなかった事柄であっただけに急に興味は深まっていったのを覚えながら、隅なく眺め廻した。猥雑な絵が精密に二つ三つ書かれていて、そこに解説されていた。その隣にはメモのように仕切られた一欄があつて、今夜裏山のA壕BPへHさん等々と書かれ、その下に返事らしいものが同じくアルファベットの字で暗符されている。伝言板の役目を果たしているのであつた。私は次第に異様な関心を抱きながら便所の中で一人微笑していた。男性は女性を思い、女性は男性を憧れる、その自然の摂理が時代の流れで不当に束縛されている。欲求不満がこの四壁に投げつけられているのだ。相互の心の交流が斯うして毎日々々特定の同志を取り結んでいるのである。

各所に設けられている防空壕の中で、女子工員を連れ込んで愛のプレイに耽っている場合に偶然通り合わせたり或は突然の避難に出喰わして夜間など店仕舞が間に合わず、はつきりで見つけられてしまうことなど、しばしば工場内の噂話に上るところであるが、女子

同志が結び合つて何んな悦楽を得ようとしているのか私には、分らないところであつた。私はあれやこれやと落書を根元にして想像を廻らすと不思議な程昂奮した自分の体内の血の流れを感じた。勿論私はそれ迄に味つたことのない程のものであつた。時間をみると間もなく終業のベルが鳴る頃である。私はもう三十分以上、この狭い一室に沈止していたのである。あわてて扉を開け勢よく飛び出した時、待っていたようにベルが鳴った。

○ ○

光子は啓子と同じ年頃だろうか、そういえばいつも工場内の休憩時間には仲睦しう時を過していた女子工員であつた。彼女はもう啓子から耳打ちされているのであろう、私を門外で待っていて啓子の家へと導いてゆくのだつた。

「啓子さん、どうして私なんかに御馳走して下さいましょう、余り話もしたことないんですのに。」

私は光子に云うと光子は

「きっとあなたが好きなんでしょう、可愛いらしい学生さんでしょそれにきれいだから」「嬉しいような、悪いみたいな気がするんです。折角の御馳走を私なんかが頂いては」

私はもう便所の中の落書や、それに依つて感じたことなどは全く切り離して考えていたので表書き通りに其の意味を採って唯々恐縮するの一点であつた。光子の方にとれば、これは全く滑稽な一事であつたことが後になつて分つた。その時迄余り時間を要しなかつたのであるが、光子は兎に角気づかれないように誘導の役割を果たしたのであつた。光子はやがて馴れた足どりで汚れたモンペを手で二三回払いながら小高い石垣道に差し加つた私達を赤い夕焼空がまばゆいように照りつける陽光に映し出される長い影を見つめたのが印象的だつた。

「もうじきだわ、ここを上つていった所よ」

光子はそう云い終ると一層足を早めて

「さ、早く行って御馳走になりましたようよ、

彼女、待ってるわよ、きつと」

せき立てるように云つた。私は彼女達に大人扱いされているということに満足さを覚えた。

焼土の中とは云い乍ら、不思議な程静寂な気の漂つた此の辺にはところどころ焼け木の間から若い青葉が無心に伸びて空気を吸っていた。早く平和がくればと私は、戦争の勝敗の何れを考へるでもなく呟いていた。



「ここよ、谷さん……どうしたの？」

私の耳許で迎えの声が出た。私ははっとしてたじろいだ。よくもこんな大きな家が残っていたものだと思つたのだ。私の眼前に横わつていた家は、今日私は現に招待された筈の家なのであるのに意外も意外、想像もしなかつた立派な邸宅なのだった。私は思わず目を手でこすつた。中から気配に出迎えの啓子が笑つて眺めていたので私は二度驚いた。間違のない現実の世界だ。漸く調子を普通に取り戻すことができたのは、その玄関を入つてからだった。啓子は二人を招き入れると

「何も云わないでね、谷さん、ここは私の家なのよ。その理由って云うことはないけれど、当分私が管理してるの疎開中の親戚の人のものなんだけどね、それ以上きかないで」

啓子は何か光子に目配せをすると

「谷さん、お腹すいてるでしょう、何もないけど腹ごしらえだけしましうね」

そう残して光子を伴つて奥の方に去つていくと、間もなく土瓶とさつま芋を大鉢に山盛に蒸したものをかかえてやつてきた。

「まだあるのよ、一ぱい食べなさいね」

私は食糧難時代に好物のさつま芋を目の前にして食欲を高ぶらせながら、一つ二つと

思わず胃に溶け込んでいった蒸し芋の味は、かつて味つたビフテキ以上の素晴らしさを感じた。お茶を飲み交互に芋をむさばるといくらかでも入つていった。私は満された胃袋が重い程の腹気持になった。私はいつしか睡気を抑えながら二人の顔を見交しているつもりだったが次第に明確な意識を失つていった。

○ ○

私が気がついたとき、強い圧迫を全身に感じたので、そこから逃れようと水中でもがくようにして両手をかき分けようとしてみると漸くその状態が判り出した。私は縛られていたのだ。麻縄で両腕を体に平行にして直立の状態で二ヶ所を固く縛られて僅かに足先が床につく位に吊られていたのだ。私は瞬間ギクリとした。洋式の一室には真暗に密閉されて四囲の窓には暗室同様に黒い遮蔽幕が張り廻らされて鈍重な室内の空気は私を一層恐怖を呼び誘うに充分だった。しんとして物音一つ聞えない無気味さに私は呆然とししばらく時間を送った。観念して再び目を閉じようとしたが落ちつくことができなかった。と、その時どこに居たのであろうか。啓子と光子の声が同時だった。

「気がついたのね」

パツと灯りが大きく照り輝やいた。私はこんな灯りをつけて良いのかと氣になった。

「このお部屋は大丈夫なのよ。絶対に外へは光線は洩れないの。ご安心なさい」

私は彼女達二人が何のために私をこんな目に逢わせるのか分らなかつたが、居合せた対手が彼女達二人だけであつたことに對し私は心の安らぎを覚えた。私がこうされている状態を質すことは無駄だと知つた。何を云つても、こうされている以上、解放されることはないと悟つたからだ。むしろ逆に興味さえ感ずる妙な心理が、心のどこかに湧き上つてきた。廻上の鯉を覚悟した私は彼女の動きを監視することにした。

「谷さん、これから、とっても美味しいもの御馳走したげるわね」

啓子が云つた。自由のきくものは私の足だけである。床についている両足の拇指に力を入れて、体重を支えようと懸命に努力しながら、その言葉を受け流していた。さつま芋の満腹接待を受けているので腹は息苦しいこと甚だしい。益々苦痛は増す一方である。腹部を押しつける縄の緊度がだんだんと自然のうちに加重されるので、私は身もだえするやうに体をくねらせた。



「お腹が脹ったのね、谷さん」

言葉は静かだったが異様な冷酷さを感じたのは、それからだった。私は悔まれた。お芋をあんなに食べなければよかったと私は浅間しかった自分を責めたが、もう追いつかぬことだった。腹はぐんぐんと膨脹してくる一方である。

「楽になりたいの？谷さん」

「ええ」

「じゃ、私達の云うこと、何でもきいて？よくって……」

「ええ」

私はもう返事をするのがせい一杯のところであった。余分に言葉を発するだけの気力も実際の状態からして失われていたのである。私はもう唯、解放されたい気持ちのみで何を要求されても受け付ける心構えであった。

「苦しいわ、お願いだから早く解いて、この縄を……ね」

私は嘆願するのだった。二人はその様子を顔を見合わせながら眺めていた。私は足の指先が痛くなってきたので、左足を浮かすようにして右足先だけで立った。すると身体が縄を中心にして、くると回り出した。それを見た啓子と光子は柱に括ってあった縄を解い

たので、私は床の上にどさりと横になった。汗に滲んでズロースがべっとりと腰の周囲にへばりついた気持ちの悪さが、私の心を焦立たせた。

「じっとしてるのよ、これから楽にしたげるから、もう辛抱できないの、いいわ、その代り、これから何をされても云うなりになるのよ」

啓子は冷たい眼差で私に云った。啓子はそこに用意されてあったらしい木の救急箱の中から薬瓶を取り出すと、光子に向って、

「そろそろ始めましょう、手伝って」

そう云いながら光子に何か用意するように指示した。光子はゴム布を救急箱から出して私のお尻の下に拡げて敷いた。私はもう一刻も早く楽になりたい一心で恥も外聞も考える余猶などなく、される儘だった。光子は私の腰をもち上げると次でモンペを脱がせ、ズロースを引き下げようとした、私は思わず

「アッ止めて……」

と叫んだ。

「声を出すと、もっと此の儘にして、緊く縛るわよ」

啓子が準備している手を動かしながら、こちらを振り向いて

「今楽にしたげるのよ、でないと、もっと苦しめるわよ」

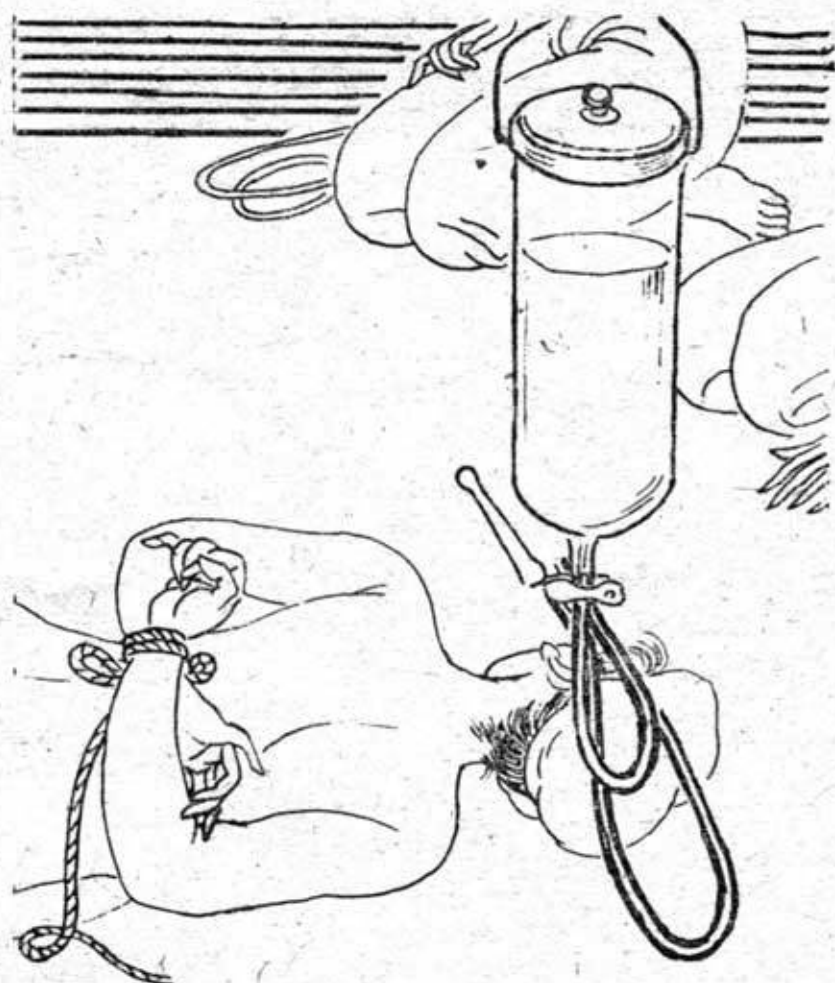
私は断頭台上に上った最後の覚悟を決めた。どうにでもなれ。私はそう思った時気が楽になった。私の全神経が人形のように冷たくしびれてゆくのを覚えた。静かに目を閉じた。下半身が涼感にあふられて生れて此の方味ったことのない空気に晒す自分の惨じめとも哀れとも云い表わすことのできない気持ちに襲われた。

はっと目を開いたと同時に私の腹の中に突然冷水のようなものが侵入してきた。一、二分の間のでき事であった。見ると啓子は浣腸器を引き抜いて第一回の注入をし終えたところであった。私はかなり苦しさを加重させられて犬のように喘いで吐息を吐いた。腹の中で生き物が蠕る感じだ。大きく右に左に、グ、ウウ、キュウと下腹に差し込む激痛は、私をこれ以上耐えさせまいといったところまで追いつめた。私のその状態を見て二人は微笑しているのが憎々しく目に映って口惜しさに涙が落ちた。そうする中にも私の腹の中の動物は大きく暴れ廻っている。

「もう一つ御馳走しましょうね」

啓子が浣腸器に薬液を満して近づいてきた





ので私は両脚を硬直させて股を縮めた。啓子は二回目の浣腸液をあっさり注入して

「どう？気分は、谷さん」

「もう勘忍して、私、我慢できないわ、これ以上」

怒濤の如く押し寄せる波が防波堤を、今にも打ち砕かんとしている。

「許して、お願いだから」

啓子は

「じゃ一先ず解除したげるけど、条件がある

の、きける？」

「ええ何でもいから兎に角楽になればいいわ、何でもきくわ」「あとで何されてもいいのね、約束できるのね」

「ええ」

「早く便所へゆかせて、もう私辛抱できないわ、出るの、出てしまおうわ」

光子がベッドの下から何かを取り出すと私の尻に当てがった。金属の冷やかさが、私の全身にピリッと走った。

「ここで、用を足すのよ。その儘で」

私は待ち切れずに、シャーと勢よく走って差込便器に反射するはね返りが自分の尻に当る。だがそんなことなど意中には全くない。苦痛から抜け出ることだけが今の私の望みであった。私は尚も苦痛に悶えながら、それでも力みつづけることに依って、次第に身の軽くなってゆくのを僅かにではあったが快く味づけた。全く不思議な力だと思った。

私は先刻迄の苦痛から考えると嘘のよう

な、自分の五体を取り戻した。だが其の時間は直ぐに次の作業への移行への段階を与えられた束の間のことであった。啓子はベッドの左にある柱にイルリガートルを吊るし、その中へ薬液を一ぱいに入れると

「もう楽になったでしょ、今一度、お腹の中をきれいにしたげましょうね」

イルリガートルの嘴管が恰も私の体から連結しているように寸法が適った長さであった。私は病院の手術室に居るような気持になった。意地悪な二人の目が私の苦痛の状景を誇らしげに笑っているものであった。イルリガートルの薬液は見る見る下方に下ってゆく。

「もう一ぱいね」

品物でも売るような口調で、啓子が又蓋を取ると薬液をつぎ足した。

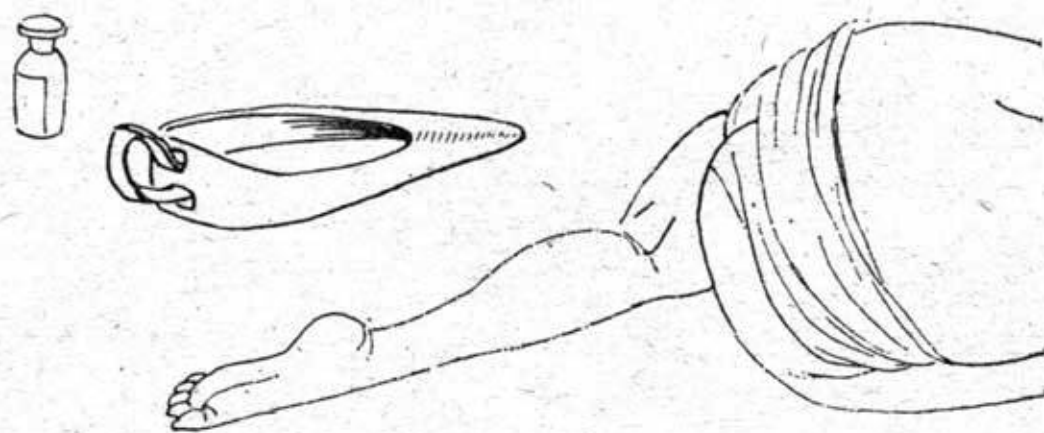
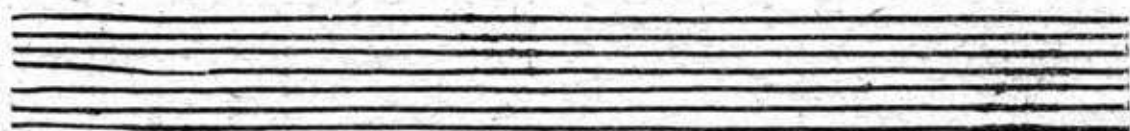
「もう止して、お腹が割れちゃうわ」

私が訴えるように叫んだ。

「大丈夫、私達体験済みなんだから、却ってあとがさっぱりして気分がいいわよ」

新しい薬液は既にイルリガートルの中間位の処に迄下っていた。息苦しさが太く短い呼吸になって表われる。啓子の魔手が延びて嘴管を引き抜いた。とたんに





「ああアア」

私は子供が引きつけを起した時のように怖  
いた。啓子の手が脱脂綿を荒っぽく箱の中か  
ら取り出すと、光子が手順のように手馴れた  
動作で差込便器を捜入した。啓子の手を脱す  
ると待ち切れず、しぶきを上げるような薬液

出て、恰も軟骨動物の姿のようにベッドにペ  
ったりと吸いついていた。  
私は瞼を閉じて不可解な清涼感に浸ってい  
た。夢心地だ。だが何か拘束された両腕のし  
びれが胸の辺りに伝導してきて血液の冷たさ  
が感じとれる。

の流出を感じた。思わず力が入る、薬の刺戟ではなく満腹になった腹の中の圧縮力が、還元作用をする為の力だと思えた。水道の蛇口のような。まるで五体の一部とは思えない。いつまで続くか不安な気持ちにさえなる位止まる処を知らないのだ。寒暖計が下ってゆくように見る見る腹の皮がたるんで、ほっとすると腹の中に一物もなく、唯水だけが残っている。少し動かすだけで其の腹の水が桶の水のようにガバツと傾く、腸管の中によじれる感じがハッキリと判るのである。よくもこんなに沢山入っていたものだと思心する。私の五体は急に疲労が

「此の腕さえ解いてくれたらなあ」  
私は心の中で呟いた。

「あなた未だ見事な処女ね、憎らしい」

私に向って乱雑な言葉が耳許に投ぜられた。然し反論する勇氣もなかった、どうにでもなれ、私は、彼女達の玩弄物と自認して諦めていた。或は、私は心の中では、何か虐待されることを希求していたのかも知れなかった。それは当初程の怖れを、もうまるで感じなかったことも明白だった。むしろ期待さえしている気がした。自分でも不思議な精神状態に追いやられていったのであった。同性として、女性同志が同様な心理の内面を探知して触れ合った。飾り気のない露わな表現に依って一時でも死への道程の過程に於て斯うした満足感を与え合うことは恵まれた私にとっては意義深いものであった。

私には悦虐の快感が此の時から自分のものとして自身にまつわりついた。性への関心と疑問もすべて未経験な私ではあったが工場内の工員間のわい談が下品なものとのみ考えできた私の倫理観を、これに依って新たにする機会ともなったのである。戦時中と雖も女性には女としての身装をどこかに身につけていたのである。唯自らその制限が加えられ大ぴ



## 裸女争闘場面

略号

(らし)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

渾一本の若々しい裸女二人が互いに相手に止めをさそうと、あられもない姿を展開して根かぎり争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って相手の顔を自分のお尻の下に敷いてしまおうと争うメトミファン、女斗ファン並に女性のサドマゾに関心をお持ちの方及び女相撲ファンの方に捧げる。

らに振舞うことは許されない状態に置かれていたのだ。そのことが内向的に、気の置ける女性同志の斯うした不満を露出できる機会となつて互に満足を与え合うのであろう。

私は既にこうした行為に依つて新らしい世界の虜となつてしまつたのである。此の世界には外聞も恥も存在しない。人間の本能を確認し合うこと、それ以外にないのである。飾り、見栄すべて余分なものを置き去りにした素ッ裸の人間になることなのである。実直に其の本能の召使となり楽土に生きることだと私は考えた。平等の人間、原始的な世界に逆行して生きる、私は卒直に受け入れることを腹で決めていた。そうなれば私は抵抗を感じ

## 変態強盗侵入

略号

(こと)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 絹川 文代

外出から帰った一人居の美女の目の前に突然ニユツと現れたアブ強盗、驚いて口もきけぬ彼女の細腕をとるや逆手に捻じ上げるや次々と彼女の晴衣をはがしてゆくのであった。晴衣を長袴襦をはがされた女の白い胸や膝、荒々しい縄は後手ばかりか胸から二の腕へも無惨にかけられてゆく。縄にもだえ、いたぶられつくす美女と悪魔の如き強盗とのコントラスト。

ない。啓子も光子も、同じように心底から斯うした悦虐に真の歓びを感じることができたのだと思つた。極めて自然の睡眠に誘い込まれた。もう先刻のようにビクついて心の中の恐怖心に呼び起されることのない眠りであつた。「光子さん、此の次は強いのにしましょう」啓子は云つた。薬液と五十CCの浣腸器が手先に光つた。やがて注入されてきた一段と冷たい溶液は、今迄と異つた強烈な刺激を感じた。ぐっと、さし込んでくる痛みに私は力を入れて耐えようとして努めた。光子がどこから持ってきたのか私にゴムシートの様なものを当てがっていた。その中に布片を二三枚重ねて当てているオシメなのだった。外側の

ゴムオシメの引き緊つた感じを充分味あおうとしたが耐えきれない波が打ち寄せた。腹の中の薬液が、私を最後の忍耐点に達したことを告げるかのようにピツと体外にはとばしり出た。私は其の音に些か恥かしいと感じたが、それは第一音のときだけであった。あとは全く大ぴらに力み続けてオシメの中に汚物を排出していた。布片が濡れ浸っている様子が、はっきりとわかつた。

「谷さん、これから毎週一回宛、こうして教育したげるわ、私達の仲間入りするのよ、いい？」

私は啓子の言葉に黙って頷いた。

私は始めてのグループ入りの為のモデルにされたのだったが見事に其の虜にされてしまつた。私は次の週迄待ち切れない、思ひだつた。私は空襲警報のサイレンをききながら、何としても生きのびねばならないと願つた。生きていく意義を私は始めて知つたように思えた。六日毎に到来する此のグループの秘された楽しみのために、生命持続への願いは偉大な吸引力となつて、あの惨激な空爆のさ中にも生きのびることを許されて、遂に八月十五日を迎え、三人は共に今日迄境遇こそ異つても生きて、歓びを分かち合っているのである。本能こそ偉大な武器なのである。

—おわり—



## マゾ芸術考

## 女性男装管見 (二)

田 島 直 士

第一回につづいて、その後に私が自にした女性の男装した写真、映画、小説などを中心に感想をしるしてみたいと思う。

乗馬服姿というのは、厳密には男性というべきでないという意見もあるかと思うが、元来、女性の乗馬服は裾の長いスカート風のものであり、乗馬靴も男性のとは違っていたらしいことは、古い時代のイギリスの「狐狩」の絵を見ても判る。従って、上に豊かなふくらみがあり、下がきりっとしまった乗馬ズボンは、男装というべきであり、更に乗馬という行為が、他を征服しようという挑戦的なものであり、男性の属性であるという意味から今後、私は簡単に男装という時、その中に乗

馬服も含めることにしたい。

さて、最近、女性の乗馬熱が盛んになり、BGや女子学生の中にも、気軽に乗馬クラブに入り、このスポーツをたのしむようになってきたが、そうした風俗をうつした写真に余り魅力のあるものが多くない。

これは、元来、貴族的な気品を持っていなければならぬのが、余り低いレベルに降され、そのため、服装もくずれてGパンに短靴などというのが現れたことによる。

大衆化は結構だが、格式をくずしてもらいたくないことをまず希望したい。

ところで、先月、星由美子の男装を見たいものだとい寸触れたが、偶然、十一月号の、

「近代映画」グラビヤに、星由美子の乗馬風景が出ている。題して「イキな乗馬ズボン」乗馬ズボン、といって、ズボンに中心があることに注意したい。

上衣は黒の（恐らく）カッターであるが、ズボンは真白く、黒光りのする長靴をはいて仲々さっそうとして表情も明るい。いや明る過ぎる位だ。たしかに可憐な美しい写真だが私が物足りないのは、どこか非情な、酷薄なところがないことだ。あまり馬を愛したり、いたわっているような感じなのは、人柄の良さを反映していても、一寸不満なのだ。貴族的な冷たさが要求されるゆえんである。

星由美子は近作の東宝映画「箱根山」で、



箱根の旅館主の一人娘明日子に扮し、隣家の下働き乙夫（加山雄三）と恋人同志になるが完全に乙夫を下僕としてとりあつかい、「乙夫、乙夫」と呼びすて、我儘一杯に振舞う。その女王対下僕の関係が面白く、そういう彼女の意外な一面を表しているように思われた。この一面が馬に対しては見られなかったのは残念だった。

次に、これは時期的には随分遅れているので、今更珍らしげに紹介するも、どうかと思うけれど、未だに掲げてあるので記すことにするが、東京には東急アパロンクラブという乗馬クラブがある。このポスターが東急沿線の各駅に掲示されており、五月ごろからの分は、そのまま、中川姿子の乗馬姿の写真である。上下共純白の夏服、長靴は黒で、かなり太造りであり、騎手の表情は口をあけて、いたずらっぽく笑った、仲々豪快ないい写真である。

中川姿子は弘子の妹で、歌手らしいが、弘子の方も、大分前、乗馬姿が雑誌グラビヤに出たことがある。この二人の姉妹には、どこか少年のような固さ、りりしさのようなものがあり、乗馬スタイルがびったりしていると

更に十月号の「文芸春秋」のカラー写真に「秋に遊ぶ」（だったと思うが、手許に現物が無いのははっきりいえない）という一頁があり、女性騎手が障害を跳んだり勇ましい瞬間をスナップしたものである。こういうダイナミックな場面も悪くないと思った。

乗馬に関係してだが、以前、美智子妃が成仁親王御誕生前に、乗馬をされるという記事を読んだことがある。皇太子が美智子妃のために乗馬服を新調されたということだった。

その後、そういう事実はないようだが、あれば目ざとい週刊誌が見のがそう筈もないので、実現しなかったのだろうか。

馬術大会など、御夫妻で出席される時、皇太子は乗馬服姿で行かれるようだが、美智子妃もエリザベス女王のように豪華な乗馬服に長靴姿で御出席されたらどうか。

ああいう地位、容姿態度の女性こそ、乗馬服の最も似合うタイプではないかと思う。最近余りにもナルちゃんの良きママさんになられたが、この辺で貴族らしい若さを乗馬に託していただきたい。

とりとめがなくなったが、今から十年位前の「国際写真画報」にアメリカの女子大生による騎馬警官隊というのが紹介されたことが

あった。四頁を占めた、かなり大掛りのものだった。はっきりしたことは思い出さないが記憶にたよっていると、この警官隊は主として災害時の救難作業に当るもので、学生も一役というので結成されたものらしかった。

いずれも花もはじらうような美人ぞろいでカーキ色の軍服のような制服に、乗馬ズボン長靴、帽子は船型（米軍のような）のものをかぶり、どういうわけか腰にはピストルを帯びていた。そして男の警官によって、馬に関しては相当高度なところまで訓練されるのはじめ、射撃の方もかなりの腕前にまできたえられる。そして、一旦災害があれば、負傷者の救出をやる他、治安の維持をはかることになり、それ故、ピストルも持っているらしい。その後、存続しているのかどうかは知らないが、男子も忸怩たるものがある。

馬といえば、女流競馬騎手というのは、世界どこにもいないものだろうか。且て、エリザベス・テラーが主演した「緑園の天使」のようなことは、現実にはないのだろうか。

日本でもし、そういう制度があれば、ちろんこちんの男女や、でぶでぶのみにくい女が登場して幻滅しそうだ。

前に南田洋子が子供の時は、女の騎手にな



りたいたと思ったといっていた記事があったし黒柳徹子も、なんの雑誌だったかに、女学生時代、競馬騎手になりたいと思ったが、女はだめだと判ってがっかりしたといっており、かなり女の人の中にも、そういう希望をもつ人があるものと見える。

やはりこの時だったと思うが、黒柳徹子は軍人になりたくてたまらなかったけれども、女はだめなので、女スパイになって満洲の荒野をかけまわりたいと思ったなどといっている、実現すれば、新東宝「女間諜曉の挑戦」を地でいく所だったと残念に思われる。

そういえば、黒柳は九月三十日の「若い季節」では野球ユニホームを着ていたが、仲々よく似合った。

乗馬関係はこれ位にして、次に女海賊ものの映画、最近作を一つ紹介しよう。

これは先月紹介した「アドリアの女海賊」と同じイタリア映画で「マラカイボ大要塞」という作品である。

舞台は十七世紀のカブリ海、イギリスの海賊アランドレークが主人公で、南米マラカイボの要塞の宝庫を狙うイギリス、フランス、スペインの海賊が三つの巴で大攻防戦をくりひろげる。このドレークの恋人アルタグラチ

アという女奴隷に、フランスのニューフェース、ブリジット・コレイが扮する。

コレイはすらりとかなり大柄な女優だが、日本の京マチ子をもっとエレガントにした感じの、肌が白く頬にほっと紅味のさした可憐な容姿である。この女優が最後の場面で男装するが、かなり胸を広くあけた白いシャツに黒いズボンをはき、膝までくるような柔かい胴の、かなり太造りの長靴をはく。

当時の海賊の普通の衣装なのだろうが、女らしい特長を強調すると共に、男らしさもミックスさせた一番魅力的な姿の一つだと思った。この姿でコレイは最後にドレイクと抱擁して終るのだが、なんともいぬエロティシズムをただよわせ、もう少しこの衣装で活躍させたかった。

しかし、私がこの映画でもっと興味を持ったのは、別の登場人物なのだ。こうした海賊を陰であやつる人物に「海の虎」という人物がいる。常に褐色の仮面をつけてあらわれ、命令をして決して素顔をあらわさない。

海賊の一味、フランスのブラッスールは、命令によって宝物を手に入れるが、一人占めにするため味方を殺し、ドレイクに罪をきせる。ドレイクはこれを晴らすため、スペイン

の宮殿に化けて入りこみ、ここで、一人の女官と知り合う。この女官が実は「海の虎」でドレイクと知り、ドレイクを助けて裏切り者ブラッスールを倒そうとする。しかし、ブラッスールはマラカイボを攻撃して来たのでドレイクはスペイン側について、これを撃破しブラッスールと船上で果し合いをする。

この時一緒に戦った「海の虎」はブラッスールに倒されてしまう。この「海の虎」には、ドイツのヘルガ・リーネが扮する。背が高く、顔はややきついだが、上品な美しさにおいては、ブリジット・コレイに劣らない。声はかなり低いアルトである。

女官姿以外では、白いシャツに黒の胴着、赤いズボン、膝まである長靴、細身の剣をつけ黒いマントという姿で登場する。この姿で仮面をとるのは一回だけである。マラカイボにブラッスールが面会に来て帰ったあと、秘密の部屋で仮面をとると、ふさふさした金髪があらわれ、美しい女の顔が出てくる。

この時は多分、そうではないかと思っただけにしても、一寸したショックである。しばらく鏡の前で自分の素顔をみとれているのも良い。しかし、全身があらわれるのが瞬間的なのは残念である。死ぬ前には、船上で三人



の海賊を倒すが、ブラフスールとドレイクが斬り結んでいる時、加勢しようとしてブラフスールに斬られる。そして、苦しい息の下から「女として生きたかった」といって死に、海中に水葬される。

これだけの面白い登場人物を持ちながら、きわめて不満な筋の運びだと思う。彼女の仮面がはがれて、ブラフスールがおどろく。素顔のままの立まわり。そして最後に死というのならない。これでは面白くない。「海の虎」は、いわばブラフスールよりドレイクよりも一役地位が上なのだから、この点に注意したら、もっと面白くなる筈だ。

こうした点をマゾヒズム的に上手く処理した作品に山田風太郎の「おんな牢秘抄」がある。これは大岡越前守の娘、霞が女賊ということである。天一方をとりまく謀略を知り一味六人を主として色香にまよわせて捕え最後に首切り役人に処刑させる代りに、自ら刀をとって六人を相手に勝負し、一瞬に全部を斬りすて成敗してしまうという筋である。次にその部分を抜萃しよう。

霞は文金島田に稲妻あられの振袖、金欄の帯、その帯に一本刀をおとしざしにして登場する。

「浅右エ門、その六人の男の縄を切れ、眼かくしをとれ」と命じた。

……………

霞は、きつとなって六人の男を見すえて

「これ、そなたらに男の性根があらば、刀をとれ」といった。

男たちは愕然として、台上の六本の刀を見る。

「霞、あの六人の哀れな女にかわり、いいえこの世の女、すべてに代り、女の敵として、そなたらの頭をうちおろしてくれる。起て」

義尾長兵衛は、ぐいっとまわりをみまわした。すでに蟻のはい出るすきまもない。

「どうせのがれられぬ運命じゃ、やれっ」

さけぶと共に、六人は土をけたてて台上の刀をうばいとった。と、みるまに、まず長兵衛と弥五郎が獣のごとく反転する。

ふたりのあいだを稲妻あられの振袖がひるがえったあと、長兵衛と弥五郎は、おのれの血の散った刑場の土をつかんでいる。その血汐を吸った姫君の刃は、すでにがっきと石寺小四郎の刀とかけ合っていた。と、みえた瞬間、小四郎の刀身はひっぱずされて、うしろに流れる霞の閃に、しのびよった乾坤堂は

胴を薙ぎはらわれて横に四、五歩およいで、どうとこころがり、あとを追うように、つんのめっていった小四郎の背に銀蛇の光流がはしった。そのまま身を低くした霞の頭上で、かつ祖父江主膳と南条外記の刀が青い火花をちらした。

花かんざしが、きらめきつつ、まわってとびすさるのを……追いつがる二条の袈裟がけに——旋風のごとくまわる破邪顕正の姫君一刀流、みごとに南条外記の美しい顔を唐竹割りにした。それは、まさに血汐とひかりに狂いとぶ一颯の花吹雪をみるような一瞬であった。

女剣客の登場する時代小説はかなりあるがこれほどまで一人の女性を重点的に大活躍させる例はないのではないか。正に女椿三十郎である。ところで、女性自らの手でたくましい奸賊を斬るといふ、このマゾヒズム的な構想を、との映画「マラカイボ大要塞」に利用してみたらどうなるか。

海賊船シーホーク号の船上、ブラフスールとドレイク斬り結んでいる。「海の虎」仮面で登場。「ドレイクとブラフスール剣を止めよ、海の虎が裁きをつけにきた」剣を引いたブラフスールは、海の虎に



「今こそ裏切り者のドレイクを血祭りにする時です。どうか私におしおきをおまかせ下さい」

海の虎は

「よし、罪状あきらかじゃ、ドレイクをしばれ」

ドレイク無念げにブラフスールの手下にしばられる。

「これで終わった。ブラフスール握手じゃ」

と、握手をしかけてブラフスールの手に捕獲品の指輪をみつける。

「ブラフスール、とうとう化けの皮がはがれたな、その指輪が証拠だ」

この時、ブラフスールすばやくドレイクを刺し、海の虎に向って剣をかまえる。手下が押しよせる。海の虎は仮面をもぎとると美し

### 緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた句うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋められました。まだお求めにならないマニアの方は、是非コレクシヨンの一端にお加えお味下さい。その妖美のエキセントリックを

い女の顔があらわれる。不敵な微笑、やや頬が紅潮している。

「あ、あっ、お前は？」

「今判ったか、バルデス伯爵の娘、ヘンリエッタだ。今こそ、父のうらみと、お前の長年の悪業のおさめ時だ。海賊に化けて、お前を探っていたのだ。覚悟は良いか。」

と叫んでマントをひるがえし、長剣を抜き鋭い突きで一番近くにいた手下の荒くれの背中につき抜ける。ヘンリエッタ、屍体を長靴でけとばし、更に突撃、左右に数人の敵を倒すが、相手の剣尖が上衣の袖にふれ、白い腕が見える。そして、相手の返り血で胴着がぬれ、甲板は血のりで一杯。

長靴をふみしめ、ブラフスールを追い、がっちり切り結ぶ。とたんにブラフスール、

### 緊縛写真グラフィック集

略号「グラフィ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフィ」です。誌面いっぱい、所狭しと盛り上げる大型グラフィの迫力は、きつと皆さまで、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女性緊縛マニアの皆さまに自信を以ておすすめる出来るグラフィック・フォト集です。

短刀を左手で出し投げようとする。その瞬間瀕死のドレイクがピストルで腕を射つ。すばやくヘンリエッタが剣で突く。血のほとばしり、獣のようになつて、ブラフスールは倒れる。ほほえむヘンリエッタ。重傷のドレイクにかがみ込んで甘いキス。

と、いった幕切れはどうだろうか。などと考えてみた。映画の終りなどで女性に殺人をさせないような筋になっているのは、女性のやさしさを強調するのと、罪におとし入れないようにする配慮なのだろうか。

女性もかなり血を好むこと、殺人をすることが罪にならないような状況を設けること、つまり時代劇ならば遠慮はいらないのではな

### 緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利川文代、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹ポーズによって味をつけます。どうぞ御一見下さるようおすすめます。



# 緊縛フオト撮影の実際

△ 芦屋マダムが白百合夫人が▽

塚 本 鉄 三

十月九日の、あの嵐のような激しいムチ打ちによって、私の心の中に嗜虐の焰を燃え上らせて素晴らしい演技を見せてくれた関谷夫人からは、その後再び便りがと絶えた。

十月中下旬から十一月。一年中で一番よい季節である。行楽には勿論のことではあるが写真を撮影するにしても、暑くもなし寒くもなし、活動するには最適のコンディションである。それに撮影後の処理をするにしても、冷却することも保温することもいらない。摂氏十八度乃至二十度の液温が自然に得られるという便宜さも、秋の夜長と共に捨てがたい

ものである。

奈良、京都あたりの神社仏閣、或いは萬葉の遺跡といわれる飛鳥川附近の風景写真も大分撮りまくった。長谷寺の石段下に車を置いて、重い三脚をかついで長い廻廊の続く急な坂を何度も何度も休みながら、登って本堂の前にやっと辿りついた時、すでに三人の先客が、望遠レンズを装着したカメラを三脚にすえているのには驚いた。

長谷寺、岡寺、壺坂寺とこの附近に集った西国三十三ヶ所の札所の写真を撮影、薄暗い堂内に安置された観音像にレンズを向けたと

き、妖しい夢幻の甘美なムードが千年の年月を経た古めかしさの中に漂っているのが伺われて、ゆくりなくも、女身の神様である観世音菩薩の美しさと、緊縛にもだえる現身の女性の美しさとが、渾然一体となって私の頭の中を混乱させる。

もとはと云えば、現在流行のレジャーブームにのった行楽案内の地図に添えて載せる名所旧跡の写真の一部として、その行程中の風物写真を依頼されたのに端を発している。今年の四月から、京都、奈良、大阪を中心に撮り初めて、その枚数も相当になった。そして



私はれんじ窓から洩れるほのかな光りに浮かび上った仏像の妖しい魅力にとり憑かれてしまった。

それは、国宝とか重要文化財に指定された有名なものよりも、名も知れぬ路傍の忘れられたものに関心を持った。廃れ寺の壊れかけた築地塀に、こよなき写材を見つけた。そして、私は今年の秋も古寺巡礼を続けた。

関谷夫人から便りが一向に来なくなっから、約一カ月過ぎた。私は嘗て愛読した松井籟子女史の小説「淫火」(みだらび)の主人公である小百合夫人を思いだしていた。被虐の妄想に悩まされていた小百合夫人が、良家の娘として生を享け、嫁いでは富裕な家の貴夫人として何不自由なく暮らしていたが、その被虐を愛する性癖の故に、数奇な運命に奔弄されるという筋書きが、余りにも関谷夫人に似かよっていたからだ。

！ちよっとすると、関谷富佐子さんは、芦屋マダムとも称せられる有閑マダムではないだろうか、というような気持も起ってくる。いつも局留の連絡で、しかも、その局をその都度変えてくるという用心深さからしても、私は彼女の正体の謎について、いろいろと憶測を逞ましくするのであった。

そして、一カ月以上も連絡がなく、どうしたことかと思っていた矢先、十一月十四日、私は彼女からの手紙を受取った。ずしりと重い筆で表書きを書いたその封筒を手にして、高鳴る胸を静めかねながら封を切った。

本当に心ならずも永らく御無沙汰いたしました。貴方さまもお変わりございませんか。私もお蔭さまで至極元気でございます。身体だけは本当に丈夫で風邪一つひきません。

十月の末には主人のお母さんが関西見物がてらこられまして十日ばかり滞在いたしました。その間、京都、奈良、神戸、などの見物にお伴をしたり、歌舞伎座での観劇に主人共々一緒に参ったりしたりで、身体が自由がありませんでした。やっと、二、三日前から、ほんと自分の身体になったようで、お母さんをお送りしてからの数日が、なにか永い永い月日のように錯覚されてくるのです。

それでいて、貴方さまにムチうたれた、あの十月九日の日が、まるで昨日の出来事のような新鮮さで、私の胸に蘇ってくるのです。あの激しいムチうちによって私のマゾの表情が、どのように変化していったかは、貴方さまからお送りいただいたお写真によって、

よく伺え、私にとって本当に感激でございました。枚数は多くありませんでしたが、その少いお写真の中に、私のムチうちに悶える姿が、いきいきとあらわれていて、本当に有難うございましたと、申し上げるよりほかはございません。

それにしましても、貴方さまには折角いろいろのお写真をとろうと御計画をしておられましたように、私の気ままのために僅か数枚の撮影にて終らせてしまいましたことは本当に申しわけなく思っております。ここにお詫び申し上げます。

十二月号のグラビヤには私の写真を大きくお取り上げ下さいまして本当にありがとうございます。最初お願いしました私の念願がここに貴方さまのお蔭にて、見事にかないましたことを、重ねてお礼申し上げます。

頂戴いたしました数多くの写真は、秘蔵の品として私の文箱の奥深く、保存させていただこうと考えます。グラビヤでは全国各地のマニアの方々に、関谷富佐子の激しい表情の変化をあますところなくごらん頂き、マゾの私としましては、本当に満足でございます。まるで衆目の中に晒されてムチ打たれているような気持でございます。



それに印画紙に焼いていただきました写真は、私の若き日の記念として末永く思い出にさせていただきます。一年、五年、十年と女の容色の変化は加速度的に退化してゆくものでございますが、私の若い時のこのような写真は、本当に得難いもので心から感謝いたしますとともに、よく決心して貴方さまにお願いしたものだと思っております。

最初思いました、主人と相談いたしました折も、自分ながら大胆なことだと、一寸あきれておりました。でも、でも、私は今となつては嬉しさでいっぱいです。

これからは、ベテランの貴方さまの手で心ゆくまで御指導していただけたらと、虫のよいことを考えております。御指導のとおり一生懸命努力いたしますから、どうかよろしくお願い申し上げます。

来る十一月二十日（火）の午後二時、阪急芦屋駅前まで御足労いただけませんでしょうか。貴方さまの御都合もお伺いせず、いつも一方的に勝手なお申出ばかりいたしました、本当に恐縮でございますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

大分永らく御無沙汰いたしました末でございますので、恐れいりますが御都合のよしあ

し、芦屋郵便局止にもお返事下さいますよう御待ちいたします。

気温も大分低くなってまいりましたので、暖房のよくきくお部屋の心当りを見つけてあります。もしおよろしければ、そこを利用していただければ、駅からもそう遠くありません故、好都合かと存じます。

今度こそ、この私の身体はすべて貴方さまにおまかせいたします。どうぞお気のすむようにお仕置下さいませ。先日の埋合せに、すべて貴方さまの御指図に従います。そして、その際の私の表情を幾枚でもお写真にとつて下さいませ。貴方さまの好き勝手放題にしていただくのが私の満足でございます。

勿論、先刻御承知の通り、私は主人の好みに飼育されました結果、ムチ打ちについて大変な喜びを懐いております。先日、貴方さまから受けましたムチ打ちも、お尻ばかりでなく、腹部から背中、それに脇腹、脛、足の裏から足の指へと、本当に全身の痺れるような感激を味わいました。あの時は、息をつくひまもない連続的な激しいムチ打ちで、もうこれ以上は沢山だという気持ちも起ったのでございますが、今となりましたは、大変欲深かな考えでございますけれど、もっと、もっと

ひどい目にあわしていただきたかったような気持ちもするのでございます。

いいえ、決して、貴方さまの責め方が手ぬるいと申し上げているのではございません。すべて、私の欲深かのさがのなせるわざでございます。そんなわけでございますから、今度お逢いしましたときこそは、御遠慮や手加減など一切なさらずに、びしびしと飼育して下さいませ、マゾの私のことですから、どのようなことにでも、すぐ馴れ同化してゆくことと思ひます。

そのようにして飼育していただいた結果、変化しました私の感情をむきだしにしたフォトが誌上を飾るようなことがありましたら、私の喜び、これに過ぐるものはありません。浣腸されて排便を抑圧された苦痛にもだえる表情を刻明にフィルムに印していただきたいものだと思ひます。

胸から脇腹、お臍、それに足の裏なんかを抉ぐるような櫛り責めにあって、ころげまわって悶える自分の姿を想像しただけで、ぞくぞくと身ぶるいするような快感を覚えます。

殊に、両手は背後で厳しく括られ、胸には息をするのを苦しいくらい、きつく縄がまわされ、只唯一の自由の残された両脚をばたば



たさせてあばれるのを、ぐっと足の甲を握られ、足の指のつけ根のところを、こちょこちょと擦られたら、一体どうでしょう。もがいて足を攪んだ手をふりほどうとしても、がっちり支えた男の手は、どうにもなりません。只、僅かに足の指を反らしたり、くの字に曲げたりして擦ったさをこらえますが、とうとうこらえきれなくなった私は、大声でわあわあと泣き出すかもしれません。

でも、私にとっては大の感激である擦り責めも写真としては、面白いポーズが出来ますでしょうか。足の指の反りかえったところ、とか、くの字に曲ったところとか、それから泣き出して大声でわめく私の顔とか、むせび泣く顔の表情などをうつしていただきたいと願っております。私の感きわまった泣きべそ顔を大写真にして頂けたら、と私なりのアイデアを考えておりますが、もしグラビヤに不適當でしたら、是非大きな印画紙に焼付けて私に一枚頂けないでしょうか。

あつかましいお願いごとばかりで本当に申しわけございませんが、何卒よろしく御指導のほどお願い申し上げます。

二十日の日、貴方さまにお差し支えがございませんでしたら、いつものように駅前まで

参らせていただきます。

末筆ながら、貴方さまの御健康をお祈りして筆をおきます。

十一月十二日

兵庫県芦屋郵便局留

関谷富佐子

塚本鉄三様

一気に読み終った私は、身内にむくむくとファイトの湧き上るのを覚えた。一度封筒におさめた便箋を再びとり出して読んだ。

彼女の言うように、今度こそは素晴らしい写真をとりたい。行きあたりばったりではなくしっかりしたプランを樹てて、あつといわせる今までになかった迫真的な被虐女体のポーズと表情とポーズをキャッチしよう。

それには、関谷夫人のような完成されたマゾ女性をモデルとして使えることは、第一歩から成功したのも同然である。あの、新年号に載せた二頁四葉に亘る仰向けに縛られムチ打たれた時の表情なんかは、彼女もきつと好きになれるものに違いない。

私は今度こそ、彼女に逢ったときは、いろいろと心境について訊してみたいと思った。夫婦生活の機微なんかについては、大変失礼

に当るが、私のいつも問いたいと考えていた重要な点であった。ザックバランな彼女のこゝとだから、きつと気軽に話してくれそうな気がする。今までは、時間の関係もあって、ゆっくり語り合える暇がなかったのだが……。

二十日といえば、あと一週間である。

私は早速、芦屋郵便局留にてOKの返事を彼女宛に出した。便箋数枚にぎっしりと書かれた彼女からの手紙に対しては、儀礼的にも、詳しい返事を書くべきであったが、何かしら私は気がすまなかった。事務的に連絡事項を書いただけで、手元にあった五枚の写真と同封した。

封をしてしまってから、この前に逢ったとき、梨花悠紀子さんの吊責の写真があったら送ってほしいと頼まれたことを思い出した。そういえば、関谷夫人も梨花嬢と同様、吊責に対して強い関心を持っていたのだ。彼女の吊られてムチ打つという情容赦もない方法で、これは場所的に御主人からも施されたことがなく憧れの念願であるようだ。

場所さえ適當であつたら、いや、たとえ完全に吊り下げなくとも、伸びきった裸身にムチを加えたいという熾烈な気持が、私の心の中にふっふつと沸き上ってきた。



# 女体切腹（現代篇）絵巻

四馬孝画

略号（えま一）

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの責画を発表して、斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝画伯が、ここに同じく女性切腹のテーマに意欲を燃やし、うら若い現代的な女性、絶対絶命の場面に追い込まれて、自らう手にて自らの命を断たなければならぬ場面を想定して、その哀婉に満ちた現代女性の姿を再現することに努力されました。想を練ること数旬。十二分に意欲の燃え上ったところで、現代風女性切腹の姿を彩管に托して、女性切腹マニアの目に訴えることになりました。お申込みの如何によって、更に第二作、第三作の構想がある由なので、何卒奮って御注文下さるようお願いいたします。

## 一、将校と女学生の切腹情死

煉瓦のくずれた廃家の一室にて軍服姿の将校が軍刀にて双手突きで立腹を切り鮮血りりと飛び散る。その前には可憐な十六七才の制服姿の女学生、スカートを脱ぎすて、白いブロースを托くし上げて九寸五分の短刀をぐさりと臍下に突き立て右脇腹まで、きりりと切り進む。血汐は壁にとび散り、哀れにも美しい最期の有様。

## 二、女間諜夕に切腹す

スパイであることの露見した、うら若き敵国潜入の女将校。すでに逮捕の手の迫ったことを知った彼女は、軍服長靴に身を固め、十分に胸と腹をくつろげ、秘蔵の軍刀でたたかに腹を切れば、青黒い腸が傷口から僅かにのぞき、血は床にしたり落ちる。乱入した敵兵の見る前で、急所の乳下を突き刺して華々しい女性の最期。

## 三、大和撫子、乙女の自刃

敗戦は可弱い乙女の寄宿舎にも、凌辱の手が迫ってきた。大和撫子の操を守るため、次々と自刃してゆく乙女たち。生徒たちの最期を見届けた未婚の美貌の教師は、乱入する暴徒を目の前にして、日本の娘の自決を見よと、下腹を短刀にて軽く切り、咽喉元に突き立て、飛び散る血汐の中に鬼神も哭く悲壮な自殺を遂げた。

## 四、美女雨中の立腹プレイ

横なぐりの雨が降りつける深夜の林の中。レインコート一枚を素膚にまとっただけの美女の白い肌だけが、夜目にも鮮かにうかびあがる。洋式ナイフを片手に、左脇腹から右脇へかけて、深々と切り進む美女。創口からはむくむくと腸が溢れ出て、血汐は下半身一面に紅と彩る。降りし雨は、その血汐をも押し流す激しさである。

## 五、夜会服貴婦人の切腹

黒皮手套に黒皮長靴の外は裸の大胆きわまりない貴婦人が夜会服を肩にかけたまま大の字に立っての壮絶なる覚悟の自決。海軍将校用の短剣の切れ味は、婦人の柔かい下腹を思うさまに斬りさばき、驚くほど太い腸管がぐっと切口いっぱいにくれ上り、豪華な雰囲気と美貌の女性とは、反対に凄惨きわまりない切腹のシーン。

## 六、女子大生の切腹自殺

私が自殺するときは、切腹によって命を絶つと覚悟していた美しい女子大生が失恋の結果、旅館の一室を選んで、思いきり自らの腹をかき切つて死のうとする。パンティー一枚の裸身のまま、腸ののぞくまで深々と下腹を切り、部屋の壁に身をもたして、じっと自分の最期を待つ悲壮にして哀婉きわまりない女性切腹の表情。



# 女性切腹（時代篇）絵巻

四馬孝画

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

略号（えま2）

若き女性のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の切腹の姿を追求してもらいました。別の項では同じような狙いで、『大奥裸女決斗場面』も描いて頂きましたが、若しマニアの方の数か或る程度までまわって、御注文があるようでしたら、引続いて別な構想とアイデアでドシドシ描いて貰う考えです。期待通りの御注文がないようでしたら、今回の試みを以って一応打ち切りにしたいと思います。マゾ関係の御注文は大変僅少なので、今度は分譲品の発表を見あわしておきます。

## 一、落城の姫君、火中の自刃

火焰に包まれた天主閣の一室、城主の姫君は迫りくる火焰と姫を生捕りにしようとする敵兵に追われながら、十八の花の命を自らの手で、潔く腹かき切って、女ながらも城主の娘。双肌ぬぎになって豊満な上半身を惜しげもなく燃えさかる火にさらし、家宝の脇差で下腹をしたたかに切りまくる。真白い肌が惜くしも血に塗れる。

## 二、武家の娘、覚悟の切腹

父のあとを追って女ながらも死を賜った武家の娘は、介錯のため派遣された藩中の青年武士に対して、介錯を断り、白布の上に正座して古式にかなった覚悟の切腹。柄も通れと思いきり突き立てた刃を、きりきりと切り回せば、血汐と共に腸が溢れ出て、氣丈夫な彼女も、思わず「ツツーツ」と前に手をついて倒れ伏してしまった。

## 三、恋人に抱かれて切腹する娘

「ウーム、なんのこれしき」白装束に覚悟の腹切りを敢行する娘に對して、恋人の武士は、その悲壮な最期を見届けるように、背後から抱き起して顔をのぞき込む。下腹は一面血の海で腸さえのぞいてゐる。顔面蒼白として悲痛な表情の娘は、その両の乳房を恋人に抱えられて、次第次第にうすれゆく意識の中で満足そうであった。

## 四、介錯に落ちる女の首

カガリ火の燃える御殿の庭、双肌ぬぎになった若い女が殿の御前で覚悟の切腹。前かがみになった下腹の膨らみに短刀を突き立てた途端、背後に回った介錯の武士が、白刃一閃。娘の白い首すじに斬りつけ、さっと飛び散る血汐。自らの纖手で下腹を切った娘は、哀れにも、その首は、刃の狙いうちでぐさっと大きく抉ぐられる。

## 五、死を賜った腰元の切腹

局のザン訴によって切腹を賜った腰元は、その憎い局の見ている前で無念の切腹を遂げる。白布の上の白装束、上半身肌ぬぎとなり「えいッ」とばかり、短刀を思いきり下腹へ突き上てる。思わず口をついて出る絶叫、真一文字に切りまくった上、健気にも、とってかえした刃で臍の真上を十文字腹にきりきりと切り裂く壮絶さ。

## 六、操を守る若妻の切腹

夫が江戸表へ出在中のこと。かねて横恋慕していた上役の上人が無理無体に迫ろうとする。死を以って操を守ろうとした若妻は、男に首をまかれ左手をとられた姿のまま、かくし持った懐刀で、あらわになった下腹をしたたかに突き刺し、二寸ばかりぐいと切りすすむ。血は白い内股にとび散り、操を守ろうとする若妻の心意気。



佐保 忍案・四馬孝画

B6版8枚1組 500円

## 時代風俗責場面八景

略号(さほ8)

&lt; 時代風凌辱場面ばかりの被虐絵巻 &gt;

第四景  
親分の折檻

コウモリの辰が狙った小股の切れ上った小間物屋の娘には、生憎くと言いかわした男があった。乾分に欺まされて連れて来られた娘は、腰巻もはがされたあらわな姿に縄を掛けられて、部屋の中に押しこめられた。キセルの雁首を娘の真ッちらい肌を押し当て、自分の意に従わせようと、いろいろ手を変えて責め折檻するのだった。

第三景  
腰元の逆吊

「拙者の意に従うと言わぬから、このような哀れな姿を晒すのじゃ」素裸に剥かれた美しい腰元は納屋の梁から逆さ吊りに釣り上げられて、観念の眼を閉じている。可愛さ余って憎さ百倍の直参は、弓の折れを手にして、この美麗な生人形を叩きのめそうというのである。汚れを知らぬ真ッ白い肌は、やがて紅に染まることだろう。

第二景  
目明裸吟味

番小屋の裏の柱に真ッ裸のまま縛りつけられた娘、身に覚えのないことと拒みつづけるのを、役得とばかり十手を口の中へ捻じ込んで、口を割らせようと目明し。真白い太股にむしろのケバが喰いこんで痛々しそう。娘は乳房も押し潰されそうに厳しい縄目にもだえ、柱のうしろで頑丈に縛られた後手がびくびくと哀れにふるえる。

第一景  
乞食と美女

荒むしろを張った乞食小屋へ掠われてきた町一番の小町娘と評判の美女。雪をあざむくばかり真白な肌をむき出しに、一糸まとわぬ裸身に太い麻縄がぐるぐる縛りつけられ、口には、むさくるしい汚れ褌できっちり猿ぐつわをされて乞食の一人に抱かれている無慚な光景を、庭のすき間から覗き見している仲間の乞食の眼。

第八景  
井戸責の姫

「姫、かくなる上は不憫ながら、その真ッ白い肌に、この弓のムチをお見舞いさせて貰いますぞ」全裸の恥しい姿にむかれ、冷たい井戸端の栗石の上に座らせられた姫は、後手をもうこれ以上は上らないという程、高々と背に縛り上げられ、苦痛の悲鳴を洩らすのであった。これから行われる苛酷な責を暗示する釣籠がころがっている。

第七景  
杉葉いぶし

深夜の森の中にぽっかりと焚火の火。夜目にも白く浮かぶ裸身の若い女が、松の木から太い縄で吊るされている。下には奇怪な老女が白髪をふり乱して、この哀れなイケニエを山の神の人身御供に捧げるべく祈りつづけている。焚火にのせられた生の杉葉は、くすぶり続けて蒙々と白い煙を女の裸身にそそぎかけていた。

第六景  
駕籠昇人足

悪人足の駕籠にのったのが運の尽きであった。人影のない森の中へかつぎ込まれた末、着物という着物をむしり取られ、後手のまま樹に縛られてしまった。口には汗くさい豆しほりの手拭できっちり猿ぐつわをされ、いやらしい醜男の人足が、美しい若奥様に対して舌なめずりしながら近づいてくる。まさに危ふし、美女の運命。

第五景  
戦陣の血祭

生捕りにされた敵方の娘は、裸にむかれて楯にぎりぎり縛りつけられて、土塁の上に立てられた。裸の首に、胸に、腹に、胴に荒々しい太縄が喰い込んで息もつけぬ娘は、苦痛と羞恥に真赤になりながら、味方に救いを求めて泣き叫ぶが、飛び来たった一筋の矢が激しく楯に突き刺って、彼女の恐怖心を一層あふりたてるのだった。



## 最新代理部分讓品案内

## 女体緊縛フオトの部

## 一、//大の字//逆さ吊り

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円  
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

## 二、立木//宙縛り//

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円  
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

## 三、凄惨//乳房責//

大判印画紙 三枚一組 二五〇円  
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

## 四、//妊婦の緊縛//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円  
略号(にむ) モデル 某女

## 五、//全裸の仕置//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円  
略号(すお) モデル 東浦ひかる

## 女体切腹フオトの部

## 一、血紅女体自害

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(ひち) モデル 大塚啓子

## 二、女体切腹マンダラ

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(あま) モデル 甘木春子外

## 三、悲愴女体自決

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(ひい) モデル 大塚啓子

## 四、哀艶女体割腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

## 五、凄惨血紅女体立腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(ひさ) モデル 大塚啓子

## 六、苦悶切腹表情

大判印画紙 五枚一組 五〇〇円  
略号(せく) モデル 梨花悠紀子

## フェチ・フオトの部

## 一、バンド着用フオト

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

## 二、バンド着用の縛り(後手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円  
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

## 三、バンド着用の縛り(前手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円  
略号(めは) モデル 梨花悠紀子

## 四、女性の六尺褌

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円  
略号(ろく) モデル 大塚啓子

## 五、ゴム・マニヤ

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円  
略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

## 六、メンス・バンド

大判印画紙 四枚一組 四〇〇円  
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

## 七、ゴムカバー着縛り

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(かは)

## 八、脱がされたバンド

大判印画紙 二枚一組 二五〇円  
梨花悠紀子 略号(めに)

## 九、アテゴムの猿ぐつわ

大判印画紙 二枚一組 二五〇円  
梨花悠紀子 略号(めほ)

## Mフオトの部

## 一、足で戴く珍味

大判印画紙 二枚一組 二五〇円  
略号(くさ) モデル 絹川文代外

## 二、靴の下にうごめく

大判印画紙 二枚一組 二五〇円  
略号(くつ) モデル 絹川文代外

## 特殊趣向フオトの部

## 一、絞首処刑

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円  
略号(こう) モデル 絹川文代



# 新版代理部分讓品案内

## 関谷富佐子夫人緊縛特集

### 一、強烈、エビ縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(もい) モデル 関谷富佐子

肥り肉(じし)の白い女体をくの字に二つ折りにして、着用のバタフライもかなぐりすててエビ縛りのまま受ける強烈なムチ打ちに真白い臀部は忽ち紅に染まり、頸にかかった縄をピンと張りきらして悶える美体。

### 二、乳房責の苦悶

大手札印画紙 二枚一組 二〇〇円

略号(もろ) モデル 関谷富佐子

脂ののりきったコリコリとした固い乳房に加えられる手と足の暴虐の嵐。猿ぐつわに息もできぬくらいの口から洩れる苦悶の悲鳴。

### 三、全裸ムチ打ち

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(もた) モデル 関谷富佐子

豊麗な臀部に、太股に脛に、情容赦なく炸烈する革製のムチ。白い肌にはミミズばれが赤黒く走り、後手に縛られて身動きの出来ぬ彼女は、只ヒーヒーといって転げまわるばかり。ムチ打ちに命を捧げる彼女に対して行っ

た手加減のない本格的なムチ打ちの成果。

### 四、六尺褌の女性像

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(くろ) モデル 関谷富佐子

恥しさに顔を赤らめた関谷夫人が、そのポリウムのある堂々たる体格の裸身に、白晒の六尺褌をきりと締めて、前後左右から、その見事な姿態を十二分に見て頂くため、皎々たる電光下に立つ。(縛りなし)

### 五、強打に泣く裸身

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(むち) モデル 関谷富佐子

裸身に六尺褌一丁の彼女が前手しぱりにあって、その可憐な身をかばうことができない哀れな膝立のポーズで、むきだしになった臀部に、背中に乱れとぶ皮ムチの強打。彼女の全身はエビのように曲り、或は倒れんばかりに逆に反り、ぐねぐねと曲り屈み、ムチの痛さに悶えぬく悦虐の極の姿態。ムチ打ちつつシャッターを切った二十数枚のネガの中から選びだした絶妙の表情のものばかり。

### フェチッシュ緊縛の部

### 一、レインコートの拘束

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(いろ) モデル 大塚 啓子

裸の肌に直接ネチネチとしたレインコートをまとい、フッドをまぶたにかかった大塚啓子の柔肌をぐるぐると荒縄で厳しく縛り上げれば、ゴムの裏布がジカに肌を圧迫して、その感触に、てんてん反側するさまを彼女の足の先から頭のとっぺんまで刻明に捉らえた。

### 二、ゴム布に包まれて

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こま) モデル 梨花悠紀子

後手に縛られた梨花悠紀子が頭にはゴム帽子、首にはゴムの前掛け、ゴムのズロースをはき、手にはゴムの手袋、足にはゴムの靴下と、全身これすべてゴムづくめ、縛られて次第に時間が経つてくると、ゴムのあのヌメヌメとしたタッチが直接肌を刺戟し、特有の臭気が鼻をついてくると、彼は、そのままじっとしていることができなかった。

### 三、狙われた和装の娘

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(ねい) モデル 愛川 悦子

珍しく和服に身をかためた娘、愛川悦子に襲いかかった縄の暴虐。忽ち羽織は剥がれ着物の前は押しはだけられて、赤い長襦袢があらわに乱れ、縛しめられた愛川嬢の周囲は帯や腰紐、羽織などが百花瞭乱と咲きほこり時ならぬ目の正月が現出した。



### 浣腸マニア東浦ひかる特集

#### 一、只今浣腸実施中

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かみ) モデル 東浦ひかる

責めの中でも浣腸が一番好きだという東浦ひかるに対して、実際に彼女のためのプレイとして実施した浣腸の場面を特にマニアに分譲するために撮影したもののワンカット。

#### 二、強制空気浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かく) モデル 東浦ひかる

彼女の好む空想のアイデア。お腹の中にドンドン空気を入れて蛙腹したらという要求でエネマシリンジを用いて、最大限に空気を注入したときの、腹部膨満の状態をこらんにいれる珍しい浣腸作品。

#### 三、百CCの硝子浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かな) モデル 東浦ひかる

浣腸が好きだというモデルでないと、中々出来ない芸当。彼女なればこそ、こういった強烈な浣腸も容易に、しかも何の抵抗もなしに実施できるのである。

#### 四、浣腸責のムード

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かむ) モデル 東浦ひかる

浣腸されることが至って好きであるという彼女にしても、やはりマゾ女性の通有として無理矢理に浣腸されるというムードには弱い。従って、両手を拘束されて、もうどうにもならないという絶対絶命のピンチに対して大きな関心を持っている。クリスター・マゾのひかるを最大限に満足させるポーズ。

#### 水本茂美緊縛特集

#### 一、強烈エビ責め

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(えひ) モデル 水本茂美

野性美を帯びた水本茂美を全裸にひきむしった上で、足首と背中に吊り上った後手首とを連結させて、グイグイ足で踏みつけて締め上げたエビ縛り、一分、五分、十分と経つうちに、流石の水本札も全身から脂汗をふきだして、うろうと苦悶のうめきを洩らす。

#### 二、ゴム衣緊縛

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(みす) モデル 水本茂美

アメゴムのヌメヌメしたゴムズロースが、

汗ばんだ肌にネチャネチャとねばりつく。容赦のない縄さばきは彼女の弾力性のある肌を腰のあたりから二つ折りにして力いっぱい締めつける。むき出しのはりきった尻には、ぴっちりゴムズロースが貼りついている。

#### 二女争闘場面特集

#### 一、和洋争闘場面

大手札印画紙 六枚一組 五〇〇円

略号(らり) モデル 田中芳代 外

禪一本に長襦袢をひっかけた田中芳代と、しゅみーズ一枚の愛川悦子とが、腕を逆にとり、足を逆エビにとり、必死に相争う中、互いに着衣もふっとんでしまい、裸身のまま、むしゃぶりついて上になり下になりして格闘する場面。二人の娘が激しく争闘するシーンが迫力をもって迫ってくる第二作。

#### 二、裸女争闘場面

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(らし) モデル 田中芳代 外

禪一本の若々しい裸女二人が互いに相手に止めをさそうと、あられもない姿を展開して根かぎり争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って相手の顔を自分のお尻の下に敷いてしまおうと争うメトミファン、女斗ファン並に女性のサドマゾに關心をお持ちの方及び女相撲ファンの方に捧げる。



# 『今月の新版特殊フォト』

## △ゴム・マニヤ向作品の部▽

### 一、ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こみ) モデル 東浦ひかる

豊満な若々しいはちきれそうな全裸にした女体の頭のとっぺんから足の爪先まで、ゴムで包み、ゴムバンドで締めつけたゴムの臭気のおんぷんとするゴムマニヤ待望の作品。頭から顔はシャワー用ゴム帽子で掩い胸は生ゴムのシートで包み、腰部は総ゴム製のピンクパーレリーナバンドでびったりと包む。手はゴム手袋、足はゴムの靴下。肌にびったりとはりついたゴムの感触を十二分に味って悶えるひかる嬢の姿態のかずかず。

### 二、ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こは) モデル 東浦ひかる

全身ゴム布でぐるぐるに包んだ女体にゴム紐がじわりじわりと肌をしめつける。直接肌に密着した生ゴムの刺戟が時間が経つと共に激しさを加えてくる。締ってきたゴム紐によって赤くかぶれてきた皮膚のむずがゆさに、ころげまわって苦しむ東浦嬢の姿態と表情とニヤニヤのお好みのままにとった。

### 三、ゴムと女体のアップ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こあ) モデル 東浦ひかる

びったりとゴムを肌にはりつけられた女体の各部の表情とそのデテールをアップによって極めて鮮鋭なレンズを駆使して刻明にキャッチした作品。まことに大胆に、女体の肌と生ゴムのタッチとを、そのずばりと狙いをつけて、ゴムフォトの決定版ともいうべき、ゴムの感触を最大限に發揮している。

## △バンド・マニヤ向作品の部▽

### 一、パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おい) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製前開きのパリスバンドを着用し、前開きをあけて当てゴムをあらわにしているバンド着用のフォト。替ゴムの部分をはつきりと見せるために、その部分を殊更前面につき出させ、自らの手でバンドにふれていく諸々のポーズを開陳(縛りなし)。

### 二、パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おは) モデル 東浦ひかる

替ゴムもあらわなポーズでパリスバンドを着用させられた東浦嬢が、両手を厳しく緊縛されて自由のきかない身を、僅かに両手をば

たつかせてもがくさまを表す。

### 三、パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おか) モデル 東浦ひかる

白い布に替ゴムが直接ついたままの解放型の携帯用の白バンドを着用し、足を挙げた大胆なポーズで月経帯の特徴を十二分にあらわにいれようというサービス本位のポーズ。

### 四、サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おた) モデル 東浦ひかる

### 五、パリスSSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おこ) モデル 東浦ひかる

### 六、パピアバンド(大型替ゴム)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おし) モデル 東浦ひかる

### 七、サカエバンド(百合)

大手札印画紙 三枚一組

略号(おえ) モデル 東浦ひかる

以上四点の月経帯着用フォトは、いずれも解放型(替ゴムが外部から見えるもの、ズロース型でないもの)のメンスバンドで、マニヤのために、種々型の変ったものを取り揃えました。



## 「今月の新版分讓品」

## ○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子  
代表的なサジスチン春日ルミ女史がバーの  
マダムという忙しい仕事の寸暇をさいてモデ  
ルとして登場。野性的な肢体の持主、愛川悦  
子嬢を相手に、組んずばぐれつの激しい争斗  
場面。互いに相手の急所を攻めて完全に屈伏  
させた上、尻の下に敷いてしまおうと全力を  
つくして争うシーンの数々。

## ○オムツの股間しぼり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「むく」 モデル 東浦ひかる

口には頬もくびれよと厳しい猿ぐつわ、ゴ  
ムのオシメカバーの半ばはずれかけたボタン  
の間から浴衣地のオシメがむざんにもものぞい  
ている。胸から腹、そしてカバーの上からの  
股間縛り。荒々しい男の足で踏みつけられて  
喘ぐひかるの豊かな裸身。

## ○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号「りお」 モデル 梨花悠紀子

完全に飼育し終えた梨花嬢が吊責めやエビ  
責め、逆エビ責めなどにも満足せず、被虐の

終局点として誠に強烈きわまりない縄目を、  
全身くびれきつてしまいう程施され、男の手で  
さいなまれ足で踏みつけられ、感極まって嗚  
咽の叫びを挙げた数コマを生来の天性による  
被虐モデル梨花悠紀子の代表的ポーズとして  
紹介します。

## ○乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「とお」 モデル 大塚 啓子

乳房の上下に紐をかけて、ねじり上げ締め  
つけ、豊満な乳房をむっくりと盛りあがらせ  
て可愛い啓子の苦痛にもだえる顔を見る。

## ○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きか」 モデル 絹川 文代

臀部を高々ともち上げて髪ふり乱して浣腸  
のポーズを無理矢理にとらされた後手しぼり  
の文代嬢に対して、もろもろの浣腸器具が男  
の手によって悪魔のように襲ってくる。

## ○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「きえ」 モデル 大塚 啓子

後手縛りの縄と両足首の縄とが若々しい女  
体がしなう程締めつけられて、その連結した  
縄をぐいぐいと持ち上げられる。全身は背中  
で二つ折りとなり、さすがの啓子嬢もその激  
痛に、うううと呻めきながら目に涙をためて

許しを乞う全くトリックのない迫真的な強烈  
な逆エビ責めのシトン四態。

## ○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きん」 モデル 絹川 文代

絹川文代の美貌にきつちりかまされた豆絞  
りの猿ぐつわ、一条まとわぬ麗身に黒ずんで  
手垢に汚れた縄が厳しくまといつき、しなを  
つくって悶える表情と全身のうねりとを刻明  
に描写して絹川文代ファンに捧げる。

## ○腰元吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「こり」 モデル 村井知可子

高島田に矢張り、白足袋姿の腰元が、一人  
の武士のために庭の木に、後手縛りのまま高  
々と宙に吊り上げられ、刀の鞘を縄目にこじ  
入れられて折檻される時代劇映画の一場面の  
如き華麗にしてロマンな被虐シーン。

## ○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「こく」 モデル 村井知可子

昨日までは腰元として御殿に仕えた身も、  
今は敵方の間諜として、庭の樹に縛りつけら  
れ、情容赦なく白状を強いられる哀れな一人  
の乙女に過ぎなかった。刀を手にした侍は、  
庭に晒された可憐ないけにえに対して、嗜虐  
的な興味をもって拷問の手を下すのだった。





○ 新年御目出う御座居ます。益々御社の御発展を心から御祈致します。初めての投書で御座居ます。私も昭和二十九年九月号から御誌の愛読者で御座居ます。いつもS Mの物語りをくりかえし読んで、此の世の中に私と同じ様な人々の多いのに心強く思います。御誌（KK）は我々の夢で有り、又良き友で有る事を心の底から思っております。私はMの男性で御座居ます。いつも現実にはSの女性が居られたら、本当に女御主人様が居ら

れたら、喜んで御主人様の足下に奴隷として御奉仕するつもりでおりますが、今だに御主人様の御目に留らず、日々を淋く暮しております。今回二月号誌上では川田幸子様の御便り拝見致し、早速此の書面差上げますしだいで御座居ます。幸子様が何年か前によきM男性をお待ちになった、しかし現在は其の相手を見付け出す事も出来ず、一人御考えて居られ其の切ない御心は私にも良くわかります。魚が水から上ってしまった様な御気持ちで御座居ましょう。今回貴女様は理想のM男性を御求めの御様子。私の様な奴隷御気に召すかわかりませんが、ために御使用下されば幸いです御座居ます。幸い私も東京に住んでおります。住所はKK編集部に御願ひして有ります。（東京八須藤虎男V）

○ 神奈川県の中川フミ子様、是非貴女の汚したショーツを私に送って下さい。捨てるのは私のようなM男にとって勿体ない事です。送って下さったら、お礼に女王様とM男としての文通を貴女様の満足する迄続ける事を約束します。高校時代にバレーボールをしていたとのこと、相当のグラマトだと想

います。其の太い股で首を挟まれると思うと体がゾクゾクして参ります。後に貴女様が望めば実際の奉仕も致します。又、東京の川田幸子様、貴女様の作られるストーリーを私にお聞かせ下さい。そして、貴女の体験を文通で聞かせて下さい。実際に奉仕もします。力の限り苛めて頂き度う思います。他にも私を苛めたり、恥しめてみたいと思う女性の方、手紙下さい。扱て、二月号グラビヤのマゾフォトは、私の念願の女王、大塚啓子嬢でしたが、もう少し手荒に苛めてもらいたいです。ヒップで顔を押しつぶしたり、股間に顔を埋めさせた馬乗りがよいと思います。これからも、ドシドシ啓子女王様の活躍される写真を載せて下さい。「サジ女学生とその奴隷」告白記、大変楽しませてもらいました。特にお小水の入った水筒の水を飲まされる場面は胸がドキドキし、口の中がカラカラになってしまいました。それと本誌に於ける女性の排除物に関する資料が少いようです。又、大塚啓子嬢の生理帯シリーズは、バンドの色が黒だったから、もっとすばらしかったと思います。（千葉八村越靖弘V）

○ 毎月KKの出る日を楽しみにしております。本屋に行つて先ず見るのが目次だ。僕は女斗美ファンです。女相撲の記事がのっているのと安心する。それから読者通信をながめて女斗美ファンがいるかどうか調べる。それから二百円出して買うが二百円は二、三頁の相撲を見たいばかりに出すのだが、最近はどうもこれも同じようなもので眼あたらしいことがありません。別に女相撲に限ったことではない。女子プロレス、柔道でもいい。編集部に云いたいことは選手に逢つて、その対談をのせるとか、実際の写真をのせてくれないものか。それが駄目なら読者の中にいろいろの写真をとった人から借り入れてのせて下さい。女斗美ファンはマゾ・サドと違って熱狂的なマニアはないのだから、読者通信に投書することは少ないが、KKを買って期待している人々が大勢いると思います。うすい雑誌でいいですから、これ専門の雑誌を出して下さい。（福富女斗狂）

○ 神奈川県の中川フミ子さん、貴女のおびかけに敬服しました。この魅惑的な世界に入るのには、いくらかの勇気がパスポートのかわり



になるようですね。私も思いきって貴女とご一しよにすばらしい花園に入ってみたい。倒錯の美しさの中にこそ、不安と恍惚をもったこの世の愉しみがあるものと思います。御文通いただければ、私の夢、私の希望をお伝えしたい。貴女の夢もぜひとも聞かせていただきたい。私は三十才公務員ですが、住所氏名は編集部にあります。編集部気付津村宛お出しただければ、親切な編集部の方は一度位なら転送して下さいでしょう。(香川八津村生V)

○ 万田不仁様、拙稿「川柳お臍漫考」に就き種々御教示戴き誠に有難う御座居ました。「俳風柳多留拾遺」を除き全部蔵してはおりませんが御案内の通り「お臍を詠み込んだ句」は非常に鮮いものです。今後共よろしく、お報らせ深謝申し上げます。(東京・練馬八須藤律夫V)

○ 私はKK誌を読み始めてから約五年になりますが、最近、私の好むところの浣腸に関する記事が多くなって来たので喜んでいる次第です。又これからは、グラビアにも浣腸の場面を載せてもらいた

いものです。私はまだ異性とプレイをしたことがないのですが、一度他人と浣腸をしたりされたり、したいものです。どなたかいっしょにいませんか、私は現在大学三年に在学中です。(東京都渋谷区八長野実V)

○ 現在の社会構成の中で生活(自立)の人生を生きるための未来の姿をM・S理論上一に考えて行く事は私に限り、到底駄目な事です。俳句の中には「四季」がうたわれる様に「奇ク」の中にも一つの人間構成が必要で有ると痛感する一人です。人間誰しも少なからず体内にM・S心がひそんでいるものです。しかしこれも許されるべき範囲であれば決して社会悪云々と云う事はないと思います。人間自由であるとなつて事に便乗せず、もっと真けんにM・Sと取り組んでいけばいかなる不運にもある事がなく、生活にたのしさをみ出す事が出来得ると思います。故に同好者の諸氏が投稿する体験、告白、手記、創作、小説、物語にいても働いて我々みんなパンを得ているんだと云う事を主流に考えて人間らしさ(ヒュマニズム)を失わぬ事が大切だと思います。M

・Sムードだけでは生きて行けないのですから、でないと、せっかくの「奇ク」もマンネリ化してしまい、最後には憂うべき結果にもなりかねないのです。M・S作品からM・Sを見出すのではなく、社会の一般的通念の中からM・S精神を見出していかなくては、M・S作品及誌は発展致しません。だから私自身縛映画などから受ける一種異様な感じにひそかに満足している次第です。又プレイにしても一歩進んで考え、自分の体内にひそむM・S精神を通俗的な一般理念に基き、判断し、よくせいし、かもふらじした中より風俗的文獻、緊縛美とか責めと云うものを見出し人間来たるM・S心をつかみ出して行くのが正しいと私は思います。いいかえれば一種のギソウですね。それでなくてはまともに私達は生きて行けなくなりまう。女性をいじめ縛る事はたのしい事かも知れないが、それにのみ生活をエンジョイしておれば、どの様になるか、おわかりの事だと思います。私達も立派な社会人です。なるが故に仕事をしているのです。M・S精神は一つの社会回転の中より見出して、そのたのしさを求めるべきだと思います。生

きて行くと云う事は平凡な中にも非常にむずかしい人間にあたえられた宿命かも知れません。其の中よりM・Sに基く誌友を得れば、

## 泥 中 の 花

(略号あめ)

モデル 愛川悦子

大手札五枚一組 四〇〇円

雨ふりしぶく泥の中にて厳しく高手小手にいましめられた全裸の女体もだえぬく五葉のシリーズ写真。一、パーマの髪も雨のためにびしょびしょに濡れて頬や額にへばりつき、掛ける型に交叉した両手首、胸に喰い込む縄、濡れて益々締ってゆく。二、泥の中へ足を開いてべったりと坐った全裸の女、脛から太股まで泥まみれ、縄にくびれた乳房は腹につきそう。三、横倒しになった女、うらめしげに雨あしを眺める。四、泥から起き上ろうとして、開いた足に力を入れるが、高々と後手首が括り上げられていて自由がきかない。五、雨空をふり仰いで観念した彼女、べったりと泥の中に尻をすえている。



## 妊婦秘蔵写真特集

ここに分譲いたします妊婦写真、読者有志の提供になるもので、モデルは二十二才になる美貌の若妻です。本誌上にて関谷夫人が登場したことに対して感激された某氏が特に自ら撮影の秘蔵のネガを提供されたのであります。提供者の希望により誌上での公開が許されませんでした。分譲品としてのみ発表いたします。

### ○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

妊娠八カ月の二十二才の若妻がベンベンたるはちきれそうな大きな腹をつき出して立った全身裸像、しかも可憐な美貌でチャームングに微笑んでいるというマニヤ垂涎のアイデアに加うるに妊婦の股間縛りという最高のアイデアによる秘蔵品。

### ○妊娠八カ月のヌード縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

後手に縛られ猿ぐつわをされた八カ月の妊婦が大きなお腹をつき出してすくく裸で立った正面像。見事にふくらんだお腹が妊娠線もあざやかに、目の前に見ることが出来る妊婦写真の決定版！

### ○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

同じモデルの妊娠五カ月のときの緊縛フォト。八カ月のときのお腹の大きさと比較すると如何に差があるか一目で見分けることが出来て面白いです。

### ○妊娠前のヌード緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

妊娠中の写真と比較するため同じモデルの妊娠前の常態の写真を増したいします。如何に妊娠中のお腹が大きいかということがよくわかりますから一緒にお求め下さい。

非常に幸せな事です。私自身男性にはきょう味は持ちません。理由は簡単です。自ら自分を知り、又視覚上の同性に対する嫌悪からです。"奇ク" 同好者の中の女性でも多勢の人がM・Sの危険性に関心のむすびつきを日夜やんでおられる方が多いと思います。M・Sの善悪は別として、私の様に風俗誌を愛しM・Sの追求と迄はいかずとも、風俗誌(M・S)に依り人間生きる事のたのしさを見出そうと努力し考えている小生、同好の女性の方、私に御支援御便り下さい。風俗誌に依り大いに男女性の理解を深めたいと思えます。土地柄四国地方の方々期待しております。(高知県八佐藤満須夫)

二月号拝見。岡本吉雄氏の文章、面白く拝見しました。この文の挿画はさる旧号に出ました雄松比良彦氏の「女子高校」の挿画にピッタリで、そのようなイメージで見ると一層興味があります。雄松氏のジュニア・メトマーズの記事はその後出ないものでしょうか。先号の読者通信に同氏の投稿がありました。種々同感です。同氏の提起のおかげで私も女子高校

のスポーツとしての相撲をいろいろ考えてみました。中々たのしいものです。女の子は体がやわらかいからです。仕切りも下段(平蜘蛛仕切り)がラクに出来、四股もしなやかさでは大鵬の比ではないでしょう。力士たちも大学の相撲選手もさかんに柔軟体操をやりますが、女子高校の選手たちのやわらかい女体の取組む相撲は、大津絵節ではありませんが「力争う勢の烈しさとやさしさは」ひとしおのものがあるでしょう。雄松氏のジュニア物をはじめ、雪崎氏、円山氏らの健筆をお願いします。私は代理部の分譲フォトは拝見していませんが、一つこの辺で女相撲のオーソドックスの写真を作っていただけませんか。輝は黒の締込みを正しく締めるのがよく、下りはなくともよいと思えます。場所にはマサカ土俵(いわゆる女俵?)も出来そうです。室内でけっこう。蹲居相対、チリ切り、四股、仕切り、四ツ身、投げ合い、寄り、吊り、掛け、寄倒し、打ちやり、投げ(やぐら)等、ポーズはいろいろの相撲誌で御研究がえればよいと思います。なお、メトミのモデル嬢たちにおねがいしたいのは、シャッターの瞬間に



は必らず力を体にこめていただきたい。力のこもらぬ四肢や筋肉では全く感じが出ないからです。四肢、丹田に力をこめ、足の指もまきこむポーズが迫真です。畔亭数久氏の「娘相撲」の足指の力のこもっていたのを思い出します。別に急ぎませんから、いつかプラン化して下さい。ではよいお年をお迎え下さい。(京都八殿田一郎)

王様の御連絡をお待ち申し上げます。(大阪八水谷成夫)

貴読者を愛読している一マゾ青年です。そして又夢幻の世界をひたすらに求めつつ、日夜悩んでおります。只その苦しみを本当に慰めて来れるのは奇クであり、又読者の皆様の声です。そして何時かは、私のマゾを理解して下さい。S女性もおられると信じて、毎日頑張っております。私は現在二十八才、身体の方は至って健康です。絶体の服従と奉仕を誓わせて下さる女王様はいないのでしょいか。勿論奴隷として、あらゆる責めにも堪える覚悟は出来ております。奇クを通じて愛読者のS女性とM・Sの花園否、主人と奴隷の世界にたとえ一時でも過すことが出来たら、これ程の幸福はありません。どうか奴隷に対しては、一切の妥協も許さない、非情な女

高校の頃から相撲ファン、豊山大好き。Kクは女相撲の記事が出ておりましたので一と駅まで降りて書店で求め、たのしみに読んでおります。友人のA子も相撲ファン、A子にもKクを見せてからは、月一度位留守をみはからってはお相撲のマネをしております。私達は本当のお相撲さんのまねをして見たいとかねがね思っておりまして、Kクの中でそんな女の子がいっぱいやることを知り早速実行してみたいのです。最初スリッパのままです。やりまして、度重なる中にだんだんと大たんになり最近には襦をつけます。六尺でなさっている方もある事を知ってからこれをまねる様になりました。でもお相撲のかんじ中々でませんね、ですからぜひ本物の相撲マワシをつけてみたいと思っております。女を取敷くとかおさえてつけるとかの手記が沢山ございまして、私達はそんなまねをした事がございせん。どちらかと云えばシコをふむとか仕切りをするとか——大たんにもまたを開くことが好きな、まるで本物のお相

撲さんになった様な気がします。二人で取組んでも外に聞えない様な小声でハッケヨイ、ノコッタノコッタと声をかけますの、一杯というわけにはまいりませんが、だって私の家は隣家とくっついてるんですもの。万一他の人達に判ったらそれこそ大変ですもの。実は東京の岡平吉雄様の呼びかけをみて嬉しさの余りこのお便りを書く気になりました。本当にそんな企画がしていただけるのならA子と一緒にぜひ参加させて戴きますわ。でもあの通り私達の秘密を守っていただき、写真を取らない事、丸裸はいや、ブラジャー、ショーツはつけさせて下さい。そして其の上になんかしを付けたいわ。一度本物の土俵で力一杯お相撲を取ることが私達の夢でしたもの。それから、会場は東京付近、日曜日にして下さい。もっとも普通の日でも一日位は会社を休みますわ。私達が参加出来るやうな様な要綱を作って発表して下さいませ。其の折りはつきり住所を連絡いたします。私、毎夜ねる前に襦をつけてシコをふみしきりのまねをするの、そして襦をつけたまま床に入ります。お風呂から上ってやりますとすぐ気持が張り切

ります。女性の方々一度おためしになりませんか。(東京都豊島区八村田武子)

「奇ク」の愛読者の皆さん、お元気ですか。私は切腹に深い興味を持っている三十才の平凡な男です。近頃の「奇ク」は表紙の美しさに目を奪われますが、中に切腹フोटオや体験発表又プレイのレポート記事が少いのは何故でしょう。とても淋しい限りです。切腹写真は代理部の分譲品の方に申込むと見られますが、切腹記事や小説が有りませんので店で「奇ク」を買っても、なんか物足りない様な感じ。其れは切腹マニアの読者の皆さんも、そう思っている事でしょう。以前と同じく、新しい「奇ク」に日本人独特な武士道精神の切腹記事や体験プレイ、レポートをのせて下さい。女性の愛好者にもお願い致します。最近号の滝れい子画伯があつた女性切腹とても良くかかれています。哀愁が立ち込めるムードで又凄絶な感じで一ぱい。今後色々な方面から女性の切腹画をどしどし書いて下さい。真に迫って息づまるような素晴らしい切腹画をどしどし書いて下さい。私も切腹と



言う事にたいして息苦しいほどに  
 気持が刺激され不思議な快感を  
 覚え、同性の切腹又は可弱い女性  
 の凄艶、悲凄な切腹願望による体  
 験や告白記に夢の如き陶醉を感じ  
 毎号、掲載された切腹記事をむさ  
 ぼるように読み耽りました。私自  
 身も色々と下腹部にかたちを変え  
 てプレイをしておりますが、プレ  
 イする度、気持が大胆に成り先日  
 など思いきりのプレイで左下腹部  
 から臍下迄三寸位切りました。使  
 用したのは細目の刺身包丁です。  
 切れ味が良く、するどい痛みと共  
 に血が流れ皮膚を切り脂肪層が切  
 れて行き筋肉層が見えていまし  
 た。深さは二糎強位いで血の流れ  
 と共に左下腹は三寸位パツクリ脂  
 肪層がまぐれています。私は其れ  
 を鏡台にうつし悦に入り陶醉に更  
 けて行きました。その倒錯的な物  
 は切腹マニヤ以外にはとても信じ  
 られない事と思います。近い内私  
 の書いた体験告白記を発表させて  
 いただきます。以前の山田久仁子  
 嬢の発表した「プレイのすべて」  
 を幾度も読んでおります。九月号  
 に投書をされた荒井弥生様、夫の  
 前で切腹された体験をぜひ書いて  
 頂きたい。「奇ク」の女性切腹マ  
 ニヤのどなたか私と文通して下さい

い。(山形八切腹ファン生)

読者通信欄をお借りしてご返事  
 いたします。十二月号に呼びかけ  
 をのせていただいた山辺まゆみで  
 ございます。その後多くの方々か  
 らの御通信を読ませていただきました。  
 私に。ありがとうございます。  
 私が十二月号を手に入れましたた  
 のは、発売後十日程たってからで  
 ございましたから、到底呼びかけ  
 に応じられない方もございました。  
 た。お許し下さい。ただどの通信  
 もひそかに胸をときめかしながら  
 読ませていただきました。ただや  
 はり私にはどうしてもドタン場に  
 立っての勇気が出ません。お約束  
 の場所に行きたい気持がするの  
 に、いざその日その時刻になって  
 みると、こわくなってしまうので  
 す。と申しますのも、ある方に半  
 ば強制的のように都内の某旅館に  
 つれて行かれ、約束をお願いして  
 プレイいたしました。けれど結局  
 約束は破られ、私は自分の向う見  
 ずな甘さと、背信のショックを味  
 わうことになってしまいました。  
 私は例の薬局で販売している浣腸  
 五個の責めを受け、恥ずかしさと  
 後悔を背負って逃げるように帰宅  
 いたしました。はじめに申し上げ

今月の新版案内

六 尺 褌

略号 (ろい)

大手札

五枚一組 四〇〇円  
 モデル 東浦ひかる

セイカンな若々しい姿態にき  
 りりと締めた白い晒の六尺褌一  
 本の裸体(褌をしめさせると殆  
 どの娘は大変恥かしがる)にて  
 四股を踏む蹲踞の構えで正面。  
 立って正面背面、側面、という  
 いろの揮姿のポーズをごろんに  
 いれます。

蒲団に悶ゆ

略号 (なき)

大手札

三枚一組 三〇〇円  
 モデル 関谷富佐子

裸身に喰い込む麻縄、激しい  
 ムチ打ちに追い立てられて蒲団  
 の上で転げまわって悶える若き  
 夫人。足の爪先立ててムチを防  
 ぐ太股に痛烈なる革ムチ。顔は  
 悲痛に泣きむせぶ感きわまった  
 悦虐の表情。

悦虐の果て

略号 (なみ)

大手札

三枚一組 三〇〇円  
 モデル 関谷富佐子

この全身の表情をちよつとこ  
 らん下さい。毆って毆って毆り  
 つけた末に、今まさに倒れんと  
 した刹那、やっとキャッチした  
 貴重なポーズばかりです。この  
 写真から従前にはない強烈なすざ  
 まじい責めのムードを擲んで下  
 されば幸甚。

椅子エビ責

略号 (おき)

大手札

三枚一組 三〇〇円  
 モデル 東浦ひかる

このポーズの撮影で半日を費  
 した強烈きわまりないエビ責め  
 マゾヒスト東浦嬢の熱意と若さ  
 を以てしなければ出来ないポー  
 ズ。椅子の上に縛りつけられ、  
 両足を頭の上まで高々と折り曲  
 げ、ぎゅうぎゅう締めつけ、一  
 時間ばかり放置した上でシャッ  
 ターを切ったフオート。勿論これ  
 はひかる嬢の注文で忍耐の限界  
 を試したものの。

六 尺 褌 縛

略号 (ろは)

大手札

三枚一組 三〇〇円  
 モデル 東浦ひかる

六尺褌を前の垂れもなくして  
 きゅつと締めつけ、恥しきにと  
 もすれば両手を前にやろうとす



た通り住所、氏名、素性の分らない方、やはりどんなお申し出でもこわいのです。この時の軽はずみな経験は苦いプラスでした。私の事は告白として編集部宛投稿いたしました。もしのせていただけたら同時に本誌で皆様のお目にとまっています筈です。ご覧のような経歴の女でございます。異性からSの性向を植えつけられたものの、私にはまだ関谷夫人のような勇氣はございません。従って通信欄で知り合う筈のお友だちも慎重に、今後は仲介人を立てて……などとも思っております。いずれにせよ当分どなたともお会いする気持になれないかも知れません。ひどい浣腸責めが脳裏から離れませんが……。いっそのこと、これから同性の方のみとひそかなプレイを続けようかとも考えております。どなたか本当に不安な状態でなく私の乳房を責めて下さる同性の方はいらっしゃるやないでしょうか。同性の方なら着衣は全部とられてもかまいません。大変思い切った言い方で内心恥ずかしいのですが……。お便り下さったマニアの方、まゆみは心からお礼申し上げます。いつの日にか、心がとけましたら素晴らしい出会いがで

きるかも知れません。それまでどうぞお元気で。(東京都北多摩郡八山辺まゆみ)

川田幸子様二月号を開いてみましたらあなたのお便りがありましたので、失礼とは存じましたがペンをとりました。私もかねてからSの女性にお会いして、できればプレイを……と願っておりますが、今日までその機会がなくなやんでいました。私はまだプレイの経験はありませんが、かつて戦時中野戦病院で看護婦の命令に従わなかった理由で二人からいじめられたことがあります。このときは、まだ二十才の若さであったせいか、ただただ恐ろしいといった感じが先に立ち、一刻も早く許してもらおうことのみ願ったのでしたが、二、三年前にふと書店で奇譚クラブを手にして以来急速にSMのファンになってしまったのです。今から思うとあのときの看護婦はS女性であったかと思うと非常になつかしく感ぜられます。そんな訳で、去る一月号に初めてお便りを出しました。勿論そのときは住所の明記はいたしませんでしたが、あなたのお便りをみて早速手紙を書いた次第です。くわしく

るのを制して、両手首を背後で括りつけて、殊更大きなお腹をつき出させるようにしたフンドシのしぼりフォト。

### 東浦の切腹

略号 (えん)

大手札

五枚一組

四〇〇円

モデル

東浦ひかる

東浦ひかるの腹部は最近皮下脂肪が増したか大変膨隆してきた。一日、彼女に切腹のことを話すと自分の下腹に刃を立てるということには興味を持っていたと言うので、彼女の思いのままに短刀を渡してポーズをとらしてみた。これはその時のフォトである。端座して刃を下腹にかまえ、したたかに突き刺したところ。扶ぐって痛さに倒れ伏したところ等、好ポーズばかり五点を選び出した。

### 浣腸シリーズ

略号 (れち)

大手札十二枚一組

一〇〇〇円

モデル

梨花悠紀子

梨花悠紀子が、いちじく、ガラス製三〇〇CC浣腸器、イルリガートル、オシメ、オシメカパー、差込便器、等を用いて連続に浣腸と排便を模様を近い距

離から手にとるように仔細に描き出した浣腸関連シリーズ、愛川悦子、大塚啓子の(ちよ)(ちし)(ちふ)に続く浣腸マニヤに捧ぐ第四作。

### 弓吊り責め

略号 (つき)

大手札

二枚一組

二五〇円

モデル

梨花悠紀子

両手首と両足首とを反対側にして別々に吊り上げ背を上にして高々と宙に浮いた梨花嬢。吊りを第一に好む悠紀子にして始めて出来た本格的な吊りポーズ。さすがの彼女も顔を垂れて苦痛に耐え、頭を上げて悶えるさまは、素晴らしい。

### 手足宙吊り

略号 (つた)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

梨花悠紀子

両手を手摺に水平に括られ、両足を八の字に開いてその両首を各々左右に釣り上げて縛られた強烈な宙吊りのポーズ。辛抱づよい悠紀子嬢も美しい眉をひそめて苦痛に耐える懸命の責められぶり。八すべて略号にてお申込み願います。



は一月号の読者通信に掲載されています。なお、神奈川の中川フミ子様のお便りも読ませていただきました。もしよかったらお便り下さいませんか。(東京八横山)

編集の方、本部綾子様への便り御高配いただき有難う御座いました。綾子様、私のお願お聞きとどけ下さいますか？貴女の月経帯に唇を押しつけ口一杯に貴女のお情けを味わっていたく事を夢見ております。又二月号の読者欄でお便りありました中川フミ子様、私のバンドマニアはお解りの事と存じます。貴女様に縛られ裸に剥かれた時、表われくるゴムだらけの月経帯!!そして真赤なパンティー!!貴女様のおさげすみになられるお顔が目には浮ぶようです。そして犬の首輪をおはめになり馬乗りになられ、貴女様のお使い古しの月経帯を私の口にただかせてもらい汚れたパンティーをすっぱり私の首にかぶせていただけたら、どんなに素晴らしい事でしょう。せめて貴女様の汚れたままの御不要の月経帯を送っていただけましたら、私は貴女様のお手でそうされる事を想像し乍ら以上の事を楽しみ又色々な事も報告させていた

くつもりです。何卒私のこの奴隷の願をお聞きとどけ下さいませ。(山口県徳山市八安田隆夫)

岐阜の服部さん。友の会を作り度いという貴方の提案に賛成します。女斗美の愛好者が私ばかりでなく沢山いらっしゃるのに感心しました。女はしとやかな者という事が通り相場ですが、その仮面をかなぐりすて肉体相打つ所に興味があるのではないのでしょうか。私も一度見たいと思っています。女子プロレスも水着をつけていては面白くありません。やはりきりと禪をしめて斗うのが良いですね。同じ女斗美でも、スタイルの良い女性では興味が薄いと私は思います。肥えて腹の出た女性同志が禪をしめて斗う方が私は好きです。京都方面の同好者皆様とも文通したいと思いますが、発起人たる岐阜の服部さんには是非共御便り致したいと存じます。何事も同好者同志の意見の交換が第一と思います。そして同好者の方々も関東、関西の中央におります服部さんに連絡してお互に書面に依るミチングから始めようではありませんか。(群馬県八三山生)

### 〔優秀緊縛フオト紹介〕

#### ●絹川文代強烈股間縛

美貌と均整のとれた肢体を誇る絹川文代嬢に対して遠慮なく肌にも喰い込めと強烈な股間縛りを敢行、各組とも開股の痛烈さに足の指をくの字に曲げて喘ぎもがくさまを刻明に描写しました。

#### ●鏢利用股間縛

(略号あい)

大手札三枚一組 二五〇円  
豆しばり猿ぐつわ、朱色ロープ使用、首縄、鏢利用股間縛り両脚大の字開き強烈なしばり。

#### ●キの字股間縛

(略号かい)

大手札三枚一組 二五〇円  
白布猿ぐつわ、白色綿ロープ使用、乳房の上下二条、二の腕の二筋、高小手、強烈股間しばり開股、足の指を屈げ、反らして苦痛に耐える表情もいたいたい。

#### ●花坂道子裸身の開陳

#### 剥がれた腰巻

(略号まき)

大手札三枚一組 二五〇円

裸の肌を見せることに非常な羞恥を覚える花坂道子が乳房も潰れよとばかり締めつけられた高小手、これだけは許してと願った腰巻さえも無惨にひきはがされて...

#### 若い妓の寝室

(略号あん)

モデル 愛川悦子  
大手札三枚一組 二五〇円  
三味線の御用もすんで行燈の灯かげもひそやかな蒲団の上に横になった若い妓は、思わぬ好事家の客の手で豊満な乳房がむくくりと盛り上るまでに厳しく縛り上げられている。白い胸が白い臀部が身動きできない縄目のもだえに、うごめいている。

#### トバクの代償

(略号かけ)

モデル 愛川悦子  
大手札三枚一組 二五〇円  
タオルの猿ぐつわをされて素裸のまま、手首と足首を括られてベッドの上に投げ出された娘丁半トバクで勝った男の餌食になるのだ。今や彼女は観念して只豊満な裸身を衆目に晒しているばかりであった。



た通り住所、氏名、素性の分らない方、やはりどんなお申し出でもこわいのです。この時の軽はずみな経験は苦いプラスでした。私の事は告白として編集部宛投稿いたしました。もしのせていただけたら同時に本誌で皆様のお目にとまっています筈です。ご覧のような経歴の女でございます。異性からS Mの性向を植えつけられたものの、私にはまだ関谷夫人のような勇氣はございません。従って通信欄で知り合う筈のお友だちも慎重に、今後は仲介人を立てて……などとも思っております。いずれにせよ当分どなたともお会いする気持になれないかも知れません。ひどい浣腸責めが脳裏から離れませんので……。いっそのこと、これから同性の方のみとひそかなプレイを続けようかと考えております。どなたか本当に不安な状態でなく私の乳房を責めて下さる同性の方はいらっしゃらないでしょうか。同性の方なら着衣は全部とられてもかまいません。大変思い切った言い方で内心恥ずかしいのですが……。お便り下さったマニアの方、まゆみは心からお礼申し上げます。いつの日にか、心がとけましたら素晴らしい出会いがで

きるかも知れません。それまでどうぞお元気で。(東京都北多摩郡八山辺まゆみ)

○

川田幸子様二月号を開いてみましたらあなたのお便りがありましたので、失礼とは存じましたがペンをとりました。私もかねてからSの女性にお会いして、できればプレイを……と願っておりましたが、今日までその機会がなくなりました。私はまだプレイの経験はありませんが、かつて戦時中野戦病院で看護婦の命令に従わなかった理由で二人からいじめられたことがあります。このときは、まだ二十才の若さであったせいか、ただただ恐ろしいといった感じが先に立ち、一刻も早く許してもらおうことのみ願ったのでしたが、二、三年前にふと書店で奇譚クラブを手にして以来急速にSMのファンになってしまったのです。今から思うとあのときの看護婦はS女性であったかと思うと非常になつかしく感ぜられます。そんな訳で、去る一月号に初めてお便りを出しました。勿論そのときは住所の明記はいたしませんでしたが、あなたのお便りをみて早速手紙を書いた次第です。くわしく

るのを制して、両手首を背後で括りつけて、殊更大きなお腹をつき出させるようにしたフンドシのしぼりフォト。

### 東浦の切腹

略号

(えん)

大手札

五枚一組

四〇〇円

モデル

東浦ひかる

東浦ひかるの腹部は最近皮下脂肪が増したか大変膨隆してきた。一日、彼女に切腹のことを話すと自分の下腹に刃を立てるということには興味を持っていた。と言うので、彼女の思いのままに短刀を渡してポーズをとらしてみた。これはその時のフォトである。端座して刃を下腹にかまえ、したたかに突き刺したところ。扶ぐって痛さに倒れ伏したところ等、好ポーズばかり五点を選び出した。

### 浣腸シリーズ

略号

(れち)

大手札十二枚一組

一〇〇〇円

モデル

梨花悠紀子

梨花悠紀子が、いちじく、ガラス製三〇〇CC浣腸器、イルリガートル、オシメ、オシメカバー、差込便器、等を用いて連続に浣腸と排便を模様を近い距

離から手にとるように仔細に描き出した浣腸関連シリーズ、愛川悦子、大塚啓子の(ちよ)(ちし)(ちふ)に続く浣腸マニヤに捧ぐ第四作。

### 弓吊り責め

略号

(つき)

大手札

二枚一組

二五〇円

モデル

梨花悠紀子

両手首と両足首とを反対側にして別々に吊り上げ背を上にして高々と宙に浮いた梨花嬢。吊りを第一に好む悠紀子にして始めて出来た本格的な吊りポーズ。さすがの彼女も顔を垂れて苦痛に耐え、頭を上げて悶えるさまは、素晴らしい。

### 手足宙吊り

略号

(つた)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

梨花悠紀子

両手を手摺に水平に括られ、両足を八の字に開いてその両首を各々左右に釣り上げて縛られた強烈な宙吊りのポーズ。辛抱づよい悠紀子嬢も美しい眉をひそめて苦痛に耐える懸命の責められぶり。八すべて略号にてお申込み願います。



は一月号の読者通信に掲載されています。なお、神奈川の中川フミ子様のお便りも読ませていただきました。もしよかったらお便り下さいませんか。(東京八横山)

編集の方、本部綾子様への便り御高配いただき有難う御座いました。綾子様、私のお願お聞きとどけ下さいますか？貴女の月経帯に唇を押しつけ一杯に貴女のお情けを味わっていたく事を夢見ております。又二月号の読者欄でお便りがありました中川フミ子様、私のバンドマニアはお解りの事と存じます。貴女様に縛られ裸に剥かれた時、表われくるゴムだらけの月経帯!!そして真赤なパンティー!!貴女様のおさげすみになられるお顔が目に見えようです。そして犬の首輪をおはめになり馬乗りになられ、貴女様のお使い古しの月経帯を私の口にただかせてもらい汚れたパンティーをすっぱり私の首にかぶせていただけたら、どんなに素晴らしい事でしょう。せめて貴女様の汚れたままの御不要の月経帯を送っていただけましたら、私は貴女様のお手でそうされる事を想像し乍ら以上の事を楽しみ又色々な事も報告させていただきます。

くつもりです。何卒私のこの奴隷の願をお聞きとどけ下さいませ。(山口県徳山市八安田隆夫)

岐阜の服部さん。友の会を作り度いという貴方の提案に賛成します。女斗美の愛好者が私ばかりではなく沢山いらっしゃるのに感心しました。女はしとやかな者という事が通り相場ですが、その仮面をかなぐりすて肉体相打つ所に興味があるのではないのでしょうか。私も一度見たいと思っています。女子プロレスも水着をつけていては面白くありません。やはりきりと輝をしてみたいのが良いですね。同じ女斗美でも、スタイルの良い女性では興味が薄いと私は思います。肥えて腹の出た女性同志が輝をしてみたい方が私は好きです。京都方面の同好者皆様とも文通したいと思いますが、発起人たる岐阜の服部さんには是非共御便り致したいと存じます。何事も同好者同志の意見の交換が第一と思います。そして同好者の方々も関東、関西の中央におります服部さんに連絡してお互に書面に依るミチングから始めようではありませんか。(群馬県八三山生)

〔優秀緊縛フォト紹介〕

●絹川文代強烈股間縛

美貌と均整のとれた肢体を誇る絹川文代嬢に対して遠慮なく肌にも喰い込めと強烈な股間縛りを敢行、各組とも開股の痛烈さに足の指をくの字に曲げて喘ぎもがくさまを刻明に描写しました。

●鐙利用股間縛

略号(あい)

大手札三枚一組 二五〇円

豆しばり猿ぐつわ、朱色ロープ使用、首縄、鐙利用股間縛り両脚大の字開き強烈なしばり。

●キの字股間縛

略号(かい)

大手札三枚一組 二五〇円

白布猿ぐつわ、白色綿ロープ使用、乳房の上下二条、二の腕の二筋、高手小手、強烈股間しばり開股、足の指を屈げ、反らして苦痛に耐える表情もいたいたい。

●花坂道子裸身の開陳

剥がれた腰巻

略号(まき)

大手札三枚一組 二五〇円

裸の肌を見せることに非常な羞恥を覚える花坂道子が乳房も潰れよとばかり締めつけられた高手小手、これだけは許してと願った腰巻さえも無惨にひきはがされて...

若い妓の寝室

略号(あん)

モデル 愛川悦子

大手札三枚一組 二五〇円

三味線の御用もすんで行燈の灯かげもひそやかな蒲団の上に横になった若い妓は、思わぬ好事家の客の手で豊満な乳房がむくくりと盛り上がるまでに厳しく縛り上げられている。白い胸が白い臀部が身動きできない縄目のもだえに、うごめいている。

トバクの代償

略号(かけ)

モデル 愛川悦子

大手札三枚一組 二五〇円

タオルの猿ぐつわをされて素裸のまま、手首と足首を括られてベッドの上に投げ出された娘丁半トバクで勝った男の餌食になるのだ。今や彼女は観念して只豊満な裸身を衆目に晒しているばかりであった。



厳寒の候、編集の皆様並びにK愛読者の皆様益々御盛栄の事、お喜び申し上げます。小生、二年程以前よりKKを愛読致しております。僅か二年と一口には云ますが、小生がKKより得た性向の知識は並大抵のものでは有りません。本誌の記事を読み続けた最近では友人と話をしても、それが単なる世間話であらうとなかろうと、／＼ああ彼はこんな性向を持っているな／＼と見抜く事が出来ま

す。これも偏見に貴誌並びに投稿者の皆様のお蔭と心から感謝致しております。ところで小生自身ソフトなマゾ系であります。しかし通信欄の皆様は個性の強烈な方ばかりでどうも小生などの出る場ではないと考えておりました。東京に実家が有ってはサド女性との連絡の取り様が無い事も一因です。そして又、小生二十二才の弱輩でも有り、種々考えて一番の難関は場所の事でした。しかし二月号の

川田様は小生に勇気を揮い起させてくれました。大体、現世に男、女が有る限り、強き者汝の名は男なり、弱き者汝の名は女なり、は鉄則として存在します。中間に於いてそれ等が転換するような場合が有ってもそれは中間に於いてであって終局的にはやはり……。それ故女性の下敷になる事を願う等と今まで公表出来ませんでした。しかし川田様はそれまでも小生に悟りの目を開かせて下さいまし

た。プレイに徹する事、これによって小生の二年間の悩みも消える可能性が出て来ました。川田様どうぞ小生の悩みを解消すべくお力をお貸し下さい。貴女様からの御連絡が有れば数年来の悩みも解消致し、大きな希望を持って臨む事が出来ます。又貴女の仰言る切ない想いの一部でも叶え得る自信が御座居ます。連絡の方法として次の提案を致します。小生高円寺のジャーナルと云う珈琲店に毎日一

## 〔最新版〕

## 女体緊縛フォト五十選

## B組五十集

大手札判印画紙(9×13糎)焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剥いだバタフライ(関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 12	一糸纏わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)	B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出エビ責め(水本)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)	B 22	首絞めの悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)	B 28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)		

B 34	すべてをさらけて(関谷)	B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)	B 37	台上的マゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)	B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)	B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)	B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)	B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)	B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)	B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)		







次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします。

彦

貴社益々御清栄の段奉賀致します。陳者別冊奇譚クラブ十二月号

(第一巻第三号)のマゾヒズム特集以来待っているうちにはや二ヶ年を経過しました。勿論多趣味の多数の読者を対象の雑誌であってみれば一つ傾向のものの特集はよほどと存じますが毎年一回は無理かどうか知りませんが二、三年に一回位はある傾向の特集を企画して貰えないものかどうか。一つの提案としてマゾの夢を時代劇で表わして貰いたいと思います。毎号のように小説、映画に見るものが紹介されていますが、全体のほんの一部ですがリバイバルも手伝って頭に残っているものを次に列挙しますので脚色、強調等により挿絵を多くして編さんしていただければ楽しいものとなるのではないかと存じます。巾広く扱えば中国の女戦士、西部劇のガンウー

# ●代理部分譲品総目録(第五号)出来ました。

十円切手封入の上お申込み下されば、折返し急送いたします。

マン、欧州のフェシング等も日本の巴御前、板額のようなものと組ませインターナショナル的なものにするのも一誌と思います。

〔本の部〕小島政二郎「乳房祭」同光社・鳴門秋一「麝香頭巾」雄文社・子母沢寛「お辰街道」講談クラブ・内田紋次郎「忍術小町」国民タイムズ・長崎謙二郎「風流女剣法」同光社・吉川英治「神変麝香猫」キング?・藤島一虎「劍豪小町」桃源社・陳出達郎「女左膳」・「犬姫様」小説クラブ?・下村悦夫「修羅城」上・下?・?・?「鬼三味線」講談社全集・漫画「振袖忍者」第1集・第3集、きんらん社・三上於菟吉「むらさき草紙」少女クラブ・田辺虎男「星空童子」少年ブック・西条八十「アリゾナの紅ばら」?

〔映画の部〕・伽羅三平「江戸姿紫頭巾」(原駒子)・?「旅鴉お妻やくざ」(伏見直江)・比佐芳武「女侠奴の小万」(原駒子)・小沢不二夫「やくざ女巡礼」(三城輝子)・小沢不二夫「神変不知火冠者」(同上)・佐伯幸三「落花の舞」(三城輝子)・牧陶六「妖術白縫変化」(原駒子)・大都映画?「女片手無念流」(三城輝子)・比佐芳武「女左膳」(原駒子)・剣三平「女児雷也」(三城輝子)・原健一郎「奴の小万」(山田五十鈴)・新興映原作・吉川英治「女来也」(鈴木澄子)・比佐芳武「まんじぐも」(原駒子)・毛利正樹「緋ぢりめん女大名」(宇治みさ子)・同上「大暴れ女俠客陣」(宇治みさ子)・「テレビの部」・チャンネル⑥「どろん秘帖」(環三千世)・同上「振袖剣法」(多摩幸子)・チャンネル④「琴姫七変化」(松山容子)以上リバイバル・ブームで回顧しつつ、何等かの形で再び目で見たいと感ずるものであります。あとは専門家の人々に検討していただきたく。よろしく。(東京人笹千一)

二月号拝見いたしました。グラビアの大塚啓子嬢の男性マゾフオト素敵でしたわ。サド女性として喜びに堪えません。尚、田沼醜男氏の創作は、いささか物足りなく

て落胆しました。それよりか、鷹島みどり様の告白、まるで私の日常そっくりで大いにショックでしたわ。私は当年二十五才のサジB Gです。身長五尺三寸、体重は十六貫五百もありました。私にも絶対服従を誓っている四十男が一人ございます。会社の重役ですけど生れつきのマゾは絶対直らないらしく、私がいじめるのを、とてもとても喜んでおります。乱暴ないたずら娘には彼もずいぶん呆れていらしく、私の我まま放題にさせています。乗馬のプレイや神酒奉戴式なんかも特別にかりてある彼のアパートを利用します。昨夜なんかも彼のすすめで乗馬のおけいこをしました。最初はお義理でやっていましたが、だんだん熱が入って彼がつぶれるまで乗りまわしてしまいました。しまいには彼の首に両足を巻いたまままでゆさぶったので流石の彼も参ってしまっただけです。足で頭を蹴ったり顔をふんづけたりもよくやります。私たちBGの相手としてはマゾ男性が一番適しています。だって彼の言う通り、お金出すんですもの。それでいて貞操には絶対手をつれさせませんからね。バカみたい。(東京八関美代子)



(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)